
こうもり族の反乱

離陸羅臼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こつもり族の反乱

【Nコード】

N7192U

【作者名】

離陸羅臼

【あらすじ】

自分たちの《行為》を収めたビデオを売り物にして生きる志穂（少女）と真紗耶（女装少年） 二人がなぜ、このような生きかたを選ばなければならなかったのか……そこには想像を絶する血塗られた悲劇が隠されていた。ツインテールの元気少女・巫彩が、志穂と真紗耶の闇を紐解いてゆくが、巫彩の出現により二人の危ういバランスが崩れはじめる。そして、志穂が帰る朽ち果てた校舎跡
その地に隠された禍々しい秘密とは！？ 他の投稿サイトでも連載しております。

こうもり族、血の海へ（前書き）

第七章における、真紗耶視点の回想シーンを、志穂の視点で転載したものです。このほうが読者の方も物語の世界に入っていきやすいかと思い……。

こつもり族、血の海へ

この手に握り締めたナイフからは未だに赤黒い鮮血が滴り落ち、呆然と佇む私の心情を皮肉るかのように、堅い木の床がボタ、ボタ、と無骨なリズムを奏でていた。

「柴門さん、貴女まさか、まさかその人を殺し……っ！」

駆けつけてきた幼馴染の声に、はっと振り向く私。

彼女……というか彼の顔は、その実あまり驚いていないように見えた。いや、むしろ何かを達成したような満足感すら放っているではないか？

しかしそのようなことを気にしている余裕もなく……

「ま、真紗耶まやっ！ わ、わ、わた、し、あ、あの、こ、こ、これ、どう、う、すれ、ば」

私は血まみれの体を揺さぶりながら、幼馴染・真紗耶にSOSを出す。

すると真紗耶のその、どう見ても女としか思えない顔が異様にどす黒く輝いたのが、こんな混乱状態のなかでも判った。

「柴門さん落ち着いて！ 貴女は悪くありません！」

女神のような真紗耶の確信に満ちた一言で、心神喪失と混乱状態の境目をさすらっていた私の心は、にわかには得体の知れぬ慢心と安楽のなかへ投げ込まれ、その凄まじい落差ゆえ、この口は急に饒舌になる。

「だっ……だ、だよね……ははっ……そうよね！？ 真紗耶だってそう思うよね！？ 全部全部、こいつが悪いのよ！ 今だって、私が《責任とって一人で育てる》って頼んだら、《そんなに育てるのが嫌なら堕ろせ》だってー！ はっはははは！ 自分勝手にこんな清纯な女子高生を妊娠させておいて！ なによその言い分は冗談じゃないわよははははー！ もう面倒臭いから殺しちゃった」

半ば裏返った声でけたたましく、目の前に横たわる男を罵倒する

私。

そのとき、そんな私があまりにも痛かったのか、それとも憐れだったのか、あるいはいじらしかったのか……、真紗耶のなかで《今まで堪えられていた何か》が謎の暴発を起こすのが判った。

「ああ柴門さん、柴門さん！ 私もう、我慢できません！」

真紗耶は血に染まった私を強烈に抱きしめてくる。

「……！！ ま、真紗耶っ！？ 危ない！ 刺さるって！」

ナイフを持ったままの私は、滑稽なことに、ナイフではなく真紗耶のほうを突き放した。

すると、床に崩れ込む真紗耶を見つめる私の体に、なにか衝撃的な電光が走ったのだった。

白いカーディガンやスカートを、私から移った鮮血のまだらで飾った真紗耶。それは、この世で最も絶美なる妖気を放っていたのだから。

「柴門さあん、私が、欲しくはないのですか？」

上目遣いで厭らしく私を見上げてくる真紗耶。こいつは私を落とそうとしているのだ、と思った。だがこのような状況下、私はただあたふたとよろけるばかり。

「あ、あ、あ、真紗耶……私……その……っ」

そのときだった！

この手で殺してやったはずの目の前に無残に横たわる男が、なんと血を吹き出しながら叫び声を発するではないか！ 奴の吹き出した血は、真紗耶の体めがけて飛んでいった。

「ぶはっ！ おおおおおおおおお！ 志穂^{しほ}は……柴門志穂

は……俺の……女……だ……」

「宗志^{むねしげ}！ 生きていたの！？」

驚愕する私の頬に、なにか生暖かい液体が触れる……真紗耶が、その手に付いた宗志の血を、この頬に塗りたくっているのだ。

「柴門さあん？ その男と私と、どちらが魅力的ですう？」

そのまま鮮血を纏った両手で全身を愛撫され続けると、私は半ば

白目を剥くほどの誘惑を受け、とうとう真紗耶の服のボタンを外し始める。

それから後のことはよく覚えていない。

私の意識がはつきりとこの浮世に戻ったのは、宗志が性懲りもなくまた断末魔の叫びをあげたとき。

「あああーっ！ お前たちは何と禍々しい女なのだろう！？」

…崇ってやる！ 崇って崇って」

そのときだった。

真紗耶が悪態をつく宗志の真ん前に仁王立ちし、烈しい恨みと幾ばくかの蔑みを込めた眼差しで彼を見下ろしてみせるではないか。

「崇れるものなら、崇ってみるが良い……。きさまのごときいかれぼんち、虫けら一匹崇る力すらあるものか」

「真紗耶？ あなた……」

そんな真紗耶から只ならぬ殺意を感じ取った私は、ただ呆然とその名を呼ぶ。

すると真紗耶は、信じられない事実を流暢に告げてきた。

「実はね柴門さん」

それは深く暗く、そして悲しくも痛ましい復讐心……。

私は虫の息の宗志に視線を落として軽く叫ぶ。

「なによ！？ 木泊君が自殺未遂したのって、こいつらのせいだったんだ！？」

以前に出会った木泊という純真無垢な少年……彼の悲劇が目の前で死にかけている男のせいなのだと思うと、私はこの胸を締め付ける罪悪感を幾らか軽くした。

宗志はこの期に及んでも自らを省みようとせず、ただ反抗的に醜く叫ぶだけだ。

「ぐおおーっ！ あれはあの宗教が勝手にやったことだ！ 俺には関係ないっ！」

悪態をつき続ける宗志に、真紗耶はとどめとばかりにおぞましき

言葉を浴びせる……

「おお、汚らわしき首田宗志しゅだよ！ 木泊さんの受けた痛み、苦しみ、絶望、孤独……その総てを百倍にしてお前に与えてやるッ！ その救いなき断末魔にて、真の屈辱を味わうが良い！」

その呪いの言葉が面白くて、私は思い切りよく真紗耶を抱き締めた。

「やい宗志！ 崇られたのはお前さんのほうじゃーい！ きゃーっほっほっほっ！」

こうして私たちは、死に逝く宗志の目の前にて、初めて深い契を交わしたのだった。

思えばこれが、総ての始まりに他ならなかった 私と真紗耶の、蝙蝠としての人生の始まり。日の当たる場所には二度と戻れぬ、暗く湿った血の海を泳ぐような、この呪われし人生の。

こうもり族、血の海へ（後書き）

おどろおどろしい開始ですが、物語全体を見渡してみると、そんなに暗いものではなく、普通のラブコメパートやヒューマンチックな見せ場もあったりするので、ぜひ、最後までついてきて頂けるとありがたいです（笑）。

【Shiho's viewpoint】呪われし逃亡劇（前書き）

この最初の部分が、物語全体の性格を決定しています。よって、これをプロローグとせず、第一章の最初の部分ということにしました。

【Shiho's viewpoint】呪われし逃亡劇

ああ出来るものなら声など発したくはない。お喋りすればそれだけ走る速度が遅くなるう。けれども私の後ろを走るあいつの実に素っ頓狂な行ないが、私にそれを許さない。

「やい真紗耶^{まのや}！ あんたは昔っから本当におかしな奴よ！ こんな逃亡劇の最中にメールで彼女さんと会話とは、まあいい気なもんね！」

「ああ柴門^{さいもん}さん、どうか怒らないで下さいっ！ いま返事を打たなければ……私はやつの想いで御目にかかれた《シェエラザード様》に合わせる顔が……！」

「ふん、馬鹿馬鹿しいったらありやしない！ どうせ上手い具合に騙されて、身を削って稼いだ金を奪われるのが関の山よ！ 全く！ ほら、ほら、それより今は私らの命のことを……はははは」

自分達の乱痴気騒ぎを、急き込みながらも嘲笑する私。これは本当の逃亡劇なのか、はたまたパロディーか、あるいは、もはやパロディーとしてしか言及できないほどの悲劇なのか。

ぶんっ！ と、後ろを走る真紗耶を振り向いた私こと柴門志穂^{しほ}は、一瞬にして全身から力が抜けるまでの憤慨にとらわれた。真紗耶が呑気に、実に呑気にしゃがんで、メールを打つていやがるのである。「こら真紗耶！ ……もう勝手に姦^{まわ}されて殺^やられやがれ、糞^{くそ}ったれが！」

今にも真紗耶を置いて走り去ろうとする私を、こいつは実に涼しい顔で見つめたかと思うと、そっと、ある方角を指差した。

「柴門さん？ あそこは、いかがなものでしょう？」

この鉄屑の臭いに満ちたオフィス街のビルとビルの狭間に在って、実に薄暗く、湿気ばかりか人の悪意すらそこに密集させるかのよう

な細い路地。真紗耶は、その路地のほうを差している。

「そっちは行き止まりよ、お馬鹿さん！」

など一応の文句をつけながら路地のほうへ駆け寄ると、真紗耶が指差す先には、心を腐らせるような陰気な薄闇の中にて、大きなマンホールがぼんやりと灰色の満月を描いていることに気づいた。あそこへ逃げ込むというのか…？

これは、心の不安を掻き立てるような灰色の雲に覆われ、日本国特有の強い湿気に満ち満ちた白昼の出来事であった。この虚ろな空気が醸し出す不快感は、現代人たちの生み出す愚劣なしがらみが幾倍にも助長しているように思える。

そうした日本社会が生み出す若者の腐敗や墮落もまた、ニュース番組やワイドショーにて我が国ならではの湿り気を帯びて伝えられる事が多いが、これからお話しする私と真紗耶の青春ときたら、陰湿・凄惨なことその非を見ず、私たちの不潔きわまりない生き方や禍々しい過去が明かされるに至っては、往々にして若者の腐敗に慣れ親しんだ現代人も、いやというほどの嫌悪と戦慄に打ちのめされずにはいられないだろう。

私は自らの置かれたこの呪わしき日々には半ば気を遠くしながらも、真紗耶と寄り添って、じめじめとしたコンクリに浮かびあがる灰色の月へ向かって足を引きずる。

真紗耶はマンホールの蓋を開けながらも、携帯でメールを打ち続けることを中断しようとはしなかった。ふと覗き見してみると、実に不健康な青い光を放つ画面に、『自殺未遂』という実に穏やかでない言葉が垣間見えた。

次いで、真紗耶がやりとりをしている相手の名が目に入る。このところ真紗耶は、その娘と頻繁に話しているらしい。

その娘の名は、巫彩^{みさい}。知り合いの名前ではなかったが、どこかでその名前を聞いたような感覚は……あった。

【M i s a e · s v i e w p o i n t】ツンデレクイーンの憂鬱（前書き）

改定前のこの物語にはなかった場面です。改定前はもつと暗くて屈折した女の子がヒロインでしたが、志穂＋真紗耶があんなふうな上に、もう一人のヒロインまで屈折してはあまりにもバランスが悪いと思い、元はサブキャラだった巫彩をヒロインにしてみましたというわけです。

【Missae's viewpoint】ツンデレクイーンの憂鬱

よく響く迷いのないあたしの靴音と、か細くて躊躇いがちな彼女の靴音が、ノスタルジックな午後の雑踏と溶け合う。

「ねえ巫彩^{みさえ}、ちよつと巫彩^{みさえ}ってば！」

「朱音^{あかね}、ちよつと黙^{もく}っててよ。ね」

「なんか巫彩らしくないよ！ メール打ちながら歩くなで……」
友達の朱音は、普段は体育会系で活発なあたしが、こここのところ異様にメールに執着していることを訝しがってる様子。

「アブないサイトとかには手え出してないから、安心してよ」

「でも、心配だよ……」

「よつこらしよつと」

「で、真紗耶さんさ、兄さんの自殺未遂の原因のこと、いつになったら聞かせてくれるわけ？」

あたしこと中里巫彩^{なかざと}はメールをカチカチ打ちながら、朱音と共に江ノ電への道を急いでいた。

どんな仕事をしているのか判らないけど、この真紗耶という人は神奈川を活動の拠点としているらしい。

つまり単純に考えれば、この鎌倉に住むあたしと近い場所に居るってわけ。

そして、それを知るとあたしは、居ても立ってもいられなくなつた。

誰も教えてくれない《兄さん》の自殺未遂の原因 その真相を知っている人が近くに居るって思うと、もう……。

「何度も言うんですけど、知らないほうがいいことだって、この

世にはたくさんあります」

真紗耶さんからの返信はいつだってそんなもの。

カツとなったあたしは、

「いててててて！ 離して！ 許してえ！」

腰の辺りから響く男の声を無視して感情的な返信を打つ。

「あんた兄さんの苦悩が《再発》してもいいっていうの！？ 人間の心の闇なんてね、腫瘍とおんなじ。ちゃんとケアしとかないと、いつ再発するか判んないのよ！？ それにこれは、兄さんを引き取った彼女の願いでもあるの！」

「ったくもう！ イライラするっ！ てあーっ！」

あたしはさつきから手に掴んでいた中年男の腕をギュウウウと捻ってやった！

「巫彩！ それ以上やったらその人死んじゃうよ！」

朱音に言われても、あたしの怒りは収まらなかった。

「力で女を捻じ伏せようだなんてサイテー！ あんたみたいなのをこの世のゴミっていうのよ！」

「ごめんなさい」

ちなみにあたしがコイツを捕らえたのは、朱音が でも、心配だよ…… とか言った直後。

朱音とあたしの体をまじまじと見つめるコイツの視線に、あたしは何分も前から気づいていた。それでもって、コイツの手が朱音のお尻めがけて伸びた瞬間、あたしが よっこらしよつと て具合に捕まえた、そういうこと。

腕をぶんと振って男を地面に叩きつけると、あたしは土の付いた赤い靴で脂ぎったその顔をなじってやった。

「ざまあみなさい！ 正義のヒーロー・中里巫彩様の御前で痴漢だなんて、百万光年早いのだっ！」

「ひいひいっ！ すんません」

といったところで背後から、自転車に乗った駐在さんが笛を鳴ら

しながら登場！

「ここらこら。まーたやってんのか！ そいつはちょっとやりすぎじゃないか？」

すると朱音は駐在さんの元へトコトコ駆けてゆき、ペコリと頭を下げた。

「刑事さん、巫彩は私を助けてくれたんですっ！」

それを聞くと、駐在さんは荒々しく地団太を踏んだ。

「ぐわあー、まーた痴漢かい！」

あたしは得意げな顔で、痴漢男を駐在さんの元へ連行する。

「もうさ、地球温暖化のせいで日本の男の頭、沸いてるんじゃないかしら？ 今日だってほら、まだ三月だったのにジメジメして厭な気候よね。」

今日も鎌倉特有の澄んだ空気が、日暮れの商店街を吹いてゆくけれど、……やっぱりガキンちよの頃に感じた、あのすがすがしい春風とは全然違う。これが鎌倉じゃなく他の場所だったとしたら、もっとドロドロした空気になってるはず！

日本の四季の崩壊　生ぬるい春、暑すぎる夏と秋、それから雪の多すぎる冬。そういうのが多かれ少なかれ、人の心に悪影響を及ぼし始めてる気がしていた。

ふっと南国のカラリとした空気を感じたくなったあたしは、すぐ隣の果物屋に置かれたカゴから新鮮なオレンヂを手に取ると、皮の上からガブツとかじりついた。

南国のすがすがしい太陽の匂いが心に広がったと思ったとたん、大人の大声が二重放送であたしにふりかかりなさる！

「お手柄だ、中里みさい！」「こらあ！　中里みさい！　またうちの果物を勝手にイ！」

それはすなわち、痴漢男に手錠をはめた駐在さんと、陳列された果物の合間から怒鳴る果物屋のオバサン。

話の内容なんかどーだっていい！　あたしは二人の大人を交互に

ギリリと睨みつけてやった。

「だーからー、《みさい》じゃないってのよッ！　あたしの名前は巫彩^{みさえ}！　み！　さ！　ゑ！　覚えれ！」

あたしはツインテールをプロペラみたいに振りながらそっぽを向くと、賽を投げるように後ろ手で小銭を果物屋めがけて投げ放ち、そのままその場を後にした。

江ノ電の駅までもうすぐ。このあたりはホントにイマドキ珍しい人情味あふれる商店街で、下校時にはいつだってコロツケの揚がる香ばしい匂いが漂う。

それで、もう少しすると……ほら、丸いプラスチックに覆われた街灯たちが、赤く染まった空の下でやるせなさそうに灯り始めた。

「あ、巫彩。セーラーカラー、乱れてるよ、また」

「いいわよ別に」

「だめ。校則にあるでしょ？　《服装の乱れは心の乱れ》って」
あたしの背後に回り、襟を直してくれる朱音。どうやら、さっきの一連の騒動で乱れてしまったらしい。

もう、セーラー服なんて、めんどくさいし！　暑いし！　動きにくいっただけじゃない！　おまけにああいう痴漢が寄ってくるのだって、きつとこの厄介な服のせいなんだから！

しかし、背中に感じる朱音の気配ときたら……これが異様なほどの存在感の薄さで。いつだってあたしはこの少女が心配になる。

「あらら？　タイが曲がっていてよ？　みたいな？」

なんておどけてみせるのも、心に発生した杞憂を打ち払うため。

あたしたちが通う『鎌倉マッシュュータス女学園』は、『お堅い』ことで有名な女子中学だけど、そのおかげで朱音は何か水を得た魚みたいに、平穩無事に暮らせている気がする。

つまり、鎌倉という古雅な土地と、女子だけのお堅い中学という秘密めいた空間が、朱音にとって都合のいいファンタジーを生み出

しているんじゃないか、と。

正直言って、朱音は普通の共学校に馴染めないと思う。この神経質なまでの生真面目さ。決して他人の色に染まろうとしない意志の強さ。馴れ合いを重視する近年の若者集団の中では、疎まれる存在になること請け合いだ。

ほらごらん。他人の襟を直すのにだって、もう一分近くかかっているじゃないの！

「これでOKね。巫彩、ツインテールだから襟が目立ちやすいのよ。気をつけて」

確かに朱音のセーラーカラーは、そのまっすぐな長髪に隠れてほとんど見えないけど、あたしは左右の髪をそれぞれ耳の上で縛っているから、襟がハッキリ見えてしまうという。

再び歩き出すと、さっきの件の影響か、朱音の視線が妙に疑わしげに周囲を気にするようになっていた。

「ほーら。やつぱりあたしが居なきゃダメなんじゃない？ 朱音」

「巫彩……ごめん。私のために……。ほんとは横浜に転校したいんでしょ……？」

「いいのよ。あたしだってあの学校、好きだし」

「でも……、でもあのご両親と一緒に暮らしにくくない？」

どこまでも心配性な朱音が少しもどかしくなって、あたしはその柔らかな頬をグニグニとつねってやる。

「あたしはあんたとは違うの！ 兄さんが目え覚まして、横浜に引き取られて行ってからはさ、もうサッパリしたもんよ。兄さんが病院で寝てた頃はもう、いつあのクソ夫婦が兄さんを安楽死させるって言い出すかって、冷や冷やして暮らしてたけどさ」

「そう……」

そう。あたしが一歳であの家に引き取られたときにはもう、兄さんは自殺未遂をした後で、物心ついた頃にも彼は病院のICU

で管に繋がれて眠り続けていた。

それでもあたしがこんなに木泊兄さんを気にかけるのは……、四歳か五歳のあたしが放った、

起きろ！ ネボスケ！

の一言によつて目を覚ましてくれたという過去があるから。それから病院に通ううち、あたしと兄さんは心を通わすようになったつてわけ。

あたしを引き取った親、つまり兄さんの両親は元々あたしの遠い親戚で、あたしが親に棄てられて孤児になったところ、《孤児を引き取った英雄夫妻》なんていうステータス欲しさにあたしを引き取ったって寸法。

あのクソ夫婦は兄さんが自殺未遂した時点で、彼を施設に入れるつもりでいたらしいけど、それを見かねた心優しい女性が、兄さんの引き取り手になってくれた。

ICUで眠っている間、そんな優しい引き取り手の呼びかけにさえ答えなかった彼が、あたしのその一言に答えるように目覚めてくれて……それがあたしと兄さんの間に芽生えた最初の絆ということになる。

駅に着き、二人してホームに佇むと、あたしはどこか儚げな朱音の横顔を見て不安になった。

「それより朱音こそ、よく毎日毎日、こんんな長い距離を通つてられるもんね」

この狭山朱音さやまという少女は、隣県から何度か乗換えをしてこの駅まで通っている。

「大丈夫。この学校、気に入ってるし。でも毎日お母さんと言い争って疲れる。お母さん、私を共学校に通わせたいみたいで」

ドン！ と黄色い線を足で叩くあたし。

「くわーっ！ お互い親には苦労させられるわねー！ ほんつと子供って損！ 親の一声で生活変えられたり、学校決められたり！

よく親は子供を選べないって云うけどさ、子供だって親を選べないってのよ！」

「……私たちの学校、寮があれば良かったのにね」

「ホントよっ！」

といったところで見慣れた江ノ電が物静かな面持ちでホームに着。

ウエスタン・リバー鉄道にでも乗ってるような、江ノ電特有の緩やかな感覚のなか、あたしはまたケータイを開いてみる。

するともう何分も前に真紗耶さんからの返事が返ってきていて、ちよっぴり申し訳ない気分になった。

「解りました。……私とて貴女のお兄さんが心配です。では来週は私、幼馴染と共に《Sweet Season》の辺りをうろついていることにします」

即座に返信を打つあたし。

「ありがと。それならあんたを見つけられそうだわ」

《Sweet Season》っていうのは、くだんの、兄さんを引き取った女の人が運営してるバーのこと。

その女の人というのはあたしの義母の従姉妹で、自殺未遂を起こした兄さんを半ば衝動的に引き取ったから、兄さんの詳しい事情を知らないという。

彼女は最近、あたしのことも引き取ると言ってくれてるけど、朱音を一人にしたくないというあたしの意思で、その話は流れている。

「あーあ。会う約束しちゃった」

隣から聞こえてくる、からかうような声。

「ああもう、人のメール覗き見とか、いい趣味してるわね」

とはいえ、これ以上電車のなかでメールを打ってたりしたら、イマドキの学生と何ら変わらなくなってしまう。いや、あたしは事実上、イマドキの学生なのだけれど、《お堅い》鎌倉マツシユータス

女学園の生徒である以上、そこらへんのケジメはつけておきたいところ。

ふうと力を抜いて背もたれに寄りかかると、初めて自分が猫背だったことに気づく。

朱音の合唱部が休みの日は、あたしもテニス部を休んで一緒に付き合うため、車内はガラガラに空^すいている。本当に、うちの学校の帰宅部の面々がまばらに見られるくらいのもの。

見慣れた家々が窓のすぐ向こうを流れてゆくさまも、こういう空いた電車から眺めるとなぜか胸が躍る。人が多いと、窓の外を見る余裕なんてないわけだから。

「じゃ、また明日ね。気をつけて」

「分かつてる。また明日……」

あたしは途中の駅で降りて、そのまま家路を急ぐわけだけど、朱音は終点・江ノ島まで行つて、そこから乗り換えて隣県まで行かないといけない。正直言つて、心配なことこの上ない。

ホームを出てふと振り返ると、車両の中、窓の向こうで少し俯く朱音の横顔が見える。緩やかな台形を描く目、ほんのちよっぴり肉づきのいい、綺麗なラインを描く風体。こんなにも孤独が似合つてしまう朱音という少女を、あたしは哀れに思った。

ほらごらん。車両に乗った他の面々は楽しそうにお喋りしてるのに、朱音はあたしが降りると完全に沈黙してしまうじゃないの。

……朱音は、学校で一人ぼっちのようだった。そしてそんな彼女の姿がいつだって、あたしのなかで兄さんと被る。だからあたしは、彼女を放っておけない。

あたしには朱音のほかに友達が二人居たけれど、《あたしに友達が居ると朱音があたしと付き合いにくいから》という理由で、今は学校ではつるまないようになっている。……と、噂をすればほら。

「巫彩、お帰り」

「オッス！ お姫様のエスコートご苦労様！」

ほんわかした紗那とボーイッシュな眞子。

「あー、また迎えに来てくれたわけね」

「だってねえ……」

「部活が休みの日くらいしか会えないじゃない？」

オレンヂに染まる二人の顔を見ると、あたしの心がわか
にその緊張を解くのが判った。

朱音と居る間のあたしときたら、常に《この子を守るんだ！》なんて使命感に燃えていて、心の休まる暇っていうのがない。

その点、この二人に会うと、心が少し前のあたしに戻るようで、どうにも心安らぐ。

「紗那、眞子、ありがとね」

ふっと心が安らいだせいか、意外にも素直にそんな感謝を述べてしまふあたし。

眞子はそんなあたしが可笑しかったのか、こちらを指差して首を横に振った。

「へえー、我らがカマジヨのツンデレクイーンも丸くなったもんねー」

その隣の紗那は、この夕映えと同化するように静穏な笑みを浮かべる。

「そっだよ……。あたしたちが好きで巫彩に会いに来たんだし。行こっ」

こうやって三人、植木鉢や垣根に挟まれた細い路地をゆくと、会わない時間なんてなかったみたいに、これが当たり前の光景に思えてくるから不思議。

朱音のために彼女たちと距離を置いたあたし……それをこの二人は、《そこまでしなくても》とも《友達想いなね》とも言わないで、当たり前のことみたいに快諾してくれたし、こうやって現に実践してくれてもいる。

常につるんでなきや友達じゃなくなる？ そんなのはホントの友達なんかじゃない。それを理解している、そういう二人……

あたしはいつか、あの二人と朱音が仲良くなれたらいいな、なんて思ったりしている。そうしてあたしも含めて《仲良しカルテット》なんて名前が付いたりして、楽しそう……。

少し歩いて眞子が、そしてもうちょつと歩いて紗那が、それぞれ垣根の木戸をくぐって、いかにも鎌倉！　ってカンジの、昭和的な日本民家に入ってゆく。あたしたちが友達になりやすかったのは、こんなふうに家が近かったせいもあるのかもしれない。

ところがあたしが帰るのは、そんな古雅な家並みに反発するように建てられた、西洋もどきな四角形の箱。

家を覆う白い塀の仰々しさも気になるけど、その塀の所々に、まるで落書きを消したようなペンキの跡があるのはもつと引くかかるけど、仲がいいわけでもない義理の両親にそういうことを訊くわけにもいかず……。

「ただいま」

玄関を開けると、現代家屋特有のキンとした冷徹な空気とともに、派手なブランド物の衣服を身にまとった義母が出迎えてくる。

「あーらまア、巫彩ちゅわん、お帰りザマス」　さつき警察からご連絡があつてねエ、ふふふ、まアたお手柄を立てたみたいねえ」

「はい。そりやどーも」

冷たくあしらって二階へ上がろうとすると、「待つザマス」と引き止められた。

階段の中ほどで、視線だけ下に落として義母の話を聞き流すあたし。

「巫彩ちゃあん？　貴女は我が家の誇りザマス。よって、付き合い友達もそれ相応の質の高い者でなければならぬザマス」

「……だからなに？」

「バレーボール部キャプテンの多岐川眞子、および図書委員長の上

田紗那は無問題もうまんたいザマス。しかし、最近付き合いただという、あの狭山朱音という子、あれはよろしくないザマス！」

「どうしてよ!？」

あまりの横暴さに、あたしは階段を駆け下りて義母と向き合う。

「興信所に調べさせたザマス。あの狭山という子、小学校時代に普通の学校に馴染めず、登校拒否になった挙句に、女子小学校に転校した過去があるとか。おまけに、今の学校では友達らしき存在もないとのこと」

「だからなによ!？」

「狭山朱音は、対人恐怖症、もしくは自閉症の可能性があるザマス。もしも巫彩、貴女が彼女と付き合うつもりなら、彼女にはまともな人間になってもらわなければならぬザマス! よって狭山朱音には、彼女の母親を通じ、リタリンという薬を服用してもらおうザマス!」

リタリン。聞いたことのない名前だったけど、あたしは言いようのない理不尽さに押しつぶされそうになった。

「薬って……どうしてよ? 朱音は、朱音は病気なんかじゃないッ!」

「いいえ。病気ザマス。普通、中学生というのは学生同士で戯れるもの。人間としての欠陥がある者と付き合えば、巫彩ちゃんまで欠陥品になってしまうザマ……って巫彩ちゃん!？」

義母が話し終わる前に、あたしは自室めがけて駆けていた。

ようするに、こういうことなのね。兄さんも、朱音とおんなじくらい、……いいえ、もっと自己主張が弱くって、内向的な子だった。おまけに女装が趣味とくる。そんな兄さんに、この親が手厳しい制裁を与えないわけがなく。結果、自殺未遂に追いやられたってこと。

あたしは部屋に戻ると、ばたんと戸を閉めてそのまま崩れ落ちる。鉄臭い家の中、ちよっとでも木の温もりを感じられるようにした

くって、あたしは家具一式を木製のもので揃えていた。こうしてると、《木に宿泊》してるみたいで安らぐ。

《木に宿泊》それは兄さんを身近に感じる言葉でもあった。兄さんの名前が《木泊^{こはく}》なんていう、変わったものだから。

親の悩みは、紗那にも眞子にも、もちろん朱音にも話せなかった。彼女たちをあたしのステータスのアップダウンに関わるオブジェクトとしか見ていない連中の話なんて、聞かせられるわけない。

そこであたしは、ケータイを胸ポケットから取り出した。眞紗耶さんになら、この心のモヤモヤを心置きなく話せるだろうから。

あたしはドアの前に崩れ落ちたまま、ポチポチ、と寂しい音を部屋に響かせだした。

「ねえ眞紗耶さん、ちょっと聞いてよ。ウチの親ったらもうサイテーだわ。あたしの友達にリタリンとかいう薬を飲ませろって言うのよ？ 友達が少ないと、それだけで病気なの？ 冗談じゃないわよ！」

【Masaya's viewpoint】下水道にて（前書き）

すみません、改訂しても改訂しても、この有様です。それほど昔の私が書いたものはカオス度がハンパないということですね。

【Masaya's viewpoint】下水道にて

「嫌あああーっ！ な、なんということを！」

「真紗耶！　こんな下水道の底で騒ぎなさんな」

「ああ柴門さん柴門さん!! これを、これをご覧になって!!」

「何よ……？ん？……な、なんだっていうのこれは！？リタリ

「……巫彩、って子の友達までリタリンに！？ 真紗耶、すぐにリタ

リンを打たせないように説得しなさい！」

「言われなくてもそうしてますよ!」

「おいおい、そんなに慌てて打ったら携帯が壊れるがな！」

煌びやかな街を生み出すために設えられた、腐臭漂う醜い下水道。そこに、いつだって穏やかでない私たちの声が冷たく響き渡っております。

私は憤慨に震える指を、手探りの理性で動かし、巫彩さんへの返信を打ちます。

巫彩さん！
リタリンだけはダメです！

例えば医者に処方されたとしても、絶対にそのお友達に打たせてはいけませんからね！

リタリンのせいで、私の幼馴染は人生を壊されました！

あれは使いようによっては麻薬同然です！

私もね！　ある日バカ教師にリタリンを打たれそうになりましたよ！
寸でのところで幼馴染に助けられましたかね！

それから、貴女のお友達が病気なら、私も病気という事になってしまいますよ！

はははははははははははははははは！

すると意外にもすぐに、巫彩さんは返事を下さいました。恐らく、家にお帰りになったのだらうと、私は直感しました。部屋に居れば、

常にネットを見ていられるわけですから。

わかったから！　ね！？　あたし、彼女にはリタリンを打たせないから！

だから落ち着いてよ。

変なことを言つてごめん。リタリンって恐ろしいものなわけね？
でもさ……

真紗耶さん、あんたが心の闇の部分を私にさらけ出してくれて、…
…嬉しかった。

生まれて初めてかも。こうやって、誰かに強い口調で何かを諭されるのってさ。

あたし、ほんとの両親にも義理の両親にも、一度も叱られたことないしね！。

クラスメイトも、あたしに怯えてるのか、妙に大人しいし。

なんか嬉しかったわ。ありがとね。

それを読んで幾ばくかの冷静さを取り戻した私は、改めて冷静に、
事情を話そうと思いました。

巫彩さん、さつきは激昂してしまつてすみませんでした。

ですが、敢えて昂つた私の感情をそのまま書こうと思つたんです。
あれはそれだけ恐ろしい薬ですので。

しかし変ですね。

リタリンはかつては、確かに鬱病や対人恐怖症なんかに処方されて
いましたが、

現在ではその危険さゆえ、あるいは麻薬代わりに利用する人が後を
絶たなかったゆえ、

とつくに規制された薬なんですよ。

現在ではもっぱら、ナルコレプシーにしか用いられていないはずな
んですが……。

そのメールへの返信には、しばしの間がありました。

遅れてごめん。リタリンのこと、今ケータイで色々調べてたのよ。確かに昔は、鬱病や引きこもりの人に処方されてたみたいね。

でも、処方された人たちがことごとく体をぶっ壊してる……。

なんであたしの義母ってば、こんなもんを朱音に飲ませようとするのよ？

朱音ってね、母親と二人暮らしなんだけど、

その母親って人が、いい人だといんだけどね。

いくらあたしの義母がリタリンを飲ませようとしたって、母親が反対すればそれまでなんだからさ。

できることならばいつまでも巫彩さんと話していたいところでしたが、ここは下水道。しかも隣で膝を抱え、時折あてつけがましくアクビをしたりため息を突いたりする彼女の手前、次を最後のメールにしようと、そう決めた私でした。

お母さんと二人暮らしの状態で、

お母さんが彼女にリタリンを奨める可能性があるというその状況！とても怖いです。

どうかどうか、自分を大切にしろと言ってあげて下さい。お願いします。

今の彼女のその状況で、彼女を守る事が出来るのは、彼女自身しか居ないのでから。

では今日はこの辺で。ありがとうございました。

ところで、巫彩さんの文章を見て、特に何の変哲もない女の子の話し言葉だと感じる人は、ネットを良く知らない人でしょう。そしてネットに詳しく、なおかつそれなりの知性を持った人ならば、彼

女の文体に多少なりとも驚くことと思われます。

すなわち、一度も顔を合わせたことのない相手と文字で会話する場合、あのような話し言葉を使うことはまずありません。そう、ネカマでもない限りは。

私の心は今、これだけ生氣あふれる文を書く巫彩さんに囚われており……そしてその理由に、私は薄々気づきかけています。すなわち、私はシャフリヤール、巫彩さんはシェエラザード…

暫しの間、私が携帯電話を打つ音だけが淡々と響いていた下水道。その沈黙を今、

「おい真紗耶くんよーい、いつまで巫彩ちゃんと喋くってんのー？　こんな下水道の底でさあ……。リタリンやめろって言うてからずいぶん経ってるお」

などと、彼女の甘く明朗な声が破りました。

向日葵のように明るく美顔を、肩まで届く優美なセミロングヘアが縁取る……その様を懐中電灯の光がぼんやりと映し出しています。

ほんの少し肉付きが良いせいで、その朗らかさがいつそう際立ちますが、この暗さでも、そんな彼女の《適度に艶美な》輪郭には心惹かれてしまいます。そう、もう十何年もの付き合いになるにもかかわらず……。

少し気取った笑みをこしらえてペコリ、と横に座った彼女に軽く頭を下げる私。最初は戸惑ったこの長い髪も、今では完全に我が物となり、こうして顔を動かす際も重く感じることはなくなりました。

私は河東真紗耶、そして柴門志穂さいもん・しほが彼女です。

下水道の底で体育座りをする私達。これをもし写真に撮って逆さにしたなら、二匹の黒い蝙蝠が天井から吊り下がっているような図になることでしょう。

というのも、私達は同じ格好をしているからです。

「それにしても成長しませんね私達。今でも柴門さんが通ってた高校の制服を着れるなんて」

「はは、そりゃ、《こんな生活》してりゃあ成長もしないって。私らの心は永遠に17才のまんま！ けど真紗耶も物好きね、いくら私が他に服が無くって制服着てるからって、自分まで…もしかしてコスプレ好き？」

いつもながらの彼女の諧謔的な言葉に、いつもながらやはり少しイラつく私。

「いいえ、わかるでしょう？ 私が何もかもを貴女と同じにしたい気持ち……」

まるで本当の女のようにツンとなった私を、柴門さんはちよっぴり困ったように温かく笑いました。

「はは、ごめんごめん」笑っていた柴門さんは視線を私から逸らし、何ともメランコリックに膝を抱えます。「あんたの口からね、その言葉をまた聞きたかったの……」

「柴門さん……」

柴門さん… などと慕情に満ちた声を隣の女にかけながらも、私は巫彩さんから次なるメールが来ていないか、確認してしまいます。

惚けている私を、隣の柴門さんがジトーツと見つめているのに気づいて、私はハッと目を覚ましました。

「あ！ すみません柴門さん！」

「ふっ、もう慣れた」

とりあえず巫彩さんに関する話はここまでにしておきましょう。

さて。私がこのように蒸し暑い場所においても上着を脱げないのは、一つには、《この姿》になった途端に寒がりになってしまったというのがあります……。小さい頃は、真冬でも半袖で暮らしているくらいだったのに。

「けど柴門さん、よく私が性転換してこんな姿になっても、私への

接し方を変えないでくれましたね」

今度は私が柴門さんをイラつかせます。もちろん、私も故意に。
「わかるでしょ！？ 少なくとも私のあんたへの気持ち、愛だの恋だのじゃあないってこと」

「すみません。貴女の口から、またその言葉を聞きたかったんです……」

さっきのしかえしをする私。ところが柴門さんは私の意図などとは全く気づいていたらしく、私のほうを向いてほんの少し微笑むと、すぐに前を見て真顔に戻ります。

「ふっ、私には、いつもいつも付き合ってる男が居た。でも、どれもこれも簡単に激しく燃えて、そのくせすぐに燃え尽きちゃった。で、私にとっての最後の男は、これが……」

柴門さんは私の黒い上着をめぐりました。そこには黒く変色した血液の付着した、柴門さんと同じ形の白いブラウス……私が上着を脱がないのは、まさにこのためです。

「柴門さん……」

柴門さんがその人生において最も凄惨な場面に着ていた服を身に纏うことで私は……。

「真紗耶、私たち、蝙蝠になっちゃったのよね。あんたは、学校やめた時に、そして私は、奴を殺」 「柴門さん！」

柴門さんの言葉を咄嗟に遮った私を、

「ははーん、壁に耳あり障子にメアリーってか」

と、気さくな邪悪さで優しく嘲笑する柴門さんの、その高貴な諧謔性……それは陶酔とか眩暈を通り越して頭痛や吐き気すら催すほど。どんなに軽妙な言葉を発そうと、どんなに蓮つ葉な態度をとろうと、この人の身体は、常になにか近寄りがたい、貴族的な優雅さに覆われているようで……、私は常日頃、緩い畏れから開放されることなく彼女と過ごしているのです。

さて……

「そろそろ出ましようか。もう大丈夫でしょう」

私が今になって、なぜ自分たちがこんな下水道に居たのかを思い出すと、柴門さんはこの頭上を何度もゲンコツで軽妙に叩いてきます。

「とつくに大丈夫だろーさ！ あんたがネットばかりやってるから、隣で私は宇宙一無駄な時間を過ごしてたのよ!?」

「柴門さんもケータイでネットやってれば良かったじゃないですか」私の軽い言葉に「けっ!」とそっぽを向く柴門さん。セミロングの髪が蝶の羽のように舞います。

「私ネット嫌い。あんただって……《あの人》、ネットのせいで自殺未遂を」

「言わないで!! お願い!! 《あのこと》には触れないで!!」

突然、両耳を両手で塞ぐ私。柴門さんは暫く啞然としましたが、やがて気さくに話題を変えました。

「……結論! 私みたいな素晴らしい人間にネットは相応しくないっ!」

長い付き合いになる私だから分かる事です、
「冗談めかしているとはいえ、恐らく、今の言葉（私みたいな素晴らしい人間）は柴門さんの本音でしょう。そう、決して冗談などではなく。

嗚呼、嗚呼、もしかしたら、柴門さんのそうした気質が、あのよ
うな悲劇を招いたのかもしれない……。

少し声のトーンを落とす私。

「柴門さん、ごめんなさい。リタリンを打たれそうになっていた巫彩さんのお友達が心配で……」

リタリン…その四文字が再び出た途端、まるで諧謔という名の仮面が剥がれるかの如く、柴門さんの表情がシリアスになりました。それはあたかも、朗らかに咲いていた向日葵が突然の雨に打たれ、さらに一瞬のうちに真夏が真冬に変わって凍った花と化すように。

「そうよね……全く厭な話だわさ！」

私は朱音さんという人の置かれた状況に気が遠くなり、嫌らしい曲線を描く自らの太股に顔をうずめながら話します…

「リタリンの恐ろしさは、あまり知られていませんからね。テレビもネットも、オタク批判だの芸能人のスキャンダルだの、やっても誰も救われない事に精を出していますけど、もっと、伝えるべき事が幾らでもあるでしょうに」

私は日本のマスメディアを憎まずにはいられません。柴門さんの負った不幸の原因は、リタリンそのものというより、その怖さを全く伝えてこなかったマスメディアにあると思うからです。リタリンによって人生を壊されていく人は十年も前からたくさん居たのに…。

「っ、日本のジャーナリズムのヘタレっぷり！ そのせいで、そのせいで果音様^{かおん}たちも私も…！」

「柴門さんっ…」

ただただ柴門さんの肩を優しく撫でることしかできない私だったのです。

さて、暫しの間いたわり合った後、私は梯子を上り、マンホールの蓋を開けて辺りを見回しました。

「大丈夫みたいですよ柴門さん」

「そ？　じゃ、地上に這い上がりますか。おっと真紗耶真紗耶、変装変装！」

「あ、忘れてました」

「忘れんな。命に關わる」

私達はサングラスを忘れずにかけました。

「ふう、夜じゃ夜じゃ　私らの行動時間だあ！」

「こんなところまで蝙蝠と同じとは……」

と、すっかり辺りが暗くなったことに安心しながらも、少し距離

を保ち、やはり早足で忍ぶように歩く私達。決して寄り添って歩くようなことはしません。二人バラバラなら《気づかれない》ものも、二人一緒だと背格好から《気づかれてしまう》恐れがあるため。

ふと私は、街路樹と街灯に挟まれたベンチに腰を下ろします。

「ちよつと真紗耶、なにを呑気に……」

危なっかしいわねえと言わんばかりの怪訝顔で、しゅしゅ柴門さんは私の隣、ではなく、街灯を隔てた隣のベンチに腰掛けました。そして、わざわざ携帯電話で話す私たち。

「柴門さん、善良な動物の群れに見えますね。黄色や、白の動物。その中に、何匹か赤い動物が混じっているんです。仲間を喰い殺して、返り血で真っ赤に染まった羊が……」

「てか、それ私のことだけどね……Red ram、逆さ読みするとMurder」

電話から響く柴門さんの声のトーンが別人の声のように低くなっていきます。私はいたたまれなくなり、電波を経由しなくとも聞こえるほどに強い口調で訴えます。

「いいえ？ 柴門さん、貴女は逆に白い羊ですよ？ 私の比喻は、人を殺したか否かの件ではありません。今の弱肉強食社会のことを言っただんです。貴女は寧ろ、喰い殺された側でしょう……」

「真紗耶ありがと。さて、今日も儲かったし、そろそろ帰るとするか。《追っ手》らしい奴らに出くわした時はビビったけど、何とか下水道に隠れて逃げ切れたし。何とか今日も、無事に終わったね」

いつも帰る時間になると、柴門さんの顔色がブラックパールのような冥い輝きくらを放ちます。無駄とは思いつつも、優しく説得を試みる私。

「柴門さん、やはり貴女、本当のお母さんの所へ戻ったほうが……。お母さん、ピラ配りしてまで貴女を探してるじゃないですか。そのお気持ちを考えると私は……」

「真紗耶、何のために私が家を出たと思ってる？ 私のせいで疲れきったお母さんの顔なんか見て暮らしたくないからでしょ。ずっと

前にもアンタには言ったけど、私がRedramになつてから、お母さん、異常に私に氣い遣うようになつちやつて。《何とか普通に娘と接そう》って必死なのが見え見えで痛くて……。ねえ、Redramになつたことで、私って私じゃなくなつちやつたの？」

「いいえ。古い付き合いの私としては、柴門さん、貴女が《ああなつた》のは至極自然な事だと思いましたよ」

「でしょ？ 結局、私を解つてくれるの、真紗耶だけだった。で、逃げるように《あの校舎跡》に駆け込んだのよね。それがこんなことになるなんて……」

《あの校舎跡》とは、現在、柴門さんが暮らしている家のこと。当初、柴門さんは住み込みという形で、あそこへ逃げ込んだのです。

……あの場所の事を思うと、やはり私は、本当のお母さんの所へ戻つたほうがいいという想いをいつそう強くします。

「柴門さん、貴女の気持ちは解りますが、貴女を失つたお母さんはもつと疲れた顔をしてると思いますよ？」

「だから、お母さんの気持ちなんかどうでもいいの。私が見たくないの、つらいから。お母さんにはいつまでも、あの年齢不詳な若々しい女で居て欲しかった。その輝きを衰えさせた原因が私にあるわけだから、どうしても、一緒に居るとつらくなるのよ」

実に柴門さんらしい回答……私は柴門さんらしい言葉をもつと聞きたくて、更に彼女を突つついてみます。

「それなら、私がお母さんに会いに行つて、もう娘を探すのはやめて自由に生きて下さいって説得しましょうか？」

「ダメ！ お母さんが私のこと忘れるなんて耐えられない！ 今のままでいいの！！」

これはまた自己中心的な考え方。《お母さんが苦しんでいる今の状況のままでいい》と言っているのです。しかし、柴門さんがこういう人でなければ、私はこんなにも柴門さんと親しくはなれなかつたでしょう。

「そうですか…分かりました。もう、余計なことは言いません」

ここで、《少しは人の気持ちも考えなよ!》と言うのが普通の友達。私がそれを言わないという事を知っていて、敢えて柴門さんは自分の脆い面や汚らしい面を見せびらかしているのでしょうか。例えば、そう……

「言つてよ、余計なこと。たまには突っついてくれないと、寂しい」
こんなふうだね。

「ふふふ、了解です。では、ここで…」

「うん…」

私達は電話を持ったまま、別れの挨拶を交わします。

「また明日」

「うん、明日も私が生きてたら話だけだね…」

「柴門さんっ!」

「はは、冗談冗談　じゃあね」

そしてそのまま顔も合わせず、家路につく私達、の筈でした。

次の瞬間!　豊胸によつて異様に膨らんだ私の胸の下に、慣れ親しんだ柔らかい腕が。

「柴門さん…」

「真紗耶、私の無事、祈つててね…うつ」

「どうかどうか今日もご無事で…っ」

暫く二人で泣いた後、私達はそれぞれの家路につきました。我が子を戦へ送り出す親の気持ち、それを私は毎日こうして味わうのです。戦という表現は大袈裟かとは思いますが、命の安全が保障されていないという意味では、戦場も《あの家》も同じこと。

腕を離す瞬間、柴門さんは声にならぬ言葉を発したように思えました。はつきりとは聞き取れませんでした。が、敢えて言うならば、それは私にはこう聞こえたのです……

「これが、これが私の受けた罰なの…」
「？」

柴門さんが《あの家》（尤も、あれが家なのかどうかは判りませんが）で今日はどんなふうに過ごすのか、それを考えると気が重くなりますが、その分、一人になると気楽に歩けるようにもなります。片方だけになれば、《追っ手》に気づかれる確率も減るでしょうし、ですがそんなものは私の気休め！ 二人だろうが別々だろうが、気づく者は気づく…嗚呼！

延々とそのようなことを考えながらも、私は無意識の内に横須賀線や京急をはじめ幾つかの列車をひょうひょうと乗り継ぎました。何年もの間、こうして同じことをしていると、京急などの列車が全て、自分の第二第三の家のように思えてくるから不思議なものでね。

そう、私と柴門さんがいつも通っているのは主に横浜近辺なのです。とりあえず、《あれ》が一番よく売れるのが、横浜の裏町であるということが、今までの経験で判りましたし、東京は私も柴門さんもそこはかとなく苦手です。

但し、私がこんなにも朗々と街を歩けるのは、柴門さんの温もりが体に残っているからなのでしょう。さもなくば私は、あのトラウマから、怖くて出歩けはしないと思います。

柴門さんの温もりがトラウマになっているからトラウマが中和される…（・w・）ナンチテ

などと、このように心の中で駄洒落をかわす余裕があるのは、私が巫彩さんや柴門さんに比べたら、ずっと幸せな人間だからといえるでしょう。なぜならば、私にはこうして帰る場所がきちんと存在しているからです。

無論、私がここでいう《帰る場所》というのは精神的な意味であります。巫彩さんの義母という人は我が娘の心を微塵も理解しておられないようですし、柴門さんは……、いつもいつもあの地獄へ帰って行くのですから。

江ノ電・柳小路駅を降りてたどり着くのは、江戸情緒あふれる閑静な街。

のれんやすだれ、和風な観葉植物などが並ぶ、無限に続くかとも思えるような路地　その複雑な迷路のなかでも一際異彩を放つ、瓦の付いた塀に囲まれた大規模な日本屋敷、それが私の家です。私がガラガラと《城塞》の門を開けると、

「あら真紗耶、今日は遅かったのね」

かとう・いのり

桃色の立派な着物を身に纏った母・河東禰里が心配そうに、障子を開けて顔を出しました。障子を開ける無機質な動作をはじめ、直ぐ隣の障子紙と保護色の肌、その白色を反転させたかのような漆黒の長髪、何もかもが命を吹き込まれた市松人形のように、この世に産まれた時点から一緒に居るにもかかわらず、私は今なお彼女の持つ怪美な雰囲気圧倒されそうになることがあります。

「お母様、ただいま帰りました。途中、追っ手らしき者に見つかりそうになったもので」

「まあ…とにかくお入りなさい」

「お邪魔します…って自分の家でしょう！」

《お入りなさい》などと言われてしまうと、つい……。

柳小路特有の古雅な風が吹き抜ける庭園を歩き、そして玄関へとたどり着くわけですが、その間、屋敷全体に響く獅子おどしの音が五度か六度、この耳を潤します。

そこから、木々や植え込みの葉々が石灯籠の光によって神秘的に照らされるさまを一概に見渡せる、屋敷の外側を囲む廊下を歩き、母の部屋の障子を開けました。

「お母様、どうです？　良い人形、出来ました？」

母はこう見えても、特に硬い人間ではなく、寧ろ、

「うーん、もうそんな気持ち無くなっちゃった。施設に居た頃はね、お人形さんの形が出来上がっていくのにドキドキしながら拵えてい

たものだけど、それをビジネスにしたら……」

などと甘い声で囁くような人です。どこか浮世離れした、良い意味で世間知らずな雰囲気は、幼い頃から思春期にかけて施設で育ったという生い立ちのせいもあるのかもしれませんが。

「まあ、そんなものですよね。日本人って、自分の好きなことを仕事にするのが理想って考えるみたいですけど、そうすると、趣味が義務になって、義務が苦勞になってしまう。あんまり無理しないで下さいね」

たかがそれだけの気遣いの言葉にも、母は嬉しそうに微笑んできます。但し、やはりそれも人形がメカニカルに表情を変えるように。

「ありがとー あ、夕ご飯、なにがいい？」

「えーとね……」

「ごめんね。私、《えーとね》は拵えたことないから……」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

「《そういう意味じゃなくて》ってそれも拵えられないのよ。ごめんね」

どこかズレている母。いわゆる天然です。《大きな家＋人形》というと、おどろおどろしく厳格な印象があるものですが、実際はこのような、今どき珍しいくらいに穏やかな家なのです。

この母でなければ私は、今まで生きてこられたかどうかは、判りません……。

「お母様……いつもありがとうございます」

「あら、どうしたの急に？」

「……いえ。あ、夕ご飯、もつ鍋がいいです」

「わかった。昆虫鍋ね？」

「え……!？」

柴門さん、どうかどうか今日もご無事で…っ

真紗耶の言葉を胸に抱き、重々しい気分で家路をゆく私。ともあれ、真紗耶の温もりがトラマナになっているから、私は今日もあの妖魔の家へ帰ることができよう。

真紗耶は子供の頃……もうそれはそれは面妖な人生を送ってたというのに、ああして私を慰めたり励ましたりする優しさというか余裕を持っているのだから、まったくもって不思議なもの。

恐らくは唯一の家族である禰里ちゃんがああいう人だからでしょう。今も昔も、真紗耶のようなタイプの子供は親からは距離を置かれてしまうという哀しき定めを持っている。ちょうど、巫彩ちゃんのお兄さんとかいう人がそうであったように。

そして私の場合は……これが良く解らないのである。私がレッドラムになってから、母は明らかに私への態度をガラリと変えたけれど、あれは虐待されるに等しく、とにかく私は母の元から逃げ出したかった。そしてしばらく母の元から離れると、もう母の元に帰るのが億劫でしかたなくなるようになった。敷居が高い、というやつだ。

さて、いつもながらに私は、まっすぐには帰れない。
なぜって……怖いから。

まるで、学校へ行かずに街を学ランでウロつく不良の如く、ブラとあてもなく彷徨って気晴らししてから帰る。今日は手近なゲームセンターに駆け込んだ。

ところが、《どれだけ客から小銭をかき集められるか》それがこつした小便臭い施設の狙い。私はゲームに熱中してヤケクソになり、時間を忘れて様々なゲームを興じてしまった。

「こん畜生！ いいことなんか一つもないよ！ けっ！」

などと誰にともなく暴言を吐き、ゲーセンから出ようと出口付近に刺しかかったときだった

不意と、背中に得体の知れない嫌な視線を感じて振り返る私。そこには、オタクふうな男達がニヤニヤしながら私の体を舐め回すように見つめていた。

まさか、こいつらが追っ手……！？

私は失禁しそうになりながらも、足が千切れても飽きたらないほどの勢いで逃げ出した。私の美質に見惚れてこっちを見ているだけなのか、それとも追っ手なのか、その見分けがつかない。

そう、私と真紗耶は、追っ手の顔を知っているわけではない……。私は走った。ビュンビュン追い抜く街の光はネガのようだけれど、コマ送りの速度は次第に遅くなってくる。あの家に近づくにつれ、どんどん人工物が少なくなっていくから。

走って走って、私は家の付近まで辿り着いた。この辺りは本当に誰も寄り付かない。鬱蒼とした森に囲まれた、田んぼの跡地ばかりの暗い場所。もうどこに痴漢やら通り魔やらが潜んでいるか判りはない。

空気が……とても澄み切っている。それはもう、怖いくらいに。そういえば、実家から逃げ、ここへ来て間もない頃は、この空気に大きな安らぎを感じたものだった。ところが今はこの澄み切り具合が逆に、崩壊したあの家の冷たさを不気味に演出する結果となってしまうている。

そして、……着いてしまった。真紗耶の家同様、城壁に囲まれているとはいえ、こちらの壁は悪魔の城を想わせる錆びた鉄柵。以前は白く塗られていて、それがヨーロッパ的な優雅さを醸し出していたけれど、今ではそのペンキも完全に剥がれ去り、元から黒い柵だ

ったように見えてしまう。

安手のホラー映画のような音を立てる門を開けると、いつも必ず手が少し黒くなる。

門をくぐってまず目に入るのは、月光によって不気味に照らされる大きな造花工場の残骸。廃墟なんていうレベルじゃなく、もう完全に瓦礫の山だ。この工場跡を含め、鉄柵の内側の土地は全て、今ここに住む主が買収している。

いつも私はここでしばらく、しゃがみ込んで目を閉じ、手を合わせる。

「あなたたちは何と運の悪い人間なのだろう。あなたたちがあの世で魂の平安を手に入れることを望むことしか出来ないこの私を、どうぞ、どうぞ、お許し願いたい。けれどもあなたたちはこの腐敗した現世とは既に無縁の存在となっている。どうか、どうか、これから何十年にも亘りこの現世にて生きていかなばならない私をお守り願いたい」

などと、そのような想いを込めながら。

手を合わせていると突然！

《家》のほうから派手にガラスが割れる音、そして即座に、機関銃のようなけたたましき打撃音を立てて人が走る音が響いた。

「また…か」

私は独り言を呟き、暫し沈黙した後、沈鬱きわまりない歩調で《家》へ向かい、大きなガラスの入口を開けるが、この瞬間はいつも木が腐った臭いが鼻から肺へ入り込んでくる。元々この建物は校舎で、あの残骸になった工場は校庭だった場所に建てられたものだ。

校舎すなわち家に入ると同時に、私はいつもポケットから財布を出す。中身を確認すると……なんということ！ 私はゲーセンで、

無意識の内に稼いだ金を半分くらい摩ってしまっていたらしい。

恐る恐る、ギシギシと音を立てる木の廊下を歩く。妖しい月の光が、廊下のいたる所に張られし蜘蛛の巣を微かに輝かせ、またあちこちが落とし穴のように剥がれた木の床をぼんやりと照らす。

ここは南棟の廊下であり、教室への扉が並んでいる。私の部屋も元は教室だった場所だ。その私の部屋まで、一メートル。

そして廊下の中央に、北へと続く通路がある。その先はもちろん北棟で、音楽室とか理科室への扉が並ぶ廊下がある。そしてそこには、この建物が学校だった頃、《開かずの間》と呼ばれていた部屋も……。

今、ポーランドの牛車フィドロの如き轟音を立てた後、バン！ と閉まったのは、まさにその開かずの間の、重々しき横開きの鉄扉に他ならない。

そしてそして、それに続いて、ギシッ、ギ、ギシ、と、疲弊しきった足音が聞こえた。財布を廊下に置き、部屋へ逃げ込んでしまおうと思ったけれど、なぜか足が動かない。私は、果音かおんの顔がどうしても一日に一回は見たいのかもしれない……。

立原果音たちばなとは、この土地を買収した女のことであり、まさにこの家の主に他ならない……。

枝分かれした通路からヨロヨロ姿を現すと、果音はボロボロになっていた。この暗さでも、服のあちこちが裂け、腕に幾つも生新しい切り傷をこしらえているのが判った。

美しかった筈の長髪は山姥の如くボサボサになっており、微塵の優しさも人間味も宿さない無慈悲な瞳が、月光によって伶俐に光っている。

果音は私に気づくと疾風のように駆け寄って来、私が手に持った財布を強引に奪う。

そしてその中身を確認すると即座にこの頬へ平手を飛ばしてきた。

冷たい打撃音がこの腐った空気を切り裂く。

軋む木の床に叩きつけられる私。そのまま床を突き破るほどの勢いで！

震えながら倒れていると、女王が奴隷を鞭で強打するような音と共に、私の体に幾重にもわたり鋭い衝撃が走る。

恐らく素手で殴られているのだろう。果音の力の強さには異常なものがあり、この痛みは鞭で打ちのめされるに等しい。

あまり体に痕が残ると困るけれど、果音は私がああいう稼ぎ方をしているのを知っていて、敢えて大事な部分は殴ってこなかった。

「ごめんなさい…明日からはちゃんと稼いできますから……」

倒れたまま上目遣いで果音に訴える、そんな私の消極的な態度が果音をカッと逆上させたのか、

「っ……！」

今度はお構いなしに足で袋叩きにしてきた。

足蹴にされるたび、私の体がこの軋む廊下に埋まっていくような錯覚にとらわれる。

嗚呼、これは埋葬の儀式か！？ 理に適う金額を稼いでこなかった私の罪は死をもつてしか償えはしないというのか。

私は舌を嚙んで痛みに耐える。舌の痛みで体の痛みが和らぐからだ。やがて暴行に飽きると、果音はお金を持って開かずの間の近くにある音楽室へ戻って行った。

【Missae's viewpoint】教科書どりの夫婦

「巫彩、これは何ザマス？」

プラスチックの臭いしかしい白い台所。あたしは義母に、リタリンの危険さの書かれたサイトを印刷した紙を無造作に差し出していた。

「リタリンって、もうお蔵入りになった薬だつてこと」

義母は手渡された文書に目を通すと、文書を投げるようにテーブルに置き、自らも後を追って投身するようにテーブルに伏した。

「そう。そういうことザマスのね！ PTAの仲間が、かつて不登校だった子供にリタリンを飲ませた経験があると言っていたザマスだからその狭山朱音って子にも飲ませれば解決できると思ったザマス！ ああ、もう嫌！ もう、何もかも面倒くさいザマス……。リタリンを打たせれば解決すると思いましたのに！」

と、そこで台所奥のリビングから義父の声が響く。

「ハッハッハ、それならば巫彩にはその狭山朱音とやらとの縁を切ってもらうしかないようだな！ ハッハッハ、コレラやインフルエンザと同じだ。友達も作ることができぬ出来損ないと共に居ては、ハッハッハッ、巫彩、お前まで出来損ないに等しくなってしまう！ 大丈夫だ、ハッハッハッ、親同士の繋がりを利用すれば、いくらでもお前に友達を紹介してやれるからな。ハッハッハッ」

壁をくぐってリビングへ駆け、ごわごわしてキモチワルいソファでくつろぐ義父を見下ろす。

「お父さん！？ 冗談じゃないわよッ！ あたしはあたしが好きな相手とだけ付き合う！ 友達って親に決めてもらうものなの！？」
「うるさいなあ。ハッハッハッ。親の言うことを聞かない子供は子供じゃない。ハッハッハッ、あまり聞き分けが悪いと、施設に入ってもらっぞー！」

義父が笑いながら宣言すると、あたしに次いで義母もこっちへ駆けてくる。

「まアあーっ、アナタッ！ 施設はダメザマス！ そんなことをしたらワタクシたち、《引き取った子供を施設に入れた冷酷な夫婦》という烙印をおされてしまうザマス！ それでなくたってアナタ、やつと木泊のことの痛手から立ち直りつつあるというのに……」

「面倒くさいなあ……ハッハッハッ！ それより巫彩、お前ももう中学一年生か。ハッハッハッ、なかなか女らしい体格になってきたものだな。くびれも、健康的な肌の色も、実に綺麗だよ、ハッハッハッ」

義父は笑いながら、あたしの全身を嘗め回すように見つめてきた。ぞくぞくと、あたしの心に得体の知れない嫌悪感が襲いかかってくる。

「い、いや……いやっ！」

そしてまたさつきと同じように、部屋に駆け込んで籠るあたし。

もちろん、できるものならあの義父を背負い投げでもしてやりたかった！

でも、それをしてらどうなる？ 多分あたしはここを追い出される。そして転校にでもなったらあたしは朱音を守れなくなる……。

あたしは朱音のためだけに、この義両親には《強く出ない》ことにしているのだった。

あたしはドアの前に崩れ込んだまま……

「紗那……眞子……真紗耶……さん……」

自分の心を理解してくれる人たちの名前を呟く。
会ってみたい。真紗耶さんに会いたい。

朱音はおるか、紗那も眞子も、あたしはあの両親の監視下で付き合わないやならないわけで。そんななか、唯一誰にも知られない関係を築きたい……

あたしは引きずり込まれるように真紗耶さんのメールを読み返し

た。彼が会う場所として指定したのは、兄さんが暮らすあのバー。
その名はSweet Season 甘い季節、か。

「真紗耶、もうすぐだからね」

「ゆっくりでいいですよー」

私が《もつ鍋》と言ったのを《昆虫鍋》と勘違いした母。味見をする表情が穏やかです。

「ウンウン、完璧ね　真紗耶、できたわよー」

お鍋を置いたテーブルに90度の形で座る私と母。私は母のこの怪美な姿を見ながら食事は出来ませんし、母も性転換によって妖艶に変貌した私を見ながら食べるのは気が進まないのでしょうか。

「いただきます」

明るく食べ始める私を、なぜだか心配そうに見つめる母。

「ねえ、大丈夫？　志穂ちゃんに巫彩ちゃん」

「ん、どうして急に改まって彼女たちのことを？」

「えー、真紗耶が明るく《いただきます》って言ってるの見たら、何だか哀しくなってるね。彼女達は、こんなふうになるくたご飯が食べられるのか、って」

食べながら話すには重過ぎると感じ、私は一旦、カチツと箸をポーン酢の入った小皿に置きました。

「うーん、どちらかというと、柴門さんの抱える問題ほうが深刻かもしれません。なぜなら、すぐにでも命に関わるからです。でも、柴門さんのほうはね、私が毎日、じかに会って様子を訊くことが出来ずから、場合によっては、私が力づくでも本当のお母さんの元へ引っ張って行くことも出来ますし。けど……」

私が口籠ったわけを母は直ぐに察してくれます。

「うん、巫彩ちゃんとはなかなか会えないものね」

「それが数日後、会う約束をしてしまつて」

何気なく言うと、カチン、と母が箸を置きました。その表情からもつーい一瞬前までの穏やかさが消え失せ、私を不安げな、けれども

なよなよと媚びるような瞳で見つめてきました。

「巫彩ちゃんとはお友達、よね？」

「そうですよ！ なに心配してるんですかお母様？　そもそも私は、柴門さんと共に《あんなこと》をして」

私が言い終わる前に、母はテーブルをドンと叩いて声を荒げます。それはあたかも、清楚な一抹人形に善からぬ悪魔がとり憑いたかのように！

「身体カラダだけの女なんて怖くないわっ！」

「お母様……？」

母は席を立つと、私の背後まで歩み寄り、この肩に腕を回してきました。それはもう、母親が子供を抱く動作ではなく、女が愛人を抱くような情念を含んだ動作で。

着物の袖がこの上半身を包み込み、とても安らかな気分になります。

「ねえねえ、真紗耶ったら、どうしてそんな美少女になっちゃったのお？　お母さん、小さな頃の、女の子っぽい男の子なのか、男の子っぽい女の子なのか判らないような、そんなアナタが大好きだったのに……」

「お母様、私がこの世で愛しているのは……貴女ただ一人でございます」

とてもすんなりと、その言葉を吐くことができました。

母も私の言葉に欺瞞がないことを感じ取ったのか、それ以上の苦言は呈してきません。

その代わり、その両手で私の肩をつかみ、戒めるような視線を私の両目めがけて放ってきます。

「もしも他の女の子に魂を奪われたりしたら、禱里、許さないから！　自らをその名前で呼ぶ母。」

少々恐ろしくはありましたが、一日に三人もの女性を味わえるというのも悪くはない……

かつて私をあやすために子守唄を口ずさんだその唇に、私はそつと口づけました。柴門さんの力強く健康的なそれと違い、どこまでも柔らかく、そして熟れた感触……

「うふふふふ！ 冷めないうちに食べちゃいましょっ」

母はすっかり機嫌を直し、席に戻りました。この昆虫鍋とて恐らくは、私を欲情させるための道具に違いないのです。

さて、私の言う 三人もの女性。一人は柴門さん、もう一人は母。そしてもう一人は……

世界で最も美しい、この私自身に他なりません。鏡の前にて自らを愛撫するのは、さしずめ私の日課のようなもので……。

【Masaya's viewpoint】淫母（後書き）

書いていて気持ち悪くなってきました……。

【Shiho's viewpoint】開かずの間

「柴門さん、来週は毎日、あのSweet Season付近で落ち合いますよ。実は来週」

痛みと恐怖で眠ることすら出来ず、ただ広く真つ暗な教室跡で、ドアの前に膝を抱えて座る私。

そんななか、真紗耶からこんなメールが届いていた。そこには何と、巫彩ちゃんが会いに来るかもしれないということが書かれている。うーん、どんな子だろう…？

それはそうと夜にメールが届くのは本当にありがたい。凍りついた心に蠟燭の炎が燈るようで救われるからだ。この家は本当に、人類が全て消えてしまったかのような静寂に包まれているか、あるいは暴力的な轟音が鳴り響くか……そのどちらかしかないものだから。教室に置かれていた机がそのままになっているこの部屋……

ふと私の瞳は、規則正しく並んだ机の一つに置かれた、紅茶色の造花に焦点を合わせる。スズランの茎からバラの花をぶら下げたような作品で、しかも紅茶色。そう、造花なら、どんな姿の花も勝手に人間が考えて創造できるのである。

私はそんな造花が好きだ。なぜなら私はかつて、造花のような愛を真紗耶に与え続けていたことがあるからで、そのことがあるから、私と真紗耶の結びつきはこんなにも深まっているのだと考えられる。真紗耶は、自分が美女（自分自身すらも！）を偏愛するようになったのは、自分の心の傷が原因だと思っている筈。もちろん、それもあるのだろうけれど、あれは殆ど、私が与え続けたその《造花の愛》に原因があると、そう思えてならない。

よろよろと造花の前まで移動し、しばしその人工美に見惚れていると、ふと、私は思うところがあり、それを手に取って部屋を出た。

そして、廊下の中央で直角に曲がり、北棟への渡り廊下を偲び足で歩く。この通路の正面に、《開かずの間》の黒光りする鉄の扉が、月光に照らされて微かに見えていた。

その扉は、この校舎のどの部屋の扉よりも嚴重なものになっていて、内側からは決して開けられぬように果音が細工してある……。

しかしなんとという悲運！ 開かずの間まであと二メートルというところで、その直ぐ隣にある音楽室跡の扉から果音が出て来てしまった！

「……！？」

果音は憑かれたような瞳でしばらく、私が手に持った造花と、開かずの間の扉とを交互に見つめると……

やがて断罪するかのように縦横無尽に平手を振り、私の頬を打ってきた。何度も何度も！

「い、嫌……うわっ、ああっ、もうやめっ……て！ やめて痛い！ 痛いのおーっ！ 果音様ああ！ えぐっ……ああーっ！ あああー！
ー！ー！」

私は一日に二度もこんな目に遭う自分の哀れさに疲れおののき、とうとう嗚咽して泣き出した。立ったまま！

やがてこの唇が切れて血が出ていることに気づくと、果音はとどめとばかりに私の手から奪った造花を床に落としてギューと踏みつけ、そして気が済んだように音楽室へ戻って行った。

けれども私の場合、小さな傷は大抵一晩で消え去る。果音のおかげで治癒力が鍛えられたのかもしれない。

【Missae's viewpoint】ささやかな希望

「巫彩、そのままでもいいから聞くザマス」

義母がドアの前で呟く声に、あたしは淡くて小さな期待を抱く。

《そのままでもいいから聞いて欲しい》その響きには、何かをあたしに伝えたいというニュアンスが感じられるから。思えば今まで、一度もあたしに何かを訴えたことのない母だっただけに……

ところが……

「来週の水曜日、PTAの面々を集めてうちでホームパーティーするザマス。朝から晩まで楽しむザマスから、巫彩、貴女も学校から帰ってから参加するなら、狭山朱音のことだけは億尾にも出さないように気をつけるザマス！ あんな問題児と付き合っていると知れたら、ワタクシの沽券にかかわるザマスゆえ」

あたしは机前の椅子の上で片方の膝を抱えて座り、消しゴムを指で無造作に弄びながら、無表情のまま呆れ果てていた。

同時にあたしは心に決めていた。その水曜日にこそ、真紗耶さんに会いに行こう、って。

もちろん真紗耶さんに会ったからってこのクソツタレな境遇が変わると思えないけど、何かがそこから広がっていきそうな、そんな、そんな淡い予感を心に抱きながら。

けれどあたしは知らなかった。真紗耶さんが幼馴染と共に、底なしの血の海を泳ぐような人生を送っているんだということ。

そして……、真紗耶さんに近づくことで、あたし自身もその血の海に足を踏み入れようとしているんだということを。深くて、恐ろしくて、そして悲しい血の海に。

【M i s s a e · s v i e w p o i n t】ささやかな希望（後書き）

第一章はこれで終わりです。お疲れ様でした。というかこんなものの読ませてごめんなさい。

【Shiho's viewpoint】淫靡なる商売（前書き）

物語を改訂する場合、取捨選択が本当に難しいですね。正直、この二章にも無駄な部分は残ってしまっています。今回の改訂では、《削ったほうが一般受けするであろう部分》は敢えて残してしまっている感じです。《削らないと物語としての価値が下がる部分》はもちろん削除したつもりですが。

また『晩壓丕埒』は架空のバーチャルアイドルユニットです……たぶん。特定のモデルなども、もちろん存在しない……と思います。

【Shihos viewpoint】淫靡なる商売

[illegible]

「柴門さん！？　また何かあったんですか！？　明日は日曜日ですが……　大丈夫ですよ。さつき巫彩さん、メールで言ってたんですけれど、私に会うのはどうしても水曜日がいいそうです。」

「それって巫彩ちゃんが会いに来るのが明日だったら私の願いはスッポカしてたってこと!？」

「いえいえ、もしそうになったら、巫彩さんを連れて柴門さんといった場所に……」

「うわ……そりやちよつと嫌かも。とにかく、明日は早めにいつもの場所に来てよ？」

「水曜日まではベツタリしましょう。」

「三日間の前奏曲、か。ねえ、どんな子だろうね巫彩ちゃんって。」

ゆうべ、私と真紗耶はメールでこんなやりとりをしていた。

一日に二度も暴行を受けるのは初めてのことと異常に混乱していたから、私の文はこんなにも激昂している。散々酷い目に遭っている私だから、この程度の可愛いワガママを言う権利は有り余っているはず！

ところで私は見ての通り、メールの中にいわゆる顔文字というやつを全く使っていない。顔文字をふんだんに混ぜた文章は、もはや現代日本のチャラチャラした女の常套語で、例えば、

《こんばんは、柴門です。いま私には大好きな恋人が居ます。》
と、たったこれだけのことを言うのに、

《コンヅ（＊・、・）人（・、・＊）ヅ バンワア！！》
柴門】D H ーヨ・、）いま（・、・、）にわダイChu
（（（＊・ - （・、＊））uuh！キな恋人タンが居ます（
つ、＊）エへ》

……こんな面倒くさい表現をしなければならない。

一体なんのためにこんな回りくどい書き方をしなければならないのか理解に苦しむ。大方、《みんなが使ってるから》みたいな一種の惰性なんだろうけれど。

それはつまりは、最近の女の子というのは、顔文字をふんだんに使わなければ《文章で感情表現》ができないということになる。文章というのは無限の可能性を秘めたツールで、やりようによっては顔文字など一切使わなくなつてその人の心を表現できるもの。ところが最近の若者ときたら、顔文字にばかり頼つて、自分の文章を見つめようとしない。

そう……そう。心の中とはいえ、私はもう 最近の若者ときたらなんていう言葉を使うような年になつてしまつていた。

閑話休題。だから真紗耶が、初めて巫彩ちゃんの文章を読んだ時に感激したというのも、大いに理解できる。使い古された表現だけれど、《今時こんな生氣あふれる文を紡げる少女が居たのか！》と、そんな気分だつたに違いない。

さて、巫彩ちゃんだけでなく、私までその顔文字を使わない理由、それは、かつて真紗耶に、

柴門さん！ そんな下衆な記号を日本語に混ぜてはいけません！
そこら辺の小娘じゃあるまいし！

なんて叱られた事があつたから。私は上記のように元々、顔文字が面倒で嫌いだったけれど、しばしば学生時代の名残で使うことがあつた。真紗耶はそれにいちいち反応して……あいつも結構、私に厳しく指図する事が多い。

さて 今はすみれ色の帳とばりが夜の闇を追い払う時刻。

私は俗に《お化けビル》なんて呼ばれる廃ビルの、コンクリの破片で散らかった屋上に座り込み、気の早い春空をぼんやりと眺めていた。こんな場所ではくグラスンを外して会うことが出来ない私と真紗耶を皮肉るように、空は早送りでその明るさを増していく。

そんな私たちに、《世界は広い。もっと大らかに生きる》などと説教するのは実に無粋きわまりない行為！地球上のどこに居ようとも、そこには既に《追っ手と化した輩》が潜んでいるかもしれないのだから。もう、どこの誰が追っ手と化しているか、本当に判らない……。

あーそれにしても……ム・カ・ツ・ク！

「遅いっ！？ 遅すぎるわっ！ 真紗耶の糞つたれは何を燻ぶってんのよ！？」

高さとしては十二階に相当する、この寂寞とした殺風景な屋上に、哀れな美少女の地団太が虚しく響き渡る。

多分、袴里ちゃんが守るあの家の居心地の良さのせい。私は逆にあんな家（こうなったら《あれ》が家なのかどうかという議論はやめにしてしまう）で暮らしているから無駄に早い時間に家を出て来ってしまう。

こうしてぼんやり真紗耶を待ち惚けていると今にも、暗く乾いた声で、

おしほ、待たせてゴメン…

なんて、性転換する前の真紗耶が現れるような錯覚にとらわれる。そう、そう、真紗耶は完全な女になる前、私のことを《おしほ》などと、下の名前に《御》を付けて呼んでいたのだった。

風雨にさらされて凸凹でこぼこになったコンクリに寝そべり、そっと目を閉じると……ふふ、やはり今でも、私の目蓋の裏には昔の真紗耶が居る。

完全に女になる前の真紗耶には、一種奇怪な魅力があったものだ。

元々あいつは女っぽい姿をしていて、年をとってもずっとこのままの姿でいられるよね、などと浮かれていたけれど、いよいよ髭の濃さが尋常ではなくなってくると嘆き苦しみ出し、そして女性ホルモン剤を常飲し始めた、という寸法だ。

私が物思いに耽っていると日食が起こった。しかし太陽を覆い隠したのは月ではなく、見慣れきった真紗耶の顔……。

「ふふふ、私のこと考えてましたね柴門さん？」ニンマリと私を見下ろす真紗耶。

私は起き上がったその憎たらしい顔を睨みつけた。

「んなこたーどーでもいいの！」けれど私は顰めていた顔を一瞬のうちに温かい笑みへと変化させる。「…おかえり真紗耶」

いつもここで会うときは、先に来たほうが《おかえり》と言う事になっている。もちろん《そうしよう》と決めたわけではなく、自然とそうなっただけではあるけれど。

「ただいま、柴門さん…」

涼しげな美声でそう言い、私に静謐な微笑みを向ける、この真紗耶に魅力がないと言えは嘘になる。

けれど今の真紗耶。長い黒髪、豊満な肉体、適度に大きな瞳、それから華麗でありながらどこまでも日本的な端正さを持つ顔立ち

と、これは完全にあの二人組バーチャルアイドルユニット『ばんあつひかん 晩壓丕埚』の《こくごうく 告互匱》という子のレプリカだ。こんなふうには穏やかな顔をしているときも、常にその全身は妖しく黒光りしているように思える。

バーチャルアイドルというのは、主にネットにて、実在しない架空のキャラクター（主にアニメ系美少女）を、あたかも実在するアイドルのように活躍させるというもの。CDを発売したり、透明なスクリーンにキャラクターを映して（これがとんでもない現実感！）ライブをしたりもする。

ことに『晩壓丕埚』は今流行のヤンデレ（相手への強すぎる愛情

ゆえに心を病んでしまう少女のこと）を採り入れたバーチャルアイドルユニットとして一世を風靡しているもの。

「ねえ真紗耶、突然だけどさ、私、性転換する前のアンタも、結構タイプだったりしたわけよ。ただ女になるだけでも良かったのに、わざわざ真紗耶は《ついでに告汙匐の姿になりたい》なんて言ったあれってさ、私のせいよね。ごめん」

今更ながら説明すると、私こと柴門志穂は、同じく『晩壓不埒』の《廉埧紡弊順》と瓜二つの美貌を持っている。何もかもと同じにしたい私たちだけに、真紗耶が廉埧紡弊順の片割である告汙匐になりたいと願うのは、やはり私のこの姿のせいでなくてなんなのか。立ったまま俯く私の視界の上側に、切なそうに首を横に振る真紗耶が映った。

「いいえ、いいえ、あれは私の意志ですよ。元々私は、告汙匐が自分に見えて仕方なかったんですよ。だから整形してもらったのも、何か重大な想いがあって…というようなことではないんです。どうかお気になさらずに」

「そっか、確かにアンタ、告汙匐に似てるもんね、その粘着質な性格」

整理しておく、真紗耶がしたのは《性転換手術》ではなく、《女性ホルモン剤常飲》+《告汙匐の顔に整形》。実にお気楽に女に変わることが出来たものだと思う。元々女っぽい姿をしていた真紗耶にだけ許される特権か。

真紗耶は実にあっけらかんかんとした私の顔を見て、酷く安心したご様子。

「でも良かったです、柴門さん元気そうで。ゆうべのメールを見たときは凄く心配でしたけど。…ねえ柴門さん、《あの人》、また暴れたんですか？」

安心に満ちた会話にすぐ立ち込む黒い霧。私たちの会話には、しばしばこういう場面が見られる。

「うん…」

私はハッキリと頷いたけれど、それは私が嘘を言った事にはならない。

《果音が暴れて》私を傷つけたのだから。嗚呼つまり、つまり、真紗耶が今言った《あの人》というのは……

「柴門さあん？ まだ、痛みますか……？」

厭らしいくらい甘い声とグロテスクなくらい色っぽい歩き方で私に寄ってくる真紗耶。それは、いつもの白日夢の始まりを意味し……

……私は《気さくな女》という殻を乱暴に投げ捨てる！

「痛い……痛くて痛くて死にそうなのよ真紗耶！ 消えないの！ 一日中、どこに居てもこの痛み、消えないの！」

演劇のように激しい身ぶりで嘆く私を、真紗耶は憐れみと母性を感じさせる表情で見つめる。……いや、いや、そうではない。憐れみと母性が入り混じっただけならば、こんなにも私の心に烙印の如く焼きつくような顔にはならないはず。

真紗耶は常時、その表つ面^{おもてづら}の裏に何か別の表情を隠し持っている。今のこの顔の裏にあるもの、それは

嘆きが私たちの結びつきを強くする　なぜならば私たちの嘆きは私たち以外の何者にも癒せはしないから　嘆けば嘆くほどこの私は、真紗耶の血となり肉となつてゆく　それをほくそ笑んでいる表情に他ならない。今まで私は、真紗耶の色んな顔を見てきたけれど、この顔は初めて見るものだった。

「あらら、可哀想に。どうして欲しいです？」

「舐めて……痛いところ全部！」

私は何かに駆られたように、大きな四角い襟からぶら下がったりボンを解き放ち、白いブラウスのボタンを外してスリと肩を露出する。

ただし……真紗耶は脱いだ黒い上着を持った手で私たちの傍らに

置かれたビデオカメラのスイッチを入れることを忘れなかった。
今日はいつもとは事情が違うのに……これが真紗耶という奴。
けれども真紗耶は、どんなに激昂しても私のお尻の辺りを触ってくることはない。これは真紗耶の趣味というより、気遣いである。
私の心には未だ、《ある傷》が生々しく残っているから……

数時間後、私たちは屋上に座り、ビデオに刷られた自分たちの行為を見返していた。

「これは高く売れるでしょうね」

「フヒヒヒヒ」

私たちがわざわざ制服姿で居るのも、まさにこのためでもある。

制服プレイというのは世の変態男どもに大変な需要があるため。

「さあ、ダヴィングしますよ」

「OK」

私はバッグから小型ノートパソコンと小型の映像機材を出し、幾つものDVDにそれを移しまくった。

「撮ってすぐに公開って、韓国ドラマみたいですね」

「ヒフフフフ　これで今日は　殴　られ　」

……！！　口が滑った。

「柴門さん？　この映像と貴女が殴られることが、どう関係あるんです？」

「あ、あー、そろそろ売りに行こっかー……」

愚かな逃避策だと知りつつも、つい動揺して無駄な言葉を発してしまった自分を悔しく思う私。こんな誤魔化しがこの粘着質な生き物に通じる筈がないのに。とにかく真紗耶は、人が言ったことを聞き流すということを知らない。

「まだ昼ですよ？　それより柴門さん、この映像と貴女が殴られることが、どう関係あるんです？」

真紗耶の穏やかでない声が、この乾いた屋上に淡々と木霊する。

「……………」

「柴門さん！ この映像の売り上げと貴女が殴られることに、どういう関係があるんです！？」

鴉のように鋭い表情で訝しげに、ぶっ壊れたレコードの如く三回も同じことを訊く真紗耶。ともあれ、その間に私は良い言い逃れ方法を思いついていた。それは、ゆうべのボツタクリゲームセンターのおかげといえる。

「もうしつこいのう！ ゲーセンの格闘ゲームで相手にボコられなくて済むって話よ」

「それと映像とどういう関係があるんですか！？」

「あのゲーセン、とんだボツタクリ商法しててさ、銭こさえ入れれば相手が弱くなるっていう……」

「そうですか。では、なぜそれを言うのに今、二の足を踏んだのです！？」

もーこうなると完全に警察の取調べ。……でも慣れた。

「あんたに《柴門さん、ゲームセンターなんかに入り浸ってはいいけません》なんて言われそうだったからさ」

ここへ来てやっとこさ真紗耶の顔に快晴の笑みが戻る。

「なんだ！ そういうことですか！ もう、水臭いですよ。ゲームセンターに行ったくらいで怒りませんよ私。ただ夜のゲームセンターは危険です。それだけは気をつけて下さい……」

その一言に私は一転、冷や水を浴びせられる思いだった。

「そうね！ そうだった！ 昨日ね、ゲーセンに追っ手らしい奴らが……」

「でしょう！？ そうでしょう！？ 《この地球上に何人居るか知らない追っ手たち》に共通しているのは、非常に低俗であるという事です。まあ、当然でしょう、こんな映像を喜んで観る連中なんですから」

そう、そう、私と真紗耶が《追っ手》によって自由を奪われた原因は、まさにこの映像にある。

「はあああー、今更だけどさ、私らも因果な物こしらえちゃったよ

ね」

私が編集し終えたばかりのDVDを眺めながら憂鬱に呟くと、真紗耶は《とんでもない》と言わんばかりに手と首を横に振る。

「いいえ、いいえ！ 悪いのはインターネットではなく、インターネットを悪用する人間ですよ！ まさか私たちのDVDの中身を動画サイトに投稿されるなんて……」

「そんな時代になってたなんて知らなかったもんねー。あの頃はさ、私もアンタもネットやってなかったしい」

「はい……。何だか、異常なファンに追い掛け回されるアイドルの気持ち痛いほど解りますよ」

「けど、あんときは怖かったよね。《ネエネエ君たち、コノDVD二出テル子たちダヨネ？》って、あのキモイ男どもに声かけられたとき！」

「いや、あれはきつと、神様が私たちに《こういう追っ手が居るから気をつける》って気づかせてくれたんですよ。あれがもつとたちの悪い連中だったら私たち、今頃こんなふうに呑気にお喋りなんかしていらなくなっていましたよ？」

真紗耶のクセにイイ子ちゃんぶりやがって！ と思った私はゴロンとふんぞり返った。

「神様なんて居ない！」

「神様に見放された人間だって強く生きていけるんだっていうこと、見せつけてやりましょうよ」

寝転がった私の体に覆いかぶさり、艶めかしい視線で見下ろしてくる真紗耶。

「ちよつとちよつと、もう一本いくのかよ……」

今度は私が、録画ボタンを押すのだった。

【M i s a e · s v i e w p o i n t】炎のテニスさせて頂く（前書き）

この章では巫彩はあくまでも脇役ですね。

【Misae's viewpoint】炎のテニスさせて頂く

「てあおらーっ！」

カーン！ ズゴツ……あたしの操るラケットに打たれた球はコートを越え、土の地面に深く食い込んでいった。

今日は日曜日だけれど、学校は部活動を行なう生徒のために解放されている。できる限りあの家に居たくないあたしは、いつだって日曜をこのテニスコートで過ごすのだった。

「いいかげんにしなさい中里巫彩！ えいつ」

ただのラリー練習のはずが、あたしも相手も熱が入りすぎて、試合同然の事態になってしまっている。

「うるさいのよっ！ 喰らえッ、あたしのファイアーボールを！ ていあーっ！」

あたしはラケットを投げ捨てると、ディクシーコングのごとくツイントールを振り回して球を打ち返す（当然反則）。その球は相手のラケットに当たった……と思いきや、なんとガットを突き破って地面へ直行！

「なによこれはあああああああ！」

あまりの勢いにペシャンコになったボールを掲げて相手が叫ぶ。

「ちよっとちよっと貴女たち、やりすぎだって！ 中里さん頭を冷やさない！」

《いかにも》って感じの爽やかな顔をした西原部長が、呆れたような笑顔でこちらへ駆けてくる。

そしてあたしの頭にバシャーっとスポーツドリンクをぶっかけてきた。相手はそんなあたしの姿を見ると、満足したように嘲笑しながら立ち去る。

ブルブルっと体を振ると、まだまだ冷たい春風が火照った心身をにわかに覚醒させた。

「冷たつ！……ごめん西原さん！やだ、あたしつたら」

「どうせ腹の立つことでもあったんでしょ？」

ぎくつと竦みあがるあたし。確かに……今のあたしはテニスをストレス発散の道具にしてしまっていた。

あのウンコ義両親との確執は前々からあったけど、それはあたし自身が我慢すれば済んだこと。ところがあの夫婦、今度は朱音にまで手を出してきやがる。

いっそのこと兄さんの住むバーのママに引き取ってもらおうかしら？でもそれであたしが転校とかになったら、朱音はこの学校で一人つきり。今、朱音には《中里巫彩の親友》っていう肩書きがあって、そのおかげで無事に過ごせてるようだけれど、それすらなくなったら、いくら《お堅い》この学園内とはいっても、なにをされ始めるか判ったもんじゃない。

また仮に、あたしが横浜から遙々ここへ通うとなると、朱音に余計な気を使わせてしまうことになる。朱音はそういう子。あたしは別に朱音のためなら長い距離だって平気で通えるけど、朱音はそれに耐えられない。きつと、《私のせいで巫彩が遠くから通ってる……》なんてウジウジ悩むに違いない。

「西原さん、あんた鋭すぎよ！」

あたしはズベーつと足をおっ広げて、日差しの温もりを宿す緑のコートに座り込んだ。

西原さんはコートに向こう、あたしのボールが生み出した穴を見つめながら深々と話す。

「怒りや憎しみをテニスにぶつけるのが悪いこととは思わない。そういうものは闘争力に火を付けるからね。でも、それは本当の強さではないのよ」

「本当の強さ……」

「そう。……大丈夫。中里さんならきつと見つけられるから！将

来は立派なアグレッシブベースライナーよ」

アグレッシブベースライナー　攻撃的で激しいプレイスタイル。その言葉にあたしの闘魂が燃えた。

「まあ、お手柔らかに頑張りますか」

がしつと立ち上がるあたし。西原さんは「じゃあ私が相手をするわ」と、私の対面へ回る。

ところがラリーを再開するなり、あたしはズッコけたりアサツテの方向に球を打つたりと、散々な有様。

西原さんのスタイルはカウンターパンチャーといって、相手のミスを誘ったり、相手の強打を利用したカウンターを放つたりと、心理戦を得意とするもの。要するに、体育会系なあたしが一番二ガテとするタイプ！

あたしの戸惑いを察してか、西原さんはラリーの球を少し穏やかにしながらこんな提案をしてきた。

「中里さん貴女、誰か知的な人とダブルス組んだら？　私はもう他の部員と組んじゃってるから無理だけど、　ほら！　貴女の友達の……バレー部キャプテンの多岐川眞子さん！　彼女、部長の座をそろそろ別の人に譲りたいとか言ってたじゃない？」

「ああ、でもね、眞子の場合、《バレー部キャプテン》っていう肩書きがあるから、ウチの両親にあたしと付き合うことを認められるようなもんなわけよ。その肩書きを失くしたら、あの糞夫婦、なに言い出すか！　てあつっ！」

そこでバシン！　と烈しいカウンターを打つと、珍しく西原さんはそれを跳ね返し損ねた。ころころと、寂しくコートを転がるボール。

「うわ、貴女の親ってそんなことやってるの……？」

西原さんの動揺ぶりを見て始めて、あたしは自分が滅多に話さない身内の愚痴を零してしまったことに気づいた。

「あ、ごめん。まあ、続けましようよ」

「ええ……」

それから、西原さんの勢いは急に衰えてしまった。ぼうつとしてあたしの放った球を見過ごすこともしばしば。

けれどもあたしは、いい打開策を思いついていた。それはつまり、眞子があのお母さんに好かれた理由が、『バレー部のキャプテン』という肩書きだということ。つまり朱音にも何かそういう、あのお母さんが気に入るような肩書きがあれば……。

そういえば朱音、幼少期からピアノの塾に通っていたと、ほろりとそんな話をしていたことがあった。

これは……。

物思いに耽っているあたしに、西原さんが明るく声をかけてくる。「中里さん、ほら、いつものお客様」

西原さんはこのテニスコートを含んだ校庭の、さらにその向こうを指差しているよう。

マッシュュータス女学園と外界とを遮る石垣の向こうを見てみると

……

「木泊兄さん！」

見慣れきった、けどどこまでも愛しいその顔が、石垣の向こうからこちらを覗いていた。

【Masaya's viewpoint】怪奇なる変装劇

「やい真紗耶、そろそろ売りに行くお（＾　＾）」

「あ、はい」

さあ、今日もメイク魂に火をつける時間。まず柴門さんが簡単な化粧を施し、《卑しい行商人》に変貌します。

「ひっひっひっ…では行くとするかぁー」

柴門さん、声まで変わっておられます。

先ほど、私と柴門さんの会話にも出たことですが、私たちは自らの《行為》を収めたビデオを売り歩いており、しかも、それがネット上で流されたために《追っ手》という負の存在への対処を強要させられているのです。よって、素顔のまま販売活動は行なえません。そして私は紅茶色をした長髪のカツラを被り、プラウディアのフアンデーションで目に細工を施すと…これでもう、完全なる別人です。

「流石だよねえ、私ら。普通、メイクしたってここまで別人には成れないってえ」

柴門さんはいつも感心するのですが、私はそのカラクリに薄々気づいています。即ち……

架空のアイドルユニット『晩壓丕埒』に似ている私たち。それは即ち、二次元的な顔立ちである事を意味します。アニメキャラというのは、顔のパーツやレイアウトが幾つかのパターンから選ばれ、微妙な目・眉・髪型やその配置の違いで、キャラの区別をつけるのです。

つまりそれは、私たちがメイクによって全くの別人になることが出来るという事を意味しており。コンパクトの鏡に映る自分を見ると、私は本当に人生を楽しんでいるという気がしてきます。

普段の黒光りする鬱蒼とした女臭さから開放され、純真かつ華美な瞳を持った、髪の色だけでなく人柄までもが《紅茶色》の無垢な

少女へと変貌できるのですから。

変装を終えた私は、か細く甘い声で柴門さんに語りかけます。

「志穂ちゃんっ…………その…えっと…今日も、上手く、いった…かな？ 変装」

「うん。綺麗。綺麗よ。もう、死にたくなるくらい」

などと、柴門さんにしては珍しく、真面目に評価してきます。

ストリートに褒められて、頬を真っ赤に染める私。

「えっ…えー？ そ、そんなこと、ないよお…………。志穂ちゃんのほうが…変装…上手いよ…………。じゃあ、夕方に、またここで落ち合おうね…………」

「うん…………。ねえアナタ、もしかしたら理奈子様りなこより、理奈子様らしいかも」

そう。私のこの姿を見ると柴門さんはいつも、晴天が一瞬にして雨雲に覆われるかのように、哀しさと懐かしさが入り混じった表情をします。変装した私のこの姿は、かつてある場所にて出会った《香上理奈子かがみ》という女性の顔に基づいています。

私たちは廃ビルから出ると、行動を別々にします。なぜなら私たちの変装レパートリーは今のところ、これだけからです。いつも同じ《卑しい行商人風の小娘》と《紅茶色の髪的美少女》が一緒にあのDVDを売り回っていたとなれば、簡単に足がついてしまうことも想像に容易いでしょう。

しかし別々に行動すれば、私たちは《単なる売人》という位置づけとなることでしょうか、足がつく危険性はうんと低くなるだろうと考えたのです。

路地裏にて、弱々しそうな男を見つけると、もう勝ったも同然。

「ねえねえ、この映像、欲しくないかな？」

などと甘く誘い、小さなプレイヤーでのハイライトを見せると…………

「うは！ うはうはうは…………スゲー！ これが噂の…………三次元版」

晩壓丕埜』のAVかあ。はあ？ これマジで『晩壓丕埜』の二人じやん！ ハアハアハア 告洵匐と廉埜紡弊順が絡んで……って、うわあスゲー、ここまで映しちゃっ……。これ、転載OKすか？」「もちろんだよー 勝手に売ってるんだもん」

「やっただぜえ。買います。全財産だつて惜しくないっすよ。動画投稿サイトにあげれば『寄付』によつて元も取れるでしょうしねえ。俺は『神』になるんだあ！ ウヘヘヘヘ」

と、こんな具合に、簡単に万札を数枚、私に手渡してくるのです。これは、決して不思議な事ではありません。ネット世代の男性は、色と欲のためならば簡単に大金を手放すのです。

まず第一に需要の面。

今流行の同人誌やコスプレAV。その最大の利点は、健全なアイドルやキャラクターのあられもない場面が描かれているという点にあります。しかしそれは同人誌の場合は紙の上のこと。そしてコスプレAVの場合は似ても似つかぬ実在の人物がキャラクターの衣装を着ているだけのこと。

その意味で私たちの映像は、バーチャルネットアイドルである二人がこの上なく忠実に実体化し、しかもそれがあられもない場面を演じているという意味で、同人誌やコスプレAVよりも遥かに強烈なインパクトと魅力を持っているわけです。

そして第二に、購買者が動画サイトへ私たちの動画を流すというスタイル。新作のマスターテープを入手した者が、それを動画サイトにアップロードすることがネット界の流行になると、アップローダーが『神』として祀り上げられるようになり、それ相応の寄付なども受けられるという特典が多くあります。

ネットで私たちの動画を見ている視聴者の数は約五百万ほど。例えば、殊勝に寄付をするのがその一万分の一だったとすれば、一人百円で約五十万円がアップローダーに入ってくるというわけです。金と女。この二つの欲望を満たしてやれば、人は思い通りに動く

リスキーゲーマー・佐久間昇の言葉を、まさに私たちは実践しているのです。

閑話休題。

未だ赤みが微塵も差さぬ空……今日は手早に販売作業が済みました。鞆に入れたDVDは十数枚の万札へと変貌を遂げています。これを期に、ずっと気になっていたある場所へ行こう、と思い立ちました。

公衆トイレにて変装を解き、本来の私に戻って、と。

私が住む柳小路の隣町へ向かいます。柳小路は滋味深い景色ですが、この隣町には店の看板や塗装などにさり気ない赤や黄色が見られ、空気はずつと華やいでおります。

もうこの辺りを歩いただけで、柴門さんと一緒に居るときより柴門さんの匂いを感じるから不思議なもの。

そして私は、青空をバックに透明な花々が描かれた看板の下に立ちます。ここはこの女性的な町を象徴するかのように洒落たレストラン《クウチューカ》。空中に咲く花のように、お客様を地上の苦労から一時だけ*いつとき*でも解き放ちたいという理由で付けられた名だとか。そう、そしてこの感じの良い洒落たレストランこそが、柴門さんの実家なのです。ここを訪れるのは何ヶ月ぶりでしょうか……柴門さんのお母様である蓉子ようこさんは美人ですし、娘とは正反対のとても穏やかな方なのですが、この事情では会うのがどうにも心苦しく。

しかし、どうしても蓉子さんが心配な私は、思い切って自動ドアの前に立ちます。すると……

「いらっしやいま……ま……真紗耶ちゃん！？ 久しぶりね」

などと、テレビドラマなどでお決まりの光景。しかも、いらっしやいまの《ま》と真紗耶の《ま》が繋がっていて面白いです。ともあれ、蓉子さんは何も変わってはおらず、ひとまずは胸を撫で

下ろした私でした。

即ち、久しぶりね　と甘く優しく、しかしどこまでも大人の女性の風格が滲んだ声で囁く蓉子さんの態度は、あのような性格の娘が居るとは思わせぬほど　たおやかで温和であり、娘と同じ肩までのセミロングも、こちらはややオカッパ頭に近く、その墨のように重々しい黒色はどこか私の母・袴里を想わせるものがあります。

それにしても、こんな人が経営するレストランで平然と食事が出るこの人たちの気が知れません。豊かな胸の下部あたりまで襟が切れ込んだ白いブラウスに灰紫色のエプロンスカートを重ね着したその姿は、そこらの萌え系レストランのウェイトレスよりも遙かに破壊力が大きいでしょうに。

「あの、蓉子さん、それで、お元気ですか…？」

それしか訊くことの出来ない私。それでも蓉子さんは満面の笑みを向けてくれます。この笑顔を見ると私はいつでも、彼女の一人娘が少し憎らしくなるものです。嗚呼、あのような呪われし校舎跡は捨て、ここに帰って来て差し上げれば良いのに…と。

「ええ。真紗耶ちゃん、私を心配して来てくれたのね？　ありがとう。でも心配は要らないわ。ネットで人探ししたら見つかったっていう話し、よく聞くし……あの子は必ず戻ってくれる。それに、こうして店に出れば少しは気も晴れるしね」

「そうでしたか。早く、見つかるといいですね。…っ！」

自分自身の発した言葉が今、私の心を真つ二つに引き裂くようでした。嗚呼、この人の娘が変装して出歩くのは《追っ手》のせいだけでなく、蓉子さんの情報によって自分を探す人たちを避けるためでもあるのです…！

「おーい！　ハンバーグランチまだかい！？」

「あ！　すみません！」

調理場へ戻ろうとする蓉子さんを私は無礼承知で引き止めます。

「待って！　蓉子さん！　一つだけ言わせて下さい！　例えば柴門志穂さんがこの家に戻って来なくても、私は一生、蓉子さんの味方で

居ますから！」

「ありがとう、真紗耶ちゃん…！」

ウルウルとし始める蓉子さんを尻目に私は、レジの紙とペンを拝借してそこに自分の携帯番号を書くと、蓉子さんに駆け寄ってそれを手渡しました。

「店をやっている間は気が紛れても、ふと、夜に淋しくなることはあるかも知れません。そんなときは遠慮なく、私にお電話を下さいませ」

「ありがとう…本当に」

「私には、このくらいしか、出来ませんから…」

深々と蓉子さんに頭を下げ、店を出る寸前、私はハンバーグランチを待つオジサンに頭を下げ「申し訳、ございました…」と謝罪することを忘れませんでした。オジサンは私たちのやりとりからただならぬものを感じたのか、やるせなさそうに首を横に振っていました。

そして店を出たとき、私の心臓は凍りつきました。

見覚えある凹凸おとつのないボディ・ラインが描く、独特の素朴美あふれるシルエツト。

「あ、あなたは…っ！」

私は数歩、後ずさりしてしまつて、クウチューカの自動ドアを開けてしまいました。

咄嗟にドアから離れて《その人》の真ん前に立つと、彼は私の戦慄顔を指差して静穏に微笑みます。春爛漫のこの陽気を夏の終わりの寂しげな晴天かと錯覚させてしまうような、涼やかな寂しさを未だに纏っている彼。

「もう、相変わらずネクラなんだから」

と、少女のような声で囁きますが、その姿もまた、誰がどう見ても女性のもの。

神秘的かつハッキリとした美顔に、腰まで届くかという長く細い

髪や、薄緑色のセーラーワンピース……何もかもが繊細で弱々しく、それが私の感傷をいっそう痛切なものにします。

（ちなみにセーラー服という大抵の人が制服を思い浮かべるでしょうけれど、彼の着ているのはれっきとした私服。私服のセーラーというのは、全く珍しいものではありません。）

「すみません……木泊さん」

彼の名は山口木泊、旧名は中里木泊。やまぐち・こはくすなわち巫彩さんの義兄その人であり……

私ネット嫌い。あんただって……《あの人》、ネットのせいで自殺未遂を

言わないで！！　お願い！！　《あのこと》には触れないで！！　下水道にて交わされたこの会話において、柴門さんの言うところの《あの人》でもあるのです。

彼を引き取った横浜のバーのママが《山口》姓であるため、彼も山口木泊という名になっております。

彼の両親、つまり巫彩さんの義両親は、木泊さんの親権を実に易々と放棄してみせたとのこと……。

木泊さんの消え入りそうな明るさが、私の胸には光る刃となってグサグサと突き刺さります。

「知ってるだろうけど、ボクは今、幸せですから……。引き取ってくれた人はとっても優しいし、それにヨコハマはいい所ですから。だから真紗耶さん、もう心を痛めるのはやめて下さい」

十三夜月のように丸く透きとおった瞳を、その月光を宿す湖水のごとく輝かせる木泊さん。

しかしどうにも私の心にはストンと落ちないものがあるわけです。「木泊さん、これはもう、あなたが幸せになったか否かの問題ではないんです」

「真紗耶さん、あんまりボクから逃げないでよ」

「は、はい。でも私、あまりにも、あなたがお可哀想で……」

「君、ボクのシアワセな姿、ちゃんと見たことないでしょ？」

「会いに行く、勇気がありませんでした。ですが最近、巫彩さんと《Sweet Season》で会いたって、無意識の内に書いてしまつて……。あの店は、あなたが住んでいる場所なのに」

それを聞いた木泊さんは秋空のような笑みで私の肩をトントンと叩いてきます。

「ふふふふ、そうかあ。ボクが元気に暮らしてる姿を見たら、きっと真紗耶さん明るくなれますよっ」

「そうですね。それで私も、無意識の内にあなたの住む店を指定したのかもしれませんが、今日はどうしてここへ？」

すると木泊さんはラケットを持つふりをし、素振りをして見せました。

「巫彩がテニスのレンシュウしてるとこ、見に来たんです。巫彩、元気そうでした。でも……ヒゴロのウツプンをテニスにぶつけてるようにも」

水曜日に会ったらその辺りのことも訊かなければ、……という想いを強くする私でした。

「……………」

「それで真紗耶さん、志穂さんはどうなってるの？ 巫彩の様子を見るついでに寄ってたんですけど、このラディッシュには帰ってないみたいですね。ということは、今でもあの校舎跡に、居るんですか？」

「はい……………」

「そうですね、か。ん、じゃあね」

木泊さんは緩やかに手を振りながら私に背を向けました。

「はい。お元気で」

木泊さんと別れるとようやく、うつすらと空に茜色が差してきました。戻りましょう……柴門さんの元へ。

夕暮れともなると、さすがに見慣れたはずの廃ビルも不気味に映

え 割れたガラス窓の一つ一つが、底なしの闇へいざなうように口を空けているのを見ると、どうにも足が竦みます。

こうなると若干、埃という名の絨毯が敷き詰められた階段を上る歩調も、恐る恐るという感じのものになってしまふものです。

屋上に着くと、柴門さんはすでに戻っており、金網に手をかけて茜色の空を見つめていました。

なぜかとても、彼岸の果てを眺めるような遠い目で……。

そして私に気づくと、ノスタルジックな笑顔で振り返り、意表を突く言葉を放ってきたのです。

「真紗耶おかえり。ねえ……お母さん、元気かな？」

「お母さん、って、蓉子さんのことですか？」

そこでようやくいつもの柴門さんに戻ります。

「他に誰が居るのかっつーの！」

「今、会って参りました」

「は？」

「蓉子さんに、お会いして来たんです。今日は早くにDVDが全て売ってしまったので」

一気にシリアス一色の顔になり、私に駆け寄って肩を掴んでくる柴門さん。

「それで！？ 元気だった！？ 奇麗だった！？ 変に老けてなかった！？ 店はうまくいった！？」

と、さだまさしの歌のようなことを訊いてきます。私は呆れて溜息をつきました。

「はあ……柴門さん、そんなに心配ならば、お母さんの元へお帰りになれば宜しいのに」

私が何度吐いたか知れないその言葉に、ふんつと表情を尖らせて夕陽へと視線を戻す柴門さん。

「もう飽きた、それ」

私は一転、例のごとく自分勝手な柴門さんにいよいよ腹が立って

きました。今度は私が彼女の両肩をつかみ、その健康的な体を揺さぶります。

「だってどう考えたってそのほうが幸せでしょう！？ 貴女にとつても、お母さんにとつても！ まあ、あの工場跡を離れられない事情が幾つもあるのは痛いほど知ってますよ！？ でも、私や蓉子さんには、貴女の命のほうが大切なんです！ それなのにどうして、どうしていつもいつもあんな所に帰るんですか！？ どうしてなんです柴門さん！？」

私の熱っぽい説得も虚しく、柴門さんは目だけを下に向けて足元に転がったコンクリの破片をポーンと蹴りました。

「だって、楽なんだもん、そのほうが。実家に帰ればお母さんは気を遣って、私が何も罪を犯さなかったように必死で明るい生活を提供してくれる。それはお母さんの好意だから、私はどうしても何もなかったように明るく振舞わなきゃいけない。……でも無性に怖くなるのよおっ！ 私はあんな凄惨な事件を起こしたのに、何もなかったように太陽の下でなんて生きられない！ って！」

「けれども、あの呪われた真っ暗な工場跡に帰れば、それが紛れると？」

「うん。あそこは何もかもが怖くて暗いから、私の罪も見えなくなる気がする……」

「まあ、気持ちちは解りますよ」

私は本当に柴門さんの心を理解しているつもりですが、柴門さんには今の言葉が癪に障ったようで、私に肩をつかまれたまま、ギツと鬼のような睨みを私に投げかけてきます。

「真紗耶に何が解るの！？ 返り血を浴びるのがどれだけキモチワルイか解る！？ 今でも奴の血の臭いが鼻から消えないのよ！ どうして私が実家に帰りたくないか解ってないでしょアンタ！？ あの明るい店の客たちが、全部全部、嘘に見えるのよ！ あいつらはみんな、何の罪も背負ってなくて普通に明るい人生をエンジョイしてて、そんな奴らが呑気に飯喰ってるのと同じ屋根の下に居るのが

「どれだけ心苦しいか！ 解んの！？ あんたに！？」

「だから今日、あの店を見てきて、私もそう感じたんですよ。こんな明るい場所に帰るのは、確かに柴門さん、おつらいだろうな、と」私の理解に満ちた言葉に安心するどころか、吐き捨てるような溜息をつく柴門さん。

「はあああ、もう、めんどくさい……。実家に住むとなると店を手伝わなきゃ居づらいし、そしたらまた、私の前科を知ってる奴が客として来るかもしれない」

色々言っておりますが、柴門さんが家を飛び出した理由、それはまさに、柴門さんの犯した罪を知っている人間があのだに客として現れ、そのことを彼女に問いただしたからに他ならないのです。

「でもそのあたりは蓉子さんとよく話し合って……」

「ああ嫌だ嫌だ嫌だ。何もかもめんどくさいよ畜生！ だから真紗耶、お願い、時々お母さんに会いに行つて様子を見て欲しいの。そのくらいしてくれたつていいでしょ？ ね？ 私、真紗耶のせいで子宮、全部失くしちゃったんだから」

それは嘘ではありません。そればかりか、柴門さんがレッドラムになったのは、ほとんど私の

私は深々と頷きました。

「そうですね。そうします。私、蓉子さん好きですし」

「急にしおらしくならないでよ！ 私が悪者に見えるでしょーが！」このワサビが効いた傍若無人ぶりが柴門さん最大の魅力でしょう。その屈折した心の襞の総てを我がものにしたいくて、私はいつも烈しく彼女を愛してしまう、求めてしまう……。それが結果として、あのような映像となって大金に変わるのですから、まあ有意義なことといえるかと。

「ふふ、柴門さん、今日はこれでお別れ、ですかね？」

「そのほうがいいでしょう。昨日は《一緒に帰る》なんて突飛なこと思いついちゃって、それで追っ手に見つかって下水道なんぞに隠

れなきゃなくなつたからね……」

「そうですね……」

私が寂しそうな顔を見ると、柴門さんは私に背を向けた後、サラサラの髪をフワリと舞わせて振り向き、金網越しの夕日を背景に、私に優しくもどこか憂いを感じさせるウイंकをプレゼントしてくれました。

「また明日ね　また、ここで待つてゐるから。……私は、ここで暫く夕日を見てから帰るわ」

「はい。どうか今日もご無事で」

「おう！　心配すんな」

ビルの階段を下ると私は、冷たい靴音を淡々と、この荒涼たる地帯に響かせます。この辺りはバブルの落とし子なのか、このような廃墟や瓦礫の山、あるいは建物を取り壊した跡と思われるコンクリの空き地しかなく、この時間帯に一人で歩くには少々寒気を催すものがあります。

角を曲がるとようやく、人の気配のする細い道路が見えてきました。

その道路に向かって、十三度靴音を響かせたところで……

私の眼前を疾風の如く突進してゆく物体がありました！　車に轢かれそうになつたのです！

「うわぁーっ！」

あ、嗚呼、嗚呼嗚呼、私はなんということを！　ええ、ええ、車に轢かれそうになつた事などではありません！　私は私は、男の、男の叫び声を出してしまつたのです！

そしてそしてその直後！　泣き面に蜂の如く……

「こらぁーっ！　気をつけるよ小娘！」

車の窓から顔を出し、私を睨みつけて直ぐに走り去つた男の顔……

私は悪い霊にとり憑かれたように喉を掻きむしりながら、今来た道を疾駆し、柴門さんの元へ急いだのだと思います。ビルの階段を上った記憶は、もはやありません。

「ああーっ！　許さない！　許さないっ　許さないっ　許さないっ　許さないっ　許さないっ　許さないっ！」

――

「真紗耶！ 大丈夫よ、大丈夫だから」

私は半狂乱のままではありますが、事情を話すだけの余裕は取り戻していました。

[illegible]

んかにブンブン振り回されんなあつ！ 私まで悲しくなるから！」

「あああああああつ！！」

そう、普段はあつけらんとしていようと、私の心の奥には、常に底なしの血の海が広がっているのです。幼少期に受けた心の傷から流れ続ける血によってできた、深く赤黒い海が……。

そして、そんな私の過去の傷を何もかも知り尽くしている柴門さん。彼女は起き上がって私の頭を膝に乗せると、この夕映えに溶け込むような愁いに染まった笑顔で私を見下ろします。さっきは私の憤慨と同化した夕映え。夕映えとは、実に様々なものにそぐいます。「解ってるって。何年付き合ってると思ってるのよ？ 仕方ないって、女性ホルモンの副作用なんだから。全く、リタリンといい女性ホルモンといい、副作用って恐ろしいわよね」

「……………」

女性ホルモンを常飲すると、副作用として情緒不安定に陥り易くなると云います。

すると柴門さんの華美な瞳に、僅かな涙が光ったように思えました。

「ねえ真紗耶、ねえ教えて。あなたは、誰が憎いの？ 自分を虐めた奴ら？ それともそんな世間をこしらえた人類そのもの？」

「う……………わ…わ…か…り……………ま…せん……………」

「そっか」

こうなると私の頬にも涙がほしい、柴門さんの白い太ももに零れます。

「もう、分からないのです。誰かを憎んでいるわけでもないのに、涙が滲み出てきてしまう。悲しみもない、恨みもないのに、どうしてこんなに悩むのでしょうか？ どうしても、どうしても、それが分からないのです……………」

「私もよ。私の心にも、いつも雨が降っているわ。私たちの心に染み込んでくる、この悲しみはいつたい何なのかしら？ 私たちの心の雨はね、いつもシトシト降るの。私たちの悲しい心には、それが雨の歌なのよ」

子供に夢のある童話を聞かせるように語る、柴門さんのその口調

も声も、もろに蓉子さんそのものでありました。そして、こうして憐れみに満ちた言葉を交し合うと、私はようやく完全に落ち着くことができたのです。

「柴門さん……ありがとうございます……。普通の、幼馴染なら……私を、警察病院に、引っぱって行きますよ……」

柴門さんは私を見下ろしたまま、ちよっぴり意地悪に笑います。

「はははは、ダメだって　真紗耶みたいなのが近づいたら、警察病院だって逃げてくわよ」

「そうですね……」

こうして私はようやく、よろよろと立ち上がって深々と頭を下げました。

「おいおい、気をつけてよ？　帰り道」

「はい……」

力ない私の返事に恐らく柴門さんは心細さを抱いたのでしょう、夕日の真ん前にまっすぐに立ち、実に新鮮な笑顔を見せてくれました。柴門さんの頭の真後ろに輝く夕日が、まるで日食のように美しい……。

「ほら、心細くなったら私のこの顔を思い出さない。ふふ、私、顔だけは無垢で明るいよ（笑）」

「ありがとうございます……では」

「こっちこそありがとー　日帝だの刺客だの、日常じゃ絶対に聞けない言葉が生で聞けて大満足よ！　また明日ね」

「はい……どうかご無事で」

今日は、私と柴門さんの生活や関係の全てを、顕著かつ端的に説明するような形の一日となっていました。こんなにも様々な要素が凝縮された一日は久しぶりです。

そうなのです。どちらかがどちらかを頼るわけではなく、お互いがお互いの脆い部分を支え合うという、このジェンガのような危ういバランスで、私たちは十何年もの間、良好な関係を保ってまいり

ました。

しかし私は時々、無性に怖くなるのです。複雑に頼り合った私たちの関係……そのどこか一箇所が、ことりとバランスを崩したなら、それで総崩れになってしまうのではないかと。

ともあれ、柴門さんのおかげで私はとても落ち着いた気分で家路を急ぎました。そう今日もまた、彼女の無事を強く強く祈りながら

……

【Masaya's viewpoint】怪奇なる変装劇（後書き）

基地外パートでしたね。

でもこれすら序の口だったりします。

【Shiho's viewpoint】ドアの前にて膝を抱え…

「柴門さん、心配しないで下さい。今、家に着きましたから。さつきはありがとう。貴女にまた助けられましたね。」

と、真紗耶からメール。ふう、手のかかる奴

私は今日はまっすぐに家路についていた。これだけ稼げば、殴られずに済む、そう思ったら気が楽で……。さっきの真紗耶との会話でも言っただけ、私が実家よりもあの工場跡を選んでいるのは、そのほうが楽だから、なんである。

壊れかけていようが殴られようが、あの太陽の光に満ち溢れた明るい店の上にある自室で籠るより、あの冷たくて暗くて、だだっ広い教室跡で籠るほうが少しは気が楽なのだ。

そうだそうだ、楽なほう楽なほうへフランコフランコしてたほうが少女は美しい！　ここまで逃げたり籠ったり責任転嫁したりし続けて生きてきた私の美しさは尋常ではないはず。また、そうした私の《浮遊美》を徹底理解できる真紗耶も神である。さっき真紗耶がトチ狂って口走った言葉《気高く神々しき柴門さん》あれは真紗耶の本心であると同時に、とても的を射ていると思った。

家の門をくぐるとまた私は、工場跡の前にしゃがんで手を合わせる……。

そして昇降口という名の玄関に入ると、横たわった下駄箱が、私の行く手を遮っていた。

「なによこれ……ここまで……ここまで《出てきた》っていうの……？」

下駄箱の上を歩くと、ぎしぎしと木の板が軋むけれど、これはほぼ廊下を歩くのと同感覚だった。

ともかく、南棟と北棟を繋ぐ通路に稼いだ金をそつと置き、私は自分の部屋というか教室跡に戻り、ドアの前で膝を抱える。これが私のいつもの体勢。

しばらくすると、果音の冷たい足音が響き、カサツ、と、万札を握る音が聞こえた後、また果音は自室である音楽室へ戻って行った。

そして、この夜の静寂に自らも溶け込んだような気分になっていたそのとき

私のその静かな心を破るかのように、また北棟のほうから魔獣が目覚めたかのような破壊音が響き渡った！

そのすぐ後で、果音がダダダと音楽室から走り出て、無数の鉄屑を激しく掻き混ぜるような音を立てて《開かずの間》の門を開けると、

「！！」

その人の名らしき言葉を叫びながら開かずの間へ駆け込んで行った。

いつも、こういう事になる時間帯は、自らの膝に顔を深く深く沈没させ、恐怖に耐える私……

こんな私を、人は《情けない》と非難するだろうか？ 例えばこれが小説なら、読者はここで、ヒロインである私が捨て身で開かずの間へ急いで、自らも必死で役に立とうとする展開を望むのかしら？ けれども、こうして騒ぎから逃げて膝を抱えているような私でなければ、真紗耶の心は癒せないことだけは事実だ。

長らく、手負いの獣が七転八倒するような打撃音と、ガラスを爪で引っかくような金切り声とが同時に響き続けた後、《あるきっかけ》を期に騒ぎが収拾するのを、私は聞き逃さなかった。

【Masaya's viewpoint】慰安の断罪

「お母様、調子はいかがで……っ!？」

母の顔を覗こうと障子を開けたとたん、人形が私めがけて飛んでくるではありませんか!？」

その胴体は障子紙に突き刺さり、もげた首は廊下にくろくろと転がってゆきました。

「真紗耶？ あなた今日、志穂ちゃんの愛を求めたわねえ？」

後ろ手で人形を投げ放った母。私に背を向けたまま、意表を突く言葉を吐いてきます。

私が後ずさりすると、この足の裏が人形の首に乗り、「きゃあっ」バランスを崩して廊下に尻餅をつきました。

「お、お母様……なぜそれを……」

するとムクリと立ち上がる母。

「歩き方!」

崩れ落ちた私に振り向きます。

「気配……!」

そして畳をどすどすと鳴らしながら歩み寄ってきました。

「それから障子を開ける仕草っ! そういうもので判るのよ!」

びらびらと、私の眼前を舞う着物の袖。平手を喰らうのだと覚悟したそのとき、この頬に触れたのは白く冷たい温もり……。

意外にも頬を撫でられたことに気を緩めた私は、柄にもなく反論をし始めました。

「だ、……だって、お母様が、柴門さんにお頼みになったんでしょ?」《真紗耶が取り乱したときは落ち着けてほしい》って

母は私の頬を撫でながらも、人形のように表情ひとつ変えません。「それは志穂ちゃんが、母性なんか持っていない女だと思ったからよ。中絶なんて行為をするような女に、母性なんかあるはずがないって……。でも私の見当違いだったみたい。あなたはさっき、志穂

ちゃんの母性に溺れていた」

「でも柴門さんは、取り乱した私を……」

そこでぎゅうと、その白い手が私の頬を鷲づかみすると、母はにっこりと、子供のように無邪気な笑顔を浮かべます。

「ふふふ、袴里、いい子だから、そのお餅みたいなほっぺを痛めつけたくないわあ」

「……？」

そのせつな、今度は呪いをかけられた人形のごとく、その目をぎいと吊り上げました。

「真紗耶、誓いなさい！ 金輪際、袴里以外の女に友情以上の感情をいだいたりはいしないって！」

「……………」すくみ上がる私に、

「早くなさいっ！」追い討ちをかける母。

私はガラス玉のような母の瞳を見つめ、声を震わせつつもこう宣言しました……

「真紗耶はお母様以外の人間に、友情以上の感情をいだいたりはいたしません……………」

「うふふふ、よくできました」

一転してニコリと、普段の温和な表情へと戻る母。「じゃあ、ご飯にしましょうね」私から離れてスタスタと廊下を歩いてゆきます。

と、そこで私の携帯が震えました。見てみると蓉子さんが早速メールを送って下さったようで……。

内容を読むと、やはり……この時間に一人で過ごすのはやはりお寂しいとのこと。

どのような言葉を紡げば、彼女の孤独をやわらげてあげられるか……それを漠然と考えていると

「そのメールの相手、志穂ちゃんじゃないわね？ あなたの後姿を見れば判るわ」

振り向くとそこには、台所へ行つたはずの母が、庭の石灯籠に照らされてぼんやりと佇んでいました。

「ちよつとお母様!？」

母は問答無用で私から携帯を奪うと、しばらくその内容を眺め、やがてどこかへ電話をかけました。

「あ、ああ、もしもし? クウチユーカさんですか? ……そう、では貴女、蓉子さんね? お久しぶりです。河東真紗耶の母です。いつぞやはどうも。ええ。禱里です」

「……………」

昔に色々あつたため、母はクウチユーカの電話番号を覚えていたのだでしょう。

「率直に言つわ。うちの子は蓉子さん、貴女に気があるの。大方、貴女が真紗耶に色目でもお使いになつたんでしょうけど。でもよりによつて志穂ちゃんの想い人に言い寄ることはないでしょう? ふつ……ふふふ、そこに志穂ちゃんが居らしたらどんな想いをなさるでしょうねえ? ねえ? ふふふふ、娘と母が同じ人を取り合うなんて……なんだかエッチで……ふふふ、厭だわぁ……」

「お母様やめて」

思わず駆け寄る私を片腕で突き放すと、母はにわかに声を荒げます。

「真紗耶は貴女や貴女の娘と違って純真なの!」と、そこで突然猫なで声に。「そうなのお、まだミルクの匂いがとれなくなつて……うふふふ。ええ。じゃあお願いね。真紗耶には私という立派な大人の女が居るの。なにも二番煎じの貴女と恋仲になる必要はないもの。じゃあ、お願いしますね。おやすみなーい」

その口調にも表情にも、大人の厭らしさは皆無。それは魔法によつて命を吹き込まれた一抹人形が、言葉を得て楽しげに話している以外の何者でもなく、それが逆に異様な妖しさを醸し出しているのです。

携帯を私に返すと、「あ、トカゲの照り焼きがコゲちゃうつ!」

などと無邪気に囁きながら、着物の裾を实にもどかしそうに走り去ってゆきました。

なぜか酷く疲れてしまい、食事が済んだら柴門さんにメールしよう、心に決める私。母は 身体だけの女 である柴門さんへのメールだけは、黙認してくれているようです。

【Masaya's viewpoint】慰安の断罪（後書き）

ここまでくると気持ち悪さを通り越してせいせいした気分でした。

【Shiho's viewpoint】狂気の家庭科室

「柴門さん、ご無事ですか？　なんだか急に恋しくなっちゃいました。明日は私も、早めにいつもの場所へ行くかもしれません。」

また夜中に真紗耶からメールが届いた。どーせ私は寝てないんだから、一晩中でもメールしたい気分。次に会った時、即、その事を頼んでみよう。

そう、一晩中このドアの前で膝を抱えて、時々うつらうつら...それが私の夜の過ごし方。特に夏は風邪をひく心配も無いから気が楽だ。問題は、時間が経つのが凄く遅く感じるという事。この状況下、こうして何もしないで居ると、自分が生きているのか死んでいるのかさえ判らなくなってくる。

ラジオをつけよう。孤独が沁みるこんな夜は、誰かの話している声を聞くに限る。電源を入れるとつまらん演歌が流れ出し、それがフェイドアウトで消えるとニュースが始まった。

最初のニュースは他愛のない政治ネタ。ところが……二つ目のニュースに私の心は凍てついた。

次のニュースです。東京都に住む四十六歳の女医が、大学受験を控えた息子に、病院から不法に持ち出した《リタリン》という薬を投与していたとして、書類送検されました。この薬は、主に精神病などの治療に用いられていたもので、俗に《合法シャブ》などとも呼ばれているため、警察では、この女医が息子の受験を成功させるためにリタリンを持ち出したと見て、詳しい動機などを調べています。では、次のニュース　今日は気持ちの良い春空が広がり、桜も満開！　各地でお花見が行なわれました

「今さら何よ!?　何がお花見よッ!?　こん畜生!」

私は思わずラジオをするりと手から滑り落としてしまった。電池が飛び出し、ころころころと虚しく転がる。あと十年早く!

リタリンの恐ろしさをアンタらマスコミが大々的に伝えていてくれたら……！！

すると、ミシ、ミシ、と、果音がどこかへ出かけていく音が聞こえた。あら？ 果音が《あのため》に出かけるのは、半月に一回くらいで、数日前に彼女はその外出を済ませたはずなのに……

さて、私が《自分が出かける時間》に気づくキツカケは、もちろんこの腐った教室跡に鈍い朝陽が差し込み、いたる所に張った蜘蛛の巣を樹氷のように輝かせること。

今日も、その時間が来た。私は北棟への通路を通ると、開かずの間の前で立ち止まり、しばしその向こうに想いを馳せるも、すぐ振り切るようにそこを通り過ぎて家庭科室へ向かった。

ただっ広い家庭科室が、普通の家でいうところの台所になっている。

果音は少なくとも私を餓死させるつもりはないようで、質素とはいえ、きちんと私の食事はこしらえている。

「そりやそうよね、私が餓死したら、こんなに荒稼ぎは出来ないものねえ」

声にならない独り言と共に家庭科室に入ると、果音はまだ来ていなかった。

蛇口や流し台の付いた大きな長方形のテーブルが四台並ぶこの部屋。そのうち使っていない三台のテーブルはもちろん、この建物の御多分に洩れず、蜘蛛の巣と埃という二重のヴェールを纏っている。

ふと、私はその内の一つ、埃の上に置かれた新聞に目が行った。

果音は確か新聞はとっていない。明らかに彼女は、外界との遮断を徹底したがっているからだ。

では、なぜここに新聞があるのか。……やはり果音だろう。ゆうべ、果音はラジオであるニュースが流れた直後に出かけていった。彼女も同じニュースを聞いたとすれば、それで、いよいよリタリ

ンの恐ろしさが世に知れ渡るときが来たか、と淡い期待を抱いて駅の売店かどこかに新聞を買いに出かけたとすれば　ここに新聞があるのも理解できる。

ところが、置いてある新聞にリタリンらしき記事は　書いてあった。表紙ではなく、三面記事の左下にオマケのように小さく。

私が記事に見入っていると、ドアをガラガラと乱暴に開けて果音が入って来た。

果音は私から一番遠いテーブルの前行き、私に背を向けた状態で野菜を切り始める。

そして……、ヘドロが流れるのように低くおぞましい声で、久しぶりに、本当に久しぶりに私に対しての言葉を発した……

「……全く、そんな薬を処方したら、患者がどんな不幸を背負う事になるか」

「果音様だつて……」

足を緩やかに震わせながら不安定に立ち竦み、怯えつつ声をかける私。

その消極的な態度が果音の癪に障ったのか、

「……！！」

ただでさえ鋭利な瞳を羅刹のごとく尖らせ、ぶんとこちらへ振り向くと、ポット、ゴミ箱、野菜、食器……手近にある物を手当たり次第に私に投げつけてきた。

巨人が街を荒らし回るような凄まじい轟音が家庭科室を震わす。

私の後ろの壁に当たったポットが壊れて熱湯が私の足元に広がる。天井にぶち当たったゴミ箱からいつのものとも知れない古いゴミが私の体に降り注ぐ。

野菜の数々が地面でグチャグチャに碎けて嘔吐物のごとく散乱する。

そしてそして、その上を生々しい音を立てて割れ果てた食器の破片が彩る。

投げる物が尽きると、果音はゆっくりと私に一步、また一步と近づいてきた。

ガラス片の上を靴下一枚で歩く果音、私の元へ来る頃には、その裏側は真っ赤に染まっていた。恐らく今の果音には、痛覚すらなくなっているのではあるまいか？

できるものならば逃げ出したい！ 逃げ出したいけれど怖気づいて足が動かない！

果音の身体から発せられる邪気が、私の動きを封じてしまうようにも思える。

私に接近しきると果音は、手に取った新聞で私の頬を打ってきた。何度も何度も！

果音の手にかかるただの新聞ですら、私をそのまま地面に崩れ込ませるほどの凶器と化する。しかし何とかガラスの散らかった箇所には倒れずに済んだ。

果音は新聞を鞭のごとく扱い、崩れ込んだ私の背を百叩きにしてきた。

私の身体に野蛮な衝撃がほとばしるたび、新聞の破片が紙ふぶきのように宙を舞う。

やがて辺り一面が手入れを怠ったニワトリ小屋のごとき惨事と化すると、ようやく果音は手を止めた。

その隙に私は、逃げ去るように家を後にしたのだった。

体が若干ヒリヒリするけれど……私は気早ながら急いであの廃ビルへ向かう。真紗耶も早く来るって言っていたし。まあ、あいつのことだ、私よりは遅く来るんだろうけど。

ところが、屋上に着いた私は我が目を疑った。そこには、性転換してから極端に寒がりになったあの真紗耶が、赤ワイン色のキャミワンピを身に纏い、やっぱり少し寒そうに、右手を胸の下に回して左腕を掴んで立っているではないの。

「柴門さん、あの、おかえりなさい」

「あ、あの、真紗耶…」と言いかけて、ははーん、と一気に私は笑みを取り戻した。「あさつては水曜日か！ あの日だ。巫彩ちゃんに会う日」

「は、はい。そう、なんです」

少し頬を赤らめる真紗耶を見て、何か妙な違和感が……そうか！
「アンタ一つ勘違いしてナーイ？ 巫彩ちゃんは 女 の 子 だ
けど？ そんなエロい格好したって、別にプラスになることは何にもないと思うけどオ…」

「あ」

硬直する真紗耶。私は呆れて真紗耶に近づき、豊胸した巨大な胸をツンツンつついた。

「アンタ、私たちがしてるのが《男女の関係》よりは《レズ》に近いこと、忘れてるでしょお。私はアンタが女になる前からの付き合いだから、別に違和感ないけど、巫彩ちゃんはワケが違うのよ？」

「すみません……」

「まあいいさ。ほら、DVD DVD！」

「そうですね」

月曜日も火曜日も、表面的にはいつもと同じ一日が過ぎていった。いつもと同じということは、ちよつと色々あった昨日とは少し違って、ただただDVDを撮って売って、夕方にもたここで落ち合う。それだけの日という意味……

……………

……………けれど、なにか真紗耶の雰囲気は昨日までと違う。何が違うのか、それはハッキリとは判らないけど、強いて言うならば、性転換したばかりで異常に はしゃいでいた頃（もちろん、キャッキヤツキヤツ、という感じの はしゃぎ方ではなく、瞳や肌が妙に輝いている、という意味）の真紗耶を彷彿とさせた。

これは、もしかしたら真紗耶も感じていることかもしれないけれど、私たちの関係は、ジェンガのごとく複雑に、お互いがお互いを

支え合うことで成立しているのではないか？　それは、どこか一つのパーツがバランスを崩せば簡単に大崩壊を起こすことを意味する。けれども、私も真紗耶もそんな不安を振り切りながら、こうして十何年も良好な関係を保ってきたわけで、事実、真紗耶が少しいつもと違おうとも、私にとっては何の問題もなく明るく過ごすことができた。

巫彩ちゃんと会うこと……まさにそれが、ジェンガの崩れる予兆だったとも知らずに。

【Shiho's viewpoint】狂気の家庭科室（後書き）

二章はこれで終わりです。
お疲れ様でした（笑）。

哀しき鎌倉Girls（前書き）

生存報告に代えて、三章のこの最初の部分を投稿します。更新が停滞している理由は活動報告にて。

哀しき鎌倉Girls

初夏を想わせるような南風の吹きすさぶ水曜日。時刻は五時過ぎている。みなみかせ

これは二重の意味で学校をサボるチャンスだと、あたしはほくそ笑んでいた。一つ目の理由はもちろん、あのウニコ義母がPTAの面々を集めてホームパーティをするから。ジョークでも「朱音とは友達じゃない」なんて言いたくないあたしだった。

それともう一つ。極度に暑がりなあたしにとって、衣替えが済むまでの春の期間は地獄でしかない。

四月も下旬になると、同じ長袖とはいえ、白い薄手の中間服を着る生徒がちらほらと見られ始める。けど今はまだ三月。あたし一人、中間服を着て行ったら浮いてしまつてさすがに恥ずい。

今だつてほら、赤いパジャマに描かれたクレヨン画タッチのオレシチたちが、熱帯の雨に打たれたみたいに汗でグツシヨリになっている。まだ冬の寒さが充分残つてていい季節なのに！

「つたく、空気読まない異常気象め！」

野蛮な南風に靡くカーテンを眺めながら叫ぶと、ふと、携帯から朱音に電話するあたし。

話が済むとあたしは、汗で重くなつたパジャマを脱ぎ捨ててシャワールームへ向かう。

オレンヂと一緒に熱帯雨に打たれたような身体のべとつきを、水のシャワーで洗い落とすあたし。心臓がビクツていうけれど、その震えはすぐに心地いい冷たさに取つて代わる。

風邪をひかないかって？ それはもう、この温暖化が穩便に収束するのと同じくらいありえないこと。あたしは生まれてこのかた、病氣というものを経験したことがない。もちろん、重いものから軽いものまで、全部ひつくるめての話。

おかげさまで幼稚園でも小学校でも、《健康優良児》なんて賞賛されたもの。

シャワールームから出て部屋に戻ると、あたしはドレッサーの前に立ち、まずツインテールに乱れがないか入念に確かめる。

そうあたしは、寝るときだろつと入浴時だろつと、それぞれ耳の上で結んだこの二本のしっぽを解くことがない。これを解くとあたしの人となりから《元気少女》のレッテルが消えてしまうから。

いつか木泊兄さんに、とっても利発で知性的だね　なんて評されたこの大きめな瞳も、髪を解くとたちまち《たおやかで心優しい少女の知性的な瞳》に見えてしまう。

そう、あたしは常に強くなければいけない。もう……身近な人が兄さんみたいなことになるのは嫌だから。

時刻は五時半。すっかり夏色の朝焼けが部屋を染めていた。両親が起きる前に家を抜けてしまおう。

あたしは赤いミニプリーツスカートを履き、白い袖なしブラウスのボタンをはめると、襟元からスカートと同色の菱型ネクタイをぶら下げる。あたしはどうやら、衣服のどこかに、常に赤い色がないと落ち着かない性質らしい。

闘魂、情熱……そんなものを想わせるこの色。思えば制服のスカーフも赤だから、あたしは落ち着いて学園生活を送れているのかもしれない。

そつと玄関を抜け出すと、家の壁に残った落書きの跡を無視しつつ、熱い風の吹き抜ける細い路地をゆく。ツンと鼻をつくのは、家々の庭に植えられた木々が放つ新緑の香り。

この辺りは本当に、角を曲がれば景色も変わるから、まるでパノラマそのもの。

石垣の形状とか、家の壁とか垣根の木の種類、それから道の隅に

置かれたプランターの花の色……そんなほんのわずかの变化で、鎌倉の路地はガラリと色彩を変える。

せわしい学生生活を送っていると素通りしてしまいがちだけど、こうやってなんの目的もなく歩く路地は色々と見所があつて楽しい。蜜を求めて黄色い花に飛んできた蜂に向かつて、

「まだアンタが出てくる季節じゃないの」なんて忠告したりして。

ようやく列車と踏み切りの音が南風によつて聞こえてきた頃、あたしは見慣れたセーラー服を着た、やっぱり見慣れた人影に思わず足を停めた。親友の一人、図書委員長の紗那が自分の家の手前にしやがんでいる。

「あ、紗那、どうしたのよ？ こんな早くに」

あたしに振り向くと、紗那はかな〜り怪訝な顔をしなさる。

「み、巫彩！？ こんな時間にそんなカツコで何してるの！？ サボり！？」

親友とはいえ、そのお決まりなセリフにはほんの少しカチンときた。

「いいじゃない？ 朝になったらみんながみんな、制服着て学校行かなきゃならないなんて、決まってるわけじゃないんだし」

「学校、つらいの？ やっぱ、朱音さんのことで……」

その胸の底から心配そうな問い返しに、今度は紗那に申し訳なくなるあたし。

「ごめん紗那。そうじゃないのよ。ちよつとあたし、兄さんのことがあるから学校のことに關してナーバスになつちやつて」

「木泊さん……」

「あ、あたしは大丈夫だから、ね？ ただ今日はちよつとき、会いに行かなきゃならない人が居て」

「もしかしてカレシい？ え〜なにそれ、学校を抜け出して逢引なんてロマンティックすぎない？ まあ今日は、あつたかいしね、恋も芽生えちゃうのかな」

やっとその柔らかな顔を可憐な笑みで緩めてくれる紗那。この子
きたら、その風体にも性格にも尖ったところが微塵もなくって、
前髪を真ん中で分けて左右に流し、ウェーブのかかった後ろ髪と合
流させているその髪型は、遠くから見ると華奢な祠ほらのよう。

あたしはホツとしつつ、恐らくあたし以上に心配されなきゃなら
ない紗那の隣にしゃがんだ。

「紗那こそ、こんな所で何してんのよ？ 具合でも悪いの!？」

具合が悪いにしては、顔色もいいし機嫌も良さそうだけど。

「ああ、心配してくれたの？ ありがと でも大・丈・夫。ほら、
あれ見て」

紗那の指差した先は、垣根と家の隙間だった。

鄙びた板張り造りの古民家、それが紗那の家。その焦げ茶色の壁
と深い緑の垣根の狭間で、華奢なポリジの鮮烈な青がイサエを放っ
ていた。違う。異彩を放っていた。

《みさい》じゃなくて《みさえ》。それを何度も何度も人に
説明してるうちに、《色彩》が《シキサエ》、《油彩》が《ユサエ》
《なんて思えてきてしまう今日この頃。》

朗らかな風に吹かれ、ポリジは星型の花びらを焰のように靡かせ
ている。

「あれはポリジね？ 花言葉は……安息、だったかしら」

あたしのマセた指摘に、ちよっぴり恥ずかしそうに微笑む紗那。

「あ、花言葉、安息なんだ？ 知らなかった。じゃあピツタリね」

「え？」

「道のね、石畳の隙間に咲いてたの。踏まれたら嫌だし。へへへ、
だから安息の地に移してあげたのよ」

「そっか……。あたしね、アスファルトの隙間なんかには咲いた花を
見て癒されるのは自己満足だと思う。当の花たちは、そんな所に咲
きたいわけがないでしょうよ」

「うん。そうよね巫彩。私もそう思う。生きづらい場所は、苦しい

よ。花も、人間もね」

じんと胸が震えた。

微笑ましく、でもどこか寂しげにボリジを見つめるその横顔を、あたしは深々と覗き込む。

「紗那……だから一人で、暮らしてるわけね」

紗那は何も言わず、こちらを向くこともなく、ただコクリと頷いた。

紗那の両親は今、東京で暮らしているという。

もちろん両親は、一度は紗那と一緒に東京へ越した。ところが紗那は都会の生活に馴染めなかったらしく、苦肉の策でこの鎌倉に一人、舞い戻ったんだとか。

紗那が自己を省みるように話します。

「朝日がビルの上から出てくる世界。コンクリの上を移動するだけの生活。ノイローゼみなくなっちゃったから、私。吐いたり、叫んだり、暴れたり」

「たしか有名なアルパ奏者の人もそうだった気が……。でも紗那を一人にするなんて、悪いけど冷たい両親だって思わざるを得ないわね」

「仕方ないよ。共働きなんだし」

「でもさ、お母さんのほうは別に働かなくなたって生活には困らないんでしょ？」

「うん……。でも生き甲斐がどうのこうのって、言ってた」

トーンを暗くしてゆく紗那の声。あたしはまた、あの理不尽な憤慨に胸を焼いた。

「ああホンット馬鹿馬鹿しいっ！ 生き物っていうのは子供を産んだらその子供だけに尽くすもんなのよ！ 猿だって自分の子が撃たれそうになったら身を挺して庇うし、クモなんて子供に自分を食わせるのよ！？ 子供よりも自分よね」とか抜かすなら子供なんか産まなきゃいいのにつ！」

「それを言っちゃ身も蓋もないよ」巫彩、子供を作るのは人の本能なんだし」

「残念だけど紗那、イマドキそんな殊勝な本能で子供を作る親なんか居ないって。出来ちゃったから産む。みんなが産んでるから自分も産む。まるでテレビやパソコンを欲しがりたいに、《子供欲しいです》とか抜かす大人ばかり」

「テレビで見たことあるかも……」

「で、その結果、不幸になるのは馬鹿な親たちじゃなくって、……あたしたちよ」

「……………」

俯いて黙りこくる紗那の弱々しい肩。

なんとかあたしが守ってあげられないかしら？ と心底思うし、実際、あたしを紗那の家から学校に通わせて欲しいと、あの義両親に頼んだこともあった。

まあ、他人の家から学校に通うなど、私たち夫婦が育児放棄をしていると思われるザマス なんて速攻で断られたけど。

紗那と二人、相も変わらぬパノラマのなかを行くと、あたしの心は微かな愁色を帯びる。

なぜなら…… まっさらな朝日を受けて優しく光る石畳が、生きる喜びを謳歌するような緑を放つ垣根が、永遠にあたしたちを閉ざしてしまいそうな家並みが、隣の少女を我が者のように受け容れきっているから。

この子に都会は合わない、と。

朱音だけでなく、紗那も守りたいと思わずにはいられないあたし。けれども彼女には眞子がついているし、紗那は朱音と違って、図書委員長として立派に学校生活をエンジョイしている。

あたしのこの体が一つしかない以上、冷徹にトリアージするよりほかないのが悔しいったらない。そう、紗那が黄色なら、朱音は赤なわけだから。

灼けつく太陽の熱を、ふと頭上に現れた木々の葉たちが和らげ、すでに軽く汗ばんでいたこの体を安らげてくれる。

それは、バレー部キャプテン・多岐川眞子の家の庭木たちが、白い壁を越えて生い茂っているから。

家の規模としてはあたしの住むプラスチック箱と大差ないけれど、こっちはとにかく庭が広くって、家の造りも縁側あり土蔵ありの昭和家屋だから、ずっと金持ちに思えてしまう。

ふと、立ち止まるあたし。

「ねえ紗那、やっぱり多岐川家に事情を話してさ、住まわせてもらえば？ あのと蔵でもなんでも、一人で暮らすよりはずっといいわよ」

紗那はあたしのすぐ前まで歩くと、そつと歩調を止めて俯く。

「ダメだよ。眞子の家だって、お母さんと二人で大変なんだから……」

そう。眞子は鍵っ子で、彼女が紗那と仲良くなったのも、眞子が紗那を自分と同じ《鍵っ子》だと思い込んでいたからだった。鍵っ子同士仲良くしよう って。

つまり紗那は、自分が一人暮らししていることを眞子に明かしていない。

紗那がチャイムを押してしばらくすると、眞子が白い壁に設えられた木戸を開けて、思い切り良く登場。

「うわーっ、あったかいあったかい！ どうしたのよこんな早くに二人そろって！？ サボリ！？ まあいい天気だもんね！ 二十一度だよ二十一度！」

二十一度……三月の気温としてどうなのよ？

紗那も眞子も、この暑さを《あったかい》なんて表現して、いつもどおりに紺のセーラーを平然と着ているんだから不思議なもの。まあ、暑がりすぎるあたしのほうが可笑しいんだろうけど。

それはそうと、紗那と眞子が同時に視界に入ると、見事な好一対が面白い。

髪先のウェーブとか赤い靴がとても少女趣味的な紗那に、女の子らしいものは何一つ身につけず、白いスニーカーと肩までのシャギーがすがすがしい眞子。

でもあたしは思う　より女のフェロモンを多く持っているのは眞子のほうだつて。

装飾が少なければ少ないほど、少女の《個性》が引っ込んで《性》が強調されるわけで。眞子自身、その飾り気のなさが逆に自分の美質を剥き出しにしていることに気づいていないのがまた、魅力を大きくする。

「ねえ眞子、巫彩つたらね、これからデートなんだつて」

「さ、紗那っ！　だから違うつて言ってるでしょッ」

「フーン……。そういう割にはオメカシしちやってるじゃない？」

「眞子まで！　こんなの、いつもの私服でしょうがぁ……」

三人で歩く路地は、少女二人の甘い香りが木や風や土の匂いと混じって、とても心安らぐ時間　それは朱音と出会う前なんにも変わらなくて、少し前の日々にタイムスリップしたみたいだった。

「紗那、眞子……、今日は始業まで時間があるわよね」

ためらいがちな言葉に、眞子が気さくに食いついてくる。

「んっ！？　これは久しぶりに行きますかっ！」

「懐かしいね……私も行きたい」

紗那もノリ気のようにだけど、今日のあたしには違った理由があった。

「今日はさ、あんなたち二人に」その先を言うのにはちよっぴり勇気が要った。「朱音に会って欲しいのよ」

はたり。

止まり果てる少女の靴音。

束の間の沈黙を破ったのは眞子だった。

「え……いいの？ 私たち、繊細な子の扱いとか判んないし」

「危ないよ。もしも朱音って子を傷つけちゃったら、巫彩一生後悔するよ」

「あー、そもそもね、あたしがダチとつるんでたら、朱音があたしと付き合いにくいだろってことで、今みたいに距離を置くようになったわけで。万が一よ？ あんたたち二人が朱音を気に入ったとしたら、それで朱音もあんたたちを気に入ったら、単純に四人組になれるってわけよ」

あたしの単純な提案に、紗那も眞子もいぶかしげな顔をする。

「うーん、そんなに上手くいくかなあ？」

「ちよつとちよつと、そんな単純な……」

「だーかーら、ね？ あんたたちは『偶然そこに居合わせた客』になればいいのよっ」

あたしは指を立てて得意げに提案した。

哀しき鎌倉Girls（後書き）

私は鎌倉へ行ったことは一度もありません。まあ、空想上の鎌倉と
思っただけならば幸いです。

少女たちの想い（前書き）

穏やかなパートほど時間がかかりますね

少女たちの想い

喫茶店『イルームの森』

あたし・紗那・真子の三人で毎日のように通ったこの店は、扉の脇にポツリと置かれた看板によって、かろうじてそこが店なんだと判る。

無限に続くような入り組んだ路地に忽然と現れる店。それはまさに森の中の喫茶店のよう。都会と違って、家々の一つ一つが日本らしい落ち着いた佇まいをしているから、余計に神秘的だと思う。扉を開けるとカランコロンと乱れ鳴るカウベルも、森の牧場さながら。

あたしは二人を電信柱の影に隠して、一人で店に入った。

「朱音、やっぱり待ち合わせ時間には早く来るのね」

「あ、おはよう巫彩。……いいお店」

カウンターの朱音があたしに振り向きつつ、この落ち着いたブラウントーンで統一された空間を見渡す。

四方を民家に囲まれているから日当たりが悪くて、扉のある側も、窓の前にはいちいち観葉植物が置かれているから余計暗い。

その代わり、温かなアンティークランプがテーブルの上に置かれたり、天井から吊るされたりしているから、店全体はべっ甲のようなブリキのような、どうにもレトロな情緒に満たされている。

「ねえ巫彩、ここって電気を使っていないのね」

朱音が早速鋭い指摘をする。あたしたち三人組といえば、そのことに気づくのに一ヶ月も通う必要があったというのに。

「おう、これはこれは鋭いねえ新入りちゃん！」

喫茶店のマスターが愉快にはしゃぐ。髪型が肩までの飾り気ないセミロングであることを除けば、あの真子に顔も声もとてもよく似ているマスター。

まあ当然だわね。だってマスターの名前は多岐川優^{ゆう}、多岐川眞子とは真正正銘の母娘なんだから。

母子家庭の眞子と朱音、親と離れて暮らす紗那、そして義理の両親といがみ合う日々を送るあたし。よくここまで見事に特殊な事情を持った子供が勢ぞろいしたと思う。

……もちろん、《特殊》っていうのは世間一般の目からすれば、の話。あたしは正直、片親だったり、親が居なかったりする程度では特殊でもなんでもないと、思っている。

世の中にはもっと、誰からも理解されなければ気づかれもしない苦しみを抱えている人が居るんだって、木泊兄さんのことでよく解ったし、これから真紗耶さんやその幼馴染と会うことで、余計にあたしはそれを思い知ることになる……。

「し、《新入りちゃん》……」

繊細な朱音。マスターの気さくすぎる対応に戸惑ってるのかしら？

「朱音、あのね、この人ってね、脳が腐」

「嬉しい」朱音があたしのフォローを遮る。「そんなふう気さくに呼ばれたこと、なかったから」

「ははははっ！ ほーら、頭のイイコは私の良さがすぐ解るっ！」
豪快に笑うマスター。

なるほど、こういうガサツだけど大らかな愛情を持った人に、朱音は飢えていたのかもしれない。

あたしはホッとして、朱音の隣に腰掛けると　ああ、この感じなのよね、と胸が落ち着く。三人して通ったのは三ヶ月間くらいなのに、それにここに来るのはちょっと久しぶりなのに、自分家^{じぶんち}以上にこの体がこの場所に憩いを感じているのが判る。

「マスター、今日、この朱音をここに連れて来たのはね」
本題に入ろうとすると、マスターにチツチツと制された。

「こーらっ、朱音ちゃんは食べてる途中でしょーが！」

「ああでも時間が……」

「黙らっしゃい！ 育ち盛りのコにとって、食べるっていうのは何より神聖な行為なのさっ！ ハッハー！」

これが多岐川優という人。

思えば三人でここへ通っていたとき、あたしたちが食べているのをこの人が本当に幸せそうに眺めていたのを、あたしは想い出した。てつきり小食だと思っていた朱音が柄にもなく、ブラウンのサンドウィッチを頬張っているのを見て、マスターの言葉が正しいことをひしひしと思い知るあたし。

朱音はよっぽど美味しいのか、軽い茶番も気にせず黙々と食べている。

「サンドウィッチってこんなに美味しいものだったのね」

「はあ、変わったコだねえ」

マスターのため息の理由は、朱音の食べているサンドを見ればすぐ解った。

この少女はよっぽどの草食なのか、トマト、レタス、アボカドの挟まったサンドを実に満足そうに食している。もちろんこんなサンド、メニューにはないわけだけど、マスター特製の純白なタルタルソースが塗ってあるからまあ、かろうじて味はあるわけね。

「パンも野菜もソースも最高。うちの母にマスターの爪の垢を煎じて飲ませたい気分」

朱音のべた褒めぶりに、手を組んで目をウルウルさせつつ大喜びするマスター。

「うはははは！ やっぱりのコ見る目があるわ。野菜はゼーンプうちの庭で採ったやつだし、パンもタルタルソースも自家製だからね」

眞子の家の広い庭。あそこには何種類もの野菜が生き生きと栽培されている。ただ、そのせいで虫が多くてたまないと、眞子はよくこぼしているけど。

朱音が食べ終わって、その小さな口を甘くない紅茶でうるおすのを見ると、あたしはやっと本題に切り出す。

「マスター、ちょっと、『営業中』の札、外してきてくれる？ どれ、せこの時間は客少ないんでしょ？ 十分か十五分でいいから、お願い」

「ま、いいけど……」

マスターは多分、あたしが朱音と大事な話があって、それで客が入ってきたらマズいから、札を外せと言っているんだと思ったに違いない。

けど、それは違っていた……。

「オーライ、裏返してきたよ」

マスターが戻ってくると、あたしは朱音を横目で見つめ

店の隅。レトロな光を発するジュークボックスやら、売り物のジヤムの陳列された棚やら、そんな物に紛れて実に目立たないアップライトピアノを指差す。

「朱音、あれ、弾いてみてよ」

「え？」

「早く！ 学校始まる前に、ほら！ あんたがいつも音楽室で弾いてた曲！」

「巫彩、あれ聴いてたの！？」文字通り、頬を朱色に染める朱音。時刻は六時十五分。八時の始業時間には余裕で間に合うといったところ。

朱音はしばらく黙り込んだけど、首を横に振ることも、否定の言葉を発することもしなかった。

実はあたしは以前、部活の長引く紗那と眞子を待ちわびて校舎をウロついていたとき、音楽室から不思議なピアノの音が響いてくるのを聴いた。

まさにそれが朱音の弾くピアノの音で、リリカルな、少し病んだような調べが、茜色に染まる世界と相俟って、この胸に強い印象を

残したのを覚えている。

音の響きからして、あれは現代音楽というやつだと直感したあたし。だからこそ今、あたしはマスターに《営業中》の札を外させた。もしも客がやって来て、その客が朱音のピアノを聴いてしまったとしたら、マスターが犯罪者になってしまうから。

著作権が切れた音楽を演奏して客に聞かせる、これは違法にならない。けれども著作権が消滅していない音楽を営業中に演奏した場合、最悪の場合店主は御用！（実際、ビートルズの歌を客の前で弾き語りして逮捕された人が居る。）

そして現代音楽となると、作曲者が亡くなって五十年以上経っていないことが多い。だから札を外すことはマスターを守ることになるってわけ。

朱音はそつと瞳を閉じつつ立ち上がると、涼しい動作でピアノの前まで移動。コトンと蓋を開けると、あの日と同じ曲を奏で出した

……

ギリギリの叙情……というのかしら。二十世紀、メロディとかハーモニーより、リズムとか音色が重視されていた西洋音楽。この曲もまた調がなければ解り易い喜怒哀楽もないけれど、聴いていて割りとフィジカルに心に沁みこんでくるといつか、不思議なリリズムが充満している。

マスターの目が光った。普段、あのピアノは著作権の切れたクラシック曲を、マスターが客に弾いて聴かせるためのもの。それだけに、音楽にはそれなりに精通しているということになるわけだから。

曲が終わると、マスターは大雑把に拍手しながらピアノの前へ歩み寄る。

「いいんじゃないかい？ ずぶのアマチュアと違って、音の一個一個に重みがあるしさ、シュニトケの二番を涼しい顔で弾いちゃうってことは、技術も相当なもんだね」

シュニトケの二番……ということは、シュニトケっていう人が作曲したピアノ・ソナタ第二番ってことかしら？

朱音はピアノの前で俯いたまま。

「あの私……ピアノなんて自分一人で楽しむもので……。人に褒めてもらえるなんて……」

あたしは、かねてから感じていた願望を決意へと変えて、朱音の元に駆け寄る。

「朱音！ 合唱部でピアノ担当してみれば！？ そうすれば……っ」「そうすれば？」

目を見開いてあたしを見上げる朱音に、そうすればの続きが言えなかった。

だって、そうすれば、うちの義両親に朱音を認めてもらえるからなんていう理由で、あたしが朱音にそれを薦めてるなんて……。

「そうすれば、あのウンコ義両親に朱音と付き合うことを認めてもらえる、だろ？ 中里」

ああもう素晴らしい！ マスターが見事にやらかしてくれた。

「マスターああああああああああーっ！ あんたああああああああああーっ！」

ツインテールをツノに変えるほどの形相でマスターを怒鳴るあたし。

朱音は立ち上がって目を潤ませる。

「巫彩っ！ 貴女、両親に私との付き合いを反対されてたの！？」

こうなったら仕方がない。あたしの本音を話すより他にないでしょう。

「……………ええ。悪いのは両親よ。友達が居ないことだって、地位がないことだって、あたしは別に恥だなんて思わない！ でもそんな常識、あの両親には通じないのよ！ 一人息子が自殺未遂したことでナーバスになって、引き取ったあたしをよっぽど完璧に育てたいんでしょうよ！ ったくバカバカしい！」

「そんなっ……………」

朱音が穏やかじゃない冷気を発すると、マスターがあたしの肩に手を乗せて講釈を垂れる。

「ほらほら、辛気臭い顔すな！ この中里はな、血のつながらない両親との葛藤に毎日毎日苦しんでんだ！ その上、狭山朱音、君との付き合いにまで口を出されて死ぬ想いなんだよ！ それでもコイツは文句一つ言わずに、それどころか君に何も知らせないまま、君を義両親に認めさせようって、ケナゲに努力してたんだ！」

「ああ、あんたが今それをものの見事にブツ壊してくれたけどねっ！」

口を挟むあたしを無視してマスターは熱弁をふるい続ける。

「中里の苦労を知らないままだなんて、それじゃもう中里がパンクしちゃうよ！ コイツはこんなちっちゃな体でさ、実の両親に捨てられた苦しみと、義理のお兄さんの悲しみと、それから義両親の重すぎる期待まで背負わされてるんだ！ 私もう見てらんなくってさあっ……！」

その場にしゃがみ込んでしまふマスター。

「巫彩……」

朱音も泣きそうにあたしの名前を呼ぶと、マスターは縋るように朱音を見上げた。

「狭山朱音、君しか居ないんだ……。うちの眞子はね、昔に父親とつまり私の糞主人と色々あって疲れてるしさ、上田紗那って子も、なんか事情があるっぽくて、いつも寂しそうに笑ってる……」

とうとうあたしに友達が居ることさえバラされてしまったけど、もう憤りは覚えなかった。

「だ、だって巫彩は友達居ないって……」

なんて戸惑う朱音に、冷静に説明を始めるあたし。

「この際だからもう全部話しちゃうけどさ、あたしには紗那と眞子っていうダチが居てね。朱音とお近づきになるにあたって、二人とは距離を置かせてもらってたってわけ。でもこれはね、いつか朱音がもつともつと精神的に落ち着いたら話すつもりでいたことだから、

時期が早まっただけって感じよ」

朱音は少し俯いて、ゆっくり胸のうちを言葉にし始める。

「巫彩は…… 友達の居ない同士 って、ウソについて私に近づいた…… でもそのおかげで、私はすんなり巫彩と仲良くなれた……。それに、自分だって色々つらいのに…… 両親が私を気に入ってないことを私に聞かせないまま…… 私が両親に認められる方法を考えてくれた……」

「そうだろ？ こんなの、十三歳のコがする気遣いじゃないってのさ。普通ならとくに親に相談ものだよ。けどこのコにはさ、相談できる親すら居ないんだ。だからきつと自然に、自分一人で解決策を考えるコになった……。こんなふうにさ、女王様みたいに、あの人のことを考え、この人のことも考えなんて、イイ年した私にだってできないっての」

マスターが追い風を吹かせると、逆に朱音は消極的に首を横に振った。

「でも…… でも私が居なかったら巫彩、両親といがみ合わなくて済むんじゃないの？ それだけが心配で」

「それはっ」

あたしが言いかけたとたん、入り口のほうから声が響いた。

「朱音さんさ、巫彩が必要でもない相手のために、そこまでのことするようなバカだと思っ？ 巫彩はさ、あんたのことが大好きなんだよ…… あんたと仲良くしたくてしたくて、たまらないんだ」

「朱音さんっ……、私、前から貴女のこと見てた。優しそうな子だなんて…… 友達になれたらなんて……」

このブラウンの薄明かりに溶け込むような滋味深い笑顔を浮かべて、眞子と紗那が立っていた。

「貴女たちが、紗那さんと眞子さん……？ はじめまして。狭山朱音です。私が…… 私が貴女たちの大切な友だちを取り上げちゃったみたいで、すみませんでしたっ」

こちらも、このブラウンの世界に溶け込んでいる朱音。

ただそれだけで、朱音・紗那・眞子の三人に緩やかな絆が生じるのが判った。

これがあの炎天下の出来事だったとしたら、こうはならなかったでしょう。この仄暗い世界が、三人を繋ぎ合わせる役割を果たしたんだと思う。

こう言つと穏当じゃないかもしれないけれど、紗那と眞子はネクラだと思う。もちろん、それはネクラっていう言葉が《明るく見えるが実は暗い》という意味だつていうことをあたしが知つた上での評価。このアンティームな空間が、紗那と眞子の暗い優しさを浮き彫りにして、それが朱音に伝わつたんだと。

ほら今だって、紗那も眞子も、決して年相応の軽薄な笑顔は朱音に向けていない。要するに朱音はそういう、若者たちが編み出す、早くつて、軽くつて、薄っぺらで、身を隠す場所なんてないくらい明るすぎる世界が苦手なんだろうから。

それに。あちこち置かれたランプたちの、ゆらゆらと不規則に揺らめく炎、これには人の心を落ち着かせる作用があるとか。みんなで優しく、慈悲深くなれる、こんな空間を生み出したマスターを、あたしは改めて尊敬していた。……まあ、人情深いだけに、さつきみたいにオセツカイなことも時々しかしてくれるわけだけど。

とりあえず、といった感じで席に着くあたしたち。

あたし・眞子・朱音がカウンターの前に座ると、マスターも涙を拭いてカウンターの向こうへ戻った。

そして朱音の気を引いたのは、マスターを追うようにカウンターの向こうへ回つて、パソコンの前に座る紗那。第三者がこの情景を見たら、紗那がこの店の仕事を手伝つてるように見えるでしょう。

「え、中学生がアルバイトしちゃいけないんじゃない……」

朱音が当然のツツコミをすると、眞子が気さくに朱音に笑いかける。

「朱音もそう思うでしょう？ でもこれ仕事してるわけじゃないのよ。紗那ちん家ちってね、ネットがないんだって。だから紗那がネットする場所ってここしかないわけよ」

そう、紗那の両親は《子供一人の生活にインターネットがあつては情操上よろしくない》なんていう、これまた糞みたいな理由で紗那にネットの禁止を強いていやがる。

ただ、紗那が一人暮らしだと知らない眞子とその母の手前、その事情を朱音に話せないのがむず痒かった。

当の紗那は涼しい顔で、ビーカーに入れた冷やつこを食べながらパチパチとPCを打っている。

「こうなったらね、紗那にはなに言ってもムダ！」

あたしが冗談めかして朱音に説明すると、意外にも紗那はフランクに声を発した。ただし、手は動かしたまま。

「そんなことないってば。ネットできるの、ここしかないんだもんー」

「メル友……とか？」

朱音が消極的に尋ねると、紗那は少しムツとして手を止める。

「もーう、みんな最初はそう訊いて来るんだから。違ふのよつ、小説投稿サイトにね、通ってるの」

と言つてまた手を動かし始めて沈黙。

こんなお粗末な説明じゃ朱音もワケワカメメだろうと、あたしが軽く補足する。

「紗那って、小説を投稿したりね、ウェブに投稿されてる小説の作者に、感想を書いてあげたりするのが趣味なんだって」

「素敵……」

朱音の吐いたそのたった一言に紗那はひどく反応して目を輝かせた。

「やだ、嬉しいな　こうやって見てるとね、つまない小説が絶賛の嵐になってたり、逆にすごくいい小説に感想が全然ついてなか

ったり、結構不平等っていうか、運次第な世界なの。だから私は、恵まれない人たちに感想を言っておあげたくって」

朱音はとうとう身を乗り出して紗那に感激の目を向ける。

「紗那さんすごい……。私もネットやってるけど、あれって流行第一の世界なのよね。トレンドと関係なく生み出されたものは、まず誰にも注目されないけど、そんな中にも埋もれさせちゃいけないものがたくさんある……。紗那さんは、それを掘り当てて、作者に報いを与えてあげてるのね。すごく素敵なことだと思う」

朱音がこんなふうに関心な言葉を話すのは初めて見たし、紗那が嬉し泣きする顔もまた、長い付き合いながら初めて見た。

「うっ……。や、やだ、嬉しいな。そんなふうに言われたの初めて。

巫彩だって眞子だって、面白半分で眺めてるだけなんだもん」

「紗那ごめんっ……………」

あたしは正直、紗那がそこまでのことを考えてネットをしているとは思ってなかった。

一方、眞子のほうは不服そうに頬杖をついている。

「ちよっとちよっとー、私が面白半分で見てるのは紗那のその朝食なんだけど」

確かに冷やっこをビーカーに入れて食べるというのは、どう考えても異常としか思えない。

「だってえー、こうすると美味しいんだよね？」

……特に理由はないらしく、あたしたちが知り合った頃にはすでに、紗那はこの謎の朝食を摂っていた。

「どーでもいいーけどさ、中里、どーせ何も食ってないんだろ？」

「そうだった。腹が減っては戦はできぬってやつね」

「やっぱりデートなんだあ 《いくさ》だってえ」

丁寧に突っ込んでくる紗那を無視して、あたしはマスターに「いつもの」とだけ頼む。

しばらくして「はいよ」と出されたのは、白いモチモチパンに地

鶏の胸肉、ベーコン、レタス、トマトをサンドした、肉食系のあたしにはピッタリの一品。

もちっとしたパンの後に、シャキツとしたレタスが歯に触れるという段取りが見事で、その後に食べ応えのあるベーコンとトマトの味が口に広がる。

特に多岐川家の庭で、鎌倉のみずみずしい太陽を浴びて育ったトマトは天下一品。もう甘くてみずみずしくて、ピザにパイナップルを乗せるのと同じ感覚になる。

「アーやっぱり美味しいわ。このトマト、普通に売ってるのと味が全然違うのよ。貴女たち母娘の性格が出るのかしら？」

マスターは得意げに笑う。

「そりゃそうさ。何があっても笑顔を絶やさない！ 太陽みたいな私たち母娘の氣質をトマトたちも受け継ぐんでしょや！」

「どーだか」

娘の眞子は母の熱弁に軽く引いている。

「オイオイ、少しはこの偉大な母に感謝するんだな！ 電気を最小限しか使わないこの店がどんなに強いかわカランかえ？」

「ワカンナ〜イ」

「くっ……いつからこんなナマイキな娘に 電気がなくても営業できるってのは凄いことじゃないか！？」

「おふくろったら相変わらずファンタジー思考なんだから。電気がなくなるなんて、そんなことないと思うけどね」

「そりやどうか？ 近い将来、どっかの原発がやられてごらんよ。計画的な停電とか、あるかもしれないぞー？」

「……ありえない……」

これはなんと、朱音、紗那、眞子の声が重なった。

あたしはまあ、数年後くらいに今マスターが言ったような事態が日本に起こるような気がするけど……。

サンドウィッチを平らげて薫り高いハーブティで喉をつるおすと、

あたしは席を立って紗那と眞子を真摯にみつめる。

「ねえ、紗那、眞子……紗那のボランティアが済んだら、」

「ボランティアって……」突っ込んでくる紗那と、

「うっん、それって立派なボランティアよ」生真面目に紗那を立てる朱音。

あたしは改めて、

「ボランティアが済んだら、朱音を送ってくれないかしら？」と二人に頼んだ。

「そんなつ、悪いよ」

朱音は消極的に遠慮するけど、眞子は大爆笑。

「はっははははは！ 行き先はおんなじ学校だったのに、なにが悪いんだか！」

紗那もキーボードからいったん手を離すと、からかうような顔で敬礼してくる。

「了解っ！ デートに行く巫彩に代わってしっかりエスコートするから」

「だからデートじゃないってのよ……」

この期に及んであたしをからかい続ける紗那に背を向けて、あたしは店を後にした。

「まったく紗那ったらデートデートって、自分がカレシ持ちだからってうるさいのよ……」

他愛ない独り言を吐きながら歩く路地。紗那は最近、カレシができたとかで大はしゃぎしていて、幸せなのはいいことだけど多少うるさい。けどそのうるささがまた可愛かったりするんだけど。

さて、と。

家と家の隙間に江ノ電が垣間見えるようになってくると、あたしはこれからの道のりを確認した。

いつもは途中で下りて学校へGOだけど、今日はそこを降りないで鎌倉駅まで行って、横須賀線に乗り換えればいいわけね。

真紗耶さんの雰囲気からして、あの人が幼馴染って人と一緒に後ろ暗い生き方をしていることは何となく判る。けど兄さんのことを知っていて、なおかつそれをあたしに教えてくれそうなのは真紗耶さんの他に居ないわけだから、逃げるわけにはいかない。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか！

M i s a e m e e t s S h i h o

ラッシュアワーのスカ線に乗ったあたし。といってもラッシュ真っ只中の時間ではないらしく、座席は埋まっているもののギューギュー詰めの状態というわけでもない。

しばらく江ノ電にしか乗っていなかったこの体は、その速さ、その大規模さに少し戸惑っていた。

私服姿のあたしを訝しがる奴も居るかと思ったけど、幸い、小学生だとも思ってくれているのか、おかしな目を向けてくる乗客は居ない。

おかしな目をとある人物に向けることになったのは、あたしのほうだった。

列車が揺れて吊り革につかまる人たちも揺れるたび、チラリ、チラリと垣間見える俯いた少女と、その後ろで汚らわしい快樂の笑みを浮かべる髭面の中年男性。

「ちよつと、失礼しまーす」

しばし人の群れを掻き分けて進むと、……ハッキリ見た。中年男性の手が、少女のお尻へ伸びているのを。

周囲の乗客を見回してみる　見て見ぬふりなのか、それとも本当に気づいていないのか、みんながみんなあさつての方角を向いている。

そしてその光景に、あたしは今の日本の方程式を見た。　悪い奴が居て、そいつによって苦しむ人たちが居る。そして大多数の間はそれに気づかないふりをするか、あるいは本当に気づかないか、そのどちらか。

あたしは中年男性の手を握り締めると、ぐいつと少女のお知りからその手を引き離れた。

「な、なにするんだあー!？」

頭に血が上ったあたしほど、この世で手に負えないものはないで

しょう。再びツインテールをツノに変えるほどの勢いで、中年男を睨み上げる。

「それはアンタに弄ばれてたその子のセリフでしょ！？ さあて、駅に着いたら署までついてきてもらわよッ！」

「は、離せえ！」

男は必死であたしの手を振り払おうとするけど、そこらの中年男の腕力がこのあたしに敵うはずもなく、かえって腕をひねってその体を屈ませる結果になった。

「力で女をねじ伏せようったってそうはいかないのよッ！ 少女や幼女なんて抵抗力のないオモチャだと思ってんでしょ！？ オアイニクさま！ あたしみたいな怪力も居るんだってこと、そのチンケな肝っ玉に銘じておくのねッ！ ホンット、あんたみたいなのが居るから！」

そうよ、あんたみたいなのが居るから、眞子は……。

「ひぎーっ！ 俺が悪かったす！ 何でも言うこと聞きますから！ かにんしてえーっ！」

情けない叫びをあげる男。弱い者を貶めて生きる奴ってというのは概して、自分より強い者にはヘコヘコする。

「もう大丈夫よ。でもできれば警察までついてきてくれると嬉しいかも」

被害者の少女へ目をやると、彼女は全身を凍りつかせたまま、かろうじてあたしに向かって頷いてみせた。

横浜に着くと、あたしは痴漢を引き連れて駐在所へと向かう。その後ろを、とぼとぼとついて来る少女。

駐在所の位置は知っていた。ここは何度か兄さんに会いに来た街だから。

幼い頃は横浜というと、『ブルーライトヨコハマ』や『ビューティフルヨコハマ』なんかのイメージから、もつと海の匂いに満ち溢れた、ちょっぴりエキセントリックな街を想像していたけれど、少

なくとも駅を出てしばらく歩く程度では、普通の都会の域を出た風情は見られない。

駐在所に着いて、庶民的な音を立てるガラス戸を開けると、少しだけ見慣れたお巡りさんが深いため息をついた。

「へえ……。まーた痴漢かい」

「ま、そーゆーことよ。おら、座れ！　ここにっ！」

あたしが乱暴に痴漢を椅子に座らせると、後ろの少女が暗い声で、けれども的確に言葉を紡ぐ。

「私……、この人に毎朝やられてました……。ここのとろずつと……」

お巡りさんは同情的な視線で少女を見上げた。

「それは災難だったね……。今度からはこういう目に遭ったらすぐに警察に連絡することだ」

「はい……」

すると痴漢が実に饒舌に身の上話を始める。

「いやあ、昔は良かったんですよ。首田宗志しゅだ・しゅうじっていう小説家が居てね、彼の小説が原作のアニメを見れば、幼女たちが暴行されたり殺されたりするから、欲求を満たせていたんですがねえ……。殺されちゃったんでねー」

お巡りさんは痴漢の頭を書類でバシッ！

「この戯けもんが！　まーた《首田宗志教》かい！　いい年してアニメと現実の見境もつかなくてどうするってんだ！？　……終わりだなあ日本も」

首田宗志　その名前に聞き覚えはあった。

たしか幼女や少女を痛めつけたり鞭り殺したりする内容の小説を書く人物で、彼の小説を原作にしたアニメは、いつもいつもPTAの頭を悩ませていたと、あの義母が思い出話をしているのを聞いたことがある。

殺されてくれてせいせいしたザマス
とも言っていた義母。その口ぶりからして、首田が殺されたのは
相当昔のことっぽい。

痴漢は大袈裟に首を横に振る。

「いやいやいやいや！　とんでもないっす！　俺は首田宗志教の信
者とかじゃなくて、ただのファンだったでござんす！」

そのときだった

「駐在さん、そいつ、殴ってもいい？」

まるで火の鳥がさえずるような、甲高くも神々しいハスキーボイ
スがこの背中に突き刺さる。

振り向くとそこには、得体の知れない高貴さを身に纏った、少女
とも女性ともつかない女が、ガラス戸に片手をかけたまま立ち尽く
していた。その一方で、彼女から放たれるオーラはどこまでも明る
く放胆なもので、そのロイヤルさとインティメートさのハーモニー
が胸騒ぎを覚えるくらい魅力的だった。

「ああ、好きにしろ」

どういうわけか暴力行為を容認するお巡りさん。

「うひっ」

竦みあがる痴漢にガツガツと歩み寄ると、女は微塵の手加減もな
い動きで彼に往復ビンタをお見舞いした。

鞭打ちの刑みたいな音が、この狭い駐在所の空気を切り裂く。

「一発目はそこに居る痴漢被害者の痛み！　二発目は首田宗志教に
傷つけられた人たちの痛みよ！」

情報は何一つなかった。けどあたしは五感とは違う部分でこ
う確信していた……

……ああ、この人が真紗耶さんの幼馴染っていう人なんだって。

「ついでにそのツインテ巫女、お持ち帰りしちゃっていいかな？」

「は？」

当然、お巡りさんは女の言っている意味が解らない。

けどあたしはすぐにその意図を理解して、女に向かって気さくな笑みをこしらえると、

「いいわよ」と答えた。

要するに、あたしのこの白い夏服に赤いネクタイ、それにネクタイと同じ色のスカートという格好が、どことなく《巫女》を連想させるコーデというか配色だということ。

そして彼女はきっと、あたしの名前を知っている。あたしの名前が《巫彩》だとしていて、あたしを《巫女》だとか言ってきたに違いない。

女を追うように駐在所を出ると、あたしたちは二人して、大抵の建物に平仮名で《みなとみらい》の名前が入る地帯をゆく……

「私、柴門志穂。『晩壓丕埚』の廉埴紡弊順にそっくりでしょ？」

「あーあたし、二次元事情には詳しくないから」

「こいつは珍しいわね。まあ、貴女自身が二次元っぽい姿してるから当然かあ」

「それって褒め言葉かしら？」

「さあ」

「……………ああ、もう知ってるでしょうけど、あたし、中里巫彩」「中里……………か。木泊君の旧姓ね……………。なんか色々思い出しちゃうなあ……………」

と、こんなふうに関の置けない風情の会話を交わしながら。

この柴門志穂っていう人物の一種異様な雰囲気がそうさせる。

表面的には眞子と似て、明るく健康的で気さくな女。けれども志穂さんの場合は、その裏腹に何かとんでもない暗さ、陰湿さ、気難しさを隠し持っている気がしてならない。

要するにこの人は、日本の女というものが持っているありとあらゆる要素をいっぺんに持っているのではないかしら？ だから眞子みたいなタイプでも朱音みたいなタイプでもすぐ仲良くなれるあた

しにとつては、必然的に仲良くなりやすいんだと思う。

やがて、あたしの視界には街を切り裂く大規模な川が入ってきた。ここまで来ればもうすぐ。

「さて、と。志穂さん、貴女が先立つてお目見えっていうことは、なにか打ち合わせでもしたいからかしら？」

「あーっ、なんもかんもバレバレってわけか。無理言つて真紗耶に私が先に会いたいつて頼んだわけよ。そろそろ来る頃かなーってね、駅前をウロついてたら、貴女が痴漢を連行して現れるじゃない！後をつけさせてもらったってわけ」

「でも、志穂さんはあたしの顔を知らなかったのにどうしてあたしを……」言いかけて、すぐそのカラクリに気づくあたし。「あ、そうよね。こんな平日のこんな時間に外を歩いている女子中学生なんて、居ないものね」

そう、志穂さんには《あたしが水曜日到这里来る》という情報があったはず。そしてあたしが中学生となれば話は早いということね。

「ふひひひ。じゃ巫彩さん」志穂さんは意外にもあたしを《ちゃん》じゃなく《さん》と呼ぶ。「ともかく、ここじゃちよつとアレだから、打ち合わせが終ったらあのバーへ行きましょう」

気づけばもう橋の上。

志穂さんが指差したのは橋の下だった。橋の隅にある階段を下りた先に、バー『Sweet Season』のネオンが存在している。そう、今は光ってなくって、存在しているだけ。

また橋の柵をはじめ、Sweet Seasonの看板の周囲にも、無数の電球が散りばめられている。夜になるとここは橋と共にライトアップされて、それはそれとはとても綺麗なんだけど、あたしは長いことその情景は目にしていない。

「来るたびに思っけど、不思議な場所よね、ここって。で、打ち合わせって……？」

《打ち合わせ》という重々しい響き。あたしが少しばかり消極的に問うと、志穂さんはサリと私あたしを通り過ぎ、電球を面倒くさそうに避けながら橋の柵に両腕を乗せた。

そして、電球たちに皮肉を言うように、朝の光によって自然のライトアップを生み出す川を見下ろす。

「あのね、真紗耶ってね、今までまともに言葉を交わしたの、私と母親しか居ないのよ」

「え？ でも、学校で結構、嫌な想いをしたって、メールで聞いたけど。今の今まで貴女と母親としか話したことがない、なんていう状況に置かれるには、学校には一度も行かないことが大前提な気がするけど」

「同じことよ。真紗耶の言葉なんて誰にも通じなかった。真紗耶が他の子供より劣っていたからなのか、それとも真紗耶を受け容れなかったクラスメイトたちが悪いのか、それは多分、真紗耶本人にも私にも、真紗耶のお母さんにも、そして貴女にも、一生、判らないでしょうね」

「そうね……」

思わず志穂さんに歩み寄るあたし。志穂さんはあたしに緩やかに、そしてしなやかに振り向くと、橋の柵に背をもたれた。

「だからね、私が言うのは生意気だけどお、そこらへん、気を遣ってあげて欲しいわけよ」

ああ、そうなのね、と思った。思わず志穂さんに頭を下げるあたし。

「わかったわ。志穂さん、注意してくれてありがとう」

「どしたの？ 別に礼を言われることじゃ……」

「あたし、真紗耶さんとメールでしか話したことなかったから……」
そこまで言っただけで、志穂さんはあたしの言わんとすることを理解してくれたようで、あははと笑って橋から離れ、あたしの肩をマレットでマリンバを鳴らすように軽く叩いてきた。

「そっかそっか。文字だけだとアイツ、やけに出来た人間に思える

「んでしょ？」

「そうなのよ。文体がすごく丁寧で、あたしが興奮しても、傷つかずに済む方法を知り尽くしてて……。だから、少なくともあたしよりは精神年齢が高い人っていうイメージが、あったわ。貴女が注意してくれなかったら、あたし真紗耶さんとの接し方を間違ってたかも……」

「よし。じゃあ、行くお（＾＾）」

「ええ……」

それにしても、つくづく風変わりな構造の場所だと思う。

橋の隅から伸びる下り階段の始まりには、《Sweet Sea son》と書かれたネオンで飾られたアーチがかかっていて、そこをくぐって階段を下りると、左が川、右がバーの建物という細い通路に着く。

ここへきてやっとあたしは、ここが東京ではなく横浜なのだという実感を持つことが出来る。そう、この通路に座れば、釣りも楽しめるそう。

階段の途中で、ふと、先に行く志穂さんが立ち止まり、これはまた高貴な諧謔性に満ちた表情であたしを見上げた。

「にしても巫彩さんよ、あんたのガツコのPTAもさ、タイミングのいいときに襲撃してくれたね」

「え？」

「今日は水曜日。水曜日ってーと、この店の定休日だ」

「あ、そうだったの？」

「そうよ。私の母とね、この店のマスターが、学生時代からの親友なのよ。だから、今日は私たちの貸切にしてくれるってえ」

「あたしのために……？」

「あ、気を遣わないでよ？ 真紗耶ってばさ、さっき話してみたいな事情があるでしょ？ だから木泊君のことで必要以上に胸を痛め

てて、木泊さんが助かった後も、つらすぎてなかなか顔が見れなかったんだって。で、今日は、真紗耶と木泊君との涙のご対面も兼ねてるってわけ。まあ数日前にも会ったみたいだけど、改めて木泊君の幸せな暮らしぶりを見せてるってわけ」

「そう……」

「じゃあ、とりあえず店へドゾー」

「ええ……」

志穂さんを追い抜いて階段を下り、バーの暗さのためには不可欠と思われるとても小さな窓から、あたしは中を覗いてみる。

すぐ近くの席……そこに向かい合って座っているのは、懐かしい木泊兄さんと、木泊兄さんと似た髪形の女性。それから奥のカウンターの向こうに薄っすら見えるのが、木泊兄さんを引き取ったあの女性。

つまり、あたしにとって見覚えのない一人が、真紗耶さん……ということね。

志穂さんはあたしの隣に歩み寄って来た。

「木泊君と話してるのが、貴女のお目当ての真紗耶よ。……で、あんたも会ったことあるだろうけど、奥の人はこの店のマスターで私の母の親友。今年、四十二歳になったとか」

「えーっ……」

あたしは店内に聞こえない程度の小規模な叫び声をあげた。

四十二歳とか……ありえない。

あんなキャピキャピしたネーチャンが、木泊兄さんの保護者としてやっていけるのかしら？

なんて、いつも思ってたほどなのに……。

こうしていると、真紗耶さんと木泊兄さんの話が自然とこの耳に入ってくる。

「本当にアナタにこうしてお会いして良かったです」

「もっと早く来てくれれば良かったのに」

「嗚呼どうかどうか、それは言わないで下さいませ。アナタの顔を見たならば私の心は再び《奴ら》への憎しみを募らせることとなり、またしても憎悪の闇の中に入らねばなくなれると思っただけです。けれども……アナタの元気な顔を見たら、過去の恨みが吹っ切れました」

「ほんとうに、ごめんね、真紗耶さん、ごめんね。ボクがジサツミスイなんかしたから、志穂さんはあんなハンザイを……」

「いいえ、いいえ、志穂さんの事件そのもの、あれはこちらの問題でございます」

……自殺未遂……犯罪……志穂さんの事件……実に重々しい言葉が次々に姿を現した。

特に《志穂さんの犯罪》という言葉にあたしは衝撃を受け、隣に居る志穂さんに思わず目をやった。

「ちよつ、睨まないでよ」

「あゝごめんっ」

目をやっただけのつもりが、睨んでしまっていたらしい。

志穂さんは店の壁に背をもたれ、川面を見下ろしていた。

「……いつか、いつかね、いつか、ちゃんと話すから」

「いいのよ。無理に話さなくたって。真面目に生きている人なら誰にでも、話したくないことの一つや二つはあるから。特に、あたしや貴女みたいな、特殊な立場にいる人間はね」

理解を示すと、志穂さんは姿勢を正してあたしを真っ直ぐに見つめ、嬉しそうに、そして本当に純真な微笑みを見せてくれた。けれども、その微笑みはどこまでも儚くうら寂しい……。

「ありがとう……」

と、そこで店からマスターと木泊兄さんが出てきた。

双方がうら若い乙女に見えるこのお二人さんはその実、片方が四十二歳になったという口りおばさん、もう片方が今はやりの男の娘

というやつなんだから、ほんとに物騒なもの。

兄さんに声をかける間もなく……このおばさんは自らのロリ属性を証明するみたいに、店を出てあたしたちに気づいたとたんズッてーン！　と何も無い所で転んでしまった。

「うつうつうつ痛い痛い……」

と痛がる声が、これはまたアニメのロリキャラみたいに甲高い。後ろで簡単に束ねた髪だけは年相応だけれど、つるりとした大きな顔に、顔の半分を占めるほどのパッチリした瞳、そして全身から放たれる少女のような若々しさ……というより幼女のような幼さ。やつぱり変！

「こらこら、なにしてるんだよモモエ。あ、あれ巫彩？」

木泊兄さんの相変わらずの、少年のような女性のような声が心地いい。

起き上がった母萌さんはあたしと志穂さんと木泊兄さんを同時に見ると、手を顔の横で組んではしゃぎだした。

「あらーっ！　巫彩ちゃんっ、しばらく見ないうちに女の子らしくなっちゃってえ！　やーん、もう美少女ばっかでモモエちゃん萌え萌えーっ」

……一人称が自分の名前である上、それに《ちゃん》をつけておられる。

そして驚くことなかれ。

この人の名前は……やまぐち・ももえ山口母萌。

あたしは最初、バーのママとしての芸名なんだと思った。けどそうではなく、これが本名だと知ったときは、事実は無名より奇なり、なんて思ってしまった。

あたしは木泊兄さんに目を向ける。寒がりな彼も、さすがに今日は白い半袖のセーラー服を着ていた。ロングスカートは白と水色のストライプが涼しげだし、緑色の襟に付いた紫色の巨大なリボンはこの上なく少女趣味的なもの。

とはいっても兄さんは女学生フェチとかそんな嫌らしい趣味は持っていない。

ただ海が大好きだから、海にちなんだ格好をしていたいんだとか。そうそう、立派な店を見て回れば、私服としてのセーラー服は結構簡単に手に入る。

思えばそう……彼が自らの命を絶とうとしてとった行動もまた、船から海に飛び降りる……というものだった……。

そんなにまで彼が海に惹かれる理由……それは、彼を引き取った彼女の名前が象徴してると思う。海が母性の象徴というのは、よく云われること。

普段は意識もしないのだけど、こうやって志穂さんや母萌さんと並ぶと、木泊兄さんはひどく肌色が薄く髪が細くって、恐ろしいくらい弱々しくて純粹無垢な雰囲気を持っているのが判る。

兄さんはあたしに向かってペコっと、ほんの小さく会釈をすると、秋の落日のような儂い笑みを浮かべた。

「えへへ、お久しぶり　ここで会うのはどれくらいぶりだろうね？」

一応、明るい話し方をするけれど、何もかもがその秋の落日に包まれているようで、なんだか抱きしめたくなくなってしまう。

すると志穂さんがしゃしゃり出てくる。

「木泊君ってさ、真紗耶みたいに女性ホルモン飲んでるわけでも整形したわけでもないのに、ホントに女の子より女の子らしいよね。はあ、あ、真紗耶にも木泊君みたいな純真さがあればね、私も袴^{いの}里^{りん}も楽なんだけどなア」

さっきあたしは志穂さんを僂げだと言ったけれど、木泊さんの前では志穂さんが堂々と地に足のついた女に見える。

って、そんなこと気にしてる場合じゃないッ！

「志穂さん！？　貴女今なんて……っ」

「だーから、」同じ言葉を棒読みで繰り返す志穂さん。「って言

ったのよ。あ、いのりんっていうのは、真紗耶のカーチャンのことね」

「えーっ!?　じゃあ今ここには、《そういう人》が二人!?」
てつきり真紗耶さんを女だと思ってたあたしは目が回る想いだっ
た。

すると木泊兄さんはコクリと首を傾げて顔の前に片手を上げ、き
よとん、と、人差し指を自分の頬に当てる。

「うーん、そんなにフシギかなあ……?」

……どうすればそんな華奢なオルゴールのような声が出せるのか
しらと問いたい。

あたしと志穂さんが木泊さんのそんな雰囲気になくなっていて
と、母萌さんが木泊さんの腕を取り、騒ぎ出した。

「へへーん、デートデートー　じゃあみんな、またねー」

「三人で、ごゆっくりどーぞー」

木泊兄さんはそう言い残し、母萌さんと共に階段を上って行った。
その背に志穂さんが、

「木泊君、どうかこれからはお幸せにね!」と痛切に叫ぶ。

木泊兄さんは母萌さんと共に立ち止まって振り向くと、全世界す
べての優しさがそこに集合したような愛らしい笑顔を見せてくれた。

「うんっ……ありがとー志穂さん。じゃあね」

母萌さんに縋るように寄り添って歩くその姿を見ると、あたしは
改めて木泊さんの幸せを祈らずにはいられなかった。

木泊兄さんは今まで、あの糞みたいな両親の元、さっきの《隙間
に咲いていたボリジ》みたいな人生を送ってきたわけで。

生きづらい場所は、苦しいよ。花も、人間もね

紗那の手によって生きよい土の地面に移されたあの花。木泊兄さ
んも今、ここで母萌さんと生きることでしょうやく《土の地面》に來
ることが出来たのではないかしら?

だとしたら、今までコンクリに阻害されて活き活きと生きられなかった分、これからは土の地面からたくさんの栄養を思いっきり吸収しながら生きていって欲しい、と心の底からそう思った。

M i s a e m e e t s M a s a y a (前書き)

どんな陰惨な物語でも、そのなかにロマンティックな部分を必ず入れる、それが私のルールだったりします。けどロマンスって難しいですね。

M i s a e m e e t s M a s a y a

志穂さんに促されて店の入口を開けると、小さなウィンドチャイムが繊細に鳴り響いて、ここがさっきの喫茶店とは一線を画する、立派なバーなんだということが伝わってきた。

定休日のためか、照明といえばカウンターの白いシーリングライトが燈っているだけだけれど、壁も天井も光沢のあるブラウンゴールドっぽい色調だから、どこまでも大人びた色彩が店に充満している。

真紗耶さんは、カウンターに向かって座ったままだけれど、この暗さでもその長髪がとても黒いことが判った。

「おい真紗耶、巫彩ちゃん連れてきたお」

「ああ、そ、そうですか」

たおやかな口調でそう呟きつつ振り向く真紗耶さん。

その姿は基本的には志穂さんと似ていながら、どこまでも正統派な美少女っぽくて、さしずめこの二人は《同じアニメに出てくる対照的なヒロイン》といった趣。

そして、やっぱり志穂さん同様、その全身からは妙な暗さというか、情念深さがオーラとなって漂っている。

ただし。これまで（特に今日になって）色々な《曰くつき美少女》を見せられてきたあたしにとつて、真紗耶さんがあの姿にして男…という事実はすんなり受け入れることができた。

「あなたたち、何かのアニメを意識してたりするの？」

二次元に詳しくないあたしに、二人は丁寧に事情を説明をしてくれた。あまりにも複雑なものだから、それを脳内で整理するあたし。志穂さんは生まれつき、バーチャルアイドルユニット『晩壓不埒』の廉埒紡弊順と瓜二つの姿をしていた。

シyam双生児の如く一心同体で生きてきたせい、何かかも同

じにしたいこの二人。

弊順にそっくりな志穂さんと《一對》になるため、真紗耶さんが同じ『晩壓不埒』の告汙匐の顔に整形。

なんていうSFチックな事情！ 母萌木泊コンビといい、これはもう、あたしの心の平衡感覚を乱そうという作戦を遂行しているかのようにさえ思えてくる。

「じゃーあ、私はこれで失礼するわ。無理言って先に巫彩さんと先に会わせてもらったわけだし」

志穂さんはそれだけ言っていると、疾風のようにその場を去ってしまった。

志穂さんに手を振って、チャリンチャリンと鳴るウィンドチャイムにしばし見惚れた後、ふっとカウンターを振り向くと、そこに真紗耶さんは居なかった。

代わりに、得体の知れない、不健全な、けれどもどこか愛すべき好ましさを持った美少女フィギュアが立ち尽くしている。

「ミサエ……やつと会えた」

やけに乾いた、無機質な口調で言葉を紡ぐ彼（彼女？）。

その人となりは、真子と表裏一体というか、好一對になりそうなものだった。真子が健康的な少年っぽい少女なら、この人は不健全な幼女っぽい少年。そう……どういうわけかその姿は真子より幼く見える。もちろん身長そのものは、志穂さんと大差ないのに。

これって女性ホルモンの作用？ それともこの人自身の特徴？

不思議なのは、中性的でありながら、男性的な要素が微塵もないこと。

あたしはちよっぴり恐る恐る声をかける。

「あの……あなたは……は、真紗耶さん、よね？ 髪は……？」

「あれは、カツラ。これがホントの、私。人形……みたい？ それは、母から受け継いだ」

確かに真紗耶さんの背後のカウンターには、バサツと、長くて黒

いカツラが置かれていた。でもカツラを取っただけでこっちは変わるまい。この人は瞬時に、メイクも剥がしたんだと思う。

「ほ、ホントの……って、女性ホルモンを飲む前のあなた……ってこと？ それとも……整形する前の？」

真紗耶さんはカクカクと首を横に振ると、ほんのちよつと瞳をうるませてあたしを見つめてきた。

「整形なんか、ホントはしてない……。ホントは、プチ整形、しただけ。化粧すれば、簡単に、告互匁になったり、元に戻ったりできる」

「そのこと、志穂さんは？」

「《おしほ》には、何も言っていない。おしほは、私が完璧に、告互匁になったと思ってる。でも……それでいい」

志穂さんの言葉が頭のなかで木霊する……

真紗耶ってね、今までまともに言葉を交わしたの、私と、母親しか居ないのよ

この人はきつと朱音と同じなんだって。

これが真紗耶という人の本来の姿なら、人に媚びず、集団の色に染まろうとしないこういうタイプは、孤独という友達を得るしかない。

「どうして……、どうして志穂さんの前では自分を偽るの？」

すると諦めたように俯いて首を横に振る真紗耶さん。

結局、あたしの問いに答えることなく、真紗耶さんはジュークボックスのほうへ歩いて行った。

「なんか、しんみりして、いや」

『イルームの森』にあったやつより二倍はあるかという、立派なジュークボックス。

真紗耶さんがチャリンと小銭を入れて操作をすると、いかにもオールドデイズといった趣の、セピア色に籠もったようなピアノの前奏が店全体に充満する。

この曲！ あたしには聴き覚えがある。思い出そうとしているとどこかアンニュイな女性のヴォーカルが流れてきた。そこでやっと曲名を思い出すあたし。

「やだ、懐かしい。『Sweet Seasons』ね、キャロル・キングの。たしかドラマの挿入歌になってたわ……あの、とよた真帆が暴れるドラマ。へえ懐かしい。今が二千九年だから十一年前か。あたし三歳だったわよ。……あの頃までかしらね？ 日本に卡ろうじて『わびさび』みたいなのが残ってたのは。ミレニアムだとか二十一世紀だとか云う頃にはもう、ネットが普及しちゃって、日本が全然別物になっちゃったけど」

普通なら、『三歳の頃にあんなドラマを見てたのか！？』なんて突っ込んでくるはず。ところが……

「そう……それは解るけど。でも……、どんな日々だって、おしほと私にとつては、ただ敵から逃げる……それだけの毎日だった……」

真紗耶さんは故意か偶然か、一般人が突っ込みそうな部分には見向きもしないで、ただ話題を進めてきた。そんなことをちよつぱり、居心地よく感じるあたし。

そして、『敵から逃げる』なんていう不穩な告白……

「何に追われてるの！？」

「追っ手」

ぼそつ、と答える真紗耶さんに、あたしはムカツ！

「だーからっ、あなたたちを追ってるのは誰なのよッ！」

「私たちのこと……知ってる……奴ら……」

真紗耶さんの言葉に嘘はなかった。

そしてあたしは、志穂さんの犯した何らかの犯罪を知っている者に追われているんだと、このときそう思った。そう、このときまでは。

一歩、あたしは真紗耶さんに歩み寄る。

この人がどうして、あたしの前で変装を解いたのか、その気持ち

を想うと痛ましかった。

あたしが木泊兄さんにアドレスを聞いたことから始まった、あのメールのやりとり。恐ろしい者から逃げるだけの日々のなか、この人はあたしに希望をいだいていたのではないかしら……と。

それと同時にあたしは、この人の無表情で寡黙で、ペトルーシユカがそのままバレエから抜け出してきたような雰囲気、それまで出会った中性的人物……つまり木泊兄さんや眞子に感じるもののなかった特別な感情をいだいてしまっただけではないかしら？

やがて、このバーと同じ名前を冠された曲が、長くて思わせぶりの間奏を迎える。

プラスが得意気に鳴り、ベースが迫るように響くなか、真紗耶さんはまるで歌の中のセリフ（演歌によくあるあれ！）を語りたいに、言葉を紡ぎだした。キャロル・キングもまた、どっちかっという中性的な声だから、そう聞こえるのかもしれない。

「私たちの毎日は……、パロディとしてしか語れないほどの悲劇だから……。素のままの私だと、たぶん耐えられない……。告汙訶になつて、おしほと『晩壓丕埧』としてセットになれば……。すべてはチャップリンの映画のなか……」

真紗耶さんが言い終わった瞬間、間奏が終わって歌が再開した。それはまるで、《それでもあたしと居る間だけは自分に甘い季節がやって来る》とも言わんばかりに。

そしてこれはそう……あたしの どうして志穂さんの前では自分を偽るの？ っていう言葉への返答。

「それであなた、幸せなの？」

「さあ」

ぼそつとした無表情な返答。

「さあ って……」

「それが、私にとつての《普通》だから……。私が普通に生きられるの、おしほの傍以外にはないから」

「……………」

甘い季節の話をしているの

歌が最後にそう反芻しつつフェイドアウトするなか、あたしは真紗耶さんのまん前へと行き、

「あたし……あたしで良ければ」

と口にしたとたん、真紗耶さんはまるで天敵から逃げるように移動して、やがて地面に崩れ込んだ。

「やめて」

またボソツと、一言だけ呟く背中が、一人寂しく人形と遊ぶ幼娘おさなごのよう。

「だったらどうしてあたしの前で素顔を見せたりしたのよ？ 誰かに素顔を見せるの、久しぶりなんでしょ？」

「……おしほに言われた。ミサエは女の子なんだから、女として

めかして会っても意味ないって……。だから元の私に……」

「それだけなワケないじゃない……」

「……………」

曲も終わって、この場を満たすのは、ただやるせない静寂。

あたしは街の狂騒が恋しくなつて、ドアに向かってガツガツ歩き出す。

「あーもうもうもっ！ しんみりしてイヤんなるのはコツチのほうだってのよ！」

ドアを開け、ウィンドチャイムの乱れ打ちとともに白昼の光を店に呼び込むと、あたしは思い切りよくツイントールを舞わせて振り向く。

そして何も言わず、この瞳だけで おいで と、うずくまる空ろな人形に告げた。

真紗耶さんはよろよると、けれどもやっぱりどこか無機質な、命を吹き込まれた人形みたいな動作で歩いて来る。母親譲りだということの人となり。お母さんもよっぽどの人形美人なんでしょう。

「来てほしい所がある」

真紗耶さんの言葉に誘われて、建物の狭間からいちいち波の輝きが垣間見える地帯をゆく。風向きのせいか、潮の香りも強い。

日はすっかり昇って、本当にミニチュア・サマーとでも言いたくなる気候。こんな気の早い格好をしてきてよかったと、改めてあたしは自分を心の中で褒めた。

真紗耶さんといえば、白黒の横しまワンピースに黒いケープを纏うという、ハイセンスな格好で、

「ランドマークタワーを見上げたのなんて……何年ぶりかしら」

なんて、腕を上げて巨大な塔を指差すと、ケープがスリりとめくられて真っ白な二の腕が現れる。触ったらたぶん、蟬のような感触がするに違いない。

「空を見上げる暇さえなかったわけね？」

あたしの沈痛さが混じった問いに、真紗耶さんはコクリと、また無機質にうなづく。

「そう。いつも逃げ回ってるか……正体がバレないか怯えてるか……

でも、この姿で歩いたのはたぶん、十年以上ぶり……と思う」

「あなたたちって、いくつなの？」

「忘れた。たぶん……二十代後半。十四年前の《あの日》から、きつと、おしほも私も、成長が止まってる」

あたしの糞義両親は、《人は社会との関わりによって成長する》と云う。そしてイルームの森のマスターもとい眞子の母は、

人間ってやつはさあ、社会の仕組みの汚さを知って、なおかつそれに順応すればするほど、年喰って老けてくんだ。私の糞旦那がそうだった。へへへへ、だから私は、この店から出ないで人生送るさ。それが多岐川優サマの美容法だあ！　よく覚えとくんだな！

と一升瓶片手に語っていた。

あんな両親の云うことに共感する気はないし、マスターが酔った

勢いで放った冗談まじりの言葉にどれくらいの信憑性があるのかも判らない。けど、もしそういうのが本当なんだとしたら……

……社会との間に大きなベルリンの壁を張って、ただ自分たちだけの退廃的で自堕落で、そして耽美な世界で生きてきた志穂さんや真紗耶さんの成長が止まっていることにストンと説明がつく。

二人とも、高校生か、下手すると中学生だといっても疑う人は居なさそうだから……。

最近聞かなくなった、アダルトチルドレンという言葉をあたしは思い出していた。

「アダルトチルドレンっていう言葉は普通、外見とかは関係なくって、精神のことで使われてるけど……」

「そう。おしほと私は、ホントの意味でのアダルトチルドレン……身も心も」

「なるほどね」

得意気な顔で横を歩くあたしの顔を、なぜか不気味そうに覗き込んでくる真紗耶さん。

「ミサエ、なんとも思わないの？ 逃げないの？」

「は？」

「私たちのこと……知ったら、普通の人なら汚がる。近づかないようにする」

ドンッとアスファルトを踏みつけて立ち止まるあたし。

「ちょっと真紗耶！？ あたしがそんなチンケな女だと思ってたわけ！？ アツタマきたもっ！」

「こんなに簡単に上手くいくなんて……」

あたしの散歩前あたりで立ち止まる真紗耶。

「なにが上手くいったってのよッ！？」

あたしは真紗耶に駆け寄ると、返答によつてはこいつのオカッパ頭にタンコブの一つでも飾ってやろうと心に決めた。

真紗耶はニンマリと目を細め、にゆるっと首だけ動かして振り向く。

「ふふつ、《真紗耶》って、呼び捨てしてくれた。だから、わざと怒らせた」

「ふぐつ……く、下らないっ！」

乱暴にそっぽを向いたあたしのツインテールが顔に当たったのか、真紗耶は小さく「痛っ」と呟くと、すぐに真摯な視線をこちらへ向けてきた。

「ミサエ、私が元の姿のときは、呼び捨てにして。それで、告げ囃のときは、《真紗耶さん》って呼んで」

湧いて出たような突飛なルール。それはきつとこの人の、志穂さんに対する想いと、自分の人生を省みる心が入り混じって生まれたもの。

怒ってたあたしも、これには素直に頷かざるを得なかった。ただし、ツンとそっぽを向いたまま。

「……わかったわよ。めんどくさいけど、そうしてあげる」

「ありがと……」

そんなことを話しているうちに、あたしたちは真紗耶の 来てほしい所 に着いていた。

そこは賑やかな桟橋。あたしは日本の海がそんなに好きじゃないけど、横浜の海は都会的に洗練されていて、かなりの好印象。

白昼の光を反射して燦然と輝く水面^{みなも}をはじめ、ビル群の淡いグレイ、空の青、そして……目の前の客船の白が、ユーミンやサザンの歌う海を想わせる。

船体には《マリーンルージュ》の文字。これは確か、ディナーを楽しむ船だったはず！

「はいはいナイスボートナイスボート。銭^{ぜに}こ持っていないあたしたちには無縁な乗り物ね。帰りましょ」

「大丈夫、予約はネットですってある」

すたすたと乗っていつてしまう真紗耶。

「ちよつとちよつと！」

仕方なく、あたしはその後を追った。

平日のこの時間だから、当然船内はガラガラ。

船員（店員？）に案内されて二階席のセレッソに入ると、女性が進行方向を向いて座るとの説明。

あたしが何のためらいもなく船が進むであろう方を向いて座るのはともかく、真紗耶まであたしと向き合わずに並んで座る。もうこの人には、男としての部分は残っていないんだろうと、直感するあたし。

メニューは魚系か肉系を選ぶことができ、あたしは迷いなく肉系を注文。対する真紗耶は「せっかく海の上に来たんだから」と魚系を。

「せっかく海の上に来たんだから　ってことは、あんまり来ないの？　ここ」

「当たり前。いつも私たちは、横浜の歓楽街や飲み屋街をうろついてるから……」

そこまで言うとき暗く沈黙してしまう真紗耶。

確かに横浜はドラクエ3でいうところのアッサラムみたいな街で、煌びやかな表の顔と、妖艶な裏の顔を持っていると、テレビで聞いたことがある。これほど風俗店が密集している地域は滅多にない、と。

けどあたしは少なくとも今日は、その先を訊くつもりはなかった。今日の趣旨は、真紗耶と志穂さんの生き方を知ることじゃなく、あくまでも木泊兄さんの自殺未遂の原因を訊くこと、なんだから。

「ああいいのよいいのよ、話さなくなっただけ」

「ごめん」

といったところで出航。可愛いシーバスとすれ違いながら、船は陸を離れゆく。すぐ視界に入るのは、横浜国際大桟橋。

すると、『ホタテとサーモンのミルフィュー』を頬張っていた真

紗耶がナイフとフークを置いて、はあつとため息をつく。

「ずっと、ずっと……地面から……地上から離れたかった……」

「水の上だものね」 地上と全然違うわ」

そう。船に乗るのは小六の修学旅行以来だったけど、床に足がついているのに、なぜか重力から開放されたようなこの浮遊感は新鮮なもの。

そんな軽い感慨を得るあたしに対して、真紗耶のほうはなにやら深刻な面持ち。

確かに。さっきはビルにしか見えなかったランドマークタワーも、ここからだとは本当に塔みたいだし、その隣、船のセイルを模った横浜グランドインターコンチネンタルホテルも、少し離れた所にある観覧車も、とても生き生きと輝いて見える。

真紗耶は水で喉をうるおすと、なぜか突拍子もない話題を出してきた。けどそれこそが、あたしの求めている話題の前置きに他ならず……

「こうしてると……、何万人何億人っていう人がネットで傷つけ合っていることが、幻みたいに見える」

「幻であってほしいわよね、そんなの。いつからネットってそんなふうになったのかしら？」

どこか他人行儀に言うあたしに、真紗耶は重くて深刻な視線を向けてきた。

「いつからって……最初から。……そう。コハクがあんなことになったのは、一九九四年……ネットが一般的に使われ始めた年」

あたしもまた、ジュレとしか思えない『冷製コンソメスープ』を口へ運ぶ手を止める。

「じゃあ真紗耶、兄さんがあんなったのって、ネットが関係があるってこと!？」

コクリ、と頷くと、真紗耶はサーモンにフォークを突き刺しつつ、言葉を続けた。

「コハクは……、タチの悪い宗教団体によって、絶望の底に叩き落

とされた……。その宗教は、主にネットで情報交換する団体で……。当時のネットだから、規模はそんなに大きくなかったけど……。コハクの家を突き止めるところまでいつて……」

あたしの脳裏に家の外壁に残った、あの落書きを消したような跡の映像が浮かんできた。

「そもそもどうして兄さんはそんな宗教に叩かれたの!？」

「コハク、小学校でヒドいイジメに遭ってた……。それで、とうとう耐えられなくなって、……。不登校になった。そんなとき、コハク、小説を書き始めたの……。それを彼の母親が、つまり今でいうミサエの義母が目をつけて……。本を自費出版した……。それを、それをあの宗教は、《登校拒否児の分際で小説を書くなんて言語道断》って……。コハクに攻撃を……。っ」

そこまで言うと、沈痛に目を閉じて黙り込んでしまう真紗耶。対してあたしは訊きたいことでいっぱいになっていた。

「あのクソ母の考えそうなことだわッ! で、その宗教、名前はなんていうのよ!？」

「首田宗志教……」

ついさっき名前を聞いたばかりの首田宗志教 志穂さんがあの痴漢を殴りたくなったその気持ちを、痛いほど理解するあたし。

「首田宗志教……ですって!？」

「そう……知ってるの?」

あたしは咄嗟にケータイを取り出し、首田宗志について調べだすと、ネット百科事典みたいなサイトですぐに詳細が判ったけど、それは想像を絶する凄惨な事実だった。

首田宗志（しゅだ・しゅうじ、1967～1994）は、日本の小説家、アニメ評論家。

一五歳の少女に殺害されるという最期が世を震撼させた。

首田はその少女を流産させようとし、お腹の子を守ろうとした少女がやむを得ず首田を殺害、少女は無罪になった。

あたしのなかで、木泊兄さんの言う《志穂さんの犯罪》という言葉と、ここに書かれている事実とが、ぴたりとシンクロする。

「あの真紗耶、もしかして、《志穂さんが起こした犯罪》って……」
ケータイの画面を見せつつ問うと、真紗耶は無言のままあたしの目をまっすぐに見つめてきた……

真紗耶の目が、言葉なんかで言うよりもずっとずっと明確に《その通り》と言い、そして付け足しのごとく、

「それから、おしほ……無罪になったけど、首田宗志教に《こいつが首田様を殺した犯人だ》って、顔写真をネットに流されて……《前科者》になった。どんな場所でも受け入れてはもらえなくなってる……。あの時期の、おしほの嘆きよう……もう、地獄のような日々だった。私たちが、こんな落ちぶれた生き方しかできないのは、そのことがあるから」

と声に出して告げてきた。

これで、《柴門志穂は殺人者》という事実が明確になってしまった……。

志穂さんの動機は、果たして《木泊兄さんを不幸にした首田宗志教への復讐》なのかしら？ どうも違うような気がする。さっきの志穂さんと木泊さんのやりとりからして、志穂さんと木泊さんの間にそれほど強い愛情が存在しているとは思えないし。

それを真紗耶さんに訊こうとしたけれど……

……！？

ちよつと待った！

志穂さんが首田を殺した少女なら、志穂さんは首田の子供を妊娠していたことにならないかしら！？

嗚呼いけない、いけない！ このままこの話を続けたら、とてつもなく陰惨な事実を掘り起こしてしまいそう！

逃げるわけじゃないけど　それより時間がない。話をしているうちに船はシーバスをいくつも見送っている。

そして真紗耶は今、陸から離れたくつてこんな船に乗っていると言った。たぶん、この人が船に乗る機会なんて、今後滅多に訪れることはないのに……

なのに、こんな暗い顔をさせていいわけがないじゃない！

あたしはガツガツと、『ラムと牛フィレ』を食べ始める。

「あんたも早く食べるのッ！　さっさと平らげて、デッキに行くわよっ！」

「あ、うん……」

真紗耶はデジタルチックに、表情も姿勢も変えず、ソースが美味しそうな『舌鰾したひらめのパイ包み』を食す動作だけを速めた。

『アメリカンチェリーフランと季節のフルーツ添え』の甘美さで辛気臭い宗教の話を忘れると、あたしたちは席を立つ。

茶緑の地面に白い柵が落ち着いた雰囲気のスカイデッキ。

野生的な突風に細めた瞳を開けると、船はちょうど横浜ベイブリッジの下をくぐるところだった。

「やった！　ベイブリッジを真下から見れるなんて！」

「すごい……」

無表情ながら、真上にのぞむ壮麗な白い橋に感嘆している様子の真紗耶。

たぶんこの人はあたしの倍以上の時を生きている。けれど、こういう景色を見る機会というのは、いったいどれくらいあったのかしら？

ベイブリッジの下。大きな日影の冷たい暗さが、あたしのなかにあった深刻な疑問を呼び覚ます……

あなたと志穂さんって、どういう生活をしているの？　訊こうとして、やっぱり言葉を飲み込んだ。

後ろめたくない生き方をしているのなら、もうこの人はとっくに

自己紹介をしているはず。それをしないんだから、よっぽど。

橋を抜けて眩しい海原をのぞむと、あたしは明るい口調で、

「どう？ 陸から離れて、リフレッシュできたかしら？」と訊いてみせる。

真紗耶は笑いはしなかったけど、海面の煌めきを慈しむように見下ろしていた。

「戻りたくない」

そしてこの穏やかでない言葉。二人して海に浮かんでいたとしても言うのかしら？ そりゃ心中よ、と突っ込もうとして、やっぱりやめた。

けど、あたしはなぜかその言葉によって、そんなに暗い気分にはならない。

船の先まで移動すると、柵に手をかけてもうすぐ着く陸を眺める。「あたしだって戻りたくない。うちに戻れば、うんこみたいな義理の両親が待つてるんだから。でもさ、」と、ここであたしはデッキの真ん中で俯く真紗耶に振り向く。「でも、ときどきこうやって会いましょ？ そうすればきつと」

真紗耶は首を横に振って、その言葉を遮る。

「いいの。できない約束はしないで……。きつとミサエには、私のことなんか忘れるときがくる」

またムカツ腹が立った。

あたしはドンドンと船全体を沈ませるような勢いで真紗耶に駆け寄ると、びんた、じゃなく、ツインテール越しに口づけをお見舞いした。強い風のせいでちょうど、しっぱが顔の前に来るのを見計らって……その頬に。

やっぱり、この人の頬は蠟のように硬く艶やかで、不思議な冷たい温もりがあった。

「み、……ミサエっ!？」

ただでさえ円らな、けれども少し尖った形の瞳を大きく見開き、あたふたする真紗耶。

「へへーん　　それでもあたしがあんたを忘れるって!？」

「……………」

そのまま沈黙して俯いてしまふ真紗耶。けれどあたしの気持ちは、
……ちゃんと伝わったと思う。

出航のときも見た氷川丸が、今度は温かい笑顔であたしを迎えて
くれているように見えた。氷川丸横の棧橋に戻れば、ランチクルー
ズコースの終了。

どこか誇らしい気分で船を下りるあたし。……あたしのほうから
生み出したこの尊い絆が、近い将来、野蛮な惨劇によって打ち壊さ
れることになるかも知らずに。

M i s a e m e e t s M a s a y a (後書き)

もちろん首田宗志は架空の小説家であり、当然首田宗志教も架空の宗教団体ですが、これに似たことはいくらかでも現実で起こっています。六章、七章あたりで、そのことを深く掘り下げたいと思っています。

確かな希望（前書き）

第一章の最後のパート『ささやかな希望』と対になるサブタイトルです
ね。

確かな希望

Sweet Seasonに戻ってカウンターに並んで座ると、真紗耶さんはカツラを被って軽く化粧を施し、元の姿（どっちを元の姿と言えがいいんだか…）に戻る。

その間なんと十秒以内！ この早業にはプロ根性さえ感じた。そして……

「巫彩さん、今日は楽しかったです。どうもありがとうございました。あら、でもまだお昼過ぎじゃないですか。まだ、何か訊きたいこととがあります？」

《真紗耶》より1オクターブは高い、流麗な口調で言葉を紡ぐ《真紗耶さん》。この調子だとさっきの《あたふた》ぶりも忘れてしまってるんじゃないかしら…… 実に腑に落ちない。

それにあたしは、この《真紗耶さん》に関しては、《真紗耶》に感じたような特別な感情をいだくことができなかった。綺麗だ、とは思っただけだ。

それはそうと、《訊きたいこと》。

「ねえ真紗耶さん、兄さんの自殺未遂の原因は、大まかには理解できたわ。でも首田宗志教が今でも存続しているなら、機会さえあればまた兄さんを攻撃してくるんじゃないかって、それが心配」

すると真紗耶さんは氷の音を鳴らしながら、ラム酒の梨ジュース割りをやや乱暴に飲むと、苦渋と悲哀の入り混じった目でシーリングランプを見上げた。

「そもそも、木泊さんを攻撃だなんて…… 何て馬鹿馬鹿しいんでしょう？ 団体を結成してまで立ち向かわなければならぬのは、《権力を持った悪》でしょう！？ 木泊さんのように、ただでさえ傷つき疲れ果てた、心優しい人間を攻撃することに、何の意味があるのです……？」

「正義の名の元に、弱い者いじめをする宗教団体…… か。いいご身

分だわねえッ」

梅酒の飲むヨーグルト割を一气飲みし、ドンとテーブルにコップを叩きつけるあたし。真紗耶さんが《母萌さんにはナイショですよ》と用意してくれたものだけれど、梅酒と飲むヨーグルトの割合は一对九くらい。バチは当たらないでしょう。

その音で我に返ったのか、真紗耶さんは慌てた様子であたしに頭を下げた。

「あつ、ごめんなさい。首田宗志教は、滅びました」

「滅んだ……って？」

「首田宗志が殺されたことによる集団自殺です……」

つつけばつつくほど、ことごとく重くてキツイ内容の話が出てくる、出てくる。

「教祖が死んで集団自殺、か。よくある話ね」

「ああ、巫彩さん、何か誤解なさってるようですけど、あの宗教の教祖は首田自身ではありませんよ？ あくまでもあの宗教は、首田宗志の名を冠しているだけでして、教祖は別なんです」

「やだ。首田宗志の名前がまんま使われてるから、てっきり教祖は首田自身なんだと思ったわ。じゃあ、その教祖っていうのは集団自殺のときに一緒に？」

「いいえ……」

消極的に首を横に振る真紗耶さんを見て、あたしの背筋に悪寒が走った。

「じゃあ！ 教祖って奴は生きてるってこと！？」

「いいえ。死にました。けれども……集団自殺とは別の件で」

真紗耶さんの瞳はもはや、今この瞬間を見つめてはいなかった。この人は完全に、首田宗志教との確執を繰り広げただろう過去に戻っている。

これ以上の詮索はお互いの精神衛生上よろしくない、と思った。兄さんの自殺未遂の原因は知ることができたわけで、あたしの当初の目的は達成されたことになるんだから。

「他には何か？」

と訊いてくる うら寂しげな美顔に、
「もついいわ。ありがとう。あとはこっちが、どう兄さんを守って
いけばいいか、考えるだけだから。……それより、こっちこそあり
がとう。真紗耶さんに会いに来なきゃ、あんな船になんか乗ること
なんかなかったわ、あたし」

最大限の優しさを込めてそう告げると、真紗耶さんも穏やかな笑
顔を取り戻してくれた。

「こちらこそ、貴女が居なければ決して訪れることのない貴重な体
験でした。夢みたいな時間をありがとう……」

けれど、この笑顔は心からのものなのかしら？ 思えばこの
人は、《真紗耶》のときには一度たりとも笑顔を見せなかった。け
れどもこの《真紗耶さん》は割りと頻繁に笑顔を見せる。

これはつまり……………

その緩やかな時間は、乱れ鳴るウィンドチャイムの音によって打
ち切られた。

「ン、アレ？」

営業中だと勘違いしてドアを開けたのは、太ったオタクふうの男。
母萌さんの名誉のため、あたしは感じよく説明する。

「あーごめんなさいね。今日はあたしたちの貸切なの。ママも居な
いわ。ドアの札、見てみて下さい。《休業中》ってなってるはず
です」

「ンヲ、ゴメーン。ホントダ。デナオシテキマース」

「申し訳ありませんです」

困ったような笑みで男に挨拶する真紗耶さん。

そのときだった。男が実に厭らしい笑みを浮かべてこちらへ
入ってくるではないの！

真紗耶さんは震えながら立ち上がり、ガタガタと震えだす。

「……しまった……サングラスをかけ忘れ……っ」なんて口走りな

がら。

まさか！ こいつって真紗耶さんたちを追っている連中の一人！？
男はどんどん近づいて来、やがて真紗耶さんに接近する。

「ネエキミ、キミツテサ、ネットデ イマ ワダイノ、アノDVD
ニ デテル オンナノコ ノ カタハウ ダヨネ？ オレ、キミノ
ファンデネ、ゼヒ イチド、アイタイナンテ オモツ……グヴァ
！」

あたしは思いっきり男を蹴り飛ばしてやった！

「巫彩さん！？」

何が起こったか判らないふうな真紗耶さんと、地面に叩きつけられる男。

「ナ、ナンダ、オマエハ！？ オマエノ ヨウナ ボウリヨク オ
ンナニ ヨウハナイ。オレノ メアテハ コノコダ！」

そこであたしは、倒れた男の腕をギュウと捻ってやった。

「地味な女で悪かったわねえ！ たくどいつもこいつも！ 色と
欲しか頭がないイカレポンチばっか！ ああ！？ いいのよ！？
このまんま、その腕を使いもんにならなくてやったってね！」

得意気に男を見下ろしつつ、地面にへタレた彼の腕を威圧的に蹴
飛ばし続けるあたし。

「ヒ、ヒーーーーー！！！」

男は白目を剥き、一目散に逃げ去って行った。

数十秒後……

「あの、ありがとうございます」

「なによっ！？」

しまった。興奮のあまり、真紗耶さんにまで罵声を浴びせてしま
った！

「ひいっ！」 弾け飛ぶ真紗耶さん。

「ごめんっ！ あんまり腹が立ったもんだから、つい」

空気が和んだところでちょうど、ブリキの柱時計が十二回、荘厳

でどこか鄙びた鐘の音を打ち鳴らした。

あたしはペコリと頭を下げる。

「じゃ、今日はこれで失礼するわ。母萌さんにお礼を、そして……木泊兄さんには『お幸せに』って、言っておいてくれると嬉しいわ」

「あ、もうお別れですか？」

「ああ。うん。このくらいにしといたほうがほら、次もまた会おうって気になるじゃない？」

「テレビ番組みたいですね……。では、また今度」

「今日は本当にありがとう……」

あたしが真紗耶さんに再び軽く会釈をすると、ちょうど志穂さんが店へ戻ってきた。

「そろそろ戻ってる頃だと思ったわ。どう？ ランチクルーズは楽しめた？」

あたしは笑顔で志穂さんにペコリ。

「おかげさまで。いい経験ができたわ」

「そ？ 私たちに感謝しなさいよ。私と真紗耶の金を半分ずつ出したんだから」

「さ、柴門さんっ！」

真紗耶はあたふたしたけど、あたしは素直に二人に感謝したかった。立ち上がると、二人に軽く会釈する。

「二人ともありがとう。また来るわね……。それと、木泊兄さんのこと、よろしく」

「わかってる。真紗耶の大事な人を不幸にはしないって」

これでハッキリした。やっぱり志穂さんと兄さんにはそれほど深い絆はないらしい。とすると、志穂さんが首田を殺した動機はやっぱり、ネット百科事典に志穂さんの名前を伏せて書かれていた、あの記事の内容が正しいのかしら？

「バイバイ。またね」

あたしは店を出ると即座に、店内の会話に耳を傾ける。

「柴門さんごめんなさい、無理言って、一人で営業をさせてしまつて」

「いいさいいさ。気にすんな真紗耶。今日のブツは上物じやうもつだったんだから、いつもに引けを取らない売り上げになったわよ」

「ふふふ、ご苦労様です」

それを聞くと、あたしは心にあつたある疑念を確信に変え、やや急ぎ足で駅へ向かった。

実はもつと、《真紗耶さん》………というか《真紗耶》と一緒に居るつもりでいたけど、さっきのクズ男が言つた《ネットで話題のDVD》という言葉、あれが引つかかっている。

早く一人になってネットで調べたいという気持ちがあつたし、それに、早く戻れば真子の部活を覗けるんじゃないかという気持ちもある。

あたしはテニス部で行きづまつてる。そして真子もバレー部で行きづまつてるという。……真子とダブルスを組めたら　なんて、西原先輩に言われたことを実は本気で考えているあたしだった。

列車を乗り継ぎ、学園のある江ノ電の駅で降りると、ワラワラーつと、変な罪悪感がこの全身を包み込んだ。病気でもないのに学校を休んじやって……と。

初めての地だった横浜での、現実離れた志穂さんや真紗耶との出逢い。そこから一気に見慣れた古都へ戻ると、いやが上にも肩身が狭くなってしまう。

桜吹雪の舞う見慣れた道を、普段歩くことのない時間にゆくと、なんだかパラレルワールドに來た気分になる。

「おい中里みさい！　サボりかあ！？　」罵声を浴びせてくる八百屋のオバサンに、

「あたしは　み　さ　え　！　　いいかげん覚えれ！　それからこのこと両親にバラしたりしたらシバくわよっ！」

なんて突っかかりたりして。そう。彼女はの間あたしにオレン

チをパクられた人。

「へっ！ バラすもんか！ そもそもあんな頭のイカれた夫婦に会う気なんかサラサラないねえ！ ……まったく、あんな両親のもとで、可哀想に。ほらよ！ 持っていきな！」

そう言つてオレンヂを投げってくれるオバサン。あたしはそれをキヤッチすると、きょとんと「ありがと……」とだけ呟いて、新鮮なオレンヂにかぶりつきながら学校へ向かった。

この店の果物は有機栽培だから、本当に皮ごとイケるし、とても甘い。

オレンヂを食べ尽くす頃には、学校の塀が見えてきた。

さすがに授業中らしく、白い校舎は無人数みたいに静まり返っている。

今のうちにケータイでDVDのことを調べちゃおう……そう思つて塀に面したベンチに座るけど、手が動かない。

少なくともこんな真つ昼間、壁に耳あり障子に目ありな状況で調べることではないと。

結局、あたしはニコニコ動画へアクセス。現実逃避するようにゲームの実況プレイ動画を観覧してしまった。時間を忘れて延々と。

大げさじゃなく、この実況プレイ動画というのには観る者の時を早く進める効果がある。三十分が一分くらいに思えてくるから不思議なもの。

それにしても、昼間の学校前で実況プレイ動画を見る少女　どんな状況よ。

「昼間の学校前で実況プレイ動画を見る少女　どんな状況よ」思つていたことがそのままナレーションみたくして上空から降つてきて、「ひゃっ！」とすくみ上がるあたし。

見上げると、塀から身を乗り出した真子の太陽みたいな顔が、興味深そうな笑みを浮かべてこちらを見下ろしていた。

「眞子！」

「どうしたの？ カレシにフラれでもした？ それで学校が恋しくなって、一人寂しく実況動画観覧？ この二コ厨め！」

「だーから、カレシじゃないってのよ」

「えーっと、あんまり長話してらんないのよね。私これから部活だから。じゃあね」

もうそんな時間になっていたわけね。けれど目当てのものを見ることはできそう……。

「頑張つて」

「じゃあね」

眞子が居なくなつたのを見計らうと、あたしは塀沿いに体育館前まで移動。周囲に人気がないのを確認して校内へ侵入！

なゝに、あたしにとってこれしきの塀、水たまりを飛び越えるようなもの。

力も気も強い割りに、背はちっちゃくて体重は軽いあたし。音も立てずに体育館の前まで移動すると、這いつくばって下窓から中の様子を伺う。

目を輝かせてバレーボールに興じる部員たちを前に、普段の眞子からは想像もつかないボンヤリとした表情で、体育館の隅に座っていた。そして時々、部員たちに指示を出す……という感じ。

これはたぶん、有能すぎて《監督》に近い立場になってしまったんだと、あたしは解釈した。体を動かすのが好きな眞子にとって、これはキツツイ時間だろうと……。下手をすると体が鈍^{なま}ってしまうかもしれない。

眞子に想いを馳せつつ、いつもの帰り道をぼんやり歩く。

空が赤から紫に変わる頃、あたしは自分の家の前に着いていた。

P T Aはまだ、居るかしら？ まあ、家のそばまで行って様子を見て、まだP T Aが居るようだったら街をふらつければ良いだけの話

ね。

玄関に耳を寄せると、話し声が聞こえた。畜生。まだ居るらしい。「本当にあなたという人は……！　それが娘さんの教育にどんなプラスになるというのです！？」

聞いたことのない声だった。そして次に、義母の弱々しい声。

「なんザマスの……？　会長ならワタクシの気持ち、解って下さると思っておりますのに」

会長が義母を怒っている……？

「ここのところずーっと、巫彩さん、二人のお友達との付き合いが途絶えてらしたでしょう？　おかしいと思ってたんですよ。そしてこの前、娘から事情を聞きまして。奥様あなた、娘さんの付き合う相手にいちいち口を出しているらしいですね！　長らくの自分に腹が立ちました！」

ここでやっと状況が読めた。

先日、テニス部の先輩である西原さんとラリーしたとき、あたしの愚痴を聞いた西原さんは、

「うわ、貴女の親ってそんなことやってるの……？」

とショックを受けて、調子を失くしていた。

その西原さんの母親がPTAの会長だったということね。

「馬鹿馬鹿しいだなんて……そんなア」

義母はいつもの自信満々な口調がウソみたいに、その声を涙に潤ませてすらいる。

さっきの痴漢とおんなじ。

弱い者に対して高圧的になる人ほど、自分より目上の人間にはめつきり弱いんだから。

西原会長はなおも義母を追いつめる。

「馬鹿馬鹿しいことを馬鹿馬鹿しいと言って何が悪いのです？　友達というのは、子供たちが自分で選んで決めるべきものです。それ

でもし、それが自分に合わない友達だったとしたら、自分から距離を置くようになる……人はそうやって成長するんです！」

「す、すみませんザマス……」

「奥様、私はね、副会長たるあなたとこれまで友好的に接そうと努めてまいりましたが……今後もそれが続くとは限らないのですよ。では失礼いたします」

「まっ、まっまっ待つて下さいザマス、会長！　ワタクシメを一人にしないでえっ！　な、何でも言うことは聞くザマスから！」

「PTA副会長であり続けたいのなら、会長たる私の方針に従っていただくまでです」

「わかつているザマス！　何でも言うこと聞くザマスううううううううううう！」

泣き叫ぶ義母の声と、コツコツとこちらへ近づいてくる西原会長の足音。

「あ、巫彩さん！」

玄関から出た西原さんが私を見て硬直。チラリと垣間見える玄関。靴はぼなくなっているから、パーティは終わったんでしょう。

西原さんのお母さんとは初対面だったけど、その屈託のないカリリとした明るい人となり、娘さんと本当によく似ている。

「会長さん、はじめまして。娘さんにはいつも、部でお世話になっています」

あたしはそう言つて頭を下げた。

とりあえず、会長は玄関を閉め、あたしの元へ駆け寄つて来た。

「天下無敵の勇者様も、PTA会長の前では低姿勢なのねえ」

「勇者つて……」

「だってそうでしょ？　狭山朱音さんを守つて、真子さんや紗那さんを気にかけて、……ねえ貴女、自分のことなんか二の次つてタイプでしょう？」

確かに。今日はそれに加え、痴漢に苦しめられる少女を救い、真

紗耶さんをキモ面から守ってしまった。

「会長……けどそれは、あたしのエゴです。あたし、大人とか男とか、そういう力のある人が、子供とか少女とか、力のない人を捻じ伏せるようなことがイヤでイヤでたまらないの！」

「それを言うなら、勇者が魔王を倒しに行くのだって、それだって結局はエゴでしょ？ 何が正義で何が偽善かなんて、そんな人間には判らないわよ。でもね！ 少なくとも私は、強気を挫き弱きを守るうとする、巫彩さん、貴女って素敵だと思うわ！」

「ありがとう……」

思いがけない賛辞に戸惑いつつもお礼を言くと、会長は一転、明るい顔をシリアスな鋭さに染めて、あたしに歩み寄ってきた。

「私の娘だけじゃないのよ。多岐川眞子さんも、貴女のこと気にしてるわ」

「眞子が……どうして」

「巫彩さん、貴女が、自分と同じことになりはしないかって……。言いたくないけど、彼女、実の父親に強姦された過去があるでしょう？」

そう。眞子はあの明るさの裏に、一生癒えないような傷を……

そして、あたしの義父はいつも、あたしに厭らしい視線を向けてくる。この間の、

それより巫彩、お前ももう中学一年生か。ハッハッハッ、なかなか女らしい体格になってきたものだな。くびれも、健康的な肌の色も、実に綺麗だよ

なんて言葉が良い例。

「眞子……」

「だから巫彩さん、いつでも私の家に来なさい。それなら転校しなくても済むわ。朱音さんを守り続けられるわよ」

「でも……」

二の足を踏むあたし。この両肩をがっしりと、会長はつかんできた。

「なんなら、今日からでもいいのよ。そう……何かあってからじゃ遅いの！ 眞子さん、貴女が自分と同じ目に遭ったりしたら、どんなに悲しむか！」

あたしはそのまっすぐな表情に、ありったけの誠意を込めて頭を下げた。

「ありがとうございます。でも、もう少し考えさせて下さい。それに、自分の身は自分で守れますし」

あたしは自信満々でそう告げた。この《先送り》が、とんでもない悲劇を生み出すとも知らずに。

「そう……。できれば早く返事をしてほしいわ。じゃあね」

心配そうにあたしの瞳を覗き込む会長に、あたしは深い感謝の意を込めて深々と頭を下げた。

他人の家にお世話になるというのは、やっぱり申し訳ないし、今は木泊兄さんのこととか真紗耶さんたちのことを考えたい。ことにDVDの件、あれはすぐにでも調べたいもの。西原さんと暮らしたら、それは幸せなんだろうけど。

それにしても、会長が義母を捻じ伏せてくれたおかげで、あたしの行動範囲は広がるはず。さっきは朱音が眞子・紗那と仲良くなっただことだし……。久しぶりに訪れたいいくつかの幸運に、胸を高鳴らせているあたしだった。

確かな希望（後書き）

三章はこれで終わりです。

いやあ、こんなに時間がかかった章は初めてでしたよ（笑）。

【Shiho's viewpoint】薄紫の校舎跡にて（前書き）

果音様の怖さとか、校舎跡の不気味さとか……

そついうのが読者の方にきちんと伝わっているのか。

それが甚だ心配です。

【Shiho's viewpoint】薄紫の校舎跡にて

それは、うら寂しき薄紫を描く夜明けの出来事であった。

透き通った春の光は、校舎跡を満たす埃や蜘蛛の巣をなんとか皮肉に輝かせ、北からの風によって恐ろしいほど澄んだ空気は、私の悲哀をいつそう浮き彫りにする。

「志穂！ 貴女も手伝うのよ！」

「果音様！ 果音様！ お願いよ堪忍して！」

北棟へと続く渡り廊下。壁は安っぽいガラス張りであるため、物寂しい空の色がじかに感じられる。

……私は果音に引きずられ、今まさに轟音の響き渡る《開かずの間》へと連れられそうになっていた。力の差は歴然であり、一尺、また一尺と、開かずの間の仰々しい扉が迫りくる。

通路を半分ほど引きずられたところで、

「いやあーっつ！ ああああーっ！」

とうとう私は得体の知れぬ恐怖に耐え切れなくなり、大口を開け、喉が千切れるほど嗚咽した。

果音は立ち止まり、そんな私に羅刹のごとき凄まじい眼光を浴びせると、私の左肩を右手で鷲づかみにし、左手で私の背を百叩きにしてきた。肺が激しく刺激され、赤い飛沫の混じった咳が次から次へと出てくる。

私が咳き込みつつ地面に崩れ落ちると、果音は剥がれかかった床の板をバリバリと剥ぎ取り、それを武器にして蹲った私の背を次々に鞭打った。服の上から、私の体に木の棘が何本も突き刺さってゆくのが分かる。

そしてそして、果音がとどめの一撃を打とうとするのと、私が起き上がるうとするのが同時だった。

果音はバランスを崩し、自分が剥がした床の穴に足をとられそうになる。そしてバランスを保つためガラスに手を着くも、老朽化し

たガラスはいとも容易く割れ、果音の上半身が建物からはみ出した状態となった。

ガラス片があちこちに刺さり、果音の体は半ば血だるまのごとき有様になっている。

「果音様！ 果音様っ！ 今、救急車を！」

私が携帯電話を出すと、果音はそれまで以上に憤慨。

「そんなもの呼んじゃだめえーっ！！」

ズタズタになりながらも凄まじき執念をみせて起き上がると、私を思い切り突き飛ばし、時おり倒れそうになりながらも未だ轟音の響きやまぬ開かずの間へと向かっていった。

果音は《騒ぎ》が収集したら、いつものごとくアロソナルファアで傷を塞ぐつもりに違いない。事実、果音の体には十数ヶ所も、接着剤で繋ぎ合わせた痕がある。

それでも全く生きるか死ぬかの状態にならないのは、恐らくは若かりし頃の体の鍛え方が尋常ではなかったからだろう。

私のほうも今回は、細かい棘が刺さっただけで目立った外傷もなかった。喉の傷とて、普段からハスキーボイスな私には何ら問題はない。さあ出かけよう……。

【Shiho's viewpoint】薄紫の校舎跡にて（後書き）

果音様が鬼畜過ぎて、

皆さん話題にすら出たくない……のかな？

ともかく、果音様に注目して読むのが、

この物語を一番楽しめる方法だと思います。

【M i s a e · s v i e w p o i n t】汚水と聖水（前書き）

何度も言いますが、首田宗志教は架空の宗教です。

ただし、これとよく似た思想の集団は実在しました。まあ首田宗志教のような過激な行動は起こしませんでしたし、そもそも宗教ですらなかった。

しかし、私は思ったんです。

「この集団が宗教に発展して力を付けてしまったら、恐ろしいことになるのではないか」と。

この物語の首田宗志教のプロットは、そのようにして生まれたものです。

【Misa's viewpoint】汚水と聖水

「ハッハッハッ、飯をこしらえろ！」

「それどころじゃないザマス……会長様……ああ……会長様……」

「腹がすいているんだ！ 飯をこしらえなさい！」

「……どうすれば会長様はワタクシをお許しに……ふひー……」

「ハッハッハッ！ 何があつたか知らんが不様なものだな！ ハッ

ハッハッ！ もう良い！ 外で食う！」

ドアの向こうから聞こえる、フヌケになった義母と、それを気遣いもしない義父の声。けれど……あたしの心は今それどころじゃなかった。

なんていう愚かしい世界！

昨日、真紗耶さんとの会話に《諸悪の根源》として出て来た小説家・アニメ評論家《首田宗志》 諸悪の根源であると考えたのはあたし自身だけれど、真紗耶さんと志穂さんの転落は、まさに木泊兄さんの自殺未遂に端を発している気がしてならない。

そして、兄さんの自殺の原因となつたのが《首田宗志教》。

あたしは登校前のこの時間、首田宗志教についてネットで色々調べていたわけだけど……この宗教のあまりの卑劣さ・横暴さに度胆を抜かれて、不吉な両親の声さえまともに耳には入らなくなっていた

一つ。小説・アニメ・漫画は一人で楽しむためのものではなく、他者と関わるためのものである。作品を語り合う仲間を持たぬ者に、首田宗志を愛好する資格はない。但しその仲間がオタクであつてはならない。会社員・公務員をはじめ、将来の夢をきちんと持ちつつ勉強にはげむ学生、および自営業などが特に好ましい。

一つ。美少女文化を愛好する者に、首田宗志を愛好する資格はな

い。不買活動、デモ、アニメ製作会社への製作反対運動などに於いて、そうした文化への攻撃を行なうのも我が首田宗志教の使命である。

一つ。首田宗志の作品を普及する気のないものに首田宗志を愛好する資格はない。少なくとも十人の友人に作品を薦め、その友人にも普及活動に参加するよう呼びかけねばならない。友人が十人に満たないなどというのは論外である。

一つ。小説という文化を守ることこそ、首田宗志教最大の使命であり、これを穢す者への攻撃を行なうのが我が宗教の使命である。小説を書く資格を有するのは社会経験豊富な高学歴者のみであり、一流大学卒の元サラリーマンたる我が首田宗志こそが、小説家の鑑に他ならない。どれほど魅力ある小説であろうと、それが低学歴かつ社会経験の不足した者が書いたものであれば、それは社会に害をなす悪魔の小説に他ならない。

以上、四つのルールを守らぬファンに対しての攻撃を行なうのも我が首田宗志教の使命である。ルールを守らぬ者がファンとして首田宗志に纏わりつかぬよう、常に攻撃態勢に入っていることが望ましい。それを怠る者に、首田宗志を愛好する資格はない。

以上が、『首田宗志教ホームページ』の残骸に記されていた、《首田宗志ファンの心得》。

首田宗志教は見ての通り、悪意のないファン、誰を傷つけるわけでもない美少女文化、ひいては何の罪もない小説家たちすらも攻撃の対称にしている。……もう呆れを通り越して、この愚かさを的確に表現する言葉すら見当たりはしない。

ホームページの最終更新は一九九四年の初頭。首田が殺される直前まで更新されていたことになる。

そしてこの年はちょうど、『ときめきメモリアル』の第一作が発売されたのをはじめ、今で云う《萌え文化》のはしりともいえる兆候が見られた頃。

エロい女の子が表紙になったゲームなんか売られ始め、可愛い女の子が変身して悪と戦うアニメなんか流行りだした頃……なのかしら？ もっと昔から、そういうものはあった気がするけど。

しかし昨日の痴漢も話していたけど、首田宗志は美少女が暴行されたり甚振り殺されたりする話を書く小説家。そんな彼の傘下に生まれた宗教が、どうして美少女文化を攻撃しようとしたのか……解らない。

さて、《ホームページの残骸》というのは、既にそのページが《跡地》となっているから。つまり、ここ十数年間はずっと更新されず、webの海底に難破船みたくして存在してるということ。

集団自殺という衝撃的な最期を遂げた首田宗志教。モニタに映し出されるホームページはいかにもネット初期といった感じの、原色をベタ塗りしたような素っ気ない質感だけど、それが逆に当時の世界にあたしを引き戻すようで、どうにも空恐ろしくなる。

首田宗志のことを調べていたら汚水を浴びたような気分になってしまった。

まだ調べ足りないけど 時間もちょうどいいことだし、出かけてしまおう。すぐにでも朱音の顔が見たい。今日は北からの空気が入って涼しいし、すがすがしい登校になりそう。

家を出て春の北風に吹かれると、少し前までのあたしに戻った気分になる。

南風が吹きすさぶなか、あの二人に出逢った昨日が夢のよう。

……というか、あたしはまだ夢を見ているのかしら？

「オッス巫彩！ 今日ハサボンなよ」

「おはよ」

春風に吹かれるタンポポのように手を振って、朝の挨拶をする眞子と紗那 これは数ヶ月前の日常。そして……

その後ろ……紗那と眞子を両前に携えるようにして、少し俯いた

朱音の姿。

「ちよっ……！ みんな、あたしが出てくるの待っててくれたの？
っていうか」

あたしが訊く前に、朱音が前に歩み出てきた。

「昨日は、この三人で下校したの。……二人とも、なんだか巫彩に似てて、私なんかと仲良くしてくれて」

朱音の言葉を引き継ぐように、眞子、続いて紗那が甘く囁く。

「なんか三人で居るのが当たり前だった気分」

「巫彩が守りなくなる気持ち……解るよ」

昨日は眞子の様子を見て、そのまま帰ってしまったあたし。あれは、帰り道の痴漢騒動があつて以来、朱音のガードが固くなったからだった。朱音があたしに気を遣つて、

護身用の武器とか持つようにしてるから大丈夫。帰り時間が合わない日は、早いほうが先に帰ることにしよう？

なんて提案してくれて。

そして例のごとく、あたしをからかってくる紗那。

「それが巫彩つたら昨日、カレシにフラれたんだってえ？ 堀の前で一人寂しくニコニコ観てたって、眞子から聞いたよ」

「そうそう。だから三人で出迎えて、励ましてやろうってね、朱音が言い出してさ」

眞子が得意気に朱音を見ると、朱音はビクツとすくみ上がる。

「ま、眞子っ！ それは言わないって約束したでしょ！？」

朱音は恩着せがましくなるのが嫌で、眞子にそれを言わないでと頼んだんだと思う。

けどあたしは、こうやって早々にバラしてくれた眞子に感謝していた。

だって、嬉しいから。

「あははははっ そっかそっか。じゃ、四人して行きましょ！」

あたしが三人のなかへ飛び込むように合流すると、なんの違和感もなく、季節の戻った路地を四人で歩き出した。

花たちも新緑たちも、にわかに戻った冷たい空気に寂しげな表情をしていたけど、あたしの心はそれさえも風流な見物に感じてしまふほど明るく浮き立っていた。

首田宗志教が汚水なら、彼女たちは聖水ね。

ただ……あたしが先頭、朱音がその後ろ辺り、で、紗那・眞子が両脇をゆく、この菱型の陣形

紗那と眞子の間にぽっかりと空いた空間に、冷えきった植物たちの香りが漂う。

……元々、紗那と眞子は大の仲良しで、あたしがそこに割って入る形で仲良し三人組になったわけだけど。

最初の頃はあたしが先頭を歩くか後ろを歩くかしてて、紗那と眞子はいつもくつついて歩いてたし、ときには手を繋いだりもしてた。それがいつからか、あたしが中央を歩くのがデフォルトになって……それはそう

「もう、彼っいたらね、付き合って半年も経つのに、手も繋がらないんだから」

ちようど紗那がこんなふうに、彼とのノロケ話をあたしたちの前でするようになってから。

「ほらほら、巫彩は昨日失恋したばっかなんだから、そういう話はやめときなって」

こんなふうに、どういうわけか眞子はそれにさり気なく突っ込む。これまでは何気なく見流していたこの光景だけど、朱音というフィルターを通すと、初めてそれが違和感としてあたしの心をついた。

「ねえ、眞子ってさ、好きな子とか、居るの？」

さり気なく訊いてみると、眞子はズサッと靴を鳴らして立ち止まる。

ちょうどそのとき、春の侘しい北風が、ひととき家々の庭木をざわめかせていった。

「居るわけないじゃん……。ばっかじゃないの？」

眞子の吐き捨てるような屈折した声。俯いたその瞳は、風によってバラバラと舞い落ちてしまう新緑を映していた。

あたしは朱音と目を見合わせる。

あたしと朱音の考えは同じだと思う　つまり、眞子が好きだった

彼を、紗那が奪い取ってしまったんじゃないかしら……と。

【Masaya's viewpoint】愛のとまどい（前書き）

このあたりからやっと、恋愛ものらしくなってきましたね。

「そういえばジャンルを《恋愛》にしたんだった！」

なんて、意識しなければ自分でもこれが恋愛ものであることを忘れてしまいそうな内容ではありますが、ジャンルを《恋愛》にしたことは後悔していません。

なぜなら、後半は恋愛模様がメインになりますし、それに、大きな意味での《愛》というのが、物語全体の最大テーマですので。

「おーし！ 今日もいいのが撮れたね！」

「はい！ そろそろ売りに行きましようか？」

「おいおい真紗耶、良かったよ……何にも変わんなくって」

いつもの屋上でのやりとりの中、ふいと私に不穏な言葉を吐いてくる柴門さん。

無性に腸が煮え返った私は、彼女の呑気な笑顔を掻き消さんばかりに、いやらしく縋るような目で見つめてやりました。

「どういうことです？ なんですかそれは？ 私が柴門さんを裏切るとでも！？ 柴門さんは、柴門さんは、私をそんな人間だと思っていたんですか！？ 心外ですっ！ 私はっ、私はただの一度だっで、貴女を蔑ろに考えた事などありませんっ……！」

私は感情的になり、柴門さんを乱暴に押し倒しましたが、彼女は怒りもせず、惚けたように私を直視します。

「あ、ちよっと、撮影時以外にそういうことされると困るじゃない……あのねー真紗耶、私はね、巫彩さんに会ったら、あんたの心がそっちのほうに行っちゃうんじゃないかって、それを気にしてたのよ」

さすが、付き合いが長いだけあり、柴門さんは私のどんな態度も柳に吹く風のごとく交わしていきます。私はその体にのしかかり、胸に顔をうずめました。

「何があるうとも私は……私は、柴門さん、貴女とこの生活を続けます」

わざわざそれを口にするのが億劫でした。こんなふうに出さなくなたって、何があるうとも私たちはこの生活を続けざるをえないわけで……。

ところが柴門さんは全くデリカシーのないことを言ってくるのです……

「どーするのぉ……………私とこんなこと続けてちゃ、巫彩さんと付き合えないよ？」

「柴門さん、私が巫彩さんに対していただく感情は、少なくとも恋愛感情ではありません。もちろん柴門さん、貴女に対していただく感情も、恋愛感情とは違いますが。そもそも、恋愛って何です？」

「そうなのです。私は今の今まで、恋愛というものに全く縁がないどころか、恋というものを小馬鹿にして生きてきたのです。しかし、それとも、ずっといだいてきた私のこの柴門さんに対する想いこそが、恋愛感情なのでしょうか……」。

柴門さんは不満そうに私を手で突き放すようにして立ち上がらせ、自らも憂鬱に起き上がりました。

「ねえ真紗耶、私たちって何？」

「何って……？」

「私たちの関係よ。長く付き合いたしデートもしないから《恋人》じゃないでしょ？　かといって、こんな　ブ　ツ　を撮ってるわけだから、ただの《友達》とも《幼馴染》ともいえない。それから、血が繋がってないし結婚もしてないから《家族》とも違う。でも、ただの《仕事仲間》にしちゃ、お互い骨の髄まで知り尽くしちゃってるし……」

……………恐らく、巫彩さんの登場が柴門さんを混乱させているのでしょう。これは少し話し合ったほうが良さそうだと思います、私は少し改まったふうに変えました。

「柴門さん……………愛だの恋だのの下らなさは、貴女が一番よく知ってるじゃないですか」

それを言われると柴門さん、喜劇のごとく地面にふんぞり返ります。

「あーそうだった！　私には昔、常に付き合ってる男が居た時期があったんだったわねー。本当、愛だの恋だのは下らないよ。恋焦がれて、愛に燃えて、それでもって最後はカスになる、それだけ。け

どさ、けど、不意、と立ち止まって、《私たちって何なんだろう》
って考えたら、もうワケ分かんなくなっちゃって……」

私は冗談を言おうとして微笑んだ後、

「では、籍を入れますか？ 性転換したとはいえ、私は戸籍上は男性です」

と口にする、自分が意外にも真面目に柴門さんの顔を見下ろして、慈しむようにその言葉を呟いたことに自分で驚きました。これには柴門さんも少し凍りつきます。

「あ……あ？ ……で、でも、それに何の意味がある？ 私たちが《夫婦》になる理由、どこにあるかなあ？ 結婚しようがしまいが、私たちは今のこの生きかたしか出来ない。そうすると本当に《書類の上だけの夫婦》になっちゃう」

「だって、ハッキリさせたいんでしょう？ 私たちの関係を」

「いやいや、別に私たちの関係を発展させたいわけじゃないの。だから、いいんだけどねー別に。じゃあ、売りに行こっか？」

実に明るい立ち上がりかたをする柴門さんに、私は呪いと怨念に満ち満ちた眼光を放ちました。

「柴門さん、今の私は、貴女が居るからこうして心を壊さずに生きていられるんです。何か私に不満があれば仰って下さいな。私が気に入らないからといって、いきなり私を見限ったりしたら殺しますよ……？」

後姿の柴門さんが振り向くと、そこには怒りに燃えし女怪の顔がありました。

「たわけたことぬかしてんじゃないよ！ 私だってねえ！ あんたに見捨てられたら、もうあの校舎の跡に籠ったまんま餓死するしかないのよ！？ あんたが巫彩さんに会って聞いて、私がどれほど不安だったか解る！？ 必死で私が不安を隠して明るく振舞ってた気持ちがかんないかよ！？ どんだけ極楽なの、あんたは！？」

砂漠の廃墟ドムドーラのごとく、乾いた風に晒され朽ちゆくこの地帯に、女怪二人の罵声が虚しく響きます。

たったこれだけの短いやりとりの内に、《裏切る》《蔑ろ》《殺す》《餓死》《不安》……こんなにも数多くの不穏な言葉が顔を出すのです。

いつからでしょう？　こんなふうに、私たちが女怪になってしまったのは……。私は自問自答を始めます。

最初から？　出逢った時点で既に、私たちは女怪になってしまったのでしょうか？　いいえ、いいえ、少なくとも、柴門さんが《恋》というものに目覚める前は、私たちは女怪どころか、逆に誰よりも純粋な二人だった……。今思えば、あの頃が一番、幸せだったのかもしれません。

では、柴門さんが《あの事件》を起こしてから？　いいえ、いいえ、あの事件は柴門さんだけの問題ではなく、私が裏で手を引いて

私が女怪と化して　あんなことをした原因は……何あろう、木泊さんの自殺未遂です。

するとやはり、諸悪の根源は首田宗志教！

私はモーツアルトのイ短調ソナタよろしく《疾駆する悲しみ》にとらわれ、柴門さんの腕を鷲掴みにしました。

「柴門さん、来て！」

「でも販売しないと！」

「これでどうですか！？　今日一日くらいサボって何が悪いんです！？」

私は柴門さんに万札を幾枚か手渡しました。

「な、なにこの金！」

「柴門さん、私は分け前を完全に使ってしまったわ、五分の四ほどは溜めておいているのです」

「あんたはいいよね！　稼いだ金を溜める余裕があんだからさっ！」
憎まれ口を叩く柴門さんが私の業火に油を注ぎ、その腕を引く力

を強めます。

「とにかく来て！」

「ちよつとちよつと……」

放課後。今日は紗那も眞子も部活が休みだったから、三人して朱音が練習を行なう音楽室へと赴いていた。

《お堅い》女学校だけあって、それなりに育ちの良い娘たちの息吹が満ちたす純白の校舎。茜色の空気に染まるこの時間はことさら、色づきだす乙女たちの息吹が艶めかしく輝く。

そして音楽室が近づくにつれ、その清楚で秘密めいた息吹をそのまま音にしたような聖歌が、その音量を大きくしてゆく。

マツシユータスの合唱部は時々協会なんか招かれるくらい水準が高いらしい。確かにこうやって聴いていても、子供の合唱特有の小便臭さが皆無なだけで凄いと思うし、ときには大人の女を凌ぐような色気さえも感じさせる。

取り上げる曲目にしても、日本特有のせせこましい教育臭プンプンな合唱曲はやらず、グレゴリオ聖歌とか、ルネッサンスやクラシックの合唱曲から歌いやすいものを選んでいるとか。

それだけに、英語やラテン語なんかを通り一遍は覚えなきゃいけないわけで、それが甚だ大変だって、朱音がよくこぼしている。

いっぽう眞子は、どこかソワソワして落ち着かない様子。

「あーあ。こういうの聴くと心の臓しんぞうが痛むんだよなあ。奨学金制度に目えつけて入った口としては……育ちの違いが身に沁みてね」

そうそう。眞子は女手一つで自分を育てるイルームマスターを喜ばせようと、せっせと勉強に励んだという。結果、お嬢様でもないのにこの学園に入ることができたとか。

また、紗那は単純に歌に聴き惚れている。

「そんな難しいこと考えなくたっていいよ。私なんて親が世間体のために、こんないい学校に入れたようなものなんだから」

親が世間体のために。それはあたしも同じことだった。

正直、幼稚園・小学校と、女ガキ大将だったあたしが、こんな《お堅い》学校でやっていけるのか不安だったけど、いざ入ってみたらここは意外とインテリメートな空間で。

《いかにも》なお嬢様がそんなに居ないほか、逆にみんながみんな育ちがいいことで、下らん流行や不毛な馴れ合いがなくて、爽やかな学園生活を送れることにすがすがしい驚きを感じた。

「じゃあ、今日はこの辺にしましょう。皆さんお疲れ様」

たおやかな雰囲気顧問教師が、タクトを置いて声をかける。

すると、昨日あたしがした提案を早速律儀に実践しようと、朱音が消極的に手を上げた。

「先生……あの」

「狭山さん、なにか？」

「そのピアノを、弾かせてもらえませんか？」

音楽室の隅にあるグランドピアノを指差す朱音。

「貴女ピアノ弾けるの？」

「私は……、自分の腕なんて趣味の範囲だっと思っていて……、でも昨日、友達が私のピアノを褒めてくれたんです……。だから一度、先生に聴いてもらいたくて……」

顧問教師はピアノの前へ移動すると、蓋を開ける。

「いいわよ。……ああ、他のみんなは帰ってもいいわ」

とは言うものの、少女たちは一人として帰るそぶりを見せなかった。その代わり……

「狭山さんに友達なんて居たんだ？ ふふふ」

そんなからかいを口火に、軽いさざめきが起る。やっぱり朱音は部活に於いても、相当地味な存在だったらしい。

ピアノへ移動する朱音が、ぎりつと一同を《心の中で睨む》のが、あたしにだけは伝わってきた。

ピアノの前に座ろうとして、ドアのほうを向くと、朱音はあたしたちがドアの窓から覗いていることに気づく。

その瞬間、あたしは朱音に烈しい眼光を送りつつ、首を横に振った。

そんな心で弾いちゃダメよ！ と、そんな想いを込めて。

「……………」

それが伝わったのか、朱音はピアノの前に座ると深く目を閉じ、祈るように瞑想した。

そして女神が目覚めるようにゆっくりと目蓋を上げると、またあのこの世とは思えない調べが音楽室を満たしだす。

曲はいつもと同じ、アルフレート・シュニトケのピアノ・ソナタ第二番。

イルムマスターの《シュニトケの二番》という言葉が気になって今朝ネットで調べてみたら、これは僅か十八年前（一九九一年）に生み出された音楽で、海外amazonで試聴したところ、朱音がいつも弾いているのはその第一楽章だということが判った。

同時にシュニトケ晩年の作品であること、それから彼が妻のイリーナに贈った作品であることも知った。

「綺麗なんだか不気味なんだか……ねえ」

「やっぱり寒気がするよお……………」

眞子と紗那はやっぱりこの曲に戸惑いを見せる。そうそう、イルムの森で朱音がピアノを弾くのを、あのとき彼女たちは店の外から聴いていたという。

七分ほど、ただ朱音のピアノの音が響くだけの時間が続いた後、ふつと音が途切れる（現代音楽らしいハンパな終わり方！）と、音楽室を満たすのはただ拍手。

顧問の教師は放心したように聴き入っていたけれど、拍手によって目を覚ますと朱音の元へ駆け寄って行った。

「狭山さん！ 貴女、才能あるわよ！」

「そうでしょうか……………」

この喝采の渦においても、朱音はいつものポーカーフェイス。…まあ、これじゃ学校で浮いてしまっても仕方ない。

「ええ。……そうだわ。うちは今まで、無伴奏をモットーにやってきたけど、これほどのピアノに合わせれば、それなりの芸術品が生まれそう。狭山さん！ 貴女、我が合唱部の部員兼ピアノ担当になつてくれないかしら？」

「私…… 小学校の頃は聖歌隊でオルガンを弾いてました。でも、それは和音をベタベタ弾くだけの作業で……。ピアノの腕はどうか……」

「だから、その腕が確かなことが今、ここで証明されたの。それとも私の耳では不満かしら？」

「いいえ！ 先生がピアノリストとして、どのくらいの活躍をしているかは、私も知っていますし……」

すると、部員たちも「やってみたら？」とか、「またとないチャンスかもよ」なんて朱音に声をかけだす。

朱音の緩やかな台形を描く瞳がほんの少し潤んだかと思うと、その華奢な体はきつぱりとそこに居る全員に頭を下げていた。

「……よろしく願います」

見守るあたしたちは三人で抱きしめ合つて喜んだ。ただし、場所が場所だけに声は出さずに。

そのとき、まるで水を差すように、あたしのケータイがスカートのポケットでブルブル震えた。あたしは基本、放課後になるとすぐケータイの電源を入れている。

「ったく……」

開いてみると、それは真紗耶さんからのメッセージ。

「ミサエ、さよなら。私はやっぱり…… ソッチへは行けない。ごめん、なんだか眠くなってきた」

これは…… 《真紗耶さん》というより、《真紗耶》の言葉だった。はしゃぐ紗那と眞子。歓声に沸く音楽室。そのそばであたしは、一人凍りついてしまう。

さよなら

なんて、どうして突然別れの言葉が出てくるの！？
ソッチ

っていうのはつまり　このこと？　この、朱音の才能が開花して、それが認められた感激に満ちる音楽室のこと？　友達の幸せを心から喜んで、抱きしめ合って喜ぶ三人組のこと？

というか、メールを送ってきた真紗耶にあたしたちの状況が分かるわけではないんだけど、あまりにも

あまりにも、一人寂しくあたしにこんなメールを送ってくる真紗耶と、新鮮な喜びに沸くこの場所の温度差が凄まじすぎて、あたしは笑うことを止められてしまった。

そう……そう。いつもいつも、この人のメールは長文だった。《これこれこういうことがあって、こういうことがあるから、こんなんです》なんて、順を追って丁寧に文章を組み立てるのが、あたしの知ってる《真紗耶さん》のメール。

ところが、これは何？　ボソツと、まるで《真紗耶》に戻ったみたいに、自分の心うちをあたしに……。

おまけに、

眠くなってきた

これはどういうこと！？　まさか……まさかこの人、木泊兄さんと同じことを！？

あたしは戦慄した。兄さんの心の闇が再発しないかって心配し続けて、それで真紗耶さんと会うことにしたあたし。

けど当の木泊兄さんは意外とのほほんと暮らしていて、ヤバいのは真紗耶さんのほうだった……ということ！？

いてもたってもいられなくなったあたし。

「紗那！　眞子！　朱音をお願い！」

とだけ言つと、早足ですたすと長い廊下を歩き出す。

なにやら紗那と眞子が話しているけど、構わなかった。

「あー、巫彩ったらまたカレシからお呼びがかかったんだあ」

「ちょっとちょっと、どう見たってそんな雰囲気じゃないでしょうが！」

「もう、あのマジメ顔は恋に燃える女の顔よ。あーああ、私の彼もあんなふうに」

「カレカレカレカレうるさいんだよ！　いつもいつも！」

眞子が紗那の言葉を遮って怒鳴るのが聞こえたけど、あたしはそのまま廊下の角を曲がってゆく。

気づけばあたしは江ノ電の中。そうだ。横浜に着くまでに、電車内でDVDのことを調べてしまおう、と思った。ラッシュアワーの時間には程遠いから乗客も少ないし、いいでしょう。

な、何が起ったと……ここは一体……私は木の床に正座し、椅子に座った女性の膝に肩から上をゆだねて眠っていたようなのです。膝から離れ、女性の顔を見上げると、そこには柴門さんのようにいて、少し今の柴門さんとは違うような気もする女性が……

私の頭を膝に乗せたまま何かをこしらえていたらしい柴門さんは、テーブルに一旦それを置き、私の頭に手を乗せて慈しむように目を閉じました。

「おはよう真紗耶。目が覚めた？ 長いうたた寝だったわね……」
そう！ この感じは、《あの事件》が起こる前……

いえ、いえ、それよりもっと前……恋に染まる前の幼い柴門さんです。その純真さのまま、年齢だけは今の姿になっており……その透明な美しさたるや、母の蓉子さんすら色褪せて見えるほど。

「あの、柴門さん……？」

「ちよつと真紗耶、なにヨソヨソしい呼び方してるのよ……」

柴門さんに訝しがられ、ふと近くに置かれた棚のガラスを見てみると……

なんと、性転換する前の、《男とも女ともつかぬ女の格好をした若者》としての私が映っておりました！ 思えば、柴門さんはこの姿を酷く気に入っておられたのです。

けれども、次第に髭が多くなり始め、顔つきもゴツゴツしてくると、私は気が狂い、その解決策として性転換に至ったのでありました。しかし今ガラスに映っているのは、髭が生え始めるよりずっと前の、高らかな美しさを持った私でした。

「やだ！ 私、男に戻ってしまったのですか？」

とりあえず慌てる私に、柴門さんはとんでもない返事を……

「馬鹿じゃないの？ あんたは女の子でしょ。それとも真紗耶、性転換して男にでもなりたいの？ ふふふふふ」

本当に明るく、優しく、そして微塵の諧謔性も見せずに笑う柴門さん。長年の苦しみが溶けていく想いでした。

私は、告汙匄になる前のボソツとした口調に戻ります。

「おしほ、あの事件の心の傷、完全に癒えたんだ？」

「ちよつとちよつと、事件ってなにお（；^ ^）事件って。おい！ 目を覚ませー！」

私の頭を両手でグリグリする柴門さん。

夢！？ 今までのあの、私と柴門さんの呪われし青春は全て夢だったと！？

ふと、時計を確認すると、時刻はもう昼！

「おしほ、早くDVD、売りに行かないと……」

「あーもう！ その年でボケ！？ 私らが売ってるのはDVDじゃなくって造花よ？ ほら、あんたが寝てる間にもこんなにこしらえたんだからっ！」

改めてテーブルを見てみると、そこには見事なプラスチック造花の数々……柴門さんの好きな、《ありえない形の花》が並んでおります。

「おしほ……」

「ほら、売りにいくお（^ ^）」立ち上がる柴門さん。

よく見渡せば、ここは見覚えのあるレトロな木造校舎……窓の外は、少なくとも日本ではありません。のどかな田園風景が広がっており、土と木と海の匂いを乗せた懐かしい風がこの建物中を満たしております。

「おしほ、ここって……」

「相当、重症みたいね。ここは私たちのお家よ。ほら、お花を見ながら街まで歩けば嫌な夢のことなんか完全に忘れちゃうって！ 行こう？」

「ワタシ、お花見、嫌い。人いっぱい、居るから……」

「ちよつとちよつと、お花見つてなによ、お花見つて。街の行事？　いつも二人で造花製作の参考に、お花を見に出かけてるでしよう？」

あまりにも、優しく、温かく、平穩で、ちよつぴり儚げな、そんな私たちの生活。そうだった。私は柴門さんと籍を入れ、山奥に在ったこの校舎跡で暮らし始めていたのです。

おかしい夢のせいで、危うく記憶すら失うところ。

……長い、本当に長い夢でした。復讐、殺人、転落、そして行き着いたところが、追っ手に怯えながら如何わしいDVDを販売するという生活。どうして私はこんな夢を見てしまったのでしょうか？

「おしほっ！　あぁっ！　おしほおしほおしほ！」

私は跪き、柴門さんの胸に縋りつきました。草花の息吹を宿したようなその温もり。涙が止まりません。柴門さんは少し首を傾げながらも、ひとと私を抱きしめ返してくれました。

「大丈夫だから。ね？　私たちの生活、誰にも邪魔は出来ないから。……そもそも、こんな山奥に人なんか来ないし　何があっても、一緒に守ろう？　二人の国を」

「うん……」

黙ってそのまましていると、木々のそよぐ音と、柴門さんの生命の鼓動しか耳には入ってきません。この平安を邪魔する存在など何もないと思うと、悲しいまでに幸福でした。そんな優しい沈黙を、柴門さんの笑い声が遮ります。

「ははははは！　ほら、メソメソしないっ！　売りに行くよーっ！」
私から離れ、表へ出ようとする柴門さんをウツカリ引き止めてしまします。

「おしほ、ダメ。サングラス、かけないまま外出したら、追っ手が……」

すると柴門さんは私を強引に跪かせ、私の両頬を手で包んで女神様のように見下ろし、そして……

「よっぽど怖い夢だったのね？　可哀想に……。お姫様のkiss

で目を覚ませ……ちゅっ……」

【Masaya's viewpoint】いのちの叫び

「起きろ……ちゅっ！」

「お、おしほ、なにをするの？ 急に……」

「きえーっ、真紗耶ーっ！ どうしたの？ 私のこと《おしほ》なんて呼ぶの何年ぶり！？」

怯えるように私を突き飛ばし、自らも砂利の上で恐れおののく柴門さん。

ここは房総半島・南半部に存在する溪谷。房総半島は低い山や丘陵の連なりからなる土地。

休耕した田んぼの脇から湧水が流れ込み、あたかも尾瀬のような湿地帯を形成しています。私と柴門さんは靴にヒル除けを塗り、草深い山々をかき分けここまで来ました。

しばらくおののき合った後、元に座っていた岩に再び腰かけ直す私たち。歩きたび、ピチャピチャと水遊びをするような音がします。鬱蒼とした木々を纏いし低い丘に四方を囲まれ、地面よりも水溜りのほうが多くを占めるこの地点。普段は春の湿気の溜まり場なのでしょうけれど、今日は珍しく北からの空気が訪れたためか、春の光を宿した水面を爽やかな微風が煌くように流れてゆきます。

「寝ちゃってたんだ……」おっと、告返匐に戻らなければ。「あ、眠ってしまったんですね私」

「そーよ！ 《疲れましたあ》なんて言っちゃってさ！ 巫彩ちゃんにメール送ったかと思ったら、一時間も寝てやんの！ だから言わんこっちゃない！ もっと他にいい場所なかったん！？」

柴門さんは手近な石を、巨大な水溜りに小島のごとく点在する地面に命中させて楽しんでおります。比較的大きな小島に命中したところで、私は柴門さんに頭を下げました。

「ごめんなさい……。でも、ここしか思いつかなかったんです。《廃墟以外で私たちが羽根を伸ばせる場所》って」

「んー……。確かに、誰にも邪魔されなくって、しかも日帰りできるような場所っていえば、そりゃ限られてるけどさあー」

柴門さんの石投げゲームは次第に難易度を上げ、今度は中くらいの小島に、……。命中！ 小島に生えた草がフサツと鳴り、名も知らぬ昆虫が逃げてゆきます。

「でもほら、ここなら追っ手が来てしまう可能性は極めて低いですよ？」

《追っ手》というワードを出せば、

よっぽど怖い夢だったのね？ 可哀想に……

などと言ってくれるのではと期待したものの、柴門さんは最も狭い小島を狙って見事に外した後、首を縦に振りました。

「まあ、ね。わざわざヒル除け塗らないと血だるまになるし、特に絶景ってワケでもないから人も居らんし、……。こんな所に、あんなDVDを食ってる連中が来るわけないって寸法か」

「そうなんです。東京や、東京を囲む県なら、日帰りは出来るでしょうけど、どこも観光地みたいな場所になってしまつて、それに、山へ入るとなると日帰りは無理ですし。というか、ここしか知らなかっただけですけど」

「ねー真紗耶、私たち、被害妄想に囚われてるのかなあ？ 追っ手なんて、ホントはそんなに居ないんじゃない？」

サングラスをして歩いてしまえば、誰にも追われることのない私たち。

よって私たちはときに、《自分たちが被害妄想にとらわれているのではないかという妄想》に陥ることがあります。が、つい昨日にそれが《二重の妄想》であることが証明されてしまったわけで……。いいえいいえ！ ちょうど昨日！ 巫彩さんとSweet Seasonに居たとき、休業中の札に気づかないで入ってきた男が、私のことに気づいて。……。サングラスをかけ忘れてたんですよッ

カリ。そしたら早速擦り寄ってきましたよ」

柴門さんは手を止め、私に戦慄の視線を送りました。

「で、どうした!？」

「巫彩さんが懲らしめてくれましたよ」

それを聞くと柴門さん、もう手当たり次第に石を最も狭い小島に向かつて連投しました。それでも一度も当たらないと、自らが水飛沫をあげながらその小島へ走り行き、その上に仁王立ちをして見せました。そして手でメガホンをこしらえ、大空に向かつて叫びます。

「だああーっ! 私の名前はなあ! 前科者でも少女Aでもないのよお! 私にはなあ! 柴門志穂っていう立派な名前があんだあーっ! 私は生きてんだよーっ! 人間なんだよーっ! 分かってんのか(。。(ゴルアーっ!!)」

その姿を岩に座ったまま見つめていた私は、ただただ哀しくて泣いておりましたが、やがて無性にいてもたってもいられなくなり、柴門さんの隣の小島へ駆けて行き、同じように手でメガホンをこしらえ、山の上めがけて叫びます。

「河東真紗耶! 私は、生きていまーす! 身分証明もない! 肩書きもない! けどーっ! 母に貰った真紗耶の名! この他に何が必要だというんですかあーっ! 私は! ここにある木々や! 水や! 草花と同じに! 生きていまあーすっ!」

そんな私に、柴門さんは目蓋をびしょびしょに塗らしたまま笑顔を見せてくれました。

《生きている》と叫ばなければ生きている実感が湧かず、《私は人間だ》と叫ばなければ自分がヒト科であることすら忘れてしまいうる私たち。

嗚呼それでも、ケータイで恋の四方山話を語り合う若者たちよりは、こうして大袈裟に叫び合える私たちの魂のほろが輝いていると、強く、強く、そう信じたい私たちだったのです。

「また、来ようね、ここ。今度は、もっと明るい気分のときにさ」
「そうですね……」

隣り合う小島に立った私たちは、何気なく、そう約束したのでした。

それから二人は、とぼとぼと元来た道を戻りました。

「何だか、足取りが軽くなってますよ柴門さん」

「あんたこそ……」

と、そんな会話を交わしながら。

サングラスをかけて街に戻り、やがて総武本線の音が聞こえてくると、私はふと、あることに気づきました。

「ねえ柴門さん、」ここで腕時計を確認。「まだ夕方ですね。今日も、Sweet Seasonに行ってみませんか？」

「ん、なんで？」

「私ね、先週末、巫彩さんに 来週は毎日Sweet Season付近をうろついている という趣旨のメールを送ったんですよ。そして昨日、実際にお会いして以降は、さっき一度しかメールしていないので、もしかしたら……」

「なるほど。今日も御出でなすってる可能性がゼロではないってことか」

「そうなんです」

と、そこで、『ドラゴンクエスト?』のエレジーが流れ出しました。アツテムト鉱山で流れる絶望的な旋律。

「真紗耶……あんた、なんつー曲、着メロにしてんのよ……」

「は、ははは。……（？）もしもし、あ、お母様？」

電話の相手は禰里であり、《相談したいことがあるから出来るだけ早く帰って欲しい》とのことでした。私がそれを柴門さんに話すと、彼女はドンッと胸に手を当てました。

「しょうがない。私が一人で行ってやるさ」

「よろしいんですか？」

「あんたは鎌倉の外れ在住。私は横浜の外れ在住なんだから。私が行ったほうが合理的でしょ？ それに……」

柴門さんは私が渡した万札の入ったバッグを軽く叩きます。

「それに、これのお礼よ。おかげで今日は何年かぶりにのんびりできたわ」

この程度で のんびりできた とは……柴門さんがどれだけ追いつめられた生活を送っておられるかが痛切に伝わってくる発言です。私は柴門さんに深く深く頭を下げました。

「柴門さん、よろしくお願いいたします。そして……どうか今日もご無事で……」

「はいはい、じゃあね」

こうして私たちは別れました。いつものように。そう。明日また会う約束など、することもなく。

さて、私は無意識の内に公衆トイレへ急ぐと、わけもなく《あの女性》の姿に変装しました。

そう、いつもDVDを販売する際に変装する、あの紅茶色の髪をした香上理奈子という女性です。

「えへへへ、志穂ちゃんってホント優しいなあ……。私の代わりにSweet Seasonまで行ってくれるなんて」

鏡の中で微笑む告汙匐でない私 やはり心が明るくなります。

《あれほど色々な事》があつては、私はもう、このような純粋な人間にはなれぬでしょう。けれども姿だけでもこの優しく純真な少女になると、心に溜まっていた毒素が放出される想いがします。

昨日は巫彩さんと会ったため、そして今日は販売をしなかったために、この姿になる機会がなかったので、いまこの機会を利用して変装しようと思ったのです。

そして、この姿のまま家へ帰り、

「お母さん、ただいまー」などと甘い声で挨拶しました。

頭を押さえながらフラフラと玄関へ歩いてくる母。

「おかえり。あら、今日は そ っ ち の姿？」

と、この姿だと母は異様に素っ気なくなります。それは恐らく、告汙匐が元の私の面影を残しているのに対し、理奈子さんの姿はあまりにも元の私とかけ離れているからでしょう。

私は母にすら、先日巫彩さんに見せた本来の姿を晒しておりません。

プチ整形が済んだ後、既に告汙匐の姿となって母の前に現れた私《プチ整形の効果があまりにも大きかった》と事情を説明し、以来、私は柴門さんの前だけでなく、母の前ですら、告汙匐か、あるいは理奈子さんの姿しか見せていないのです。

それは、巫彩さんに説明した、この人生をパロディ感覚で送るため……という理由だけでなく、姿が変われば、ともすれば泥沼化しかねない母や柴門さんとの関係に、常にある種の客観性を生じさせることができる考えたからでもあります。

「うん で、話って、なにかな」

普通ならばここで、中に入るように促し、お茶を入れてから話すでしょうが、それはドラマの中だけの話なのではないでしょうか？ 重大な話というのは、《今から私は重大な話をします》と宣言してから始めるものではない、と。

というわけで、母はその場に崩れ込みました。

「私、なんだか疲れちゃった」

「お人形、こしらえるのが？」

私の問いに、母はコックリと頷きます。

「うん。考えてもみて。朝から晩まで、何も考えずに機械みたいに人形制作よ？ 頭脳を使う作業なら耐えられるけど、人形ってほらほとんど何も考えなくてもこしらえられてしまうから。私の脳、退化してる気がする。本を読む暇もないのよ」

「そっかあ、元々は趣味だった人形制作を、ビジネスにしちゃったのがいけなかったのかもね。時々休んで、本でも読んでたら、どう

かなあ？」

「そうしたいけど、本を読む暇があつたらもつと人形こしらえたい
つて思つちゃつて結局……」

すると私の脳裏にはある案が。

「ねえ、志穂ちゃん、雇つてみない？ 志穂ちゃんはね、昔、造花
をこしらえるのが上手だつたんだよ？ だからきつとお人形だつて

……」

私の淡い希望を、母の哀しくシビアな声が遮りました。

「この家でアルバイトする儲けなんて、たかがしれてるわよ？ そ
れじゃあ志穂ちゃん、だめでしょう？」

「あ……そうだった」

そうなのです。柴門さんは《前科者》としてどこへ行つても雇つ
てもらえず、かといって、《儲けこそ薄いけれど人を選ばない職業
》に落ち着くことも許されていないのです。柴門さんの前科を知つ
ている者が客として現れたらそれで終わりであるゆえ。

とすると、常に儲けの荒いあのDVD販売しか、今は生きる方法
がないのです。

「真紗耶と志穂ちゃんが、あんな物を売って生きてるって聞いた時
は、真紗耶を一生、家に閉じ込めてでも辞めさせようって思った。
でも、《志穂ちゃんの事情》を知つたらとても……」

そう。母は知っています。何もかも。

それでも柴門さんへの同情ゆえ、あのDVD業を許している、と、
本人は言っています。

……が、私はそうではないと思うのです。恐らく母は、私を自由
に泳がせておくことで、逆に私の自分への愛情をやつれたものにし
ないようになしようと策略しているのだと、そう確信しています。

身体カラダだけの女なんて怖くないわっ！

怖くないどころか、この母は柴門さんを、食品に入っているよう
な防腐剤として利用しているのでは……と。

「……………」

シユンとなつた私を、母は俯いたまま目だけを上へ動かし、決然たる眼光を送りました。

「真紗耶、アナタがウチで雇う人、見つけて来なさい」

「え、私があ！？」

「そうよ。下手に私が見つけてきて、変に嫉妬されたら嫌なもの……。いつまでに、とは言わないから」

そうそう、私は告洵匐に匹敵するほど粘着質であると同時に、オセロ王に匹敵するほど嫉妬深くもあるのです。私は、はにかみながらもペコツと頭を下げました。

「うー……わかったよお」

【Shiho's viewpoint】女怪の火花（前書き）

うん、イマイチ迫力不足ですね。

もっと、内館牧子女史みたいな、ドロドロした女のバトルが描けるようになりたいです。

でも、巫彩と志穂のバトルが物語のメインというわけではないので、まあ大目に見ていただけると嬉しいかと。

【Shiho's viewpoint】女怪の火花

真紗耶から貰った札束が重い。私はこの間ゲーセンで摩ってしまい、酷い目に遭った。今日はSweet Seasonの様子を見たら真っ直ぐに帰らなければ。

北からの空気に支配された日には夕焼けがなく、あの橋が見えてくる頃には、空は深海のごとき濃い水色を描いていた。こんなにも澄んだ夕暮れを秋以外に見るのは久しぶりである。

橋の前に着くと、角つののようなツインテールを頭に飾り、鬼のような情緒を宿した少女の影が見えた。

そして次の瞬間！ 橋と、橋の下のお店が一斉にライトアップされ、少女の姿が明らかになる。

誰あるう、中里巫彩であった。

点灯したのは、橋の柵を飾る丸い電灯、店へ下りる階段の始まりに付けられたアーチを飾るネオン、そして店自体の細長いネオンだけれど、最も目を惹くのは、一階の店のネオン上部で天の川のごとく煌く、四階から垂らされた網に付された無数の電球だろう。

巫彩さんは突然目前に広がった、この早春のクリスマスともいふべき美しい情景に一瞬だけ感動の色を見せたけれど、私を見つけると何か威圧的な視線をぶつけてきた。

とりあえず歩み寄り、挨拶するしかない。

「巫彩さん、こんばんわ。今日も真紗耶に何か用？」

「ええ……来たのは、貴女だけ？」

意外にも昨日と同じフツーな態度。私は少し脱力した。

「うん。そうだけど。何か真紗耶に伝えたい事でもあるなら私が代わりに……」

と、そこまで言ったところで、巫彩さんは私のほうへ一步、踏み出した。

「貴女だけのほうが良かったわ。突然だけど志穂さん、たった今、貴女たちがどんなDVDを売って生きてるのか、それで、そのDVDがネットでどれだけウケているのかも、全部調べてきたわ」

「あつそう」

「それでね志穂さん、真紗耶さんが貴女とDVDを売る人生から抜け出したいと思ってる限り、あたしは貴女たちの関係を許すわけにはいかないから」

……これはまた実に単刀直入に切り出したものだ。この年齢の娘なら普通、こんなことはモジモジして言えない筈。そのことに敬意を感じつつも、私は厳しく切り返す。

「真紗耶はね、今日、私に、はつきりと、自分の巫彩さんに対する想いは少なくとも恋愛感情ではないって、そう明言したわ」

「なら訊くけど、真紗耶の貴女に対する想いは恋愛感情なの？」

答えられない　けれども無性に腹が立ってきた！

「ちよつと！　なに呼び捨てにしてんのよ！？　貴女が私たちの前に現れたのは昨日よ　昨日　！　突然割り込んできた貴女に、私たちの何が解るっていうの！？　あ！？」

私がどんなに激しても、この小娘は微動だにせず私を真つ直ぐ睨んでいた。

「解るわよ。昨日、真紗耶さんがあたしに何て言ったと思う？」

地上から離れたいって、そう言ったのよ！」

「そんなのただの気まぐ」　「志穂さん！」

私の抵抗を呆気なく遮断する巫彩！

「志穂さん、人の話は最後まで聞いて。真紗耶は自分と母親意外とはまともに口を利いたこともないって、貴女言ったわよね？」

「……ああ、言ったよ」

「確かにあたしは真紗耶には昨日の一回しか会ったことがない。でもね！　真紗耶にとってその一回は、すごく特別なものだったのよ、

きつと。ふらふらーって、虫みたいに外から飛来してきたあたしに希望を感じて、それで助けを求めてこんなメールを送ってきたのよ！ あたし、そんな真紗耶の気持ちगतまんないの！」

あたしにケータイを突きつける巫彩。そこには……

「ミサエ、さよなら。私はやっぱり……ソッチへは行けない。ごめん、なんだか眠くなってきた」

整形して女性ホルモンを飲み始める前の、中性的な魅力を持っていた頃の真紗耶の言葉があった。そう、私を《おしほ》なんて呼んでいた頃の。

しばしの沈黙。

このメールは……、あの湿地帯で眠りにつく前の真紗耶が書いたことになる。呑気に居眠りしようとするその裏で、こんな意味深なメールを巫彩に送っていたなんて……。

これは、どう受け取ればいいというの？

見ようによつては、私への想いを再確認したゆえ、巫彩に別れを告げているようにも思えるし、逆に巫彩の居るソッチとやらに行きたいと、子供のように駄々をこねているようにも見えてしまう。私は前者の意味を持つメールであつてほしいし、さっき二人であんな《いのちの叫び》をした身としては、そうとしか思えない。けれども巫彩は当然、このメールが後者の意味を持っていると解釈しているわけで。

あたしが戦慄しているのをいいことに、巫彩はなおも私を追い詰めてくる。それも、汚らしく罵倒してくるならまだ良かった。なぜなら、慣れているから。

ところがこの女ときたら、普段はじゃじゃ馬なクセに、今ばかりはまるで有能なカウンセラーみたいに、淡々と冷静に私と真紗耶の闇に切り込んでくる……

「AV女優や風俗嬢なんかとはワケが違うのよ。だって貴女たちの

場合、相手が決まってるんだから。真紗耶はきつと、貴女との深すぎる関係に、身動きできなくなってるのよ。だって、生活と貴女との関係とが直結してるんだもの」

私は背筋の辺りがムズムズと刺激されるのを感じた。

「ってそれって私への嫌味！？ 私は真紗耶の身体しか知らないとしても！？」

「違う？ 少なくとも今は、そうなっちゃってるんじゃないの！？」

試すように訊き返してくる巫彩。

なんとという恐ろしい女！ 私の口調はいよいよ内的な狂気を帯びてきた。

「……巫彩さんよ、どうやら貴女には本当の事を語らなければならぬようなねえ。真紗耶は女性ホルモンの副作用で情緒不安定でね。ときどき赤ん坊が夜鳴きするみたいに、悲しくなると突発的に私にしがみついてくるのよ？ そのたびそのたびに、私は真紗耶をあやしてるの。貴女にその芸当が出来る？ 真紗耶は精神病患者同然なのよ」

「真紗耶が精神病なら、木泊兄さんだって、それから朱音っていうあたしの友達だって、精神病ってことになっちゃうわよ……そうでしょ？」

そして真紗耶と木泊さんが精神病なら、私や果音も精神病ということになるっ。

……私は次なる切り札を出す。

「ふう、私はね、真紗耶のお母さんと条約を結んだのよ。真紗耶を金稼ぎに利用しちゃう代わりに、真紗耶が取り乱したときは私が慰めるって」

「それが？ そのことと、あたしのことと、何の関係があるのかしら？」

「だからね、私と真紗耶の間には、そういう複雑な事情がたくさんあるの！ 中途半端な同情だけで、私たちの仲に茶々を入れること

なんて出来ないのよ！」

私がとうとう激情を露にしまうと、巫彩は厳格な自信に満ち満ちた上からの目線を送ってきた。年下の分際で……実に腹立たしい。

「言っておくけど志穂さん、これは同情なんかじゃないわ。あたし、真紗耶には幸せでいてほしいのよ」

そこまで言われると、怒りを大きく通り越して不思議な気分になつてきた。

「あんた、なにゆえそんなに真紗耶にこだわるのよ？ 今の話で判つたでしょう？ 真紗耶と付き合つたつて、貴女には微塵の利益もないのよ！？ 私には理解できない……貴女が、どうして自ら進んでこの呪いの地に分け入ろうとするのかがね！」

この言葉には微塵の誇張も含んではない。

この女は《じゃじゃ馬》ということを除けば本当に清廉潔白な娘であり、そんな女がわざわざ私と真紗耶が居るこの呪われし青春の渦中に入ろうとする、その神経が信じられなかった。

巫彩は少し表情を和らげてくる。

「あの人……木泊兄さんや朱音と同じ目をしてた……。あたし許せないのよ……純粋な人間が痛い目に遭うのが！」

そこへきて初めて、私は巫彩に《勝つた》想いがして、得意気にほくそ笑んだ。

「真紗耶が？ 純粋な人間 だつて？ はははは！ ちゃんちゃら可笑しいつたらないわ。真紗耶が私に何したか解つてるの？ あいつがどれだけ意地汚いか知つたら、あんたのほうから逃げてくわよ！ そら、逃げるなら今のうちよ？ 今なら真紗耶とのこと、綺麗な思い出として忘れられるわ」

「あの人がどれだけ意地汚いかなんて知らない……でも、あの人がい意地汚いことをするようになったのつて、女性ホルモンを飲むようになったから……違うかしら？」

これにはハツとさせられた。確かに、真紗耶があんな妖しく黒光

りする粘着質な性格になってしまったのは、女性ホルモンを飲み始めてからのことだ。

「っ……！」

「貴女のことを《おしほ》って呼んでた頃の真紗耶は、誰よりも純真で透明だった……。あたし、戻ってほしいのよ、その頃のあたしに」

「けっ！　なによ知ったような顔して！　なにが《戻ってほしい》よ！？　昔の真紗耶も知らない分際で！」

「知ってるわよ！」

「知ってるってどういうことよ！？」

「あの人あたしの前で変装を解いたのよ！」

そのとき、大きな船の雄たけびが横浜中の空気を震わせた。

《変装を解いた》その言葉を呑み込めず、顔面蒼白と化する私。

「ちょ、ちよつと……、変装を解いたってどういうことよ？」

「真紗耶はね、整形したって、貴女に嘘をついたんですって。ホントはプチ整形しただけなのよ」

「じゃあ、戻ろうとすればいつだって元の姿に戻るってこと！？」

「そうよ志穂。貴女には見せなくなつた本当の姿を、あたしには見せたのよあの人！　それでもあたしを外野だって言うの！？」

ただでさえ鋭い形のその瞳を、勇敢な自信にきらきらと輝かせて私を睨みつけてくる巫彩。

私は怖くなつて、ただただ怖くなつて、首を横に振りながら巫彩の両肩をつかんで揺さぶつた。

「出てって……私と真紗耶の世界から出てってえ！　あんたさえ……あんたさえ来なけりゃなんにも変わらなかつたものをあつ！」

私がどれだけ取り乱しても、巫彩は微動だにせず、ただそのツインテールだけを潮風に揺らしながら力強く答える……

「いいえ、出て行かないわ！」

そこまで言い切る巫彩の気持ちを量りかね、怒る力さえ失くして

その場に崩れる私。

「なんで……なんでよ……」

巫彩も少しだけ声の色を曇らせる。

「あたし、首田宗志教のホームページを見たのよ！ あたしね、日本社会のああいう感じが嫌で嫌で仕方ないの！ 例えば日本人にラダムで声かけて、首田宗志教の思想を教えたら、悔しいけど、十人中五人は《これは正論だ》って言うだろうし」

「だから……なによ？」

「木泊兄さんも、それから朱音も、そういう日本人の陰湿な気質が生み出した被害者でしょ？ それから真紗耶も。だから放っておけないのよ！ 志穂……貴女だって」

「うるさい！」私は巫彩のそばから飛ぶように逃げた。
罵られるならまだいい！ まさか巫彩の同情の矛先が私にまで向いてくるなんて！

私は、私の心の闇の発端ともいえる《ある出来事》を思い出して、それと深く関わるこのお尻を、わけもなく手で掻きむしる。

そう、何があろうとも真紗耶が絶対に触ってこない、このお尻を。

「あたしには志穂が悪い人だなんて思えない！」

うずくまった私に一步步く巫彩。私はただ、

「うるさい！」と拒絶する。

「だってそうじゃなきゃ真紗耶が貴女と一緒に生きるはずがないもの！」

「うるさい！」

「話してみなさいよ！ 志穂……貴女一体、何を抱えてるっていうの！？」

とうとう私のそばまでたどり着いた巫彩を、思い切り突き飛ばす。
「うるさいうるさいうるさい！ うるさい！ うるさいうるさい！」
「……………」

けれども巫彩を突き飛ばすどころか、像のように微動だにしない

巫彩のせいで、逆に私が跳ね飛ばされてしまう。

とうとう橋の隅まで追いやられた私は、例の階段に付されたアーチ状ネオンにしがみつき、ただ震えていた。

目のすぐ前で輝く電球が、まるである童話の少女を温めるマツチ棒のよう。

巫彩は無様な私のこの姿を見て何か感じたのか、妙に高らかな声でとんでもないことを言ってきた。

「あたしだってねえ、あの義両親が思うとおりの生き方をするつもりはないわ！　だってあの両親の思考は、首田宗志教と同じだもの！　それならいつそのこと、貴女たちの居る地獄へ堕ちたほうが幸せよ！」

その告白自体に怒りは感じなかった。……けど、今この女が放ったある一言が、私をむくつと立ち上がらせる。

バシン！　あたしは巫彩に駆け寄ると、そのツルリとした頬に平手打ちを喰らわせていた。

「地獄だって……！？　私たちの居る場所はねえ、地獄であると同時に聖域なのよ！」

「聖域……！？」

「ああそうよ！　私と真紗耶が何年も何年も、色んな者に笑われて！　馬鹿にされて！　叩かれて！　踏みにじられて！　嫌悪されて！　嘲られて！　罵られて！　蔑まれて！　痛めつけられて！　苦しめられて！　足蹴にされて！　殺されかけて！　その果てに辿り着いた聖域でもあるのよ！　気が楽　だあ！？　そんな生半可な気持ちで入ってきて欲しくないわねえ！！」

パンツ！　巫彩は殴り返してきた。果音に殴られるのとは全く違った痛み！

果音に往復ビンタを喰らうより、板で殴られるより、巫彩の小さな手で一発引っぱたかれるほうがずっと痛かった。

「言っとくけど、これは貴女の言ってることに対する反抗じゃない

から！ 年下の女に手を上げるなんていう野蛮な行為に出た貴女への教育よ！ 貴女、誰からも教えてもらえなかったんでしょ！？ 人としての最小限の礼節を」

何度も思っけれど、一方的に罵られるのには慣れている。

ところがこの女の言葉には常に、望んだことすらなかった同情が流れていて……それが無性に、私を激昂させてゆく。

「っ……！ どっちにしたってね、小娘に説教されるほど落ちぶれちゃいないわよ！」

「……………。ともかく今度、真紗耶に会って気持ちを確認させてもらうから」

「だから言っただしょうが！ 真紗耶はさっき、自分の巫彩さんに対する感情は愛だの恋だのではないって、私にそう明言したんだってば！」

熱情に囚われてゆく私をたしなめるように、巫彩は深刻な顔でため息をつく。

「ふう……貴女、真紗耶に上手く誤魔化されてるのよ」

「な、なんだって！？」

「だって可笑しいでしょ？ 《柴門さんに対する想いは恋愛感情ではない》《巫彩さんに対する想いも恋愛感情ではない》……真紗耶一流の裏技なのよ。あの人は女の姿をしているから、あたしたちは簡単に誤魔化されてしまうの！ 表面では《ビジネス》とか称してたって、心の底では志穂のことを恋愛対象として見てるかもよ！？」

「そ、それは……」

「志穂、貴女がどう思っておられるかは知らないけど、少なくともあたしは、この関係をハッキリさせたいと思ってるから」

「ああどうぞ！？ 《巫彩さん、さようなら》でジ・エンドよ！ 所詮真紗耶は私とのこの生活を捨てられないの！」

「どうしてよ！？」

「だから！ その理由なら散々喋くりまくっただでしょうが！ 喉が痛いわよ！ もうっっ！」

「確かにそうだけど、どの理由も何だか胸に響かないわ。志穂、貴女、それっぽい理由つけて色々言い逃れてるみたいだけど。ホントは、前科者だつてことでどこでも生きていけないから、真紗耶さんを利用してあんな生き方を」

「違うッ！」

「なら言いなさいよ！ 貴女たち二人があんなもの売って生きなきゃなんない理由、やっぱり他にあるんでしょ！？ なら今ここでそれを言つて！ なんなら、あたしが助けてやるわよ！」

「うっさいなあぁーっ！ 私たちは誰にも助けられたりなんかしないわよ！ 助けてもらう必要すらないのに助ける助けるってヒーロー気取りも甚だしい！」

……その一言で、巫彩は形相を変えた。

どうやら逆鱗に触れてしまったらしく、彼女の言葉には憎しみや怒りらしいものが含まれるようになる……

「貴女なんかは何が解んのよ！？ 木泊兄さんみたいな人を二度と出したくないっ……そんなあたしの気持ちが解るっていうの！？

大事な……、それも怖いくらい無垢で透明な人が、汚らしい者によつて不幸になるつらさが解る！？」

「知るか！ あんたの気持ちなんて私と真紗耶には関係のないことよ！」

「そうやって真紗耶を巻き込んでトーチカに閉じこもって、人を傷つけたり罵ったりしてばかりいる貴女には一生解らないでしょうねえ！」

言うだけ言つてブンと背を向け、勝手に去ろうとする巫彩に、殺意を込めた歩調で駆け寄る私。

「殺してやる！ 少しでも私たちの世界を荒らしたら、あんたも殺してやる！」

「その前に、あんたがあたしに殺されなければの話だけどねえ！」

巫彩は顔だけ振り向いて、また歩き出す。

「なんだってえー！？」

思い余った私は巫彩の肩を鷲掴みにした。

「なにか？　こんな所であたしを殺すつもりかしら？」

それでもなお涼しげな巫彩に対し、私は真紗耶から貰った万札をバッグから数枚出して突き出す！

「巫彩、これで真紗耶と縁を切って頂戴！」

「……………」

意外にも素直に受け取り、そのまま背を向けて橋の隅を歩き、帰る素振りを見せる巫彩。

ところが……巫彩は何の前触れもなく、左手を豪快に柵から放り出して私の大事な大事な万札を川へ投げ捨ててみせた！

イルミネーションの中、雪のように舞う万札　早春のホワイトクリスマスといったところか。

そして巫彩は一瞬だけ私に向き直り、

「いかがわしいDVDってよっぽと儲かるのね！！」

という捨て台詞を残してそそくさと去って行く。

「ただじゃおかないっ！」

一人残された私は、吐き捨てるようにそう叫ぶしかなかった。

けれどもその数十秒後のこと。実に情けない話　私は柵から身を乗り出し、札束の状態を確認していた。……あれは、取れそうもない。巫彩は私が回収できぬよう、わざと川の中央に投げ捨てたというのか？

帰り道、私はどうやって巫彩をしとめようか、そればかりを考えていた。私や真紗耶の今までの経験からいうと、人は簡単に破滅する。

そうだ、あの時にあおして使ったあの機材を使い、巫彩の入浴シーンか何かを撮影して、それを巫彩の学校にバラ撒くというのはどうだろう？　我ながら素晴らしいアイデアだ。そのためには、巫彩の家の場所を知らねばならないけれど、それも簡単な話。次に巫

彩に会ったときにも尾行すればいいのだ。色々あって私は、そういう行為には慣れている。

だがその前に、もっと簡単な方法がある。私が、私と真紗耶の過去を話すという方法だ。今、巫彩は私たちの抱える問題がどれだけ陰惨にして不潔なものかを知りもせず、大いに軽い気持ちで私たちの仲に茶々を入れている。

けれども、私たちの事情を熟知すれば、向こうからそくさと逃げ出してゆくはずだ。

そうこう思案をめぐらせている内に、私は校舎跡に戻っていた。さっき見た夢とはなんという違いだろう！？

実はさっき、房総で真紗耶が居眠りしていたとき、私もウトウトしていたのだった。そして、私は夢を見た。

真紗耶と二人、山奥の校舎跡で造花をこしらえて生活している夢だ。造花をこしらえている私の膝の上で、真紗耶がうたた寝をしている。真紗耶は目を覚ますと不安に怯えだし、それを私が、

お姫様の *kiss* で目を覚ませ

とか言って慰める。……というような夢。

そう、夢の中で真紗耶は女性ホルモンを飲む前の真紗耶をしていて、なおかつ元から女だということになっていた。

そしてその夢の舞台である校舎跡は、紛れもなく、いま私が住んでいるこの校舎跡と全く同じ建物。けれども現実のこの校舎と夢の中のこの校舎とは、あまりにも違うことは改めて述べるまでもないだろう。

工場跡の前でしばし手を合わせた後、重い足取りで怯えるように校舎跡へ入る

悲しいかな、今日は直ちに果音がお出迎えだ。果音は私の身体からバッグを引っぺがすと、即座に財布の中身を確認し出し……その金額を見るとやはり平手を飛ばしてきた。

痛くない。さっき巫彩にやられた痛みのほうが勝っているからだろう。

私が痛がらないことを不服に思ったのか、果音は私の髪を鷲掴みにして容赦なく地面に叩きつけると、私のバッグを武器にして倒れた私の体を打ちのめしてきた。何度も何度も！

鈍重な衝撃がこの体を震わすたび、がらくたをひっくり返すような音を立て、バッグに入っていた物が朽ちた床に散乱してゆく。

やがてバッグが空になり武器として利用できなくなると、果音はハシタ金を手にして音楽室へ去って行った。

よろよろと起き上がり、化粧品やら飴玉やらを拾い集める私の姿は、恐らく日本一惨めったらしいに違いない。

【Misa's viewpoint】彼女に似ている彼女

柴門志穂……なんていう女怪！　あの女に殴られた頬がじんじんと痛む。

けれども、あの程度の雑魚女怪なら怖くはない。思い返せば実にヒ弱そうな女。フラフラと浮ついて締りのない物腰といい、すぐにキレる子供臭さといい、弱点をつかんで何とかすれば簡単に破滅させることが出来るでしょう。

そして真紗耶を、志穂の生み出した《精神的トーチカ》から救い出す。

そうこう思案をめぐらせている内に、あたしは自分家の近辺に帰っていた。早朝や夕暮れに歩くのとはなんていう違いかしら？

群青の帳とばりが降りた古都に寂しく燈る外灯は、この見慣れた路地を冥府への道に変える。

家にたどり着ける気がしないし、たどり着けたとしたって、あの冷たい義両親が居るだけ。……　どんどん暗くなつてゆくあたしの思考を、外灯に照らされる夜桜だけが甘く慰めていてくれた。

この垣根を右に回れば紗那の家。紗那がこんな暗い時間にも一人で家に居ると思うと、もう心配で心配で仕方なくなる。

……けど、例えば痴漢を撃墜するとか、キモヲタを捻じ伏せるとか、そういうことをして人助けはできるけど、さすがに夜一人ぼっちになる少女に安全な住処を提供してあげることはできない。

情けない想いで角を曲がると、あたしは思わず紗那の家の木戸めかけて駆け出す。

「真子……！？　どうしたのよ！？」

そこには、この闇夜と一体化してしまいそうな面持ちをした真子が、生きる力を総て奪われたようにしやがみ込んでいた。

妙なデジャヴにとらわれ、しばし硬直するあたし。考えたくもないことだけど……

それは……目の前でしゃがみ込む真子の姿が、あのSweet Seasonのアーチ状ネオンにしがみついて震える柴門志穂に、怖いくらい似ているからだった。

真子は実の父親から淫行を受けた少女……。そして柴門志穂はあのとき、……自分のお尻を掻きむしっていた。まさか……まさか、志穂も真子と似たような経験を……

「……あ、巫彩……、遅い帰りね……。あんたも彼氏と逢引してたの……？」

そう話す声にはもう、いつもの張りも元氣も全くなくて、指で一押しすれば奈落の底へでも落ちてしまいそうな雰囲気を放っている真子。

「どうしたっていうのよ真子！？　こんな所に一人で……」

「……………」

その問いには答えようとしない真子。

思い出されるのは、あたしが真紗耶からのメールを読んで、校舎を後にする直前耳に入った、あの紗那を怒鳴りつける真子の声。ほんとならあるとき、あたしは引き返すべきだったのかもしれない。横浜へ行かないで、真子と紗那の問題に対処するまではいかなくても、ちよつと様子を見る必要はあったと思う。

なのにあたしときたら、真紗耶への憐れみでいっぱいになってしまったって、大事な親友二人を半ば無視してしまった……。

「……………」

自責の念にとらわれてただ硬直するしかないあたしの鼓膜を、真子の諦めきつたような吐息まがいの声が揺らす。

「紗那ってさあ、一人暮らしだったんだね……」

「紗那はね、自分の事情を眞子が知ったら、きっと眞子はお母さんに頼んで多岐川家で自分を引き取ることにするって……母一人娘一人、女二人の生活で大変なのに、このうえ自分が負担になるわけにはいかないって。それで、そのことを隠してたのよ」

なぜ眞子が落ち込んでいるのか全く判らないままのあたしのフオロ。

眞子はどういうわけか力なく笑いだす。

「ははははは……そっかあ。確かに、私の家に引き取られたんじやさ、彼氏を家に泊めることなんかできないもんね」

ということは……眞子が好きだった彼を、とうとう紗那は自分の家に……それとも、もっと昔から紗那は彼を……？

「ねえ眞子、その彼と貴女とは、……付き合ってたの？」

それとも、眞子の片想いだったのかしら？ という意味合いを込めて訊いてみる。

ところが返ってきたのはただ、

「は？」の一字。

本当に、あたしは何を言っているのか判らないといった様子で、こちらを見上げている。

「眞子？」

「うわ……そっかあ。はははははは！ そっかそっか。そうだよ。そう思うよねえ普通は」

しゃがんだまま、表情をこころごと変える眞子がとても痛ましい。

「普通は って、どういうこと……？」

「わかんない……。普通って……、何なんだろうねえ……ううっ」

一思いにダムが決壊したように、その健康的なはずの瞳から涙を流しだす眞子。

「眞子……？」

あたしもただ悲しくなって、眞子の前にしゃがむとそっとその肩を包んであげた。

眞子特有の、木漏れ日をいっぱいに浴びた草のような香り。それが、眞子自身が落ち込んでいても普段どおりに漂っているのが逆に痛々しい。

「巫彩え……私さ……、ピーカーの中の冷やつこになりたいよ……。紗那にだけ好かれる、そんな存在になりたい……」

嗚呼、なんてこと！

あたしは自分の愚鈍さを心の底から呪った。

「ごめんっ！ ごめん眞子！ あたし肝心なところで鈍くって……」
謝ることしかできないあたし。

この体にはとても弱々しい笑いの振動が伝わってくる。

「はははは、仕方ないよ……。変だもん、女なのに女が好きだなんてさ……。キモチワルイよね……。紗那に知れたら絶交もんだ……」

「そんなことないっ！ 人を好きになるのに性別なんか関係あるもんですか！ それをキモチワルイとか云うような奴らのほうがキモチワルイのよっ！」

そう、例えば首田宗志教とか。ああいう連中は同性愛撲滅運動とかしそう。

「でも世の中に、巫彩みたいに寛大な人がどれくらい居るか……」

「寛大だから貴女を肯定してるわけじゃないわ。あたしが気になってる相手だって……」

「女……?」

元男で、しかもメイクによって別人になることも可能な変な人なのよ。……なんて、混乱してる眞子に言うわけにはいかない。

「っていつか……まあね」

「????」

ともかく、二人してこんな所に居続。

あたしは立ち上がると、眞子に手を差し出す。

「眞子……、家まで送るわ」

この手によろよると腕を伸ばし、そつとつかんでくる眞子。

ぎゅっと、その手を強く握って、ゆっくり歩き出すと、優しい春の夜風と神秘的な夜桜が眞子の心を幾らか癒したのか、少し落ち着いてたふうに言葉を紡いできた。

「紗那ったら、あんまりカレカレカレうるさいもんだから、学校で怒鳴っちゃってさ。そのまま大喧嘩して、……でも朱音を送れるとこまで送んなきゃって思ってたから、音楽室から出てきた朱音を引っ張って学校から出ちゃったのよね……」

「朱音のこと、ありがとう……」

眞子は軽く《気にしないで》とばかりに首を横に振りつつ、話を続けた……

「ちょうど朱音の腕をつかんだとき、紗那のケータイに彼から連絡があつてさ。紗那ったら、私を追いかけるより彼と話すほうが大事だったみたい……追いかけてもくれなかった」

「眞子……」

「でもさすがに、どう考えてもさ、突然取り乱した私が悪いじゃない？ 家に帰ってからすごい後悔して、悲しくなつて。紗那に謝ろうと思つてここまで来たら……」

紗那に謝ろうと思つてここまで来たら、紗那が彼氏を家に招き入れるのを見てしまったと、そういうことなんでしょう。

「……」

その気持ちを想うと、どんな慰めの言葉も安っぽいものになつてしまいそうで、何も言えなかった。

代わりに、手の力をぐつと強くするくらいしか……。

「明日から……明日からどうしよう」

また涙にうるみだす眞子の声。

あたしは握った手を離して、ドンと、眞子の肩を抱く。

「心配すんなつて！ この中里巫彩様がついてるでしょーがあ！ 紗那と眞子が離れて登校するにしたつて、貴女を一人にはさせないわよ。朱音って味方も居るんだから、紗那と朱音、眞子とあたしつて、分裂するのもいいしね。ほら、ハイファイセットと紙ふうせん

みたいに」

「巫彩が仲間に加わってくれて良かった。紗那との二人組みだったらさ、私、どうにかなっちゃってたかも」

「いいのよ、その代わり思う存分パシリにさせてもらうからあつ」

眞子に擦り寄り、ぬるぬるゝと嫌らしい視線を投げるあたし。

「うざっ！」

眞子は確かに元気になって、跳ねるようにあたしから離れる。

…… やつといつも眞子を見れた気がした。

「こらこらゝ、仲良く行こうぜ」

「なんなのさ！ 見損なったよ！ もう！」

お互いに何かとても重いものを抱えさせられた今日。その晴れない思いを忘れるように仲良くケンカするあたしたちを、古都を吹く静謐な夜風が見守るように撫で続けていた。

【M i s a e · s v i e w p o i n t】彼女に似ている彼女（後書き）

四章はこれで終わりです。

「彼女に似ている彼女」とは、もちろん、眞子と志穂のことではあるのですが、もう一組、「彼女に似ている彼女」が存在します。

前のパートの志穂の地の文と、このパートの巫彩の地の文に、酷似した部分があるのは、実は志穂と巫彩は似ていることを暗示するためなんです。

さあて、どうしましょうか？

ゆづべ眞子を送り届けてからというもの、これからの四人のことを考えて、とうとう一睡もできないあたしだった。

眠れない夜というのは、どうしてこんなにも長いのかしら？

ベッドの中で色々と考えながら、寝返りをうつたりパジャマのオレンヂを弄ったりしてるうちに、時刻は五時半（またかよ）を過ぎていた。

そろそろ決断を出さないと。

あたしは寝返りをうつついでに電気スタンドの隣に置いたケータイを手に取り、朱音にかける。

「あ、もしもし、おとといに引き続いて朝早くからゴメンね。あのさ、今日は紗那と一緒に登校してほしいのよ。あんたと紗那は同じクラスなんだし、やりよいでしょ？」

そこまで言っただけで、朱音は事情を理解してくれたらしい。

まあ無理もないでしょう。昨日学校で、あたしも見ていない紗那と眞子の修羅場を目の当たりにした朱音なんだから。

というわけで話は決まった。

朱音が紗那を誘って、一足先に登校してくれるという。

「……ありがとう朱音。あたしたち三人が朱音を助けなきゃならなはずだったのに、すっかり朱音に助けてもらっちゃって……うん……うん……じゃあね」

ケータイを切ったのを皮切りに、微かな罪悪感がジワリと心に広がる。

これは、仲間割れを自ら推し進める行為だから。

けど、眞子にとって紗那と一緒に登校することは、もう今は針の筵むしろでしかないはず。

……大丈夫。

自分に言い聞かせる。あたしたち四人が本当の友達なら、愛だの恋だのなんか簡単に乗り越えて、いつか何事もなかったように元通りになれるって。あたしたちは今、きつと試されているときなんだって。

あたしを意を決して、眞子にも連絡をする

眞子と色々打ち合わせして、今日の方針が決まるやいなや、どつと眠気が押し寄せてきて、あたしは一時間近く熟睡してしまった。

ところで、あたしは家では朝食を摂らない。義母の料理は化学調味料でんこ盛りでカラダに悪そうだし、気を許してもいない義両親と顔をつき合わせて食べたって、消化不良になりそうだから。

あたしはいつも『イルームの森』で眞子ママの料理を頂いているわけだけど、義母がフヌケになった最近では、義父まで外食するようになった。なんていう終わった家！

そして今日はいつも以上に暗い気分です関までの道のりを歩く。

道のり　なんていえるほど広い家ではないけど、冷め切ったこの家庭ではトイレでさえ駄々広い空間に感じるし、特に今朝は友達の明るい笑顔が出迎えてはくれないだろうから、余計に気が重かった。いつもより遅い玄関。ドアを開けると、それでも眞子の笑顔があたしを迎えてくれた。とはいっても……

「オッス巫彩……えへへへ」

なんてフザケるその表情にはいつもの力強さがなくて、無理しているのが明々白々。それでも、一日の始まりに友達の笑顔を見れたことに変わりはない。あたしは無理にでも笑ってくれた眞子に感謝しつつ、その力ない立ち姿めがけて駆けた。

「眞子おはよ！　ねえ、あたしとダブルス組もう！」

敢えて唐突に切り出すあたし。少しでも色んなことを考えさせて、恋の痛手を紛らわさせてあげたかった。

人間にとって《紛らわし》はとても重要。気分を紛らわして

明るく振舞っているうちに、ホントに明るくなれることだって少ないわけだから。

「でも私バレー部、っ……は、もういいか。私なんかあの部じゃほとんど空気だからさ」

「ね？ もう今日にでも退部届けと入部届け、出しちゃいなさいよ」

「巫彩……強引だよ」

苦い声を発しつつ歩き出す眞子にハツとするあたし。慌てて眞子の隣を歩き始める。

「あ、ごめんっ！ 嫌だった？ 一番大事なのは眞子の気持ちなんだから、嫌なら別にいいのよ？」

すると、眞子の横顔がニンマリとほくそ笑んだ。

「ふっ……、あんたの強引さが何よりの救いよ」

「眞子……」

しばし、そこはかとなくセンチメンタルな靴音が路地に響くと、やがて眞子がやるせないような明るいような、緩やかな溜息をつく。

「ふう……テニス部かあ。バレーよりさらにフェミニンなスポーツよね。少しゃ女らしくなっちゃっか」

「女らしく……？」

「そ。私さ、紗那に好かれたくって……、その一心で、こんなふうにおとこおんなに男女やり始めたんだ。紗那に好かれる望みが消えたんなら、思う存分女らしくならせてもらいますわ。ほっほっほっ」

残念（？）だけれど、眞子の ますわ は怖いくらい様になっただけだ。

この少女からこの男気を抜いたら、とんでもない絶世の美女がこの世に光臨するはず。

「よしてよ。綺麗過ぎて近寄りがなくなっちゃっわ」

「またまた」

「いや、マジでやめて。宇宙の法則が乱れる」

「それなら乱してやるっじゃないのさ」

話しているうちに明るくなっていつてしまう。それがあたしたち。紗那と朱音も、そうだといいいんだけど……。

ちなみに、うちの学校の転部は『ドラゴンクエスト3』のダーマ神殿みたいな方式で、ある程度までその職業とつか部活動を極めさえすれば、好きなように変更できるというもの。

要するに、生半可な状態で転部しようとするれば、みじゆくものの ぶんざいで もう ぶかつを かえたいとはなにごとじゃ！

なんて怒られてしまうというわけ。

朱音と紗那が同じクラスなのを除けば、あたたちのクラスがバラバラだったことをこんなにありがたく思う日が来るとは思わなかった。

思えばそう……あたしが朱音に目をつけたのだって、クラスで浮いている朱音の話題を紗那が出してきたことがキツカケなわけで。

このマッシュュータス女学園の外観は、『お堅い』だけあってとても壮麗なもの。とにかくペンキの再塗装を怠らないからシミ一つ見つけるのにも苦労するし、その落ち着いた白さは清廉な少女以外を拒むように気高い。

三角錐形の時計塔が頂に優雅なアクセントを与えていたりして、ここは校舎というよりほとんどフランスの城といった趣がある。

ちなみに今更ながら『マッシュュータス』というのは、どこぞの神話に出てくる謙虚誠実を絵に描いたような武神の名前らしい。

ホテルみたいな大理石の階段をのぼって見慣れきった三階の廊下に着くと、重い気分で、けれども最大限の笑みを浮かべて眞子と別れた。

そして見慣れた面々が集うクラスに足を踏み入れる。

右から、左から、前から、「巫彩おはよう」「おはようございます」「甘い囁きが耳に飛び込む。それなりに居心地のいい空間。

「おっはよう」「ハロー！ 今日も綺麗ね貴女」「グッモーニン」

こんな感じで挨拶するあたし。この人当たりの良さからアンチが発生することはないんだろうけど、反面、親友と呼べる少女もまた、このクラス内には居ない。

やっぱり、良家の娘たちとは根本的に何かが違うんだと思う。そしてそれは眞子も紗那も同じことのように。それがあたしたち三人が仲良くなるキツカケともなった。

席に着くと、お嬢様方の発する甘くて高貴な息吹のなか、あたしは頬杖をつき、虚ろな曇り空をぼんやり眺めていた。

必ず晴れるときが来る……それは本当なんだろうけど、こうやって漠然と曇りの空を眺めていると、この晴れない状態が永遠に続くように思えてきてしまうものだなあと。

そして、そんなふうに思っている人に対して、《必ず晴れるときが来る》そんな言葉は何の役にも立たないんだろうと。

【Shiho's viewpoint】疑惑まみれの愛

「ねえ柴門さん、日に日に、身体の痣が増えていつてますよ？」

《撮影後》、真紗耶が気にせんで良いことを訊いてきなさる。

訊きたいことが山のようにあるのはこちらのほうだというのに

情けない話

結局、いつもと何ら変わりない告返しの姿で真紗耶が現れると、いつもどおりに撮影をしてしまったのだった。

「最近、よく暴れるから。まあ、不安定な時期はね、私も怪我すること多いのよ」

私はこう言えば見事に身を交わせることに気づいた。嘘を言わずして真紗耶を騙せるからだ。

「あの人……良くなる見込みは、あるんですか？」

「さあ……」

「そうですか……」

あーめんどい！

私がこんなことをしなければならぬハメになったのはこの痣のせい。そして、このいつになく生々しい痣が出来たのは巫彩のせいだ！ 巫彩が、せっかく真紗耶がくれた札束を川にぶん投げやがったから！

「ねえ真紗耶、巫彩ちゃんの家場所、知ってる？」さり気なく、奴の居場所を訊いてみる。

「知るわけがないでしょう？ 住所を言い合うような仲ではありませんよ」

「だよー」

「柴門さん、どうして巫彩さんの家の場所なんて……」

始まった。真紗耶の尋問だ。

「い、いやあ、なんか、いい子だからさあ、好きな時にこっちから会いに行きたいなーなんて」

私の適当なはぐらかしに、またピキッと怪訝な顔で反応する真紗

耶。

「なんですか、それ。他に理由があるんじゃないんですか？」

「り、理由ってなによ！？」私に他意があるのは凶星だけに、声が震える。

真紗耶は例の如く、女よりも女の厭な部分を凝縮したような、実に挑戦的な薄笑いを浮かべていた。姿が告汙匐だけに、本当に淫らな嫌らしさの極みだ。

「柴門さん、貴女もしかして、巫彩さんをお気に入ったのではありませんか？ あーなるほど。貴女も巫彩さんも、外向的で明るくて、そのくせ何かあると、ぐつと深く深く悩み込んでしまうタイプですもんねえ。巫彩さんにご自分と似た匂いを感じて、惚れてしまったのでしょうか！？ 違いますか！？ ナルシストも甚だしいです！」
なんとという素っ頓狂な解釈！ 私は思わず真紗耶の前に仁王立ちした。

「やい真紗耶！ そういうアンタはどうなのよ！？ え！？ 巫彩に会って、私のことが霞んで見えてるんじゃないの！？ あーそうだそうだ、今の《撮影時》もなんか、ビジネスだから仕方なくやってまーす、みたいな感じだったし！……！」

私の暴言に真紗耶は立ち上がり、私の全身を滅茶苦茶に愛撫してきた。

「柴門さぁん！？ 昨日私が言ったこと、もう忘れてしまいましたのん……？ うふふふふ」

「っ……」

……咄嗟に手を伸ばしてカメラの録画ボタンを押す私が居た。いつしか私もビジネス志向になっているのだろうか？

【Shiho's viewpoint】疑惑まみれの愛（後書き）

「貴女も巫彩さんも、外向的で明るくて、そのくせ何かあると、ぐつと深く深く悩み込んでしまうタイプですもんねえ。巫彩さんに「自分と似た匂いを感じて、惚れてしまったのでしょー!？」」

真紗耶のこの言葉をよく覚えておいて下さい（笑）。

【Misa's viewpoint】哀しき昼休み

「えー、なにここ。この学校にこんな場所があったなんて……」

「巫彩に気に入ってもらえて嬉しい。いい場所でしょう？ 私もつい最近、見つけたのよ」

昼休み。あたしは朱音に連れられ、校舎の裏側を訪れていた。

驚いた事に……そこはまさに別世界で

新緑に色づいた木々がサラサラと音をたて、校内のさざめきを中和するこの爽やかな空気きたら、ここが学校であることを忘れるほど。

あたしたちはちょうど二つだけ存在していた切り株に腰掛け、朱音がこしらえた弁当を食べることにした。

「朱音、ありがとうね、あたしの分まで持ってきてくれて」

「そのくらいのこととして当然よ。巫彩、私のために色々頑張ってくれて……。私のことが一段落したと思ったら、今度は紗那と眞子が……。それに、ねえ、お母さんとそんなに上手くいってないの？」

そう。弁当は普通、母親がこしらえるもの。ところがあたしは毎日、自分で自分の弁当をこしらえている。

くだんの化学調味料云々はもとより、学校でまであの義母を思い出したくないというのが本音だった。

そして寝坊した今日は朱音にこしらえてくれと頼んだわけだけど、

……何も知らない朱音はそれを訝しく思っているでしょう。

あたしは溜息を一つ。けれども一人でつく溜息とは明らかに何かが違うって、吐いた息が草木を揺らす風に溶け込んでいくようだった。

「そつなのよ朱音……あたしん家^ち、かなりドロドロしててさ。母のこしらえた弁当なんか食べたくないわけよ。だからいつもは自分で

こしらえてるんだけどね。今日は寝坊しちゃってえ。はははは」

「そう……」

「けどっ、おかげでこんな立派な昼食が食べられて予は大満足じゃっ！ ふふふふふ」

プチトマトと、サラダと、タコのウィンナーと、玉子焼きと、ピラフとかが、きちんとレタスで区切ってある朱音のお弁当……そこには彼女の温もりがいっぱいに詰まっていて、ヘタをすると泣きだしそうだった。

「なにそれ……古い言葉……クスッ……」

……強烈だった。あたしにさえポーカーフェイスを突き通し続ける朱音が、そつと、その堅牢な顔を緩やかに微笑ませたんだから。

「あー、朱音が笑った！」

「え、私、笑った……？」

「うん。笑ってたほうが可愛いわよ！ んもー、嬉しいからタコさんウィンナー分けちゃうっ」

自分のウィンナーを朱音に分けてあげるあたし。

紗那と眞子を抜いた昼食なんて気が重かったけど、朱音と二人の食事というのも、どこか静穏な安らぎがあって楽しい。

それに、朱音の料理の腕は半端ではなく、とても美味しかった。

昼食を終え、ごちそうさまを言おうとした瞬間、背後から聞き慣れた少女の甘い声と、聞き慣れない青年のけばけかしい声

「ちよつと……、こんな所まで来ちゃマズいよ」

「だって今朝急に親に言われたんだよね。それに毎晩お前んち泊まったりしてたらマズいじゃん？」

？

あたしと朱音は手近な木の陰に隠れ、様子を伺う……すると、軽薄そうなイケメンが塀の上から顔を覗かせていて、それを紗那が見上げているという図だった。

紗那がケータイを片手に持っていることから、たぶん紗那はケー

タイでここまで誘導されたんだと思われる（紗那は授業中以外は常時電源を入れているというし）。

「俺さ、紗那のこと孤児だと思ってたんだよね。でも両親居るんじゃない」

「……うん」

「で、昨日お前の両親と俺の両親がさ、かなり近くに住んでることが判ったらしいんだよね。これって奇跡じゃん？ 俺たちの親同士が、仲良くしてたなんてさ」

「仲良くって？」

「お前の両親と、俺の父親ってさ、昔頃から仕事で親しかったんだってさ。提携企業同士の付き合いってやつで。それで俺の両親が紗那を嫁にもらいたって大ノリ気なんだよね」

その言葉に、紗那は一瞬だけ瞳を輝かせるも……

「そうなの！？ またすぐ暗い瞳に戻る。「それで……？」

きっと紗那は、彼の話の内容を察しているのではないかしら？ 事実、彼が続けた言葉というのは、紗那にとって心の傷を抉られるようなものだった……

「紗那さ、なんでお前、あんな所で一人暮らししてんの？」

「……」

「転校したくないから？ ……ダイジョブだって。友達なんてこの学校だってすぐ出来るって」

軽薄な笑顔で紗那を見下ろして軽口を叩く彼。対して、祈るように彼を見上げる紗那がなぜかとても痛ましかった。

「……話って、何なの？」

「お前の両親もさ、お前が十六人になったらすぐにでも俺んちに嫁にやりたいって言っててさ、そんな流れで 娘の一人暮らしは親として心配だから、君からこちらへ来るように説得してくれないか なんて説得頼まれちゃってさ」

「そんな……っ」

「なんだよ？ 友達より俺のほうが大事だったら来れるよな？」

「そんな急に……」

「話が出たのは急だけど、お前は春休みまでに決めればいいことだよ。じゃ、話はそれだけだから」

無責任に引っ込む彼。戸惑った顔のまま残される紗那……。

そして、折り重なるような格好で木陰からそれを見ていたあたしたち……

「聞いちゃった……」

朱音がひそひそ声で話しかけてきた。あたしも同じくらいの声量で話す。

「ええ、聞いちゃったわね……」

「紗那って確か、都会でノイローゼに……」

「そうよ朱音。紗那は都会の空気とか建物とか生活に馴染めなくて、とうとう気が狂って……。紗那の両親は《娘より仕事》って人たちだから、紗那を鎌倉に一人残したのよ。一種のネグレクトよね」と、そこでとぼとぼと、紗那が校舎へ戻って行った。

朱音は木陰から離れ、紗那が消えていった方角を心配そうに見つめる。

「あの感じだと紗那、彼にそういう事情、話してないみたいだし……どうするんだろう？ 私たちに何か出来ること、ないかな？」

「うーん……」

あたしは腕を組み、色々と思案をめぐらす。……けど、あたしも朱音も所詮中学生。

いい手立てなんて見つかるはずがない。

「やだ、昼休み終わっちゃうよ巫彩！」

ほら、こんなふうを考えている暇すらないし。

仲間割れ以上の試練が四人に訪れているのを感じているあたしと朱音だった。

【Shiho's viewpoint】女怪のせめぎ合い

「グッへへへへへ、儲かつちゃったねー」

「今日は二回分も撮影してしまいましたからねー 柴門さんが愚

かな発言をしてくれたからですよ。あれで私に火が付きましたから」

「わっははははは！ たまにやあバカ発言もしてみるもんね！」

夕刻。私と真紗耶は上機嫌で、料理の匂いが無造作に漂いだす裏町を歩いていた。

「あ、柴門さん、今日は私もSweet Season行きます」

マズイ。昨日あんな事があったのに、真紗耶・巫彩・私の三人で会ったら修羅場は免れない。

ここはいつそのこと、嫉妬する少女を演じるとしよう。

「真紗耶、私、今日も一人で行く。真紗耶を巫彩さんに会わせたくないの、もう。真紗耶は、私だけの者なんだから。メールだけの関係に戻ってよ」

それを聞いた真紗耶は、戸惑った反面、どこか嬉しそうだ。

「柴門さん、そうなんですか？ うふふん、ヤキモチやいてるんですか。私みたいですね。ふふふ。ではでは失礼いたします。ああでも、巫彩さんに冷たく当たらないで下さいね」

「わかってるって。第一、私が巫彩さんを憎んでたら、わざわざSweet Seasonまで様子を見に行ったりしないでしょ？」

「そうですね。では、今日もよろしくお願いします」

というわけで上手く真紗耶を撒くことに成功した私は、心の底に烈火を迸らせながら《表の横浜》へ向かう。

Sweet Season前の橋に着いたが、巫彩は居ないようだ。仕方ない、木泊さんの顔でも見て帰るかな、と思い、あのアーチをくぐろうとすると……階段の下に不吉な影。

巫彩がSweet Seasonの中を覗いていた。あれは奥の

部屋の窓……ということは、木泊さんの居る調理場を覗いてるという事か？ ふっ、数時間後に自分が同じことをされるとも知らずに！ けっけっけっ！

「ちよいとそのお嬢さん！ 覗き見はいけないね！」

私の階段を下りながらの大声に驚きもせず、巫彩は当たり前のことのように振り向いた。

「志穂さん、木泊兄さんって、料理を勉強してるのね。こんなに何かに打ち込んでる兄さんの顔、久しぶりに見たわ」

「そうなのよ。母萌さんが拵えた料理よりね、木泊さんの拵えたのを店に出したほうがウケが良かったんだってさ。それにねえ……」

「それに？」

「……………」

その先を言うには、ちよいと目の前の小娘が憎らしすぎた。《これ》は、仲の悪い相手とする話ではない……。

私が黙っているのをしばらく見ると、巫彩は何と私に頭を下げてきた。

「志穂さん、昨日はごめんなさいね。ついつい、度の過ぎたことを言ってしまったって」

「あっそ。別にいいのよ。私と、真紗耶……あんた程度の弱小女怪に壊される程度の関係なら、もう何年も前にとくにブツ壊れてたと思うし」

表面では軽くあしらったけれど 許してなるものか。キサマのせいで、ゆうべ私は果音から烈しい罰を受けたんだから！

私の軽い毒に、巫彩も軽く反応したようだ。

「志穂さん、《いかがわしいDVD》は発言撤回するわ。その代わり《嘆かわしいDVD》と呼ばせて頂くわね」

こうしてまた、軽い毒吐きが猛毒的な口論へ発展してゆく。

「嘆かわしいだって！？ あんた、私と真紗耶がどんな経緯であんなDVDを撮るようになったか知りもしないで！ あんた、どっち

側の人間なのよ!？」

「どういう意味？」

「だからね あんたの兄さんだって不登校経験者でしょ!？ 私らに楯突くべき立場なの!？ あ!？」

「それは存じ上げてるわよ。前に真紗耶がサラツとメールで話してたけど、志穂さん、たかだか失恋くらいで不登校とは、いいご身分ね。貴女みたいな愚者が居るから、不登校児のイメージが悪くなるのよ。そのせいでどれだけ苦しんでいる子たちが居るか」

真紗耶ときたら! メールでそんなことを話してたなんて! :

：まあ大方、木泊君や真紗耶自身のことを話している流れで、《柴門さんも》なんていう話題になったんだろうけれど。

「貴女何様!？ 自分はただ偉いのよ!？」

またしても、激情を露にした私に対し、巫彩が淡々と毒を吐くという図式。

「木泊兄さんや真紗耶がどんな想いで学校へ行けなくなったか、貴女みたいな薄っぺらな人間には理解できないと言ってるわけよ。まあ真紗耶は迷信深い人だから、理由はどうであれ、貴女が不登校になったという事実のみに共感して、貴女への想いを強くしたみたいだけど……こうやって貴女に会って確信したわ、真紗耶は貴女に騙されてるってね」

「騙す!？ 何のために!？ 真紗耶を騙す事で、私に何のメリットがあるって言うのよ!？」

「貴女にとって真紗耶って、いわゆる《キープ君》ってやつだったんじゃない? 貴女は一時期、恋に溺れた時期があったと聞くわ。空中ブランコみたいな数々の恋。でも真紗耶っていう《セーフティネット》があれば、貴女は縦横無尽に空中ブランコを楽しむことが出来る……違うかしら?」

まさかメールでこんな話までしていたとは!

「真紗耶め! 言わんでいい事をペラッペラペラッペラ!」

「“言わんでいい事”ってことは、やはり凶星なわけね? 真紗耶

を責めるのは筋違いよ志穂さん。さあて、じゃ、昨日の謝罪も出来たし。あたしはこれで失礼するわ」

……何はともあれこれにて作戦遂行決定である。

「また今度ね」私は朗らかに挨拶した。

そして巫彩が階段を上りきってアーチをくぐった瞬間、私は咄嗟に例の変装をして尾行を開始。

運良くお着替えシーンを撮影できる事を祈りつつ……

【M i s a e · s v i e w p o i n t】仮面家族の崩壊（前書き）

改訂前の別ヒロインが担っていた役割を巫彩に背負わせているため、随所に矛盾が発生していると思いますが、随時、手直ししてゆくつもりですのでご了承下さい。

そこはかとなく、誰かに後をつけられているような、そんな気配がしないでもないけれど

志穂への 謝 罪 を済ませたあたしは、やや誇らしい気分で家に戻った。

ところが……家の門をくぐったあたしには、志穂との確執以上の針の筵が待ち受けていた。

「巫彩ーっ！ おかえりザマスー！ 狭山朱音さんの噂、聞いたわよー！」

玄関の前に立った義母が、まるでフェスティバルかカーニバルでも始まるかのような声で私を迎えてきた。

「……………」

「うふふふふふ、これでお友達の三人が三人とも立派な人になったわけザマス！」

ちなみに眞子がバレー部へ移ったことは義母は知らない。

「PTAの会長に言われたこと、忘れたの……………」

「忘れてなどいないザマス！ しかし、巫彩が選んだ友達が全員立派になったこの状況ならば、会長の言葉にワタクシは従事したまま、なおかつ、ワタクシの理に適うお友達関係を巫彩が築いていくことができるザマス！ こんなにメタイことはないザマス！」

……呆れて言葉も出なかった。

とりあえず、母に促され、暗澹たる気分で家に入る。

そして台所に足を踏み入れた瞬間！ あたしはテーブルの上を睨まずにはいられなかった。

「お母さんッ！？ これ、なにッ！？」

「うふふふ、今日ほど御めでたい日はなかなかないザマスゆえ。腕

によりをかけてこしらえたザマス」

テーブルの上には、中央の大きなケーキをはじめ、うちにこんな物があつたのかと思うような豪華な食器に入れられたオードブルやスープの数々。

「ねえお母さん、あたしたち四人はね、そんなお祝いするような気分じゃないのよ。紗那は彼氏に親元へ帰れってせがまれて悩んでるし、眞子はね、失恋の痛手から立ち直れないでいるの。朱音だって……お母さん、あなたがそういう人だから、無理してピアノを頑張ってるのよ」

あたしが母に、心の内を話すのは初めてのこと。

こうやってきちんと話せば、もしかしたら理解してくれるのではないかしら？　なんていう、甘い期待もあつた。ところが、義母はそれまでになくあたしの心を傷つけてくるのだった。

「そんなことはどうでもいいザマス。ワタクシは、巫彩の友達が全員立派なステータスを得た、そのことが嬉しくてたまらないザマス！　さあ食べましょう！　座って座って」

義母は一足先に席に着いたけれど、あたしは座るつもりなど毛頭ない。

「どうでもいい！？　娘が友達の話をしてるのよ！？　それがお母さんにとってはどうでもいいことなの！？」

「巫彩え、こんな御めでたい日にそんな面倒なこと言わないでちょうだい！……」

あたしはこんな女を母だと思ったことは、たぶん一度もないけど、あたしは小さい頃からこの人の手によって育てられたわけで、それに、この人が木泊兄さんの実の母親というのは、変えることのできない事実。

木泊兄さんのことを実の兄のように……いいえ、それ以上に強く想い、慕っているあたしは、時々、この人が自分の母親に見えてくることもあつた。

それなのに……駄目。もう何を話しても駄目！

そう思うとあたしの心を激烈な悔しさが遅い……、テーブルに歩み寄ってケーキを素手でグチャリと驚づかみにし、母の手前に置かれた小皿にベタツとこびりつけた。

「さあ 召し上がれ、お母さん」

これは、あたしの最大にして最後のSOS……。

それなのに……義母は何と微笑んでケーキを食べだす。

「まあ、汚い盛り付けかたザマスわねえ」

罵る力すら萎えてゆき、あたしは打ちひしがれたように流しの前まで移動すると、放心したように手を洗って、とぼとぼと自室へ歩いて行った。

「あらー、巫彩は食べないザマスのー？」と、義母が言ったような気がする。

そして、ガチャンとドアの鍵を閉め切り、その場に崩れ込むあたしだった。

【Shiho's viewpoint】愛は突然に

へっへっへっ！　とうとう居城を突き止めたぜ巫彩さんよ！　私は目をギラギラ輝かせながら巫彩の家の前に佇んでいた。

それにしても……、いい町だと思う。海の残り香をまとった微風が、細い路地を舞うように吹き抜けてゆくを感じると、危つく軽妙な復讐心を忘れてしまいそうになるほど。

ところが……当の巫彩の家ときたら、この古雅な町並みにいちやもんをつけるかのように現代的で素っ気ない、薄い灰色の四角い箱これをもった……私の住むあの校舎跡のほうで、どれだけ人間的か知れない。

私は中里宅の門をくぐり、巫彩の物らしき二階の部屋の下へサササッと移動することが出来た。

あのオレンジ色のカーテン……ほぼ間違いなからう。真紗耶がいつか、

巫彩さんってえ、オレンジが大好きらしいんですよ。服装も部屋もオレンジが赤で統一してるんですって

などと話していたのを聞いていたからだ。あいつが実は滅茶苦茶に口の軽い人間だったという新事実を、今ばかりはありがたく思う私なのだった。

さてと、私は耳なき青猫のごとくポケットから、

「超極細カメラ」

と、秘密道具を出した。

あんなDVDを売っている身。撮影機材という物には深く精通している私なのである。カメラの先は爪楊枝とストローの中間くらいに細く、うまくいけば、網戸の隙間からでも入るスタイル。

まあ、今日は単なる《下見》に終わるだろう。とりあえず、家の

構造や、巫彩の窓はどんな形状で、巫彩はどういう窓の開け方をするか、そうしたことを下調べできれば御の字というくらいの気持ちで丁度いい。

ところが、その必要はなかったようだ。巫彩の部屋の窓は少し開いており、しかもカーテンと窓枠の端の間には二センチ程度の隙間が！

これは即刻撮影開始か！？　と思い、五分の一度に縮む折りたたみ梯子をバッグから出すと、スタスタと窓に近寄り、その隙間から中を覗いた。

そしてその瞬間こそ、女怪としての私が死を迎える時なのだった。

「巫彩え！　ワタクシ一人じゃ食べきれないザマス！　降りてきて一緒に食べるザマス！　お父様がお帰りになったら三人でパーティーというのもいいザマスね！」

「あたしのことはもう放っておいて！」

「もう、なんザマスのお？　友達三人が立派に巫彩の、ひいてはワタクシたち夫婦の名誉を高めてくれる存在になったと知れば、お父様も大喜びなさるザマスわよお？　久しぶりに三人の笑顔が揃」

「お願い！　今日は気分が悪いのッ！　放っておいてえっ！」

「もう、つれない子ザマスね」。いいザマス　お父様と夫婦水入らずでお祝いするザマスから」

奥から響くババアの声は、なにやら実に理不尽な言葉を並び立てている。

子供に理不尽な注文をする世間と、耳を塞ぐことでしか自分を守ることが出来ない子供。

巫彩も、そうなのか。彼女もまた、真紗耶や私と同じ闇を……！

いったん、梯子を下りた私。どういわけか涙が滝のように頬を伝う。

涙でメイクがぐちゃぐちゃになった顔がみつともないだろうから、私はハンカチを出して顔を拭う。けれどもその後も次から次へと涙が流れて止まらない。

涙を止めることは諦めて、もう一度登り、覗いてみる。

曇った夕方の鈍い光のみによつて、うつすらと部屋のドアの前に浮かび上がる、耳を塞いで膝を抱えたその影は、やはり……

私 そのものだ。た。た。

それは……失恋する度に部屋に籠って膝を抱え、真紗耶や母に大迷惑をかけた、あの私であり……あの校舎跡で、果音がどんなことになっても何も出来ず、ドアの前で耳を塞いで膝を抱えている、あの私でもある。

今、私は悲しい。今、私は感動している。今、私は共感している。……そういった端的な言葉にすることが出来ない、この複雑な感情！

とにもかくにも、いてもたってもいらなくなり、私は玄関へと急いで正々堂々とチャイムを鳴らした。

「はい あら、どちらさま？」

明るい声で現れたこの女が、巫彩の母だろう。あのリタリンを巫彩の親友に打とうとしたとかいう……！

「あの、巫彩さんにお会いしたいのですが。私は、もう一人の巫彩さんです。……と言いたいくらい、巫彩さんに似たものを持った、巫彩さんの友人です」

私はこの母親への怒りを抑えて淡々と語る。すると、母親は家中へ向かつて、

「巫彩！？ お友達が来たわよー！」と叫んだ。

「朱音！？ 紗那！？ 眞子！？」巫彩は叫びながら階段を下りて来たけれど、来たのが私だと知ると一瞬にして冷たい顔になった。

「……あ、あんた！ 何なのよ家まで押しかけてきて！ 尾行してたのね！？ なんて女なの！？」

そうやって取り乱す姿さえ愛しく……私は咄嗟に靴を脱いで巫彩に駆け寄り、強く抱き締めてしまった。

「巫彩ー！ うああーっ！」

「ちよつと！ なんなのよ！？」

巫彩は私を振り払おうとしたけれど、私は決してその小さくて神秘的な温もりを手放そうとはしなかった。

そもそも、元々の力の強さでは、私より巫彩のほうがずっと上だろう。けれども今の私には得体の知れない火事場の底力のようなものが沸いており、巫彩に抵抗することを許さなかった。ところが、面白いのは何秒かすると巫彩が私に抵抗しなくなったことだ。

しばらくして、ゆっくりと巫彩を手放す私。

「巫彩、貴女と二人で、話したい……」

「別に、いいけど」台所を出る巫彩を追うと、階段を何段か上って私に振り向く。「来れば？」

「ありがとう……」私は部屋に向かうことにした。

その間！ あの母親は何事もなかったかのように食事に戻って行った。なんという娘への関心の薄さ！ ある意味、果音よりも無慈悲といえるだろう。それがまた、私の涙をしばるのだった。

ともあれ、私はアツサリ巫彩の部屋に入れてもらえた。

女の子の部屋にしては、ぬいぐるみとか細々（こまごま）した置物とか、そういう甘たいものがなくて。けれど赤やオレンジで統一された空間いっぱい少女の息吹が宿っている。ここは私の部屋だと思った。

今暮らしている（というより寝に帰っている）あの校舎跡の私の部屋は教室だから、この巫彩の部屋とはかなり形相が違っけれど……あの実家、即ちクウチューカ二階の私の部屋とはどこか似たもの

がある。

私は、さっきの巫彩のように、そしていつもの私のように、ドアの前に膝を抱えて座った。

「巫彩、よく私を入れてくれたね。さっき、あんな憎み合ってた私たちなのに」

「あたしにはね、友達が三人居るのよ。……貴女、彼女たちと同じ温もりをしてた」

回転椅子に座り、勉強机に伏したまま話す巫彩の憂鬱な美しさ。でもそれを指摘する前に、私は、

「どんな、温もり？」と訊いてみる。

「あたしね、小学生の頃、同級生の女子にふざけて抱き付かれたことがあったの。……女の子の、匂いがしたわけよ。この先、普通に学生生活を満喫して、結婚して、子供を産んで、何の疑いもなく生きていきます、みたいな匂いが。でも、貴女や彼女たちは、何かが違う」

それを聞いて、やっと私は納得したのである。

「そう……。あんたを好きになった真紗耶の気持ち、やっと解った。こういう、ことだったのね」

「どういうこと？」

巫彩が机に伏したまま顔を少しこちらに向くと、私も膝にうずめた顔を巫彩に向ける。

「やっぱり、こうもりと働き蟻はコミュニケーションすらとれないってことよ」

「私もそう思う。真紗耶とも昔、メールで話したことだけど 《馴れ合い》 っていうものが、褒められたものじゃないことは解る。でも、少しでも似たところのある人間同士じゃないと、そもそも相手の言葉すら理解できない……」

「……………」

はてさて、なんだって巫彩はこんなにも落ち込みきっているのか。

「ねえ巫彩、大丈夫？」

「見れば、わかるでしょう？」

「わかるお（＾＾） さっき部屋で膝抱えてたし、なんか言い争ってたし、今はそんなふうに机に伏せつつちゃってるし。……けど、あの貴女がそこまで暗く塞ぎ込むなんて意外よ。ねえ、貴女に何があつたの？」

私がそう問うと、巫彩はやっぱ机に伏したまま……

義両親が自分の友達を《鑑定》していること。そんなとき、朱音という子にピアノの才能があることを見抜いたこと。最近、紗那と眞子という二人の間に亀裂が入ったこと。そして紗那が彼氏に都会へ連れ出されそうになっていることを教えてくれた。

「……………というわけだね、せっかく朱音が仲間になってくれたと思つたら、そのとたん、あたしたちを試すみたいに、紗那と眞子の間に溝が出来ちゃって。朱音だって、もしかしたらホントは普通に合唱だけやってたかったかもしれないのに、あの義両親のせいでピアノまで」

「そっか……………」

と、そこで巫彩は急に立ち上がり、私を見下ろすと訴えるような口調に変わった。

「そしたら！ 朱音がピアノのことで有名になったのを知つたあの母が大喜びよ！ あたしたちがどんな想いで学校生活してるかなんて、母にとつては《どうでもいいこと》なんですつて！ ただ、《娘の友達が輝かしいステータスを得た》って事実だけにしか、目が行ってない」

変な母親だと思つと同時に私は、首を傾げてもいた。

「ねえ、あの母親つてさ、木泊君の実母なのよね？」

「ええ」

「どーしてまた、あんなワカランチンから木泊君みたいな純真な人が生まれるかね？」

呆れ口調で言うと、巫彩も軽いため息をつく。

「親子なんてそんなものよ。心から理解して、愛し合える親子なんて、万に一つじゃないかしら？ 紗那だってネグレクト同然の仕打ちに遭ってるし、つくづく子供って損だわ」

……《理不尽な正論》を押し付けられ続けた幼い自分を、私は思い出した。

「そうね。けど貴女は偉いわ。理不尽な苦しみを受ける子供を、必死で救おうとしてる……自分だって子供なのに。 真紗耶から聞いたんだけどさ、貴女、真紗耶へのメールで木泊君のことばかり書いてたらしいじゃない？ 木泊君の心の闇を再発させたくないって」

「えーっ！？ 真紗耶って貴女にそんなことまで話してたの!？」

「ね！ なんたる口の軽さって、私も思うお（＾　＾） でもさ、でも、それって逆に、真紗耶がきちんとケジメってもんを持つてる証拠だと思わない?」

「ケジメ……」 巫彩も《なるほど》と思ったようで、私の真ん前に座り込んだ。「そうか。真紗耶さんは私が《リタリンの話》を出すまでは、私に直に会うつもりなんて全くなかったってことかしら?」
「その通り。だからこそ、貴女のことを私に喋ったり、私のことを貴女に喋っても、現実の人間関係じゃないから何の影響もない、って思ったんでしょーね。……ねえ巫彩、真紗耶とのメール、私に見せられるのだけでいいから、見せてくれないかな?」

ただただ見てみたかった。巫彩の努力の跡を。

すると巫彩は無言のまま、私に携帯を差し出す。

「巫彩、いいの?」

私が問うと、巫彩はこれまた黙ったまま頷いた。

私がメールを読んでいる間、巫彩は地べたに仰向けになり、目を閉じていた。

恐らく色んなことに疲れきっているんだろうけれど……柩に入っ

た王女の亡骸を想わせる、その気高い美しさは、携帯をいじる手が止まりそうになるほど異常である。

巫彩が私にメールを見せたのは、どんな気持ちからだろう？ 私に助けを求めている？ それとも《別に読まれても構わない》という投げやりな想い？

それはどうであれ、読むにつれてどんどん、私の心が紅蓮かげろひの炎で焼き尽くされてゆくを感じた。

「春ね。木泊兄さんが目覚めたのも、こんな季節だったわ。」

「真紗耶さん、あたしね、木泊兄さんに二度と眠り姫になってほしくないの。」

「話したくない気持ちは解るわ。でも、木泊兄さんが船から飛び降りた原因……それが話したくないような理由なら、なおさらあたしはそれを知っておかなきゃならないのよ。」

「ねえ真紗耶さん、今日こそは教えてもらうわよ。兄さんのこと。」

257

毎日毎日、肝心なところでは口の堅い真紗耶に問いかける巫彩。その一字一句から、兄を想う少女の心をひしひしと感じると、いよいよ携帯を握るこの手がガタガタと震えだした。

そして最後まで読みきる頃には、私はもはや、いてもたってもいられなくなっていた。さつきとは全く違った涙が流れる。

けれども泣いている場合ではない！

私は涙を拭くと、携帯を持ったまま、巫彩の部屋を出て台所へと急いだ。

「お母さん貴女、巫彩をどれだけ苦しめれば気が済むんですか……？」

私の静かな問いに、母親は御馳走を食べながら答える。

「苦しめる？ やーねー。巫彩の苦しみは終わったザマス。友達三人が立派な人間になってくれたならもう万々歳ザマス」

「付き合ってる友達全員が社会的地位を手に入れば何もかも万事めでたし、無問題もうまんだいですか。そんなに簡単なものですか？ 貴女、巫彩さんがどんな想いで友達三人や木泊さんを守ろうとしているか、お解かりですか？」

「なにそれ？」

「巫彩さんが今、帰って来たときに言っただでしょう！？ 友達の一人は失恋し、一人は不本意な土地へ連れて行かれそうになり、もう一人はお母さん、他でもない貴女のためにピアノを頑張っているところ！ 巫彩はその一人一人の問題を全て一人で抱え込んで、解決しようと頑張っているんです！ いまどき居ませんよ、こんな優しい心を持った女の子！」

「そんなこと言っただけじゃしょうか？ でも、とにかくワタクシは巫彩がワタクシども夫婦の理に適う友達を得てくれたことが嬉しくてたまらないザマス。貴女も食べるザマスか？ ほほほほ」

その瞬間、私の心は地獄の釜戸へ投げ入れられ、心臓が煮えたぎるように波打つのが判った。

こんな凄まじい殺意を感じるのは……………

そう、奴を刺し殺したとき以来かもしれない。

とうとう声を荒げるしかない私。

「娘が……こんな小さい体した娘が！ 自分のことなんか二の次にして友達や兄さんのために必死で戦おうとしてんだよ！！ それなのに、それなのに……こんな御馳走カツ喰らって、お祭り気分味わってんじゃないよッ！！」

ガシャーン！

私は御馳走を豪快に床にぶちまけてやった。

当然、母は立ち上がって激怒する。

「ちよつと貴女！ 突然家に入り込んで来て何してるザマス！？ これ以上なにかしたら、出るところに出るザマスよ！！」

「ああ！ 出たけりゃ出ればいいでしょーが！ 何にもしなくたってタダメシ喰わせてくれる所にブチ込んでくれるならねえ、こつちから土下座でもして頼み込みたいくらいだわ！」

「な、なんザマスの貴女は！？」

「でもねえ、私はタダじゃあブタ箱には入らないよ！？ 巫彩が、あんたの捨てた息子のことをどれだけ想ってるか、それをあんたに思い知らせてから入ってやる！ 見な！！」

私は料理が落とされて空っぽになったテーブルの上に、巫彩の携帯を乱暴に置いた。

「巫彩の、携帯……？」

「ああそうですよ！ 巫彩が《真紗耶》って奴に書いたメールを、一字一句とばさずに、丁寧に丁寧に読んでみなさいっ！」

「これがあれば、巫彩が何を考えていたのかが解るザマス！ ワタクシずっと、あの子の気持ち解らなくてどれだけ苦しんだか！」
まるで芸能人のスキャンダルが載った週刊誌に喰いつくかのよう
に、眼を光らせて娘の携帯を手取る母。

……ずれている。普通母親というのは、娘が考えていることが解らなかつたら、何としてでも娘の心と向き合って、何とか理解したいと願うはず。多分、それすらも面倒くさくてやらなかつたんでしよう。

けれども今は、そのことを突っ込むより、この母に娘のメールを読ませるほうが先だ。

……メールを読む母の顔は、何の感銘も受けていないようにも見えるし、読むのに必死で表情を変える余裕もないようにも見えた。やがて読み終わると、母は携帯をそっとテーブルに置いて俯く。

「……………」

「巫彩が毎回毎回メールに書いていた貴女の息子さんへの心配！それは本来、貴女がすべきことだったのではありませんか！？」

「……………」

「実の母親が塵芥ちりあくたのように捨て放った木泊君を！ 義理の妹の巫彩は一日も忘れることなく心配しているんです！ 貴女が息子を想うよりずっと強く、巫彩は木泊君を想っているんだ！ 貴女は巫彩を教育しておられるつもりかもしれませんがねえ、貴女がた夫婦のしていることは教育でも育児でもない！ ただのファッションだ！」

私の熱弁に、流石の母の声もとうとう震えだす……

「ファッション……ですって？」

「ああそうだ！ 貴女がたは自分たちのステータスのために子供を生んで、その第一子が思い通りに育たなかったものだから、まるで時代遅れの服から流行りの服へ着替えるように木泊君を捨てて巫彩を引き取った！ そして巫彩がいい子に育ったなら、今度は巫彩の友達にまでいちゃもんを！ 一体どこまで、あんな小さな子供にワガママを押し付ければ気が済むおつもりですか！？」

「ワタクシはそんなつもりは……」

この期に及んでまだ戯けた事を！ 私は自分の顔が鬼のような形相になっていくのを感じた。

「お母さん！ 貴女は木泊君を自分たちの《失敗作》だと思っておられる。そしてその汚名を返上するために巫彩を引き取り、《この家の見栄えを浴して頂戴》《ワタクシたちの誇りになって頂戴》と頼んでばかりいる！ いい年をした大人二人が！ 一体いつまで十四歳の小さな女の子に甘えているつもりですか！？」

「くっ……」

「兄や親友たちの悩みだけでなく、親のエゴにまで付き合わされて、巫彩は四六時中、心の休まる暇がないんです！ このままでは倒れておしまいになりますよ！？」

「そもそも木泊がちゃんと学校に通っていてくれたら、ワタクシとてエゴを子供に突きつけるようなことはしなかったザマス！ どうしてなのザマス！？ 学校、楽しい場所でしょう！？」

……もう憤慨を通り越して逆に冷静になる私。

「ふう、お母さん、近現代の学校がどれだけ腐敗しているか、貴女

は解っておられないようだ。誰にも言うまいと思っていたことですが、私は中学時代、付き合っていた彼と体育倉庫で男子と、まあ、けしからんことをしていました。そしたら、あるうことかその倉庫には隠しカメラが仕掛けてあって、それを高校の映画上映会で、アニメ映画の代わりに垂れ流されましたよ。まあ下らん幼児向け映画よりは私の濡れ場のほうが見ごたえはあるでしょうが……なぜ生徒らがそんなことをしたか、理由は《面白いから》ただそれだけだった。これが平成の高校です。木泊さんの学校も、似たようなものだったんじゃないですか？」

話したくないことだらけの私の人生、その中でも特に後ろめたい出来事を、実に淡々と流暢に告白してしまった。

「そんな……………」

それでも煮え切らない態度の母に、再び私の口調は熱を帯び始める。

「木泊君はねえ、腐敗した学校でイジメに遭い、首田宗志教からは理不尽に攻撃され、おまけに両親まで自分を失敗作だと罵ってくる！ 三重の地獄にたった一人で落とされてしまったんですよ！ そりゃあ、生きていられなくなりますって！ 両親のため、一生懸命これ以上の迷惑をかけぬよう、一度は自ら消える道を選んだんです！ そんな息子の気持ちも考えず、貴女がたは厄介払いをするように、意識を取り戻した木泊君を母萌さんに預けた！ 木泊君がどれほどの想いで居るか、想像したことはありませんか！？」

「……………」

「これをご覧下さい！」

私は呆然とする母の前に今度は自分の携帯を叩きつけ、木泊さんがSweet Seasonの厨房で料理の腕を磨いている姿を写した写メを見せてやった。

いつか厨房を訪ねたときに、あんまりにも凛々しくて健気な表情をしているものだから、こっそり撮らせて頂いたもの。

「こ……………こは……………」

「ああそうですよ！　これはあんたがお腹を痛めて産んで、それ
気に入らないからといって勝手に捨てた子供だ！　木泊君がどうし
て、こんなふう料理を頑張っているかお解りですか！？」

「……………」

「貴女に許してもらったためですよ！　ボクがイチニンマエの料理
人になれたら、お母さんだってきつと、ゆるしてくれるよね　って
ねえっ！　それなのに貴女がたはなんですか！？　木泊君が貴女の
ために健気に努力しているときに、巫彩さんの友達に下らないイチ
ヤモンを！　情けなくはありませんかあっ！？」

私は木泊さんの透明な愛に想いを馳せ、とうとう泣き崩れた。

このことこそが、私がさっき巫彩に言いそびれた、

母萌さんが拵えた料理よりね、木泊さんの拵えたのを店で出した
ほうがウケが良かったんだってさ。それにねえ……

という言葉に続く事情に他ならない。

言うべきことは全て言った私は、散らばった食器の破片や料理の
残骸を一人で片付け、十数分かけてそれを終えると、母親に頭を下
げながら万札を何枚か差し出した。

「手荒なことをして申し訳ありませんでした。これ、ささやかです
が弁償代です」

「結構ザマス。若い人からお金を受け取るほどワタクシ、落ちぶれ
ておりませんゆえ」

その棘のある台詞と気高い口調が、どこことなく義理の娘の巫彩を
想わせるのだった。

最後に、巫彩の顔を見て帰ろう。そう思い、二階へ赴いて巫彩の
ドアを開けると……

「志穂！　志穂お！」

なんと今度は巫彩が私に駆けてきた。柄にもなく、ドア付近の壁
際に置かれた観葉植物につまづきながら。

「巫彩？ どうしたのよ貴女らしくもない！ さつき私を罵ったときみたいに、しゃんとしなさいよ！」

「だって、ううっ、あたしのために、誰かがこんなふうになつてくれたのって、生まれて初めてだったからあっ……！」

その言葉がガラス片のように私の心に突き刺さる。

親身になつてくれる人が誰も居ない世界で育ってきたこの少女。

普通なら、グレるか歪むかするところ。それか、首田宗志教の連中のように、他者を貶めることで自分の価値を保とうとする人間になるか……。

それなのにこの巫彩ときたら、……恐らく自分と同じ想いをする人を出したくないからだろう、大切な人を体当たりで守り、助ける！ そんな少女に成長したわけで。

それを思うと、私は愛しさといじらしさで胸がいっぱいになった。

「巫彩、貴女今までよく頑張った！ほんとに凄いわよ！グレも歪みもしないで、それどころか、人助けばかりする女の子に育ってさ！ ってく、こんなちっちゃな体で！」

「志穂……」

「そうよ、これからは天下の柴門志穂様がついてるんだから！ なにか困ったら私に相談してよっていうかあのコードは何？」

私はとつさに巫彩から離れて、倒れた観葉植物の鉢から延びるコードの前に立った。

コードは観葉植物にまとう蔦つたのように、葉々の隙間から垣間見えていて、倒れた衝撃で植物から浮き出してしまったことが、私に見つけられる原因になっていた。

コードを辿ると、片方の先は葉っぱの裏にセロテープで付けられていて、それはファイバースコープみたいな形をしている。そしてもう片方は……鉢の土の中に埋まった、四角い機材につながっていた。

「巫彩、貴女、自分で自分を盗撮して楽しむ癖とかあったりする……」

……？」

「なにそれ、慰めてくれたかと思ったら、今度はあたしを変態扱い？」

憎まれ口を叩きながら部屋に入った巫彩は、私の手に持ったものを見て震えだした。

私は観葉植物から機材を剥ぎ取ると、母親の元へ走る。

再び台所。

呆然と座りつくす母の前に、私は機材を叩きつけた。

「今度はなんザマスの？」

「これは、巫彩の部屋の観葉植物に括りつけてあった物です。心当たりは……？」

「なんザマスのこれは？ カメラと……？ 発信機！？ ……まさか、まさか主人が！ ……そ、そういうばあの人、最近、巫彩に妙な視線を投げかけたり、色づいてきた巫彩の体を褒めることが多くなったザマス！」

母は立ち上がると、慌てて台所を出る。

私はそれを追った。

廊下へ向かうと、母はそこに設えられた物置を漁っていた。

「お母さん、それは……」

「主人のコレクションとやらザマス！」

母の漁るのは、『映像で見る動物図鑑』という類の白いプラスチック・パッケージ。

「コレクション……」

「おかしいと思ったザマス！ 動物の《ど》の字にも興味のなかったあの人が、突然こういったビデオを集めたザマスから！」

そして漁ったビデオを、リビングのテレビで再生……

思ったとおりのものが、そこには記録されていた。巫彩のプライベートな生活の姿が、リアルタイムで実に鮮明に……。

「何があつたのよ？」

軽い歩調でリビングを訪れた巫彩に、母は問答無用で土下座をする。

「巫彩！ 巫彩え！ 申し訳ないザマス！ ワタクシがついていながら、あの人にこんな物を撮らせるとは！」

「お母さん？」

そこからはトントン拍子で話が進んだ。

母は早速、夫の長期に亘る悪事を通報。夫は外食先の飲食店から出たところを御用となつたらしい。

そして……、母は夫や警察と話し合うとかで、

「朝には戻ると思うザマス。くれぐれも巫彩をよろしく頼むザマス」
私に深々と頭を下げると、母は警察へと向かった。

そう……夜に娘を一人で残すとなると、母親ならば知り合いに娘を頼むくらいの安全策はとるはず。

それなのに紗那とかいう娘の両親ときたら……呆れ果ててもものも言えない。

そこへゆくと、このザマス母は日常生活における最小限の常識は持っているのだと、ほんの少し安心した。

馴染みない家に残された私。今日はここへ泊まることになってしまった。

母が去って一時間。私はずっとずっと、廊下とリビングの狭間に座り、悪夢から目覚めた子供のように泣き続ける巫彩を抱き締めていた。

義父にあんなことをされたのがショックだから泣いているのか、それとも私の母への演説が嬉しかったから泣いているのか、それは判らなかつたけれど……。

そういえば私は、《あの夢》の中でも、真紗耶をこんなふうに抱き締めていたっけ。

やがて、巫彩は私からそつと離れた。

「ありがとう、志穂。さつきは、《失恋程度で不登校になった薄っぺらな人間》とか、実到的外れな中傷してごめんなさいね。そんな事情があるなんて知らなくて……」

「そ？　じゃあ昨日あんたが、私からカツさばって川に投げ捨てた錢こ、耳そろえて返して頂戴」

巫彩に手を差し出す私。半ば本気である。

巫彩は拒むのかと思ったら、立ち上がってそそくさと自室へ消えた。

そして白い袋を持って帰ってくる巫彩。

「これ、昨日、あたしが投げ捨てた金額の三倍は入ってるわ……。あたしさ、小さい頃にお年玉とか色々貰ったけど、欲しい物がなんにもないから使わないでいたら、こんなに溜まっちゃった」

「じゃあ、ありがたく頂戴するね」

私はアツサリと巫彩から袋を受け取り、中身を確認した。……これで例えいいDVDが撮れなくても、一週間は果音に殴られなくて済む。

真紗耶に連絡してここへ来てもらって、札束をあの校舎跡へ届けてもらえばいい。

そんなことを考えていると、まさに巫彩が、

「ねえ志穂、貴女は、どうなの？」

などと訊いてきた。あつさりと金を受け取った私を不審に思ったのだろう。

「あ？」質問の意図は解っていたけれど、敢えて私は「どうなのって？」と訊き返す。

巫彩は私の隣に無造作に座る。

「志穂、貴女どうして、そんなにお金が必要なの……？　ねえ、さつきはあたしを徹底的に罵って、今はあたしを助けようとしてくれた。貴女がそんなに複雑な人間なのって、貴女が凄く複雑な事情を

抱えてるからなんじゃないの!？」

……!! 相も変わらず鋭い女だ。仕方がない

「昨日は、私と真紗耶の間に貴女なんかに入ってきて欲しくなくって、それで貴女に私たちから離れるって言っただけ……今は、貴女のために言っね 私と真紗耶には、深く関わらないほうがいい……」

私は恐らく生まれて初めて、『心の底からの真剣な顔』というのを
して、巫彩にそう告げた。

けれども巫彩は、軽い溜息で受け流す。

「はあ……ねえ志穂、よくドラマなんかでも、事件に首を突っ込もうとする天真爛漫な主人公に、陰のあるもう一人の役が『この事件には関わるな。お前に死んで欲しくない。』って諭す場面を見かけるけど、あたしは『関わるな』って言われた時点で、その人はもう、事件に大いに関わってると思う」

「確かにそうだけど! でも巫彩、貴女に覚悟はあるの!? 私と真紗耶がどんな人間で、どんな人生を送ってきたかを知ってもたじろがない自信がある!? 私と真紗耶はね、深い深い地底に居るの。地下鉄の階段を下りるような感覚で首を突っ込んだら、とんでもない深淵に足をさらわれるよ!？」

すると巫彩は、戸棚のガラスに映った自分を見つめた。

「でも、あたしだって既に、地底に足をすくわれてるわよ」

巫彩の甘さに、今度は私が溜息。

「はあ、地底だったって貴女の場合は、義理の両親が変な奴らで、お兄さんが不幸な目に遭って、友達が全員複雑な問題を抱えてるってそれだけでしょ? もう、そういう次元じゃないのよ、私と真紗耶の居る場所は。巫彩、貴女は地球の表舞台で生きていける可能性を充分持つてる。その大事な可能性を奪うようなこと、私も真紗耶も、したくない……出来ないよ」

ところが巫彩は驚くというよりは、『それは承知してるわ、でも……』と言わんばかりの清^{しん}とした決意を感じさせる顔をしていた。

「志穂……あたしね、ずっとずっと、自分が誰かを助けることはあつても、誰かが自分に手を差し伸べてくれることはないって思ってたし、それで充分幸せだと思ってた。けど志穂、貴女はそんなあたしのために必死になってくれた、最初の人なのよ。だからあたしは……」

その気持ちは解らないでもない……私は最終確認をする。

「じゃあ、何を聞いても、絶つっつ対に私たちからは身を引かないと誓いなさい。今ならまだ引き返せると、それだけ言っておくわ。私たちの事情を勝手に聞いておいて、それで今度は怖くなったから自分は去りますなんて、そんなことはこの私が絶対、死んでも許さないから」

これは実社会でもネットでもよくある話（特に顔の見えないネットに多い）だけれど、最初のうちはいい顔をして付き合つて、でもいざ相手の抱える事情を知ると徹底無視！　そういうパターンを何度見てきたことか！　本当に虫唾が走る！

ところが巫彩は得意気に挑むような表情で、実にすがすがしい宣言をしてくるのだつた……

「そのときは遠慮なく、あたしのことも 刺し殺すといいわ」

この娘、私がレッドラムであることも知っている。半分はニユースやネットによって、もう半分は真紗耶によって、だろう。

真紗耶にここへ来るよう連絡して、時刻を見ると、まだ十八時半。刺し殺されても構わないというなら、私も、この女に何もかも話してしまいたいという気持ちだが、なぜかどこから湧き出てくるのだった。その理由は、今は分からなかったけれど。

「巫彩……何がいい？」

「え？」

「何から聞きたい？」

「最初から……」

「わかつた……」

私は、この台所と廊下の狭間という中途半端な場所で、誰にも話したくない過去を語りだすのだった……………

【Shiho's viewpoint】愛は突然に（後書き）

3ねんBぐみサイモン先生〜

【Recollection of Shihō】宿命の出会い

あれは私が、恋というものに身を染めるずっと前……小学四年生になっただけの、ある日の下校途中のこと。

友達と別れ、一人になると私は、小さな林を歩くことになる。赤いランドセルを背負った私には、その林がいつも少し恐ろしげに思えたものである。

そしてそして……その日は、ただでさえ少し怯えて歩く私をあつと驚かせるかのように、足元から猫のような少女の音が響いてきたのだった。

「アホ毛！ 一人で帰るの？ 危ないね」

見下ろすとそこには、大きな目と座敷わらしのような肌が印象的なガキが、土の地面にしゃがんで居たのだった。

いたるところがフリルやリボンで飾られた、パフスリーブのワンピースがよく似合うと思った。（ちなみにこの時点で既に私の頭のてっぺんには《アホ毛》が発生していた。）

その美麗で、どこか常人とは違う雰囲気　よく見ればこの現実の風景に全く溶け込んでいないではないか？

私を見上げるその表情は、まるで異次元に迷い込んだ幼子が助けを求めているようにも見える。

とはいうものの、その言動からして私は、実に生意気なガキだと思った。こういうのとは関わりたくない。

私が無視して通り過ぎようとすると、ガキは私の背に声をかけてきた。

「無視？」

声をかけられたのでは仕方がない。

「一人で帰る？ この天下の柴門志穂様か？　おいガキ！　素っ頓狂なことを言っちゃいけないよ？　友達とは向こうの曲がり角で別

れたんだよ！」

「そう。なら君に用はない」

ガキはそう言っただけで林の中へ消えようとした。慌ててガキのフリルをつかむ私。

「おいガキっ！ あんた何者！？ 前から私を見ていたらしいけど！？」

「君だってガキ」

私はコイツをガキと言ってしまったけれど、確かにこいつの言うとおり、私もそのときガキであった。しかししかし、コイツにはどうも甘ったるい《ロリ》っぽさがあり、どうしても上からの視線で見えてしまうのだった。

「ああ悪かったねお嬢ちゃん！ あんた一体……」

私が言い終わる前に、ガキが言葉を遮ってくる。

「お嬢ちゃん！？ に見える？ 本当？」

ガキはしつこくそう問いながら、私の周りをウロウロ。さすがに笑うしなくなる私。

「はははははは！ 面白いガキね！ 名前は？」

「ま・さ・や」

名札を見せてくる真紗耶。

「ひゃー、なんなの、その男みたいな名前！」

今度は私が真紗耶の周りをウロウロ。

「しつれーな……私、れっきとした男」

「あひゃひゃひゃ、冗談言っちゃ……」

私はこいつが男か女かを《確認》した。まあ、子供だから出来ることだ。

「……あら、冗談じゃなかったのね。すまん」

「わかればいい」

「ところで 真紗耶とかいったね？ ガキがこんなところで何してるのよ？」

私が何気に問うと、真紗耶は林の中へ入って行った。

「ウサ晴らし。暗い顔じゃ家へは帰られないから」

とつさに真紗耶の後を追う。

「ちよつとちよつと、危ないじゃないのよ一人で入って行っちゃ！」

「ここはいい場所」

「……ウサ晴らして、なんのウサ晴らしなのよ？」

その問いに、走っていた真紗耶は暗示にでもかけられたようにハタリとしゃがみ込んだ。

「学校。どこもかしこもウルサイ子供ばかり……。けど、母に暗い顔は見せられないし」

「それで毎日ここで一人遊び？」

「そう……」

……恐ろしいと思っていた林の道。しかしこうして林そのものの中に入っていると、意外にも心が落ち着くものだ。

それに私も、学校で少々嫌な目に遭っていたというのもあって、この寡黙な女装少年に感情移入してしまっていた。

「おい真紗耶。そんなにつらいんならさ、私と毎日、ここで遊ぶ？」

「同情なら要らない」

ツン、と、そっぽを向く真紗耶。けれども私は、なぜだか知らないけどこのガキに興味を引かれて仕方なかったのだった。

「まあ、つんけんすんな。じゃあ、なんで私に声かけたのよ？ 私が、あんたに似てたからでしょ？」

「そう。その角で友達と別れたのかもしれない……。でも、一人で歩く君、いつも顔が暗かった」

すると私は、非常にマセたことを言いたくなかった。

「暗い者が明るい者と付き合っても明るくなれないけどさ、暗い者同士が仲良くすれば、互いに明るくなれる、そう思うよ。私はね」

私の名言に真紗耶は目を輝かせ、ニコッと、極上の笑顔を見せる。

「あ、ありがとう。……そうだ。君、名前は？」

「柴門志穂だよ！」

名前を言っと、真紗耶は立ち止まって首を傾げた。

「なんだ、《ふみ》じゃないんだ」

またドラマネタが飛び出す。

「ドラマの見すぎよあんた！ どうせ今やってる『同・級・生』にハマってるんでしょう？」

「凶星」

「あのねー真紗耶、凶星って言葉は自分で言うもんじゃないのよ」
「うるさい」

「なんだってえ！？」

「やるか」ボソッとケンカを売ってくる真紗耶。

「望むところよー！」袖をまくる私。

これが、私たち二人にとって最初の《仲の良いケンカ》だった。
…。

と、そこで巫彩が口を挟んでくる。

「うわ。『同・級・生』なんて、あたし再放送で観たけど、ずいぶん古い感じのドラマだったわよ？ そんな頃からの知り合いなのね、貴女たち。けど、そうやってその時代に流行ったものを出してくれると話が解りやすいわ。で、そうして出逢った貴女たちは、それからすぐに仲良しに？」

「うん、まあね。学校は違ったけど、それから毎日、一緒に登下校したのよ。二人とも、全く別の意味で学校へ行くのが億劫だったけど、二人で歩く時間だけは平和だった……。中二くらいまでは、そういう日が続いたわ」

私が昔を思い出して遠い目を見ると、巫彩はお茶をコップに注いで氷を入れて持って来、投げ出された私の足の前に置いた。

「喉カラカラでしょう？ お母さんのこと怒鳴ったり、過去を話したり」

「ありがとー。そうなのよ。もうカラカラ」

私はお茶を一気に飲みほすと、今度は出逢いの日から四年後、即ち二人が中二になった頃の話が始めた。

「おい真紗耶、最近元気ないお（、、）」

「そう言ってるおしほだって、ローテンションだと、思う」

二人で歩く学校への道。私たちの朝はいつも早かった。《学校に着くまではオアシス・学校に着いてからは別の意味で拷問》という毎日だったから、オアシスのほうを長くしたいと子供ながらに話し合った結果である。

そして、この頃からだ、真紗耶が私を呼ぶ《おしほ》のイントネーションが決まったのは。

学校での苦勞がたたったのか、出逢った頃の無邪気さは私も真紗耶も失ってしまったわけだけれど、ことに真紗耶は、出逢った頃より遥かに、寡黙でミステリアスな子供になっていたのだった。

私と真紗耶の外面的なスタイルが決まったのもまた、この頃からである。私はセミロングを愛好するようになったし、真紗耶はそんな私に対抗してか、前髪だけ洋風にギザギザに下ろし、後ろ髪は完全な御河童にするという、独自の髪型を編み出していた。

しかししかし、そんな真紗耶のお洒落心を素直に褒めてあげていたのは、母親と、この私だけなのだった。

「あ、おしほ、ほら、春女苑」

「あ、ホント。ねえ姫女苑と春女苑ってどう違うの？」

「春紫苑は蕾のとき、下を向いている。姫女苑は蕾のとき、上を向いている」

「へえ」

そんな他愛のないことをしながら、出来るだけ長いこと一緒に居たい私たちなのだった。せめて学校が同じだったらと、何度そう思ったことか。

私はその場にしゃがみ、春女苑を憂鬱な眼差しで見下ろしていた。

「春女苑の花言葉は《追憶の愛》だって」

「ねえおしほ、愛は追憶になんてならない。っていうより、想い出に変えられないのが本当の愛だと思う」

私の隣にしゃがみ込む真紗耶を見て、私は地べたにゴロン。

「あちゃー。そんなこと言ってるから、村八分にされるのよ、あんた。最近、どんな状況が悪化してるんじゃないの？」

真紗耶はその問いには答えず、私の瞳を覗き込んできた。

「おしほだって、最近、暗い。私たちが出逢った頃も、少し暗かったけど、私と、仲良くなってから、少し、元気になった。それから、ずっと、元気だった。でも、二年になったら、また、暗くなった。クラス替えて、何かあった？」

私は立ち上がり、線路と道路を隔てる灰色の柵を掴む。

「私の小学校、生徒の道德のためとかいって、一クラスに一人ずつ、知的障害者の子を置いてたの。……あんたと出逢った小四の頃よ、あの子が、私に、ちよっかい出してき始めたのは……嫌らしい意味でね。それで、その子の親の希望で、中学も普通の所へ行かせたいとかで。……中学も私と同じ学校になったの。それでとうとう、この二年生で同じクラスに」

告白したとたん、私の悔しさ音で表すかのように電車が通過。

真紗耶がDVD撮影の際、私のお尻だけは触ってこないのは、まさにそんな私のトラウマを配慮してくれてのことだ。

「そ、そんな……っ！」真紗耶も立ち上がり、電車を眺める私を真横から直視する。

「小学でも中学でも、クラスメイトや教師たちの言うことは同じ……」

……《障害者なんだから仕方がない》その一点張りよ」

「そんなこと言ったら、おしほはどうなるの？ 《障害者なんだから仕方がない》っていったって、その子のせいでおしほが苦しんでることには変わらないのに……」

「真紗耶、ありがと。そういうふうに言ってくれる君が居てくれるだけで、私は救われてるよ。ホント、同じ学校だったら救われたの

にね、私ら」

「おしほ……私も……そう思う……私……学校では……誰からも人間扱いされてない……あそこに居ると……自分が何なのか……判らなくなってくる……ここにおしほが居たらどんなにいいだろう……って……いつも思ってる……」

「そつかあ。私は少なくとも、人間扱いはされてるからなあ……但し、《障害者差別をする最低な女》としてね」

「……おしほは……悪くない……」

なぜかその言葉が、きゅんと、この胸を絞るようだった。

「……いいなあ……それ。もう一回……言つてよ……」

「おしほは、悪くない」

「もう一回……うつつ」

私がある場に崩れ落ち、柵にしがみついて嗚咽しだすと、真紗耶はこの肩を抱きながら……

「おしほは、悪くない」

何度も何度も、その言葉を聞かせてくれたのだった。

そのまま電車を何本か見送った後、再び歩き出す私たち。

「でもさ、小五、小六の頃に、私のクラスに来た障害者の子たちは、いい子たちだった。五年の時の子は、凄く優しい女の子。クラスのみんなが、その子と話すだけで幸せになるような。それで、六年の時の子は、絵を描くのもオブジェをこしらえるのも楽器を演奏するのも超一流な天才少年でね、いつもみんながその子を囲んで、感激の声が絶えなくて、クラス全体が明るかった……」

「そう……」

「……でも今は、また小四の頃に逆戻りよ。授業中だろうが休み時間だろうが、クラスみんなでその子にビクビクしながら暮らして。暴行を受けて、救急車沙汰になった子も居る。なんでこんな想いしなきゃならないのよ？」

「まあ、いい。戦場に行くと思えば」

その一言に私は無性に悔しくなった。

「どうしてよ真紗耶！？　どうして平和な世の中だったのに私たちが戦場気分を味わわなきゃならないの！？　どうして……、あの子は障害者ってだけでみんなに庇われて守られて、それでどうして誰を傷つけるわけでもない真紗耶は村八分なのよ！？」

「おしほ、ありがとう。でも、もう、私のために怒らないで」

「真紗耶あ……」

「おしほ……」

私と真紗耶は強く抱き締め合った。

ところがその舌の根も乾かぬ内に　再び歩き出した私たち、ふと私は、線路の向こうを歩く少年に目が行った。

「ムムツ、あの人素敵ね！」　目を全開にしてその少年を見つめる私と、

「また始まった。まあ好きにすれば」　そんな私を冷めた目で見つめる真紗耶。

ああ、真紗耶は私の心を理解してくれている、と思ったのだった。

【Shiho's viewpoint】後奏

「え？ 理解してくれてるってどういうこと？」

また巫彩が口を挟んでくるけれど、まあ無理もない。

「巫彩……私はね、小四と中二の頃そういう目に遭ってたわけだから、学校中で、その障害者の子と私との噂が耐えなくてね。大変だったわけよ」

「酷い……。大方、貴女が《彼が一方的に猥褻な行為をしてくる》って訴えても、教師にも生徒にも、《相手は障害者なんだから御手柔らかに云々》みたいに跳ね返されたんでしょう？」

さすがに学校で色々な想いをしている巫彩だけあって鋭い、と思った。

「そうよ？ だからね、とにかく別の男と付き合って、彼との噂を掻き消したいっていうのが、中二の私の想いだった。素直にさあ、真紗耶と付き合っちゃえば良かったのよ。でも真紗耶は女の姿だから、妙にそういう関係になるのは敬遠しちゃってさ」

「それが、のちに大きな悲劇を生んだ……違う？」

「巫彩、あんた本当に鋭すぎるよ。……そうなの。なりふり構わず、真紗耶とき、子供の頃からラブラブしちゃってれば、もしかしたら私たちはこんなにも堕ちずに済んだかもしれないね。はあ」

ため息をつきながら時計を見ると、なんとまだ話を始めてから三十分しか経っていなかった。結構、長話をしたつもりだったんだけれど。

「で、その続きは？」

急かす巫彩を、私は少し睨む。

「お茶！ もう一杯！ あんたの母さんの淹れたお茶、美味しい」すると巫彩は冷蔵庫に向かいながら、実に迷惑そうな困り顔をした。

「あーもう、あの母がそんな気の利いたことするわけないでしょう

！？ あたしが淹れてるの！」
「ひゃあうまい」

ともあれ、これにて、真紗耶、私、そして巫彩。この三人が、この日本社会の暗部を舐め尽して生きている人間だということが今、巫彩と話したことで一層、浮き彫りになっていた。

ちょうど真紗耶の鳴らすチャイムの音が、このだだっ広い家に響く。

玄関へ急ぐと、私は真紗耶に札束を渡した。

「これ、お願いね」

「あそこへ行くのは久しぶりです。緊張しますね」

「まあ頼むよ。私は今日、ここを離れられないからさ」

「大変なことになりましたね、巫彩さん」

真紗耶は家の奥のほうを気にしている。……たぶん巫彩の顔が見たいんだろう。

けれど巫彩は茶を淹れていて出てこない。

「心配すんな真紗耶。あの母親も少しは心を入れ替えるみたいだし。大丈夫よ」

「そうだいいですけど……では、私はこれで」
名残惜しそうにドアに手をかける真紗耶。

「気をつけてよ？ あそこら辺は変な輩やからがウロついてるからさ」

「はい……。では」

「また明日」

明るく手を振るその裏で、私は強く強く願っていた……この真紗耶が、あの校舎跡で今起こっている惨劇を突き止めたりしないようにと。

【Shiho's viewpoint】後奏（後書き）

五章はこれで終わりです。

今一つ盛り上がりに欠けるといふか、クライマックスへ辿り着きたいのになかなか辿り着けない……そんな作者のイライラを感じさせてしまう章になってしまったと思います。

【Shiho's viewpoint】前奏

「志穂、あたしの淹れたお茶、美味しいって言ってくれて嬉しいわ」
「そーよねー。あの母さんじゃ、美味しいなんて言ってくれなさそうなもの」

すっかり打ち解けた二人。

真紗耶を見送った後はきちんとテーブルに向き合って座り、私は巫彩が淹れたお茶を、今度は一気ではなく丁寧に味わいながら飲んでいった。

ところが巫彩は私の過去噺の続きが気になって仕方ないらしく、
「それでさあ……」などと急かしてくる。

「ああ分かっているって。ん、どこまで話したっけ？」

「中学二年生。障害者による貴女への猥褻行為。悪しき噂。恋を以って愚かな噂を掻き消す」

巫彩が無造作にキーワードだけを挙げると、私は簡単に思い出すことができ、お茶を半分ほど残したままコップをテーブルに置き、
噺を再開した。

「その線路の向こうを歩いていた少年だけど、私は彼をすぐにモノにした。そしたら私と彼は、たちまち二年生中の噂になって、私はほっと胸を撫で下ろしたものだ。けど………」

【Recollection of Oshihō】精神崩壊

登校途中、真紗耶に「おはよう！ お先に！」と声をかけて駆けて行く少女が居た。

「ち、ちよつと真紗耶、あの子、誰よ？」

「ただ、私を村八分にしてないだけの子」

「仲いいの！？」

少し慌てる私を憂鬱に見つめて、投げ捨てるように首を横に振る真紗耶。

「まさか。ただ、私なんかどうでもいいだけ。だから挨拶する。みんな、私を嫌うか、私に無関心か、そのどっちか」

「ねえ真紗耶、君が村八分にされるのって、君がそんな気持ちでいるからなんじゃないの？」

たまには気まぐれに平凡な言葉を吐いてみた私を、真紗耶は試すような目で見つめ……

「私が そんな気持ちでいる 人間でも、おしほ、君とは仲良くなれたけど？」と鋭い指摘をしてきた。

「あ、まあ、それはそうだけど。真紗耶の志が間違っているなら、どうしてこんな素晴らしい美少女と友達になれたのか、って、そういうことか」

「うん。……で、おしほのほうはどう？ 嫌な噂、もう消えた？」

「消えたよ。噂なんて無責任なもんね。今じゃもう、二年全体が私と新しい彼との噂で持ちきりよ。私とあの障害者の子を結び付けて考える奴なんかもう一人も居やしない。でもね、機会さえあればあの子、私のお尻を触ってくるし、それに、彼と別れるようなことにもなったら、また……」

私の表情に陰が差す。すると真紗耶の声が背中に突き刺さった。俯き歩く内、真紗耶を知らぬ間に追い抜いてしまっていたらしい。「おしほ、きつと大丈夫。いざとなったら、私と噂になるといい」

その救いに満ちた言葉に、私は引き返して真紗耶を抱き締めた。

「ま、ざや、ーっ！！ 頼むわよ！？ 私、最後には真紗耶しか居ないんだから！」

「わかってる。わかってるよ、おしほ」

真紗耶はそう言ってくれたけれど、私は心の中に立ち込める、言いやうのない不安の霧を払い除けることが出来なかった。

実は私は、彼とは上手くいっていなかったたのであり、春休みになる頃には、ついに破局を迎えた。けれども時期が春休みだけあって、私は《今で良かった》という想いだった。

三年生になればクラス替えがあり、さすれば障害者の子とも縁が切れるであろう、と。

ところが、である。

中学三年生の一学期が始まった日から、私と真紗耶は《笑う》ということを忘れてしまう。

一学期・二日目の登校日……

「おしほ…… 災難だったね。まだおしほの地獄が続くなんて……」

そう、私はなんと、二年連続での障害者の子と付き合わねばならなくなったのである。

「うん。昨日もさ、一日目早々、あの子、私のお尻を揉みしだいてきたし……、しかも噂を消すために付き合った彼とも別れて久しいから、また学校は私の針の筵と化しちゃったわよ」

「そう……」

「けど、真紗耶こそ、そろそろ限界なんじゃないの？ 唇、青いし、春なのに、真紗耶の近くに居ると寒くなってくる」

「……………」

「ねえ、やっぱりお母さんに……」

そのワードを出すと、真紗耶は逆鱗に触れられた龍の如くいきり

立つのだった。

「言わないで！ お母様には言わないで！ 学校中に私の噂が広まってることとか、今度は教師まで私を村八分にする勢力に加わってることとか、お母様には知られたくないっ！」

真紗耶はクラス中どころか、もはや学校中の笑い者になっているらしく、しかも三年になったら教師までもが真紗耶を弾圧する勢力に積極的に加わったらしい。真紗耶はとうとう、地獄を見せられてしまったのである。

真紗耶を心配しながらも教室に着き、ふと黒板に目をやると私は私は……

「あ、あつ、あ、あ、ああーっ！！」とまず、奇声をあげた。

足がガタガタと震え、眩暈が起きたかのように景色が揺れ動く！ やがてその場に崩れ込むと、べちゃり、と足に温い水が触れた。

「ぎゃああああー！！ きったねー！！」

「中三にもなつて《ちびり》かよー！？」

クラス全体から湧く下品な歓声！

私は黒板を再び見る。夢であつて欲しいという哀しき願いを込めながら！ ところが、ところが、嗚呼っ！ 私は口から麻酔なしで異物を飲み込まれたかのような不快感を覚え……

「うっ、うっ、うっ、プバツ、おええーっ！！」

ビチャビチャ、と、排泄物の上に吐しゃ物を派手に撒き散らした。

黒板には、相合傘が大きく描かれており、左側には私の名前、そして、右側には……もはや言うまでもなからう。

「グフェツ、ど、どうっ、し、て……？」

やっとの想いで誰にもなくそう問うと、死んだ目をしたデブ少年が私のこしらえた水溜りの前に立ち、蔑むように私を見つめた。

「どうしてって、お前、あの彼氏と別れたのって、」デブは障害者の子を指差す「あの子とのことが原因だったんだろ？ みんな知っ

てんだぞ？」

「ち、ちが、わ、わたし、は、そん、な……」
すると教室中からブーイング！

「差別だ差別だ！」

「おい！ 障害者差別はするなつてどの先生も言ってるだろう！？ 障害を持つて生まれてきた子が可哀想だと思わないのか！？ それに！ こんな所でシッコ漏らしてゲロ吐いて！ 柴門のほうがつぽど知恵遅れだろう！？」

「そうだ〜そうだ〜！」

「僕なんかその子に蹴られて殴られて、救急車で運ばれたよ！ それでも僕はその子と仲良くなるうって頑張ってるよ！」

ああ、障害者の子にボコボコにされて救急車沙汰になった生徒まで、私を責めてくる！

あんなに頑張つて、好きでもない男と付き合つてまで、変な噂を掻き消そうと必死で生きてきたというのに！ 私の努力はなんだつたの！？ 恐らく、その圧倒的な虚しさからくる脱力感によって失禁し、その絶望的な悔しさによって嘔吐してしまったのだろう。

と、そこで担任が登場。

障害者の子が騒ぎに怯え、自席で泣きながら震え続けているのを見ると、担任は彼の肩を力強く撫でる。

「泣かせてごめんね。柴門さん、何も解つてないよね！ 君は悪気があつて柴門さんのお尻を触ってるわけじゃないのに、ひどいよね！」

すると教室内がまた沸く。

「そうだ！ 先生よく言つた！」

「柴門クソ喰らえ〜！」

「障害者差別を遂行する柴門志穂に裁きの鉄槌を！」
「ウオオオオ！」

そして騒ぎを掻き分けるように、担任が崩れ込んだままの私の真

ん前にやって来たかと思うと、吐しゃ物でどろどろになったこの頬に平手を飛ばしてきた。

「柴門さん、どうして殴られたか解るわね？ …… お尻を触られてつらいのは解るよ？ でもね、あの子は君とは違うの。みんなと違って、とっても純粹なの！ 純粹だからね、そういうこともしちゃうのよ！ どうしてそういうことを解ってあげないの！？ あの子がお尻を触ってきたって、笑って許してあげるべきなの！ あの子はね、無条件に赦され、守られ、愛されなければならない存在なんだよ！」

「…… あああー……っ…… うわああああーああああー！」

叫びだす私を教師は蹴飛ばして廊下へ追いやると、ドアを乱暴に閉めて授業を始める。

生ぬるい沼の上に倒れる私。その場にはただ、この世の終わりを告げるような私の絶叫が響き渡っていた。

【Recollection of Oshihō】精神崩壊（後書き）

やり過ぎかとは思いましたが、このくらいやらないと志穂の歪んだ性格に説得力がなくなってしまうし、次の章で回想する事件（ブローグのあれ）にも真実味がなくなってしまう。よって容赦ないタッチで描かせていただきました。

【Shiho's viewpoint】間奏1

「いやああーっ!!」

巫彩は身を切り裂くような叫び声をあげたかと思うと、私に土下座をしてきた。

「あ、巫彩!? どうしたのよ急に!!」

「志穂!!! あたしを許してーっ!!!」

巫彩は、ついさっき私に言ったことを気にしているらしい。

「巫彩……よしよしお(^^)」

私は椅子から下りると、巫彩を優しく抱き締め、その利発なツインテールを撫でてあげた。

やがて、真紗耶からメールが届いた。私は巫彩を抱いたままそれを読む。

「柴門さん、お金、果音さんへ届けてきました。今、家に着いたところです。ところで、なんだか果音さん、以前にも増して疲弊なさった様子で、柴門さん以上に傷だらけで、おいたわしゅうございました。」

私が涙をこらえつつケータイを閉じると、巫彩は私の腕の中で話しました。

「志穂、それで、どうしたの……?」

「はっはは、そりやあもうね、私の中でとうとう、何かがブチ切れたわよ。新しい恋人をこしらえて、そいつとの噂で三年中を満たせばいいっていったって、《ちびりゲロ女》として、私は全校中の笑い者になっちゃったからね。付き合ってくれる男なんて誰も居なくなっ」

「志穂……」

「その次の日から私と真紗耶は、ひしと手を繋いで登校するようになったの……」

巫彩を抱いたまま、再び話を再開する私。

【Recollection of Oshihō】狂気の日々（前書き）

《昔の私》の激烈な作風に、戸惑いすら感じる《今の私》が居ます。

【Recollection of Oshio】狂気の日々

「わー真紗耶だ真紗耶だー！」

下品な女子が真紗耶に体当たりしながら駆けて行く。しかし私は状況が全く判らなくなっていた。

「私の真紗耶に触るなっ！ 私から真紗耶を奪おうたっ！ たってそうはいきませんよ！？ この泥棒猫っ！ ああああーっ！！」

私はその女子を追いかけてぶん殴り、再び戻って真紗耶と手を繋いだ。

「……………」

真紗耶は話す力もなくなっていたのだと思うけれど、このときの私はそんなことにすら気が回らなかった。

「真紗耶ッ！ あの女子とはどういう関係なのよッ！？」

「……………」

「黙ってないで何とか言え！！ あんたが別の女とくっついいたりしたら、私はもう死ぬしかないんだ！」

「……………」

「ああーっ！ あー！ あーあーあー！ あああああーああああっ！」

蝙蝠のように甲高い奇声をあげながらの登校である。

いつも真紗耶と別れる分岐点に來ると、その日の私は絶叫した！

「真紗耶！ 私の學校に來な！」

「私も…… そうしたい…… でも…… 無理……」

「きえええーっ！！ 私よりさっきの女のほうが好きなんだろう！？ 私を裏切らないでって言ったじゃない！？ うわあああああああああああーっ！！」

振り切るように真紗耶から離れて駆け出すと、やがて私は道路の隅に春女苑が咲いているのを見つけ、あまりの懐かしさに駆け寄り、

しやがみ込んで叫んだ。

「あーあああんっ！ はあああーっ！ あーあーあー！ きあああーっ！」

すると、私は変な物を見つけた。春女苑の隣に、恋愛指南書のよ
うな本の切れ端が落ちており、上に乗った小さいけれど重い石ころ
が、その紙が風で飛んで行くのを防いでいたのである。あからさま
に怪しいけれど

何気なく、私はそれを手に取っていた。そこにはこう書かれてい
る。

「世界中の人間が敵に回っても、あなただけは自分の味方だ」
そう相手に思わせることこそが、相手を独占し得る極意である。

必要とあらば、自らが陰で糸を引き、相手を窮地に陥れ、それを自
らが救い、相手を慰める

そういった方法も非常に効果的である。

読み終わると、私は高らかに笑った。

「あーっはっはっはっはっ！ 真紗耶を私だけの者にしてやる
！！ きえーっほっほっほっほっ！！」

こうして私はその日から、遅刻覚悟で《通学路を歩く真紗耶のク
ラスメイト》を狙った。

手頃な生徒を見いだすと、私はそいつに金品を手渡す。私の家は
母も祖父母も私に大甘だったため、お小遣いやらお年玉やらをたく
さん貰ったけれど、巫彩同様、何も欲しい物がなくて、そうして金
品が溜まっていたからだ。

「ねー君ー。これあげるからさあ、君のクラスの河東真紗耶って子
をもっと過激に虐めてくれないかな？ まあ今日は手始めに、廊下
で待ち伏せして真紗耶を殴る、とか」

「は……？」

とは言つものの生徒の目は既に、私が手に持った金に行っていた。これは簡単に落とせそうだとばかりに、私は調子よく要求を出し続ける。

「あとそれから、岩塚いわづかとかいう子のことも虐められたら虐めて頂戴。こつちは岩塚が自殺するほど惨たらしくね。私に依頼されたことを一言でもチクつたら、金は返してもらふよ。こうして録音してあるんだ」

「ひ、はい」

私は生徒に、レコーディング機能付きの万年筆を出し、そこにこつた契約を交わした記録が克明に残っていることを見せつけた。

また、岩塚とは、さっき真紗耶に体当たりしていった女子であり、その子が身につけていた名札を、私はきちんと見ていたのである。

今思えば、岩塚も真紗耶迫害に参加する側の者だったんだろうけど、そのときの私には、岩塚が真紗耶に気があるとしか思えなかった。そのくらい、この時期の私は気が触れていたのだろう。

そして、その結果はこうだ。帰り道で落ち合う際、真紗耶が私に、「おしほ！ あいつが廊下で殴りかかってきた！」と叫ぶ。

真紗耶に殴りかかったのは無論、私が金品を手渡した生徒である。そして私が、真紗耶を女神のように抱き締めるといふ寸法。

「真紗耶、可哀想にね。私だけは君の味方よ。いざとなったら私が、君を虐めてる奴を全員ぬつ殺してやるからっ！」

「うううっ！ おしほーっ……！」

真紗耶ってこんなに私に甘えるタイプの子供だったかしら……一抹の不審を感じつつも、こうして私と真紗耶はいよいよ一心同体と化していったのである。

【Shiho's viewpoint】間奏2

「志穂、貴女、悪女^{わる}ね」

巫彩が私から離れ、蔑みとも畏れともつかぬ異様な目を向けてくるけれど、私はそれに構わず言葉を続ける。

「そして次の日も、また次の日も、岩塚は登校のとき真紗耶に体当たりして行って 私は真紗耶への虐め依頼と同じくらい、岩塚への虐め依頼も徹底していった。当然ぬかりなく、真紗耶のほうへの虐めは《陰湿に、かつ真紗耶が自殺しない程度に》、そして岩塚への虐めのほうは《岩塚を自殺に追い込むほど凄惨に》ってお願いしたのよ」

「でも、よく生徒たちが貴女の言うことを素直に聞いたわね。いかに金品に目が眩んだとはいえ」

「元々、真紗耶を村八分にして楽しんでた生徒たちだったってこともあるし。それに、この時代は学校ってものが、サバイバルゲーム化し始めてた時代でさ、みんながみんな、自分の地位が転落しないかってビクビクして生きてたよ。けど、金さえあれば、大抵の問題には太刀打ち出来るでしょ？ 流行りの服やゲームだって買えるし。私はそういう子供の心理を利用して頂いたのよ。えっへん」

得意気に腕を組む私を、もはや薄笑いすら浮かべて見つめる巫彩。「なるほどね。それで、一番気になるのは、その《恋愛指南書の切れ端》なんだけど」

そうだ。あれは今でも不思議でならない。よくまあ、春女苑の隣に。しかも文鎮代わりの石まで置かれて。

「あれは私も本当に不思議。あの場所にあの本の切れ端が落ちてなかったら、また違った未来が私には待ってたのかもしれないけど」

「切れ端が、春女苑の隣に落ちてた……それも、重要だった気がする」

「かもね。あんな状況下で春女苑を見て、楽しかった頃を想い出し

て泣き叫んでさ、それで、その隣にあんな切れ端が落ちてりゃ、ねえ、余計に切れ端に書かれてることに洗脳されちゃうよ」

「うーん。で、結果的にはどうなったの？」

「結果的には、か……………」

【Shiho's viewpoint】間奏2（後書き）

「悪女」と書いて「わる」と読む。
懐かしいなあ。

【Recollection of Oshihō】造花（前書き）

この物語最大のキーワード「造花」を冠した章の「造花」を冠した part です。

内面的には特に重要な部分ですね。

【Recollection of Oshihō】造花

私が真紗耶を虐めさせ、傷ついた真紗耶を私が慰める　そんな日々が数週間続いた。そんなある日の下校時のこと、意外にも真紗耶が傷ついていない様子で私との合流場所に現れた。

「おしほ、うちのクラスの岩塚って子が自殺未遂した。先頭きつて私を虐げてた奴」

私は鈍器で頭を殴られたような気分だった。

「ちよつと！　なにそれ！　岩塚って、真紗耶に気があるんじゃないのかったのっ！？」

「まさか。あいつほど私を嫌ってた奴はいない」

その事実に一瞬だけ呆然とした私だけれど、すぐに明るい笑顔を取り戻した。

「……まあ、どっちみち、不幸になってくれて良かったね。めでたしめでたしだ。岩塚、虐められてたんでしよう？　バチが当たったのよイイ気味だわ」

「おしほ、どうして岩塚が虐められるようになったこと、知ってるの？」

「やばい！

「え、あ、あー、だってほら、自殺するほど生徒が苦しむことっていったら、虐めくらいしかないじゃない？　は、はは。ねえ、そんなことより真紗耶、大丈夫なの？」

「……………」

真紗耶の顔色は毒を飲まされたかのように青紫色に染まり、少し前までは痩せても太ってもいなかった筈のその体は、拒食症患者の如き惨めさを放っていた。

真紗耶と私は強く強く結びついた。けれども、これにて万事めでたしとなったか否か……その答えは否である。

万が一、私よりも更に真紗耶を守ろうとする奴が現れでもしたら、私の株は一気に落ちてしまいうわけで。さて、どうするか……？

……実は、私が拾った《恋愛指南書の切れ端》には続きがあったのである。

では最後に、相手を一生、完全に我が者にする、その方法をお教えしよう。

それは、社会から完全に疎外され責め苛まれた相手に、
　　もはや、現世にて自分を人間扱いしてくれる人間はあなたしか居ない

そう思わせることである。

相手が社会に適応しているのなら、
　　自らの手で相手を社会から疎外されるように仕組むのも一つの方法である。

なぜならば、愛の妨げになりうるもの、それは、
　　自分を受け入れてくれる場所は他にもあるだろう
　　という甘い希望だからである。

むむ、真紗耶を完全に疎外させる方法……もう策士と化した私には実に簡単なことだった。

「そろそろ、いいかな？」

「うん……？　どうしたの……おしほ……？」

そう弱々しく尋ねる真紗耶。そう、これは私の野望のためだけでなく、真紗耶の命の問題でもあるのだ。

それは即ち、真紗耶がこんな状態になっていることを、禰里さんに話すということである。

あくる日、私は学校をサボり、真紗耶の家へ向かった。

「禰里さん！　お志穂どうす！」

仰々しき門の前で叫ぶと、慌てたように禰里さんが駆けて来、門

を開けた。

この命を吹き込まれた人形のような人となり、近くで見るとやっぱり少し不気味だ。

「志穂ちゃん、どうしたのこんな時間に!？」

「禰里さんに話があるんです」

「そうでしょうね。だからわざわざ学校をサボって真紗耶の居ない時間に……まあ、お上がりなさい」

「はい……」

剛毅・勇壮・屈強を絵に描いたような私（なに醒めた目で見るのよ巫彩？）だけれど、なぜかこの日本屋敷の厳かな雰囲気と、禰里さんの怪美な佇まいの前に於いては、すっかり萎縮してしまつて素直な少女になってしまう。

けれども、今日はそうも言っていない。莊重な板張りの台所に案内され、お茶を出された私は早速話を切り出すが……

「禰里さん、ここだけの話なんですけど……真紗耶君は、学校で村八分にされて、」

と言いかけたところで禰里さんが、立ったまま涼しい顔で意外なことを言ってくるのだった。

「ええ。もう私も我慢の限界だわ。そもそも真紗耶はね、《平成の学校》っていうものと関わらせてはいけない子だったの。小学校の校長はね、もう頭の固い人で手を焼いたけれど、今度の校長はそこそこの話の出来る人。もう、校長との交渉はついているの」

「じゃあ……」私の目がギラリと閃光を放つ。

「ええ。もう明日からは、真紗耶はあの学校へは行かせないわ。というわけで志穂ちゃん、これから真紗耶をよろしく」

「はいっ!」

私は心の中でガッツポーズ。真紗耶が不登校になるのが確実なら、後はもう簡単だ。

あくる土曜日の放課後、私は学校が終わると早速、行きつけの柄

の悪い八百屋のオバサンと交渉しに行った。

「オバサン、この人参ちようだいな」

私が未成^{うみなつ}りっぱい人参を指差すと、豚を潰して黒い毛を生やしたような汚らしい顔をしたオバサンが現れる。

「あ、志穂ちゃんじゃないの？ 久しぶりだねえ。今日は一人かね？ あの変ちくりんなガキとは別れたんだね。良かった良かった」

こいつは簡単に利用できそうだ。と思った。そう、このオバサンは真紗耶のことを嫌悪している。即ち、真紗耶を村八分にしていた学校の生徒と精神年齢が同じということだ。

「今日はね、オバサンに頼みがあつて来たの」

「なんだね？」

「実は真紗耶がね」

そして日曜日、私は真紗耶と散歩をしていた。

「はあー、こんな明るい気分で散歩したのは久しぶりねー！」

真紗耶も一応、なにかから解き放たれた顔はしているけれど、常に私のことを心配しているのが分かる。

「おしほ……、おしほは大丈夫なの？ 変な噂、今はどうなってるの？」

「ああ、私ね、明日から隣の学校に転校するから。ほら、あんたは学校そのものがダメだったけど、私の場合はさ、あの噂だけが地獄の原因だったんだから」

「そっか……」

と、そこで

私たちは、八百屋の前を通りかかる。

私は、心の底でほくそ笑む。

オバサンは、真紗耶を睨めつける。

「こら！ その不登校児！ 学校へも行かないで！ それで人間まともに育てるでも思ってたのか！？ 志穂ちゃんを守るためにも！ 明日からちゃんと学校行け！！ お前みたいな人間が日本を

ダメにするんだ!!」

「……………」

真紗耶は確かに、《相合傘事件》の際の私のように足をガタガタ震わせてはいたけれど、つい数日前までは学校で似たような目にずっと遭っていたためか、それほど特別な衝撃に見舞われた顔はしておらず……それが余計に痛々しかった。

「真紗耶、真紗耶、あそこ行こう。ほら、私たちが出逢ったあの林」
私の甘い声に、

「おしほ……」少し声を震わす真紗耶。

私は真紗耶の手を強く強く握り締めた。

「死んでも私の手を離すな。いいね？」

「うんっ……………」

懐かしい懐かしい林の中。思えばそう、この林に入るのは、私たちが出逢ったとき以来のこと。

私と真紗耶は、木々の隙間に挟まって、強く抱き締め合っていた。

「うっっ、おしほ……………」

ずっと泣き止まない真紗耶の頭を白々しく撫で続ける私。

「真紗耶……私だけは真紗耶の味方だから。世界中の人間が真紗耶の敵に回って、真紗耶の居る世界がなくなったら、この柴門志穂が真紗耶の世界になってあげる。君は幸せ者なのよ？　こんな美少女に味方になってもらえて」

「私も……そう思う」

「ふふふふ。分かればよろし」

かくして真紗耶は、完全に私だけの者になったのである。

【Recollection of Oshihō】造花（後書き）

屈折しまくってますねえ

【Shiho's viewpoint】間奏3

「なんだか、造花みたいな愛ね」

またまたまた、巫彩が鋭い御指摘。《造花のような愛》……この前、私が感じていたのと同じことを言っている。

「てひつ、言われちゃった」

「花の美しい部分を人工的に増幅して、それを売り物にする造花。

そして……真紗耶にとって、社会を《絶対悪》、自らを《唯一の光》とすることで、真紗耶からの愛情をより強固なものにした貴女」

再び呆れとも感心ともつかぬ謎の表情をする巫彩と、少し顔を歪めて誤魔化し笑いをする私。

「あー、けど私のせいじゃないのよ。全ては、あの《恋愛指南書の切れ端》のせい」

「ああ、あれね……。ねえ、凄い奇跡だと思わない？ 貴女に影響を与える本の、特に重要なページが、貴女と真紗耶の思い出の花である春女苑の横に落ちてるなんて」

何度も思うけれど、これは本当に運命の悪戯としか解釈できない。私は身震いした。

「ああ恐ろしい恐ろしい。私は、科学で解明できないことは信じない性質^{たち}だけど、あれはもう本当、こうやって思い出しただけでも寒気がする」

「そうね。私も怖くなってきた。で……真紗耶は学校とは縁を切った。貴女も転校して愚かな噂と縁を切った。その後はどうなったの？」

「こうして真紗耶を我が物にした私は、自由奔放に恋を楽しむようになったっていった」

「どうして!？」

また巫彩の声に火炎が帯びると、私も少し感情的になってきた。

「障害者の彼との噂を消すために付き合った彼との恋……その失恋

の痛手を、どうしても埋めることが出来なかった！」

病的な私の振る舞いに巫彩は何かを感じたようで、表情が少し和らいだ。

「確かに……小学校四年生で猥褻行為をされて、しかも、相手が障害者だつてことで誰も助けてくれなくて。更に変な噂まで立てられて、噂を否定すると《障害者差別だ》の一言で弾かれる。そんな状況に立たされたら、誰だって、《性的に狂ってしまう》かもしれない」

さすがに巫彩の中立的意見には懐の深さを感じる。こういう子が、私のクラスに一人でも居てくれたら……まあ、考えても仕方のないことを考えるのはよそう。虚しくなるだけだ。

「でしょ？」

「でも、だったら、あんな卑怯な手を使ってまで真紗耶さんを我が者にしなくたって、とつかえひつかえに男を手玉にとって噂をこしらえるとか、それが、堂々と真紗耶と噂になつてしまつか」

「じゃあ訊くけど、巫彩、女の貴女は真紗耶を恋愛対象として見れる？」

「……………」

俯いてしまう巫彩に構わず、私は淡々と告白を続ける。

「《高校時代のある出来事》をきっかけに真紗耶が完全な恋愛対象になるまでは、私も普通の女同様、《完全な男》しか愛せなかったのよ。でも、最初の彼に捨てられて、しかも、彼に捨てられたのはあの障害者の彼とのことが原因だなんて噂が立つて………どうかしてた、あの頃の私は」

すると突然いきり立つ巫彩。

「あー！　じゃあやっぱり真紗耶はさっきあたしが言ったとおり《キープ君》だったの！？」

私は力なく照れ笑いをした。

「そーなのよ。あまりに凶星すぎて、ついつい過剰反応しちゃったけどね　それから、中学二年の残り、そして中学三年、って、私

はとつかえひつかえに男子生徒との噂を学校に流すことで、あの忌まわしい過去を忘れようとした」

「色情狂……」

「そう。まさにそれ。でも、どの男も私には相応しくなくてね。私のちよっとしたワガママに腹を立てて、私から去っていくヘタレ男が殆どだったわ」

遠い目の私を、巫彩は少し好戦的に見つめる。

「でも真紗耶というキープ君が居るから、安心して自由奔放に恋を楽しめたわけね？」

「そーよー。もう好き勝手やっちゃった。でも私はね、タダじゃあ失恋はしないよ」

さつき巫彩の義母に言った　タダじゃあブタ箱には入らないよを踏襲した私。

巫彩はそれが面白かったらしく、感じよく鼻で笑った。

「クスッ……そうなの？　どんなふうに？」

「私から去った男への中傷を噂として流すのよ。彼らの実名で、《各々の彼がキャラ的にやりそうなこと》をFAXで学校に送りつけたりね」

そう。当時はパソコン通信（古い！）の時代。ネットなんて一般人はほとんど利用していなくて、当然、《学校裏サイト》なんてものも存在しなかった。存在していたなら、私は当然利用したんだろうけれど。

得意気な私に巫彩は、今度はハッキリとした呆れの感情を露にする。

「はぁ……火のない所にも煙が立っちゃうのが、学校って場所だものね」

学生たちが噂というものを過信してしまう理由……それを考察したら一冊の本が出来上がってしまうので、ここでは考えないようにしておこう。

「そうよ。その結果あらぬ噂が立ってさ……二番目の彼は《万引き

犯》、三番目の彼は《SMクラブ通い》、四番目の彼は《実はホモ》なんてレッテルを貼られて村八分になった。もちろん全部、私が捏造した真っ赤な嘘だけだね」

「楽しそうね」

すっかり友達気分になった巫彩に、そんな無理解なことを言われた私は非常に悔しくなり、どん、と立ち上がった。

「いいえ！ あれは復讐よ！ 噂ってものに散々引つ掻き回された私の、噂に容易く左右される学校に対する復讐だったのよ！ そのくらいしたってバチ当たらないでしょーが！」

「志穂、ごめん……」

巫彩は素直に謝ったけれど、私の炎は消えなかった。

「それなのにね！ バチが当たっちゃうのよ私に！ しかも、しかも、なんにも悪いことしてない真紗耶にまで！」

「どういうこと……？」

哀しい目で私を見上げる巫彩から一旦目を逸らして、少し溶けかけた氷の入ったコップを持って冷蔵庫へ向かい、あの美味しいお茶を自分でコップに注ぐ。

そして再び巫彩と向かい合ってテーブルに座り、それを一思いに飲みほすと、私は話を再開した。

「あれは、私が転校してしばらく経った夏休みのこと……」

【Recollection of Oshihō】愛の密林

私と真紗耶は、あの日（真紗耶が私の依頼を受けたオバサンに罵倒され、それを私が慰めた日）以来、初めて出逢ったあの林の中で会うようになっていた。

「真紗耶〜！ どこに居んの〜！？」

待ち合わせの時間になっても真紗耶は林に訪れないけれど、不意と立ち止まってみると、ぴちゃ、ぴちゃぴちゃ、と、水の音が聞こえる。さては……

私は林の中に存在する、小さな池へと赴いた。この林は面積的にはそんなに大規模なものではないけれど、本当に人工物が皆無であり、本当に私と真紗耶だけの場所という気がしていたものだ。

案の定、真紗耶は池で孤独に水遊びをしていた。そして私に気づくと申し訳なさそうに、左手で前髪を拭い、右手で半透明なキャミワンピースのスカートをつかみながら、やや不器用に池から上がってきた。

「おしほ、ごめん。水浴びしてた」

「真紗耶……」

私は死にたくなった……透明な服が水に濡れて真っ白な肌に張り付き、真紗耶のなだらかな体のラインを浮き彫りにする、その天国的な妖しさに。

思えばこの時期の真紗耶が最美であつたと、私は今でもそう感じてならない。そりゃ、告洵匐真紗耶を美しくないと言えば私は大ぼら吹きになるけれど、それはあくまでも女性的に美しいのであつて……。

この時期の真紗耶の、男とも女ともつかない顔立ちや体形には、白く柔らかな肌が上手い具合にミスマッチであり、それが余計に魅力を増幅させていた。

学校という、人を良くも悪くも俗界の空気に染めようとする場所と完全に縁を切れれば、人はこんなにも透明になるのだろうか？

（ちなみに、真紗耶の髪型は引き続き《洋風な前髪+オカツパ》であった。）

私は見惚れてボンヤリしてしまう我が心を振り払うように、無理に怒った顔をする。

「もう！ 風邪ひいたらどうすんの！？ 全く暑がりなんだから！」
そう、まだ男と女の間を彷徨っていた頃の真紗耶は、今の真逆で、本当に暑がりだった。

「大丈夫。おしも入って」

真紗耶は表情一つ変えず、左足以外は微動だにもせず足払い！
私は池ボチャである。

「がぁぁーっ！ なにすんのよ！このドSが！」

「面白い」

「きいいーっ！」

私はとっさに池から出ると真紗耶の首を腕で鷲掴みにし、頭から池に突き落としてやろうとした。が！

ザッパーン！ 真紗耶による再びの足払いにより、今度は共倒れ！

「ドジだね。おしほ」

腰まで漬かった真紗耶が、やっとの想いで水面から顔を出した私にボソと呟く。

「……………」

私は黙ったまま、前触れなしに手水鉄砲を真紗耶の顔に命中させた。

「うわ、なにするのやめて……」

水飛沫を浴びた顔で困った表情をするのが妙に艶めかしい。

「容赦せんよー！ はははははっ」

ビショビショになってはしゃいだ私たちは、普段あまり体を動か

さない（特に真紗耶は）疲労から、地面にへたつてハアハア言っていた。

「ふう、おしほ、私、疲れた」

「じゃあ真紗耶、木のとっぺんで休も。気持ちいいよ」

「うん……」

木登りなんて興味すらなかった真紗耶だけれど、私がこうして先導するとスルスルと登ってくるのだった。

というわけで私たちは高い高い木の上に登り、太い枝に腰掛けた。
述べることが何もない。

これが三昔前の時代だったら、《木の上に登った私と真紗耶はその絶景にひととき言葉を失った。街、湖、山、それらが一枚の絵の如く一度に視界に入って来、云々……》などと私は感じたのだろうけれど、ここから見渡すことが出来るのは、本当にコンクリの街や人工的な公園くらいなのである。

「ひゃーあ！ 高い高い！ 巨人になった気分！ ねえねえ、こうやって見てるとき、ああやって公園にグチャーって集まって騒いでる人間ども、ぎゅーって、踏み潰したくならない！？」

「なる」

「でしよでしよー！？」

十代前半にして既に、《気持ちいいねー》とか《綺麗な眺めー》といった言葉を発することすら許されていない私たち。

それだけ、私たちは取り返しのつかぬ深い深い闇を心に抱えてしまっていたのである。

ああ、なのに……

「……………」

「……………」

二人の沈黙は、火照って濡れた体で感じる優しい風の快さのせい。確かに、この世は地獄よりも陰惨な場所なのかもしれない。嗚呼、それでも時々、この世は美しいのである。そのまま何十分か、私た

ちは黙って座っていた。

そうして少し優しい気分になったのか、真紗耶が私のほうを向き、カクツと頭を下げた。こういう動作は、母の袴里ゆずりだと思う。

「おしほ、ありがとう」

「どーしたのよ急に」

「私、うるさくて汚い普通の子供とだったら、こんなふうに遊べなかったし……おしほが居なかったら、私の人生、暗かったと思う。だから、ありがとう」

あまりにも純粋な感謝の意に、私も素直にならざるをえなかった。「私こそ。ありがとう。きつたないことだらけの小中学生生活だったけどさ、あんたが居たから、何とか無事に中三生活も残り半分よ。今の彼は誠実な人だから、やっと落ち着けそうだし」

「そっか。それ、きつと、私を助け続けてくれたおしほへのご褒美だと思う」

「いいや、真紗耶のお陰よー。君が居ると思うから、私はこんな奔放に生きられるのよ」

「……なに褒め合ってるんだろっ」

「ああ、ほんと。ところでさ、」

「なに？」

「微妙〜に、地面が近くなってるない？」

「気のせい」

「そうかな〜」

と、そこで木の下の方から透明な声が響いた。

「おーい、アブナイですよ、お二人さん！」

声に誘われ、とっさに幹に移ると、私たちの乗っていた枝の根元には亀裂が入っていた！危うく《天使羽根リュック鯛焼きダッフルコート少女》と同じことになるどころだったのである。うぐう！

木から降りると、私は自らの心が得体の知れない哀しみに覆われ

ていくのを止めることが出来なかった。

私たちに声をかけてくれた女の子　日本人とは思えぬような細い髪、疑うということを知らないような円らな瞳、そして全身から否応なしに漂い続ける不思議な悲しみの帳……それらが泣けてくるほど透明で儚げだったものだから。

私は泣きそうになりながらも、ぺこつと頭を下げた。

「ありがとー。貴女が居なかったら私たち、こんな煮え切らない状況の中で死んでたかも」

素直に感謝する私に対し、真紗耶はどこか不機嫌そうであり、

「ここは、私と、おしほの国……」とボソリ。

「ちよつと真紗耶！」真紗耶を睨んだ後、とつさに女の子に視線を移し、申し訳ない顔をする私。「ごめんねー、コイツ、小学校で散々ゲテモノ扱いされて人間不信になってんのよ」

「そう。おしほだけが味方」

おうつ、真紗耶は完全に私を信じ切っている。実は私が真紗耶を苦しめた悪を陰で操っていたとも知らずに……

すると女の子は、嫌な顔もせずに私たちに一歩近づいて来た。

「ボクもね、今、にえきらないジヨウキョウだし、ちよつとヒトがコワイかも……」

「あ……まさか」

「おしほ……もしかして」

私と真紗耶は同じ予感を抱いたのか、顔を見合わせた。そして私が女の子に接近し、

「ちよつと、ボク　って何よ？　あなた、まさか……」

と導音を奏でると、女の子は握った手を顔の前に寄せて、実にコケティッシュにはにかみ笑い。

「えへへ、ボク、オトコノコ、なんだあ……。おどろかせて、ゴメンなさい」

そつえば声が普通の女よりかなり爽やかだ。

「ぎゃーっ！　似たようなのが二人も！」ミミズのごとくウネウネのたくる私と、

「……………」一転、感慨深げな表情を見せる真紗耶。

「あ、ちよつと、今は夏休みだけど？」

私は彼女……じゃなくて、彼の着ている巨大なリボンの付いたセーラーワンピースに目をやった。襟の濃紺とリボンの紫、それに薄水色の地が涼やかでとても素敵。

「あ、これ私服ですっ。いっしょに暮らしてるギリの妹が『兄さんには海が似合う』、って、言ってくれて。それで海っぽいカッコウがしたくて。ふふ、ボク……海に行きたいんです……。コワイものがなんにもない、海のまんなかに。なんて、ね」

彼が悲しげな微笑みを浮かべて湖水を見つめていると、真紗耶も彼に接近した。

「そっか。アナタ、名前は？」

真紗耶に問われると、彼は両手をスカートの前で組んでおすまし……………」

「中里木泊です。よろしくね　木にシユクハクって書くんですよ。えへへ、変わってるでしょ？」

と告げた。

それが私たちと木泊さんとの出会いなのだった。真紗耶も深々と木泊さんに頭を下げた。

「実は私も、ホントは男」

「えーっ！」

「ねえ木泊さん、なにか、つらいことが……………」

真紗耶は木泊さんを真つすぐに見つめながら、涙声になっていた。確かに木泊さんは見た者の心を哀しくさせる何かを抱えている。

それは真紗耶も私も同じ気持ちだったようだ。

その仄暗い沈黙を破ろうと、私はジトーツと二人を交互に見つめた。

「《真紗耶》といい《木泊》といい、男でも女でも特に違和感のない名前で良かったね、お二人さん。《源五郎》とか《嘉右衛門》とかいう名前だったら、どうしたのさ……」

私のネタふりにより、一旦は次なる沈黙に包まれた三人。けれどもすぐに、穏やかな笑いが起き、私たちは自然と打ち解けていったのだった。

【Recollection of Oshihō】愛の密林（後書き）

志穂・真紗耶のどす黒さに対する木泊の純真さが、書いていてとても苦しいです……。

【Shiho's viewpoint】鯛茶漬（前書き）

さんざん呪わしい話をやっておいて、突然サブタイが「鯛茶漬」これが離陸羅臼クオリティ。

「へえ。意外」

ここでまたまた巫彩が口を挟んでくる。

しかししかし、その先は話したくないことだらけだったので、私は胸を撫で下ろしてもいた。

「ふう……何が？」

「真紗耶が『ここは自分とおしほの国だから入ってくるな』みたいなことを言うなんて。あたし、貴女のほうがそういうことを言う人だと思ってたから」

「まあ、今と逆よね。どこで立場が逆転したんだか」

「まあ……それが……、木泊兄さんとの出逢いだったと……」

巫彩も義兄のことになると、その利発な顔を薄からぬセンチメンタリズムに染める。

「うん……。でも、木泊さんが酷い目に遭ったくらいだけは……つらすぎてつらすぎて、詳しく話せないよ私。木泊さん大変だったの、首田宗志教のせいで……」

とうとう、話に出てしまった……『首田宗志』の名が！ 巫彩は私の手を握ってくる。

「それでいいのよ志穂。そのくだりは、私も聞きたくなかったからちょうど良かった。その時点で既に、木泊兄さんは虐められていて、しかも家族の誰にも心を理解してもらえてなかった！ その木泊兄さんが更に、首田宗志教によって酷い目に遭った話なんて、詳しくは聞きたくないっ……」

しばし、私の手を巫彩が握っている状態で私たちは硬直していた。私と真紗耶は、心の底に黒々としたものを持っている人間だ。ゆえに、つらい過去の話であっても、深刻さが幾ばくか和らぐもの。しかししかし、木泊さんのような純粋な人ともなると、さすがに

語るほうも言葉に詰まってしまふし、聞くほうもそれだけは聞きたくないという気持ちになってしまふのだろう。

その沈黙を破ったのは私だった。

「私も詳しく話したくないから、簡単に端折って説明するけどある日、林に来た木泊さんがね、真紗耶さん、志穂さん、これ、よんでみて。ボクのかいたシヨウセツだよ　って……ううっ！」
ここだけでもう、涙が流れ出てしまった。木泊さんの口調を真似たら、変に深く想い出してしまつて……

巫彩も私の手を握る力を強くする。

「志穂、いいのよ？　話したくなければ、もう」

そういわれると逆に、すんなりと話し出してしまう私。

「それを知ったあの母親がさ、《不登校児が小説を書いたとならばセンセーショナルな話題を呼ぶザマス》って欲に目を眩ませて、自費出版にこぎつけたの」

「その小説が……ああっ！」

声を荒げる巫彩と、それに輪をかけたように激昂する私。テーブルを叩いて立ち上がった。

「そうとも畜生！　その小説が、木泊さんの自殺未遂の原因になったのよ！　ねえ巫彩！　首田宗志教の奴らが、大体どんな連中かは知ってるわよね！」

「……………」

巫彩は私を見上げ、実に沈痛な面持ちでハッキリと頷いた。

それを確認すると、私は火のような勢いで悔しさをぶちまける。

「首田宗志教の奴ら！　木泊さんの小説を叩きやがったのよ！……いいえ、いいえ、正確には、《木泊さんが不登校の分際で小説を出版した》っていう、その事実を徹底的に批判した！」

「いやっ！　聞きたくない！」

テーブルに伏す巫彩に構わず、私は大声で続けた。

「しかももしか、ああっ、木泊さんの住所まで調べ上げて、家に石

を投げ込んだり悪戯電話までかける始末！　ねえ巫彩、この家にそういう痕跡は残ってない！？」

「残ってるわよ！　外の壁に！　落書きの跡が所々ねッ！」

「壁に落書きまでしやがったのね……奴ら！　ああ憎らしい憎らしい！　ねえ巫彩、木泊さんが首田宗志教にどんな中傷を受けたか、それは首田宗志教ホームページにログが残っているから一度見てみたらどう！？」

「見たくないっ！　木泊兄さんの妹として、そんなものだけは死んでも見たくないわあッ！　どうせ《小説という文化を穢すな》とか、《小説を書くことを現実逃避の手段にするな》とか、《学歴のある者しか小説を書く資格はない》とか、そういうことでしょ！？」

さすがの巫彩もこの事実を前にしては大きく取り乱したのだった。

「ああその通りよ！　よく分かるわねえ！」

「ああいう層の思考回路なんてお見通しだわよッ！」

自分の義両親に、紗那っていう子の両親……　ああいう層を何度も見てきた巫彩にとっては、首田宗志教の書いたことが手に取るように分かるんでしょう。

あたしね、日本社会のああいう感じが嫌で嫌で仕方ないの！

橋の上で私に放った彼女の言葉が、この胸をいよいよ重く深く締めつけてくる。

やがて、はたり、と、私は椅子に崩れ込む。

「……でもね巫彩、その時点では私、知らなかったのよ、木泊さんが首田宗志教のせいでそんな目に遭っていたっていうことを、リアルタイムにはね」

「どういうこと？」

「木泊さんは当然、私なんかよりずっと自分に近い魂を持つてる真紗耶のほうに、色んな相談をしてたし。まあ、それと同時に、私と真紗耶には色んな事件が起こったからね」

「どんな？」

私は少し戸惑った後、やっぱり諦めたように首を横に振った。

「そこから先は真紗耶に聞いて……」

そう呟いて振り切るように立ち上がって巫彩から視線を逸らし、時計を確認する。なんと十一時半になっていた。そろそろ眠ったほうがいい時間。というか空腹感がハンパではない。

巫彩も色々あって疲れたのか、びたーとテーブルに伏している。

「あーあ、腹減ったわ……」

「そうよ……、巫彩、晩飯どうすんの？　けど、時間が時間だけにあんまり重いものは食べられないわ」

「あたしだって、貴女たちの過去を聞いた後でコツテリしたもんは食べたくないわよ」

巫彩は立ち上がり、冷蔵庫を開けると、「いいブツがあるわね」と私と真紗耶みたいなことを言い、調理を始めた。

何分かして、私と巫彩の前に置かれたのは、爽やかな青で縁取られた白い茶碗に盛られた、品の良い鯛茶漬。

緑の葉っぱが飾られたりして、見た目にも癒されるようだった。

「料理上手いのね」

口に運ぶと、侘び寂びに装われた出汁の味が口に広がる。

いいブツ　すなわち鯛が生のまま、胡麻味噌和えにされて乗っているのも気が利いていると思った。

「義母の料理が化学調味料でんこ盛りで体に悪いから。知らず知らずのうちに自分でこしらえることを覚えちゃったわよ」

「巫彩っていくつだったけ？」

「哀しきフォーティーンよ」

ぽとつ、と箸を落とす私。

「どうしたの？」

「い、いや……、なんかその言い方が！　昔のオールディーズみたいで面白かっただけよ」

「《昔のオールディーズ》って、《真夜中のミッドナイト》と同じ

ようなダブリ言葉よ」

「うつさいわねー。早く食べて寝るわよ！」

風呂もトイレも歯磨きも済ませ、リビングのソファでも寝ようかと思っていた私の袖を、巫彩がひしとつかんできた。

「そんなお腹出した格好で寝たら、いくら春だって体壊すわよ」

私は確かに、黒いミニタイトスカートとおへその上までのタンクトップの上に、灰色のジャケットを羽織った格好。これがいつもの私服なわけで、あの校舎跡でゴロ寝しても風邪をひいたためしなんてないのだけれど……

「はーん、巫彩さ、あんな話聞いた後で、……一人で寝たくなんでしょ」

「ち、違っわよっ！」

頬を赤らめてそっぽを向くところを見ると、やっぱり凶星らしい。

「はははは。話聞いて、それで私たちから離れてくどころか、近づいてくるなんて面白い子ね」

「うるさいわねえ」

というわけで。

私たちは巫彩のベッドで二人、眠ることにした。……いつだって南国に生る柑橘果実の香りを漂わせる巫彩。こうして部屋に居るとそれが余計に強く感じられて、どうにもむせそうになる。

寝息を立てる巫彩の髪を撫でながら、私は小さな声で語りかけた

……

「ねえ巫彩……私……中絶したのよ……。生まれてりゃちょうど、

巫彩、あんたと同年……」

「zzzzzz」

しかし、これはどういうシチュエーションなんだろう？

三十間近の女といえば、普通はOLか主婦だ。そんな女が 哀しきフォーティーン を抱いている。よほど仲の良い姉妹でもない限

り、こんなシチュエーションはないだろう。

翌朝。疲弊した表情で帰ってきた母に、

「巫彩を見守っていてくれて助かったザマス」

と頭を下げられると、私は隣で母を出迎えた巫彩に、

「巫彩ありがとう。何だか久しぶりに楽しかった」

とだけ告げ、逃げるように巫彩の家を後にした。

そう……ここに居続けたら、私の口から《あの過去》を話さなければならなくなるかもしれないから……。

【Misa's viewpoint】客観的な彼女

巫彩ありがとう。何だか久しぶりに楽しかった

その言葉を残して志穂が逃げるように去った一時間後、あたしは土曜の学校でその 久しぶりに の意味をずっと考えていた。

つまり、真紗耶と居る時間というのは、志穂にとって楽しい時間ではないの？

それとも、真紗耶との楽しい時間は志穂にとって当たり前のことすぎて、楽しいという実感が湧かないだけなのかしら？

ともあれ、過去囁の続きは真紗耶に聞いて欲しいと言う志穂の言葉のため、あたしは放課後、真紗耶の元へ向かおうと思った。

しかしよく考えてみると、Sweet Seasonへ向かうことは真紗耶の元へ向かうことにはならない。あたしは結局、真紗耶と志穂が毎日どこで会ってどんな時間割で撮影をしているのか、それを知らないから。

そういえばあたしは、なぜあの二人があんなDVDを撮影する生活をせざるをえなくなったのか、その辺りの詳しい事情もまだ知らない。

土曜日は正午下校。

眞子にはこれから出かけることを言わず、彼女を多岐川家に送り届けてからあたしは横浜へ向かう。

眞子に外出することを告げたら、

私に気を使わないでその足で行きなよ

と言ってくるだろうから。そんなことはしたくなかった。

だって、下校途中に紗那やその彼氏に出くわしでもしたら……と心配だから。

はぁ……いつまでこんな異常事態が続くのかしら？

あたしは真紗耶に会えないかとも思いつつもSweet Seasonへ向かい、木泊兄さんの顔を見ようと思った。あんな話を聞かされた後、《今は》幸せな木泊さんの顔がどうしても見たかったから。

以前にも増して、Sweet Seasonまで行き着く時間が短くなっている。思えば、PTAが家に来たあの水曜日からの三日間、たたみかけるかのように様々な出来事があたしに襲いかかった。

閑話休題。例の橋に着くと、紅茶色の長髪を持つ見知らぬ美少女が立っており、あたしに気づくと彼女はペコツと頭を下げてきた。

「巫彩ちゃん、おはよう」声が異常に甘々しい。

「……どなた？」

「えっと……はじめまして。香上理奈子です」かがみ・りなこ

「あの、全く聞いたことのない名前なんですけど。っていうかどうしてあたしを知っているんです？」

「ちょっと来て」

色々あつて感覚が麻痺しているあたし。もうどうにでもなれ、という気分で理奈子とやらについて行こうとすると、なんと理奈子はSweet Seasonに入つてゆく。

営業日にここに入るのは初めてだったけれど、やはり貸切のときとは別の場所のよう。

外国人で賑わうワインカラーのバーに、日本の酒場特有の嫌なムードは皆無で、軽い逃避気分すら味わえる。

理奈子はカウンターで客の相手をする母萌さん（英語ペラペラ！）に軽く頭を下げると、私がトイレかと思っていたドアを開けた。そこには地下へ下りる階段……

階段を下りると、そこは見事なワイナリーだった。

古い木の匂いが立ち込める、ちよつぱり埃っぽい空気の中、図書館のごとく立ち並ぶ棚に大切そうに入っているワインを見ていると、法律違反してでも飲みたくなってくる。

さて理奈子は、ワイナリーの隅に申し訳程度に設置された水道で顔を洗うと、なにやらメイクを始めた。

人を誘っておいて何のまじないか、と思っていたら、振り返ったその人は告^ツ汙^フ匄^フの顔だった。

「あら真紗耶さんだったの？」

もう色んなことがありすぎて、何を見せられても冷静なあたしが居る。

真紗耶さんは申し訳なさそうに照れ笑いをした。

「……そうなんですお（、、） 水曜日はこの顔で居て、『追っ手』に絡まれて、貴女にご迷惑をおかけしましたからね」

なるほど、と思った。

「志穂が気を回して真紗耶さんとあたしを会わそうとしてくれたわけね？ ……でも、大丈夫なの？ 撮影、休んだりして」

「ええ。大金が入ったから数日はサボっても平気、とのことでした」
あたしがあげたあの金か。

「そう。それで……」

「柴門さんの話の続き、ですね？」

真紗耶さんが的確に言い当てる、あたしは何だか萎縮してしまう。

「そのことなんだけど ここまでアナタたちの過去を聞いておいて、今更こんなことを言うのもなんだけど、本当に、あたしなんかに話しちゃっていいの？」

「ここ数年間というもの、ずーっとこんな同道巡りをしている私たち 柴門さんは、巫彩さんならもしかしたら、私たち二人のことを《客観的に評価》してくれるのでは……そんな期待を抱いて、それで、貴女に過去を話すことを決めたのではないでしょうか？」

「客観的評価が欲しいなら、あたしなんかより……」

消極的に俯くあたしの前に、真紗耶さんは切なそうに駆けて来た。「いいえ。いいえ。貴女でなければ《客観的には》評価が出来ないんです逆に。まあ一般的な社会人からしたら、私たちなんて謎の物体にしか見えないでしょうし、逆に私たちとそっくりな立場の人間だと、私たちに共感してしまつて正当な評価をしてくれない。その点、貴女なら、私たちの心を理解できるだけの闇を抱えておられる反面、社会で強く生きてゆける力も持つておられる。だから……」

「そう……」

「では、座りましょうか」

私たちは、これもまた申し訳程度にポツリポツリと置かれた小さな椅子に腰掛ける。

「それで真紗耶さん、志穂は昨日、《木泊さんが首田宗志教によつて酷い目に遭つていることをリアルタイムには知らなかった》と告げた後、その続きは真紗耶さんに聞けつて……」

すると真紗耶さん、深く深く腰を曲げて俯いてしまった。

「はあー……それは仕方のないことですね。とてもではありませんが、柴門さん自身の口から告げられるような内容ではございませんので」

「何があつたわけ……？」

「巫彩さん、何を聞いても、柴門さんを嫌わないで差し上げて下さいね」

「もちろんよ」

あたしの確認をとると、真紗耶さんはようやく話を始めた……

【M i s a e ' s v i e w p o i n t】客観的な彼女（後書き）

一見無駄に見える「真紗耶の理奈子への変化^{へんげ}」ですが、このネタは実は終盤で重要になってくるんです。

その頃の私は、自分だけは特に凄まじい不幸を抱えているわけではありませんでしたが、二人の重要人物である柴門さんと木泊さんの問題に頭を痛めておりました。

ある日、いつもの林へ赴くと、私は実に奇妙奇天烈な光景を目にしたのです。

柴門さんが 鼠の屍骸を食しておられる。

「おしほ、何してるの……？」

「ングング、ん、真紗耶、あんた動物愛護団体？ モグモグ、食べりゃあ罪にはならないでしょう？ ムシヤムシヤ……」

柴門さんは鼠の血によって、呪われたような形相になっていました。

「おしほ、最近おかしい」

率直に指摘すると、柴門さんは残った尻尾を麵のようにすすります。

「ズルズル、チュルツ、ねえ真紗耶……ゴクツ、あの男、他に女が居るみたいなのよ」

「だっておしほ、今度の彼は誠実そうだって……」

すると柴門さんの表情が、笑いながら涙を流すという、非常に得体の知れぬものに……

「ふっ、ふぁーっ！ ははっはっはっはぁーっ！」

「おしほ……？」

「ぎいーっ！ 次の男、探してやる！」

柴門さんは今度はあの池に浮かぶ蓮の葉に乗ったカエルを見て目を光らせ、どちらがカエルか判らないような早業でカエルを仕留め、それも丸呑みして見せました。

そう、柴門さんにとって男探しとは、このように血眼になって獲物を探すのと同感覚だったのでしょう。

やがて満腹すると、柴門さんは湖水で顔を洗い、無機能的かつ無表情な顔で私に向き直りました。

「真紗耶、お腹が痛い。家まで連れてって」

「おしほ……？」

「お腹が痛い。家まで連れてって」

「変なものを食べるから。病院に……」

「私は病気なんかじゃないっ！　こんな家で寝れば治る！　お腹が痛い。家まで連れてって」

「おしほ……」

「お腹が痛い。家まで連れてって」

「店には出られる？　もうクウチューカの夏休みは昨日から終わるけど？」

「お腹が痛い。家まで連れてって」

「おしほ、蓉子さんの気持ちも少しは……」

「お腹が痛い。家まで連れてって」

「分かった」

クウチューカすなわち柴門家に着くと、柴門さんは二階へと急いでボタン、とドアを閉め切っていました。

ちなみに私は蓉子さんに合鍵を貰っていたため、柴門家への出入りは自由だったのです。

「おしほ。今おしほが休んだら、蓉子さん、大変なことになる」

「別にいいでしょ？　そんなことより真紗耶、私の気持ちを考えてよ！」

柴門さんの尖った声がドアを突き破って私の心に刺さります。

実は、柴門さんは今の《誠実そうな彼》と付き合ってからには非常に精神状態が良く、クウチューカで雇われていたバイトを強引に辞めさせて自らが働くようになったのです。

ほら、私が働けば人件費からないでしょ　などと言って。

やがて昼休みを迎えた蓉子さんが上つてきました。

「志穂！　お願いだから、代わりの人が見つかるまではお店に出て頂戴！　お母さん、疲労で倒れちゃうわよ！」

すると部屋の中から、今度は陰気な声……

「あつそう。でもさあ、大体、実の娘をタダ働きさせるなんて、お母さんどうかしてるよ。とにかく私は店に出る気も学校に行く気ももうないから」

「なに言ってるのよ志穂！？　貴女が働きたいって言うから私、バイトの人に無理を言って辞めて頂いたのよ？　良く働いてくれるいい人だったのに！」

当然、蓉子さんの想いなど柴門さんには届きません。

「あー、そんなこと言っただけー？　記憶にない！　私、お腹が痛い。そんな私に下らない話してこないでよ！　痛みが酷くなる！」

「お薬は飲んだの？」

蓉子さんが試すように呟くと、柴門さんはしばしの沈黙の後、

「……………飲んだ！」と告げました。

蓉子さんは困り顔で私を見つめます。

「仮病ね。志穂の部屋には薬も水もないもの。志穂の色情狂にも困ったものだわ。やっぱり一度お医者さんに……………」

困り果てる蓉子さんでしたが、それを言われてはさすがの私も蓉子さんを睨まざるをえません。

「蓉子さんっ！　おしほは病気じゃないっ！　おしほがあんなふうになったの、みんな、おしほが痴漢行為に遭つてても《障害者差別をする柴門が悪い》の一点張りだった学校の奴らのせい！　おしほだって好きであの障害者の子を避_さけてたわけじゃないのに！」

「いいえ。学校のせいじゃないわ。幼い志穂の苦しみに気づけなかった私が一番いけないのよ……………」

蓉子さんは廊下に崩れ込んでしまいました。

そして志穂さんの部屋からは、カチカチとワープロを打つ音。恐らく学校へFAXで送る文面を書いているのでしょう。

今度は《誠実そうな彼》の誹謗中傷に違いありません。そこまでならば、いつもの柴門さんのパターンです。

ところがその直後、バシッ、バギッ、ドンッ、と、まるでDVが行なわれているかのような凄まじい打撃音も響いたのです。まさか自傷行為……！？

「志穂！ 何してるのぉ……！？」もうズタズタといった感じの素振りです。

「おしほ！ 馬鹿なこと考えないで！」その横で必死に声をかける私。

しかし、その音はしばらくすると止み、やがてカシャリ、カシャリ、と、写真を撮影するような音が……

その数日後、クウチュールカへ向かった私は、一瞬、蓉子さんが借金をしていて、その取立てが来ているのかと思いました。

それは、店から響いてくる図太い男性の罵声。

「おい！ 娘を出せって何回言ったら解るんだ！？ この額を見る！ 学校で昼寝したら、クラスメイトに油性ペンで書かれたんだよ！ 柴門志穂のせいで俺は酷い目に遭ってんだ！」

思わず店に入ると、

「真紗耶ちゃん！ 入って来ちゃダメ！」蓉子さんが叫びました。

店内は植木や椅子が滅茶苦茶に倒されており……お客さんたちは怯えきり、店から出ることに出来ないようです。

男が振り向くと、その額には、なんと《DV男》の三文字。これで私は全ての事情を理解しました。

すなわちこれは柴門さんが、学校に《彼からDVを受けていた》と、ありもしないことを、《体に傷を負った自らの写真》を添えてFAXしたがゆえのイジメなのでしょう。

私はとつさに店の入口付近に置かれていたメガホンを手に取り、外へ出ました。

「レストラン・クウチューカにて、営業妨害が行なわれております！」

その言葉を何度も繰り返すと、私の声を聞いた人々が店の前に集結。ごつい体系をしたオジサンたちが店に押し入り、男を取り押さえ、警察へ引つ張って行きました。客たちは安堵の溜息を漏らしません。

「蓉子さん、大丈夫？」

店の中央で崩れ込む蓉子さんに駆け寄ると、蓉子さんは私に抱きついてきました。

「怖かったあつ！　ありがとー　真紗耶ちゃん素敵っ」

「ワー！　ヒューヒュー！」店の人からは大拍手。

その騒ぎの間じゅう、柴門さんは結局、部屋に籠ったまま全く顔を出さなかったのです。

閉店後、私と蓉子さんは暗い気分でテーブルを囲んでいました。蓉子さんの淹れる紅茶の湯気が、私たちの暗い気分を少し中和しています。

「蓉子さん、このままじゃおしほが……」

「でも、どうすればいいのか……」

「おしほ、常に付き合ってる人が居ないとダメみたい。蓉子さん、蓉子さんの昔の知り合いの子供に、おしほと合いそうな男の人、居ない？」

「……分かった。当たってみるわ」

「そうしてくれると助かる」

私の献身ぶりに、紅茶を飲もうとした手を止める蓉子さん。

「ねえ真紗耶ちゃん、あなた、どうして志穂のためにそこまでしてくれるの？」

「私がおしほに、造花をこしらえさせた……」

意味深な私の言葉に蓉子さんは、

「え？」と聞き返してきますが、

「い、いや、なんでもない」私はとっさに誤魔化したのです。

【Missae's viewpoint】造花の愛…その真相

「ま、真紗耶さんっ！ 造花 って、あつ、アナタ、まさか……！？」 志穂が道端で見つけた《春女苑の隣にあつた恋愛指南書の切れ端》って……」

最後まで続けて聞くつもりが、ついつい口を挟んでしまうあたし。あたしは先日、小学生の志穂が真紗耶さんにしたことを《造花のような愛》だつて言った。

そして今、真紗耶さんの口から 造花 という言葉……

真紗耶さんは本当に本当にゆっくりと、噛み締めるように頭を下げた。

「いかにも。あの指南書の切れ端は この私が仕組んだものです。古びた本の、空白のページを切り取って、そこに私自身が書いた文章を印刷する。そうしたら、本物の本の切れ端のように見えるものなんです」

あたしは衝撃を受けると同時に、実に不可解でもあつた。

「だつて真紗耶さん！ そんなことをしてアナタに何のメリットがあるっていうのよ！？」

恐らくこれは、真紗耶さんの最も深い部分を抉る質問だつたんでしよう。

真紗耶さんはしばし沈黙した後、鉄格子のように重い口をゆっくりと開いた。

「造花でもいいから、この目で見てみたかったです……この私を守り慰める美少女というものを」

そういうことだったのね……。あたしは哀しくて哀しくてたまらなかつた。

「そんなことをしてまで！ 柴門志穂を自分の望む少女に仕立て上げたかったの！？」

半ば取り乱すあたしの問いに、今度は涼しげに頷く真紗耶さん。

「はい。私、耐えられなかったんです、私を村八分にした生徒たちの、鼻糞がこびりついた顔や、乱暴に扱って産廃みたいにしたランドセルが。だからあの頃の私は、造花でもいいから、そいつらとは間逆の存在、即ち、《私を守る美しい女の子》を、この目で見てみたかったのです。事実、柴門さんは面白いほど私の思い通りに動いてくれた……」

もうこの話は続けたくない。

なんていう愚かさ！

なんていう哀れさ！

真紗耶さんのこの、サスペンスドラマの犯人が悲しい動機を告白するような口調が耐えられなかった。

「真紗耶さん！ 続きを！ 過去囁の続きを聞かせて！」

あたしは涙を堪えながらそう叫んだ。

「はい……」

【M i s a e · s v i e w p o i n t】造花の愛…その真相（後書き）

真紗耶の求めた造花の愛を、病的なものと見るか、みじめなものとするか、それとも哀れなものとするか、それは読者の方の自由です。ちなみに私は（自分で言うのも変ですが）、病的でみじめでありながらも、とてもいじらしいと、書いていて感じました。

【Recollection of Masaya】哀しき慕情

蓉子さんは、店を休んでまで柴門さんの彼氏を《あれでもないこれでもない》と探し出し、その結果……

「いらつしやいませーっ！ クウチューカへようこそ！ ……あ、なんだ真紗耶か」

柴門さんはこのように店に出るようになり、学校へも戻りました。

「なんだとはなんだ」

「へへへ、失礼失礼」

「おしほ、元気になってくれて良かった」

すると柴門さんは実に現金に照れ笑い。

「私ってほら、寂しがり屋だから、常に付き合ってる男が居なきゃ嫌なのよ」

そんな柴門さんを見て、私と蓉子さんは笑顔を見合わせました。

平和が戻ったかのように思えましたが、私は木泊さんのことが気がかりで仕方がなかったのです。

あの林はもはや、私と木泊さんの場所になっておりました。

私は先日、柴門さんと気晴らしに自然に触れに行きましたが、あの林へ行かず、わざわざ房総へ行っただのです。それは木泊さんの悲しい出来事を思い出さなくなかったからで……。

それにしても木泊さん……私などと話しても大して幸せではないと思うのですが、追いつめられた木泊さんにとっては、私との時間が唯一の救いだったようで。

一人、水遊びをする木泊さんに、私はその日も優しく声をかけました。

「コハク、おはよう」

私に気づくと、木泊さんは笑ってくれます。笑ってはくれるのですが、その儚げな笑みが、私の心を哀しくするのです。

「真紗耶さん！ おはよう。今日も来てくれたんだね」

私は胸の苦しさに耐え切れず、ハネをあげながら木泊さんに全速力で駆け寄ります。

「コハク！ 大丈夫なの！？」

「……………」

「ごめんっ！ 大丈夫なわけないよね。うううっ…………… ねえコハク、私に、なにが出来る？」

私の涙ながらの問いには答えず、木泊さんは虚ろに空を見上げます。

「ねえ真紗耶さん、ボク、このセカイに居ないほうが、いいのかな？」

「そんなことないっ！ 私は君に会えて良かった！」

私が木泊さんの両肩を掴んで揺さぶると、木泊さんは力ない笑顔を私に向けます…………

「ありがとう。でも…………、昨日なんてね、家の窓がガシャーンって割れて、石がコロコロって入ってきたし、毎日毎日、イタズラでんわが絶えないし」

「ねえコハク！ 私…………君が居なくなったら嘆き悲しむ！ それを解って！」

「真紗耶さん……………」

そこで、ふと私は、ある疑問に打ち当たりました。

「コハク、悪戯電話とか、石を投げ込まれるとか……………それも、君を虐めてる学校の連中がやってるの？」

「……………」

【Missae's viewpoint】批判宗教

真紗耶さんの口調は、ここで回想的なものから詠嘆的なものに変わった。

「巫彩さん！ そのとき、私が一番悔しかったのは、そんな薄っぺらな言葉しか木泊さんにかけることが出来ない自分自身だったのです！」

「それで結局……木泊兄さんの家、つまりあたしのあの家へ攻撃してたのは、首田宗志教だったのよね？」

「ええ。私の問いには、木泊さんは答えてはくれませんでした。木泊さんがあんなことになったのは、ご自分が小説を出版して、しばらく経ってからのことでしたので」

「それで怪しいと思ってネットで木泊兄さんの本のことを調べたら、首田宗志教の連中が木泊さんを熾烈に批判してた、と」

「そうなのです。もう酷いものでしたよ？ ネットで木泊さんの悪口を言うだけでは物足りなくなった首田宗志教は、一致団結して木泊さんの住所まで調べ上げ……」

話がそこに差しかかる瞬間を、実はあたしは待っていた。ここでようやく、あの疑問が訊ける。

「ちよつと待つて真紗耶さん。前々から疑問に思ってたんだけど、首田宗志の代表作つて、虐めを受けた少女が復讐として人間狩りをする話でしょ？ 可愛い女の子なんかもバラバラにされたりして」「まあ、大まかに言えばそうですね。そんな小説を崇拝している首田宗志教が、なぜ自ら弱者への攻撃を行なう宗教になっていったか、という疑問ですか」

実能的確に言い当ててくる真紗耶さん。あたしは少し照れながら頭を下げた。

「そうなのよ。そこがどうしても腑に落ちなくって」
すると真紗耶さんは立ち上がり、ワインの棚と棚の間を縫うよう

に歩きながら語りだした。

「そうですか。腑に落ちませんか。でも私はね、イジメや差別を糾弾する小説のファンたちだったからこそ、自らが弱い者虐めをする宗教と化していった気がしますよ？ 実際、首田宗志教は《元イジメられっ子》の集まりでしたが……《弱い者が無意識の内に更に弱い者を攻撃して安心感を得る》これは日本人の性さがです」

「酷い……」

「首田宗志教の連中はいつもいつも、重箱の隅を楊枝でほじくるように、ある特定のカテゴリに入る人たちを探し回って、その人たちを《自分よりも劣っている者》を決め付けて、そしてネットで晒して、自らが差別を興じる。そんなことをしておりますよ？」

「ある特定のカテゴリ って？」

座ったままのあたしは少し声を大きくする。

真紗耶さんは歩いたまま話を続けた。

「その代表的な例が《オタク》や《不登校児》などです」

「真紗耶さん、首田宗志の代表作は虐めを糾弾する漫画なんでしょう？ だったら、虐めによって不登校になった人に優しい手を差し伸べるのが、そういう宗教家というものでしょう？」

「よく考えてみても下さいな。首田宗志の代表作は、虐められた少女が人間狩りをする物語ですよ？」

こうなるとさすがに首田宗志教への恨みが募ってきて、あたしもドンと立ち上がった。

「じ、じゃあ何よっ！？ 首田宗志教の連中は、《虐められて不登校になる》より《虐めた奴らを片っ端から殺す》ほうが褒められたことだと考える宗教ってこと！？」

「その通りです。現に首田宗志教は、不登校になった少女の登場する小説やアニメのことは《不登校を推奨する許し難き作品》として、熾烈に攻撃していましたし。まあ別に、大半の作品は不登校を推奨してはいないんですがね、《不登校》というワード自体が、首田宗志教的にはNGだったようで」

「馬鹿馬鹿しい！」

あたしは棚に納められたワインを一気飲みたい気分になった。

「ね」。馬鹿馬鹿しい……その一言に尽きますよね」

真紗耶さんも首田宗志教の愚かさに想いを馳せ、暗い気分になっているよう。

やがてあたしが力なく椅子にへたれ込むと、真紗耶さんも沈痛な面持ちで隣に座り直して話を再開した。

「それでね、私、木泊さんを何とか助けてあげられる方法はないかと思って、その帰り道、《母や蓉子さんに懇願して木泊さんを引き取ってくれそうな人を探してもらう》という方法を思いつきました。しかししかし、運命とは、実に残酷なものですね」

「誰も見つからなかったの？ それとも、見つかったとたんに木泊兄さんが自殺未遂を……？」

すると真紗耶さんはコンパクトを取り出し、自分の顔を見つめた。
「いいえ、その帰り道、ショーウィンドウに映った私の腕からはおびただしい量の毛が生え、この顔は男臭さに満ち溢れていたのです！ その頃は色々あって、鏡を見る暇もございませんでしたから……そのときの私の衝撃、憤慨、絶望！ まあご想像下さいませ！」

「それでアナタは、気が狂ってしまったと？」

「はい。私は狂気に囚われ、柴門家へ向かいました……」

【M i s a e · s v i e w p o i n t】批判宗教（後書き）

実際にこういう宗教がありそうで怖い……。

ちなみに四章の頃にも書きましたが、首田宗志教は架空の宗教です。ただし、これによく似た集団は実在しました。

その集団を見て、「これが宗教になって力をつけてしまったら悲劇が起こるだろうな」と感じたのが、この物語にこういう宗教を取り入れることになったキツカケですね。

【Recollection of Masaya】狂気が芽生えるとき（前書）

志穂も真紗耶もよく叫びますねえ

「ああああーあああーあーあっ!!」

「真紗耶ちゃんっ! どうしたっていうの!?」慌てふためく蓉子さん。

「おしほはどこだああーっ! おしほを出せえーっ!!」

「それが志穂、また部屋に籠っちゃってるのよ」

それを聞くとつさに私は柴門さんの部屋の前へ向かいました。

「おおおしほおしほおしほ! ここを開けるが良い!」

「誰!? …… 真紗耶? 真紗耶なの? どうしたっていうの!?」

「開けるおおおおおうううー!!」

「やだ。私、もうダメ」

柴門さんの消極的な声が私をカツと発狂させ……

「ぐわいあああーあああああーあーあっ!!」

私は体当たりでドアを蹴破り部屋に侵入。

柴門さんが何かを言う前に部屋にあった戸棚を拳で叩き割り、そのガラス片を鮮血を滴らせながらもぎ取って柴門さんの首に当てました。

「心中しまししょうや柴門さん…… ああああーああああーあああー」

思えば私が柴門さんのことを《柴門さん》と呼んだのは、これが初めてでした。このときの私は鬼の如き形相だったと、柴門さんも蓉子さんも仰います。

「真紗耶ちゃんっ!!」

蓉子さんが、かなり体を鍛えていると思われる男性客を連れてやって来、その場は収束しました。

【Missae's viewpoint】哀しき復讐心

「そして性転換・整形騒ぎになったわけね？」

「その通りです巫彩さん。そして私はこの告汙匄の姿になった……」
それはそうと、今の回想で気になることが一つあった。

「志穂が また部屋に籠っちゃってる って、なにがあったわけ？
ここであたしは不意に、志穂が母を説教する際に言っていたことを
思い出した。」「……まさか！ 濡れ場上映会事件！？」

「そうです。アニメ映画の代わりに、柴門さんと彼との濡れ場が流
されてしまったという、あれです（苦笑）」

「またしても志穂の恋は成就しなかったと……。でもその件に限っ
ては、彼は何も悪くないわけよね？ なんとって母親の蓉子さんが
見つけてきた人だし」

あたしの考えは甘い、と言わんばかりの虚ろな笑みを浮かべる真
紗耶さん。

「ええ、当然、彼は何も悪くないわけですが……。あろうことか柴門
さんは、例のごとく何も悪くない彼への誹謗中傷をFAXで送り続
け、彼は虐められて、転校までさせられる騒ぎになりました」
「……………」

しばしの沈黙の後、あたしは最も苦しい質問をすることに決めた。
「それで、その真紗耶さんの騒ぎの内に、木泊兄さんは……」
これには真紗耶さんも大きく腰を曲げ、自らの太股に顔をうずめ
てしまう。

「はい。私があんなつまらないことで発狂したばかりに、木泊さん
の里親探しが大幅に遅れてしまい、蓉子さんが学生時代の親友であ
った母萌さんをやっと見つけた、その日につ…… 《船旅をさせてく
れたら学校へ行く》という条件で一人旅をなさっておられた木泊さ
んは、船から飛び降りて……」

「そう……。でも、木泊兄さんは今、このSweet Seasonで幸せに暮らしているわけだから」

本当にそれだけが大きな救い。それでも真紗耶さんは明るい顔を見せてはくれない。

「ですがその日、報せを聞いて病院まで駆けつけた私がガラス越しに見たのは、変わり果てた木泊さんの姿でした。ICUの治療台の上で、何本もの管を付けられ……」

「やめて真紗耶さ」

遮ろうとした私の言葉を逆に遮ってくる真紗耶さん。

「その時！ 私は見たのです！ 木泊さんの傷ついた顔の、閉ざされた瞳から、一筋の涙が伝うのを！」

「聞きたくないわそんな話……」

止めるけれど、真紗耶さんにはもうあたしの言葉なんて耳に入らず……

「その涙で……その涙で私は……私は心に決めたのです……首田宗志教への復讐を！」

まるで騎士が高らかに指令を出すように、そう気高く宣言したのだった。

ところが、その数十秒後……

「フクシユウなんかしてほしくなかったよおっ……。そりゃあ、ううっ、おかしなシユウキョウに攻撃されたのはシヨックだったよ……。でも、ボクのために真紗耶さんと志穂さんにギセイになつてほしくなかったあ……」

いつしかそこには、涙で顔をびしょびしょにした木泊兄さんが佇んでいた。

「木泊兄さん？」

「木泊さんっ！」

あたしも真紗耶さんも、思わず木泊兄さんに駆け寄り、彼を同時に抱き締めた。

「あわわわっ、苦しい、苦しい。なにをするのー!？」

慌てふためく兄さんがいとおいしい。

まずは真紗耶さんが大袈裟に心中を吐露。

「確かに復讐ほど無意味なことはないのかもしれませんが。けれども、あんな連中が木泊さんを地獄に叩き落しておいて、何の罰も受けずにのうのうと生きているのが耐えられなかったのです私は！」

続いて、あたしが号泣しながら訴えかける……

「木泊さん、お願いです！ 日本で一番、幸せな人間になって！ 本当の幸せをつかむべきなのは、あなたみたいな人なの！ あたしに出来ることならなんでもするからっ！」

「えへへ。ありがとう……ふたりと。あはっ　ボクってシアワセものだね……！」

木泊兄さんにしては意外な、どこか力強い笑顔が、あたしと真紗耶さんの心をにわかに明るくしたのだった。

そうして安心したあたしと真紗耶さんが木泊兄さんから離れると、兄さんは柄にもなく難しい顔で腕を組んだ。その不釣合いな感覚がまた、実に可愛らしい。

「うーん。お二人は、ボクのこと想って泣いてくれたんですね。でも、ボクはもう、ダイジョーブですよ？」

「兄さん……」

「木泊さん……っ」

そこで木泊兄さんは小さくガッツポーズ。

「ん、わかりましたっ。巫彩の言うとおり、ボクは日本いち、ううん、セカイでいちばんシアワセな人になってみせますからっ。ほら、ゆびきり、しましょっ」

差し出された華奢な小指に、自分の小指を絡ませる。指先に弱々しくも温かい愛を感じたとき、あたしは復讐に至った真紗耶さんの心を徹底理解した。

こんな純粹無垢な木泊兄さんがICUで涙を流しているのを見た

ら、誰だつて復讐をしたくもなるだろう、と……。

【M i s a e · s v i e w p o i n t】哀しき復讐心（後書き）

第六章はこれで終わりです。お疲れ様でした……。

「巫彩。おかえり。お母さん明日はね、お父さんのことで、遠出して夕方から弁護士さんなんかと徹底的に話し合わなければいけないザマスから。民宿に泊まることになるかもしれないザマス。くれぐれも戸締りには気をつけて。またあの志穂さんとかいう人が来てくれると安心なんザマスけど」

「お母さんただいま。明日は志穂さんの 女 友 達 に来てもらうから大丈夫よ」

あたしが家に帰って、義母ときちんと挨拶する……これって実は初めてのことなんじゃないかと思う。

そしてなぜかその声には薄っすらと人間味が感じられるし、化粧も薄い。こうして見ると意外と素朴な顔をしている義母に、あたしは少し驚いた。

木泊さんを真紗耶さんと二人で抱き締めた後、母萌さんを交えて四人で、料理修行中の木泊兄さんがこしらえた料理を食べた。あれは驚いたもので、いまだき一流を自負するレストランでも、あんなに口当たりが良くてバタ臭くない料理は出せないだろうと、そう思わせるほどの腕前でビックリ。

ただ、そんなこんなで真紗耶さんと志穂の過去嘸に関しては、全く続きが聞けなかった。

そして翌日 今にも泣き出しそうな灰色に染まった日曜の昼下がりに、あたしは真紗耶さんにこの家へ来てもらっていた（真紗耶さんはこの家を知らなかったけれど、志穂がここを知っているから伝たちが簡単に済んだ）。

「お邪魔します」

真紗耶さんが挨拶すると、母は安心そうに微笑む。

「あなたが志穂さんの女友達という人ザマスのね？ これで安心し

て出かけられるザマス」

ドアを出て行った義母と入れ替わるように、「お邪魔します」と家上がった真紗耶さんから、早速鋭い指摘が……

「なんだか、思ったとおりの家です。せつかくこんな素敵な鎌倉という場所に建っているのに、これじゃ東京の気取った住宅街にある家と変わりませんね」

「でしょ？ 義母も義父もプラスチックみたいに非人間的だから、家も自然とこんな感じになってしまうのかも……」

「そうですね……」

これで真紗耶さんが学校で村八分にされた理由がますます解った。この人は本当のことしか言わないし、言った後に《失礼なことを言ってしまったね》などと取り繕うようなこともしないんだから。

「真紗耶さん、とにかく、好きなところに腰掛けて」

「はい。失礼します」

台所へ移動して椅子に座ると早速、真紗耶さんは現場検証でもするように台所を見回し……「巫彩さん、あれはなんですか？」棚の上に置かれて埃を被った写真立てを指差した。

「あれは、あたしが小学の頃に一日も欠席しなかった賞を貰ったときに、友人たちと撮った記念写真よ」

友人、という言葉が出ると、穏やかだった真紗耶さんの顔が、青天の霹靂へきれきのように怪訝なものに変わった。

怪訝顔で斜め下に視線を落とすその仕草は、いかにも女から嫌われそうな女といった感じ。

「そんなものを置いていて何になると？」

……やっぱりこんな奴の相手ができるのは志穂しか居ない！なんて思ってしまった。

「べつ、べつにいいじゃない？ いい想い出なんだからっ！ 嫉妬してるの！？」

さすがにプンスカするあたし。けれども真紗耶さんは口調を微塵も変えたりはしない。

「この家には、木泊さんを攻撃する首田宗教によって、落書きされたり、いたずら電話されたり、石が投げ入れられたりしたんです。そんなことがあった家に、小学時代の楽しい思い出なんて……神経を疑います」

「……カンケイないでしょう？」

「木泊さんにとって、小学時代は地獄だったんですよ？」

度が過ぎているとはいえ、これは真紗耶さんなりの自粛なんですよ。

確かにあたしは、管を何本も繋がれて涙を流す兄さんの姿を見てはいない。あたしがこの家に引き取られた頃には、兄さんは日当たりのいい部屋へ移されて、平和な顔で眠っていたから。

もしも、あたしも真紗耶さんと同じ情景を見ていたら……

そう考えると、真紗耶さんが横暴なことを言っているように思えなくなつて、あたしは棚から写真立てを下ろして写真を出し、それをビリビリと破いてみせた後、流し台まで移動して生ゴミの入った三角コーナーにポイッと捨て放った。

「これでいいかしら？ ……正直言つて、小学校の頃の友達とはそんなに深い付き合いじゃなかったし」

「そうですか」

満足そうな真紗耶さんを見てホッと胸を撫で下ろし、志穂の氣に入つたあのお茶を出してあたしも腰掛けた。

「真紗耶さん、昨日は木泊さんや母萌さんの手前、《復讐を誓つた真紗耶さん》以降の話が出来なかったわね」

「そうですねー。と言いますか、」真紗耶さんはあたしのお茶を一口飲んでニコリ。「美味しいですね」

「そりゃどーも」

そして真紗耶さんは、コップを両手で大切そうに持ったまま真顔に戻る。

「それで……復讐を誓った私は、仲間として首田宗志教に接近しました。ただ、この告汙匐は首田宗志教の忌み嫌っているアイドルユニット『晩壓丕埧』の一人ですから、適度に変装をしてね」

「そのときはどんな顔に変装を？」

「まあ、貫禄ある熟女に」

「そう。……それにしても、味方として敵に近づくだの変装だの、何だかスパイ映画みたいね」

あ、また怒られる、と思ったけれど、真紗耶さんは意外にも怒らず、逆に暖かく微笑んできた。

「やだ。巫彩さんもそう思いますか？ 私も何だか、あの頃のこと、現実感を伴って思い出せないんですよ。ふふふ」

……判らない。本当に、沸点がどこにあるのか見当のつかない人だと思う。

「……。そうでしょう」

「はい。まず、ネット掲示板上で集会の案内をしていたのを見かけた私は、下見感覚でその集会へ赴きました……」

「えー、掲示板上で！？ 首田宗志教も危険なことをするものね！」

「ああ、当時……一九九三年はインターネットが商用化されたばかりでして、当時のネットなんて、ほとんどパソコン通信に毛が生えたようなものでしたから」

「なるほど」

「あれは、一九九三年も、初夏の南風が街を吹きぬけるようになった頃のこと」

【Recollection of Masaya】スパイ大作戦

首田宗志教が集合場所に選んだのは、町外れのみすぼらしい公民館。その前に集まっていたのは、それに輪をかけたように貧相な感じの青年たちでした。

せっかく告げ囃の顔になれたのに、すぐさま熟女に変装というのは気が引けましたが、まあ仕方ありません。

私は連中のそのようないでたちを少し疑問に思いながらも、

「あの、首田宗志教の方々でいらっしゃいますか？」と低く重みのある声をかけました。

「ソウデスガ？ ナニカ？」メンバーの一人が実に弱々しい返事。

他の面々も明らかに、私のこの異常に貫禄のある姿にたじろいでおります。

公民館の中。安っぽい白のプラスチック・テーブルを囲んでの座談会が始まりました。

首田宗志教のことですから、どんな殺伐とした話を始めるのかと思つたら……あろうことが彼らは、ロボットのプラモデル云々、世界的に有名な某アニメ団体の作品のどれが最高傑作か云々、といった《旧世代のオタクたち》ならではの話を始めたのです。

それで私は、なぜ首田宗志教が美少女文化や、それを愛好する新世代のオタクたち、ひいては社会に積極的でない不登校児といったものを攻撃するのが理解できました。

《旧世代のオタク》というのには、一部、マッチョイズムに毒されている層があるのです。早い話が、正論ならば人を傷つけても構わない、というガサツな思想。

すなわち首田宗志教とは、マッチョイズムを掲げる旧世代オタクの集合であつたのです。

それが収まると、私は早速、こいつらに気に入られそうな発言をします。

「本当に許し難いですよね」

「ウヒツ、ユルシガタイツテ、ナニガデスカ？」

「アナタ方も仰っているでしょう。最近の美少女ブームですよ。これはアニメという文化を破壊する悪しき存在ですからね。我が日本国が築き上げてきた偉大なるアニメーションという財産！これに泥を塗る存在を叩き潰すためならば、私はテロ行為も辞さない考えであります！」

私が、しゃあしゃあと心にもないことを口にとすると当然、拍手と歓声が起こるわけです。

「オオオオオオー！」

「ソノトオリー！ チカラヲ アワセテ、ニホンカラ ビショウジ ヨブンカラ マッショウ シマショウ！」

「アナタハ カミサマダー！」

たかが《美少女文化》などという毒にも薬にもならない存在に、ここまで腹を立て、ここまで必死になる首田宗志教。まさに《旧世代のオタク》の持つ傍若無人な面を象徴する存在と申せましょう。

これはこれはいい塩梅だと思い、私は更に心にもない発言を続けます。

「最近、私はアナタ方のお陰でスッキリしたことがあるんですよ。不登校の分際で小説を出版した中里木泊とかいう少年への見事な攻撃です！ ああいう子供が日本をダメにすると思うんですよ。ふっ、奴、船から飛び降りて自殺を図ったとか。いい気味ですよ。いつそのこと、くたばってくれたらもつとせいせいしたのに。ともあれ、アナタ方は勇敢でした！」

「ワアアアアアー！」

「ワタシタチノ オモイヲ、テツテイテキニ リカイシテクレテ、アリガトー！」

「アナタハ セカイイサnder！」

「まあっ 光栄でございます。それにしても、よく、アナタ方はあのクス少年の住所を突き止められましたね？」

「アノ ショウネンガ ホンヲ ハツバイシタ シュツパンシヤニ、ワガ シュダシュウジキヨウ ノ シンジャヲ、アルバイト トシテ オクリコンダノデス」

「そこまでなさるとは…… お見事です！ 心より尊敬いたします！」
かくして、私はいとも容易く首田宗志教に気に入られたわけですが……まさか、こんなにも簡単にいくとは思ってもみませんでした。ネットで傍若無人に振舞う奴らほど、実社会ではこんなものなのですね。

と、そこでその日の目玉である。ご本人登場コーナーです。

首田宗志……どんなエキセントリックな人となりなのかと思ったら、公民館に入ってきたのは、シミだらけの顔や焦点の定まらぬ瞳が特徴的な、痩せ細った青年でした。

「どうもこんばんは、首田宗志です。こんな素晴らしい宗教を僕のために作ってくれてありがとうございます！ 皆さんの熱い応援のおかげで、僕は小説を書き続けることができます！」

馬鹿馬鹿しい！ と思いました。

首田宗志教のせいで何人ものファンが嫌な想いをしているという事実、首田宗志自身は微塵も気づいておらず、ただ自分の宗教が出来ているという事実のみに目を向けて、馬鹿みたいに喜んでいるのですから。

ともあれ、ご本人登場を目当てに、今回はこんなにも多くの信者が集まっているでしょう。私の発言によるものと同じくらい大きな歓声があがります。

それが鎮まるのを見計らって、私は流麗な笑顔を浮かべて堂々と首田宗志に対して発言を始めました。

「首田宗志様！ あなた様の小説や、それを原作にしたアニメによ

って私たちはどれだけ心を慰められ、救われ、そして感動したかしれません。おお、あなた様のためならば私は、どんなお礼でも致します。なにか、欲しい物はおありですか？」

すると首田宗志は、照れ臭そうに俯きました。

「今、欲しいものは彼女ですね。彼女居ない暦が相当なことになっていまして（苦笑）。随時、彼女募集中です」

彼女が欲しい……この言葉を首田宗志から引き出したかったのです。

かねてから首田宗志は、ネットで連日《彼女が欲しい》と言いまくっていたので、まあ思い通りになったという感じです。

「ご紹介致します 私の友人に、ちょうど失恋中で傷心の美少女が居るんですよ」

「おおっ！ それはそれは！」

というわけで首田宗志教および首田宗志自身をモノにした私は、首田宗志とポケットベル（笑）のやりとりをするようになりました。

そして柴門家へ向かいます。柴門さんが働いたり休んだりを繰り返したために運営のバランスが崩れ、《人を雇う》という概念が滅茶苦茶（人を雇うと柴門さんが《働きたい》と言い出した時に困るため）になったクウチュー力は休業中でした。

レジの向こうに愕然と座る蓉子さんを軽くハグして慰めた後、二階へ急ぎ、籠ったままの柴門さんにドアの前から声をかけます。

「柴門さん、私、見つけました。貴女の彼になってくれそうな人をする、つれない声が……」

「私、もう嫌。もう、誰も信じない」

「ですがね、私が見つけた人というのは、あの首田宗志ですよ」

当然、この時点で柴門さんは、木泊さんの自殺未遂は学校での虐めのみが原因と思っておられましたし、また首田宗志教の存在すら知らなかったため、首田宗志を単に《有能な人気小説家》と思って

おります。

「え！？ 首田宗志って、あの小説家の首田宗志！？」

と、柴門さんの声が明るくなりました。

「そうですよ。あの、首田宗志です」

「私を部屋から出そうとして、それで嘘を言ってるんじゃないですよーね？」

「いえいえ、ポケベルで打ち合わせさえすれば、いつでも首田宗志と貴女は会える状態にあるんですよ？」
するとドアが開きました。

そして数日後、首田宗志と初めて会合した柴門さんは、上機嫌で帰って参りました。

「真紗耶ーっ！ ありがとうー！ 宗志となら私、未来を誓い合えそう！ 宗志ったらね、君、『晩壓不埒』の廉埒紡弊順に似てるね！ 素敵だなあ…… だって！ アハハッ！ お母さーん！ 私、明日から店出るから！」

【Recollection of Masaya】スパイ大作戦（後書き）

志穂の色情狂ぶりは、『週末婚』の陽子（松下由樹）がモデルになっています。

【Misae's viewpoint】矛盾だらけの宗教

……これには真紗耶さんの回想を遮らざるをえないあたし。

「ちよつと待つて真紗耶さん！ 首田宗志は志穂を見て、《廉埜紡弊順に似ていて素敵だ》って言ったわけ！？ おかしくない！？
だって弊順は『晩壓丕埜』のメンバーよ！？ バーチャルアイドルユニットなんて、首田宗志教の忌み嫌ってる美少女文化の産物ですよ！」

「実は、首田宗志自身は、美少女文化を憎んでいるわけでも木泊さんを批判したわけでもなく、むしろ、美少女系のアニメや漫画を愛好しているのです。首田宗志の生み出すキャラクターには明らかに美少女文化からの影響が色濃く見られますし」

「ちよつとちよつと、どういうことよ？ そうだとしたら、首田宗志自身と首田宗志教が上手くいく道理がないじゃない」

あたしが混乱していると、真紗耶さんはお茶を一口飲んでコップをテーブルに置き、呆れと軽蔑に満ち満ちた溜息をついた。

「ふう……首田宗志教の連中はね、首田宗志自身の思想などどうでも良く……また首田宗志自身も、首田宗志教が何をしても全く感心を持たず……お互い、ただづるんでいたのです」

「はー……」

はー、としか声が出なかった。そんな滑稽な人間関係もあるものなのか、って。

そんなあたしに気を遣ってか、真紗耶さんはより具体的な解説を始める。

「大体、首田宗志教のしていることは矛盾だらけなんですよ。ネットで色々なものを批判する一方でパソコンに依存する若者の悪口を言い、アニメ好きであるにもかかわらずアニメを《子供をダメにする文化》として批判し、自殺を《命を冒瀆する行為》と位置づけながらも自分たちは集団自殺をし、そして、現代社会を批判する割に

は、社会に傷つけられた不登校の少年を攻撃し……」

「……………」

これはもうノーコメントで。

さて、と。《なぜ首田宗志と志穂を逢わせる事が首田宗志教への復讐になるのか》

……実はあたしは、真紗耶さんの真意に薄々感づいていた。

「真紗耶さん、あなた頭いいわね。志穂と恋に堕ちた男性は、必ず志穂によって不幸にされてるものね」

「そうなんです。柴門さんは失恋すると、例え相手が悪くなくとも、相手の男を地獄に突き落とさなければ気の済まない人……そのことは、今までの私と柴門さんによる過去噺でお解り頂けると思います。でも私は、ただ首田宗志に不幸になってくれるだけで良かった」

ついに、ついに、過去噺が《あの事件》に繋がる時が来てしまった！

「ところが、志穂は首田宗志を刺し殺してしまった……」

私の脳裏に、昔見たニュースの映像と音声が鮮明に浮かび上がった。

首田宗志の別荘が画面に映り、十五歳の少女が逮捕されたという事実を無表情に告げるキャスターの声がそれに被さる。

「はい……………」

真紗耶さんも《ついにその事を話す時が来てしまったか》といった面持ち。

「ねえ真紗耶さん、あたしはニュースでしか知らないんだけど、」

……その先を言うのが心苦しかったけれど、あたしは絞り出すように、

「……志穂は首田宗志の子を妊娠していたのよね」と告げた。

「そうです」

「そして、志穂を流産させようとした首田宗志。お腹の子を守るために志穂は首田宗志を刺し殺した。……そう理解していいわけよね

？」

理解していいわけよね　そう呟いたあたしの心は、ほぼ懇願に近いものだった。

これ以上、どす黒い話は聞きたくない……けれども真紗耶さんは、そんなあたしの心を察してか、実に申し訳なさそうに首を横に振った。

「いいえ、いいえ。巫彩さん……壁に耳あり障子に目あり、です。

私の隣に来て下さい」

「ええ……」

あたしが真紗耶さんのすぐ隣の椅子に座ると、真紗耶さんはヒソヒソ声で囁を再開した……

【M i s a e · s v i e w p o i n t】矛盾だらけの宗教（後書き）

一九九三年の時点ではたぶん、バーチャルアイドルなんて存在しませんでしたよね。

出来る限り《時代に忠実に》をモットーに書いてきましたが、ここへきてとうとう綻びが……。

しかし物語の進行上、ここばかりは妥協して《ご了承下さい》と言うしかないのが悔しいです。

【Recollection of Masaya】こつもり族、血の海へ（前）

いよいよプロローグの事件に繋がります。

それは、一九九三年もいよいよ、クリスマスのイルミネーションが街を輝かせ始めた頃……

ある日、街角の広場に飾られた大きなツリーの煌きの下、私と柴門さんは辛気臭い言い争いをしていました。

「柴門さんっ、それなら堕ろせばいいじゃないですか!？」

「だめ! 私は産みたいの! この子、時々私のお腹を蹴るのよ!？」

「だつて育てるつもり、ないんでしょう!？」

「うん。私まだ、遊びたいし。なのにね真紗耶! 宗志ったら《二人で育てよう》とか言ってくるのよ!？ 重すぎて、責任の半分なんて背負えないよ私! 宗志が責任もつて、一人で何とかするのが筋つてもんでしょうが! 助けて真紗耶!」

柴門さんが妊娠してからというもの、私と柴門さんは毎日毎日、そんなふうと同じ言い争いをしていました。

こんな非人道的な発言も、柴門さんの魅力で 私がぼんやりと見惚れていると……

「!!!」

柴門さんはピキッと何かを思い立ったのか、石畳の広場の隅まで移動し、子供が手に持った風船をバーン! と割ってみせました。

「うわああーん!」「な、なにするぞます!」

当然、号泣を始める子供と慌てる母親。そしてそれを見て、実に満足そうな柴門さん。

「ふふ、いいきみ」

「うえええーん!」「どうしてくれるぞます!」

「金でケリつけましようや! ほら!」

泣きじゃくる子供のオデコに柴門さんは一万円札を押し付けると、そのままそそくさと走り去りました。

そんなある日のこと。

一九九四年も寒さのなかに春の息吹を感じられるようになった頃……霧深い深夜に、私のポケベルが鳴ったのです。

画面には一言、

「マサヤ タスケテ」とだけ。

「サイモンサン、ドウシタノデス？」

とっさにそう送り返すと、

「シュウシノ ベッ ツソウ ハヤク」

と返ってきました。

《シュウジ》の《シ》に濁点を打つのを忘れていたり、逆に《ベツソウ》の《ベ》には濁点を二つ打ってしまっていたり、かなり緊張というか興奮している様子。

私は慌てて、もの凄い勢いで電車を乗り継ぎ、何度か柴門さんと首田宗志と三人で会ったことのある、その別荘へ向かいました。

そして、むせるような霧深い空気の中、鬱蒼とした林を抜け、人里離れた別荘に着くと、なぜかドアが開いていたのです。

私は中に入り、内側から鍵をかけます。そしてリビングへ向かうと……

「柴門さん大丈夫ですか！？」 ！？ え……柴門さん、貴女まさか、まさかその人を殺し……っ！」

私の目に入ったのは、変わり果てた首田宗志の屍骸しがいと、その前でナイフを持ったまま硬直して立ちすくむ柴門さんの姿。

殺してから時間が経っていたらしく、柴門さんの顔や制服に付いた血は赤黒く変色しておりました。

私に気づくと、柴門さんは硬直したまま、やっとの想いで声を出します。

「ま、真紗耶っ！ わ、わ、わた、し、あ、あの、こ、こ、これ、どう、う、すれ、ば」

血まみれになってオドオドする柴門さん。

その姿を見たとき、私は心の底から思いました……この人を守りたいと。

「柴門さん落ち着いて！ 貴女は悪くありません！」

女神のような私の一言で、急に饒舌になる柴門さん。

「だっ……だ、だよね……ははっ……そうよね！？ 真紗耶だっ
てそう思うよね！？ 全部全部、こいつが悪いのよ！ 今だって、私
が《責任とって一人で育てる》って頼んだら、《そんなに育てるの
が嫌なら堕ろせ》だっ……はははははは！ 自分勝手にこんな
清純な女子高生を妊娠させておいて！ なによその言い分は冗談じ
やないわよははははははー！ もう面倒臭いから殺しちゃった」

柴門さんの言葉がスローイングナイフのごとくグサグサと私の心
に突き刺さると、とうとう、とうとう、長年に渡って私の心の底で
噴火を免れていた海底火山が大爆発を起こしたのです。

「ああ柴門さん、柴門さん！ 私もう、我慢できません！」

私は血に染まった柴門さんを強烈に抱き締めました。

「……！！ ま、真紗耶っ！？ 危ない！ 刺さるって！」

ナイフを持ったままだった柴門さんは、滑稽なことに、ナイフで
はなく私のほうを突き放したのです。床に崩れ込む私を見つめる
柴門さんの体に、なにか衝撃的な電光が走るのを私はひしひしと感
じたのです。

白いカーディガンを鮮血のアラベスクで飾った私は、この世で最
も絶美なる妖気を放っていたことでしょう。

「柴門さあん、私が、欲しくはないのですか？」

「あ、あ、あ、真紗耶……私……その……っ」

私がせっかく柴門さんを落とそうとしていたところで、なんと首
田宗志が声を発したのです！ 吐いた血を私のほうへ飛ばしながら。
「ぶはっ！ おおおおおおおおお！ 志穂は……柴門志穂
は……俺の……女……だ……」

「宗志！ 生きていたの！？」

驚愕する柴門さんの頬に血を塗りたくる私。

「柴門さあん？ その男と私と、どちらが魅力的ですう？」

そのまま柴門さんの体を愛撫し続けると、柴門さんは半ば白目を剥くほどの誘惑を受け、私の服のボタンを外しながら、洗脳されたような口調でもの凄いことを言い出したのです。

「は、はははははあ……、いやだなあ真紗耶ったら、すっかり厭らしい身体になっちゃってえ……。綺麗よ真紗耶、うん、宗志なんかよりずっと素敵。真紗耶の胸が最高級のマシユマロなら、宗志の胸なんか干からびた煎餅よ。こんな茹で卵みたいな肌と触れ合ったら、宗志の脂まみれの体なんか吐き気がする。宗志なんて力で女を悦ばすことしかできない醜男^{ぶおとこ}よ。真紗耶を手に入れられれば私は……」

……柴門さんの気の触れた長台詞に、ニンマリとほくそえむ私と、血を吐きながら断末魔の奇声をあげる首田宗志。

「ああああーっ！ お前たちは何と禍々しい女なのだろう！？ ……崇ってやる！ 崇って崇って」

悪態をつく首田宗志の真ん前に私は仁王立ちし、蔑みと恨みを込めた眼差しで首田宗志を見下ろしました……

「崇れるものなら、崇ってみるが良い……。きさまのごときい^いかればんち、虫けら一匹崇る力すらあるものか」

「真紗耶？ あなた……」

柴門さんはただただ呆然。そこで……

「実はね柴門さん」

私は柴門さんに、首田宗志教がしてきたことを全て告白しました。すると柴門さん、自らが刺した男を蔑むように見下ろします。

「なによ！？ 木泊君が自殺未遂したのって、こいつらのせいだったんだ！？」

「ぐおおーっ！ あれはあの宗教が勝手にやったことだ！ 俺には関係ないっ！」

この期に及んで何も理解していない首田宗志！

ここでもしも……

もしも首田宗志が、たとえたった一言でも、たとえ真つ赤な嘘でも、木泊さんを憐れむような言葉を口にくれていたら……

……そうしたら私は或いは、首田宗志を助けようとしたかもしれない。けれどもこの有様では、首田宗志に蜘蛛の糸を垂らすわけにはいかなかったのです。

私の怒りは頂点に達し、再び柴門さんを抱き締めて、顔だけは首田宗志を見下ろします。

「おお、汚らわしき首田宗志よ！ 木泊さんの受けた痛み、苦しみ、絶望、孤独……その総てを百倍にしてお前に与えてやるッ！ その救いなき断末魔にて、真の屈辱を味わうが良い！」

私の呪いの言葉が面白かったのか、柴門さんも思い切りよく私を抱き締め返してきます。

「やい宗志！ 祟られたのはお前さんのほうじゃーい！ きゃーっほっほっほっ！」

こうして私たちは、断末魔の首田宗志の目の前にて、初めて深い契を交わしたのです。

首田宗志は、《自分の恋人》が《自分の信者たちが地獄へ突き落とした少年の友人》に抱かれるさまを見ながら、無惨に果てて逝きました。

数十分後、完全に屍骸と化した首田宗志の前で、服を着ながら私は、

「ときに柴門さん、その子を産みたいですか？」と訊きました。

「うん……」

「では質問を変えましょう。お腹の子を産み、母親となって育ててゆく覚悟がありますか？」

母親、という重々しい響きに、血を抜かれたかのごとく顔面を蒼

白にして後ずさりする柴門さん。

「母親……！？　む、むむ無理よ無理よ無理よ！　私、まだ誰にも縛られたくない！　は、はは、私、子供こしらえたくて首田宗志と付き合ってたわけじゃないし、この子が勝手に私のお腹に居ただけ！　そ、そうよ、悪いのは全部宗志！　私は可哀想な被害者なのっ！」

……母親がこんな女では、かえってこの子は産まれてきたら不幸になるだけだろう、と思いました。

せいぜい柴門さんに《あなたのせいで自由を奪われた》と逆恨みされ、虐待されて無残な最期を迎えるのが関の山だと。その時この子は思うでしょう、《自分は何のために生まれてきたのか》と。

それならば、この腐敗した現代社会に産まれ出てくるより、柴門さんの綺麗な胎内しか知らぬまま逝かせてあげたほうが、誰がどう考えても幸せでしょう。

私は、柴門さんのため、そして、《不幸なだけの命》をこれ以上この世に誕生させぬため……

……柴門さんのお腹を強打しました。

「ぐわあーっ！　な、なにをするの真紗耶ーっ！？」

お腹を押さえて崩れ込む柴門さんが痛々しかったです、私は冷静に電話に向かいました。

「はい、捜査一課！」

すると私は《友達が人を殺した現場に訪ねて来てしまった人物》を装います。

「けっ、警察ですかっ、あ、あのあ、親友がっ、わ、私の親友がっ、ああ、あ、あのっ、付き合ってる、か、彼っ、を、刺しっ、刺し刺しっ、刺し、殺っ、殺ししししまっ、まし、たっ」

「そうですか！　とにかく落ち着いて下さい！　それでその、彼を殺したという親友は今！？」

「ぼっ、呆然、と……。かっ、彼女、彼の子を、にんっ、妊娠してっ、いたんですっ！　彼が、流産させようっ、と、してきて、お腹

の子をつ、守ろうとした、彼女が、彼女がああーっ！」

「解りました！　すぐに向かうので住所を教えて下さい！　それから、その親友を絶対に逃がさないように！　殺人直後の人間というのは非常に不安定です！　大変でしょうが、我々警察が着くまでの間、あなたが心を支えてあげていて下さい！」

「はっ、はいっ！」そして私は住所を告げ、電話を切ります。

すると柴門さんがお腹を押さえて苦しみながらも、確かな笑みを見せるではありませんか！

「へ、へえっ、あ、あんた、頭、いいね……」

「ふふふ、そう言っ頂けて光栄です。愛していますよ、柴門さん」

こうして共犯者たちの艶夜えんやは深けていったのです。

15禁ならここまで書いても大丈夫なんですか？ 詳しいマニュアルがないため、よく判りません。

ただ、《そういう場面》を描くことが目的で書いた物語なのではないことは、きちんと読んで下さった方には理解して頂けると思います。

【Misa's viewpoint】日本の穴

ひそひそ声による回想を終え、普通の声に戻る真紗耶さん。

「巫彩さん、これが、私と柴門さんが抱える秘密の全てです。柴門さんには実は、まだ産むか産まないかの選択肢が残されていました。でも柴門さんは、中絶を選んだ……」

……覚悟はしていたけれど、想像を遙かに超える内容だった。

「……それで、志穂は《お腹の子を守ろうと果敢に戦って男を刺し殺した少女》ということで、無罪に？」

「ええ。しかも、当時はまだまだ、国が青少年の犯罪に甘い時代でしたしね」

「ああ、そうよね……」

運の良い二人なのか、運の悪い二人なのか、こうなると判らなくなってくる。

「でもね巫彩さん、柴門さんが無罪になった最大の要因は、実はそれらのことではないんですよ」

「どういうこと??」

まだ何か凄い事情があるのかと怯えまくる私に対し、真紗耶さんは実に穏やかに指を立て、

「首田宗志の小説ですよ」と告げた。

ぴん、とくる私。

「そうか。首田宗志作品のスプラッター描写ね？ そのおかげで、《首田宗志の変態ぶりが柴門志穂という少女を狂わせた》という偽の事実をでっち上げることができた……」

「その通りです。しかも首田宗志は小説掲載誌上にて、作者アンケートのお題が《理想の死に方》だった際、《ネコミミの生えた可愛い女の子に惨殺される》という最期がよいと冗談めかして書いておりましたし、首田の代表作には何と、《妊娠した女が中絶しようとして自らの腹を割いて死んでいく》というエピソードもあるのです

……！　これにより、首田宗志が柴門さんに中絶を強いていたという《偽の事実》が、見事に裏付けられたというわけです」

もはや素晴らしい、とさえ思い、新鮮な笑みを浮かべる私。

「なるほど……マツチョイズムに毒された連中が青少年の犯罪を何でもかんでも出版物とかアニメなんかと結びつけて、残酷な描写のある作品を批判してくれてたおかげで、あなたたちは大いに救われたわけね」

「そうです。首田宗志自身にとっては、《自分の描いた小説が自分を殺した女を無罪にする》という皮肉な結果に、そして、首田宗志教にとっては、《自分たちが掲げていたマツチョイズムが、崇拜する小説家を殺した女の罪を軽くする》という、実に滑稽な結果になりましたね。最高の復讐でした」

「凄いわね」

「ええ。この国に生まれて本当に良かったと思いましたよ（笑）。

法治国家とは、まさに犯罪者の楽園です」

勝ち誇ったような真紗耶さんの物言いが、妙にあたしを不安にさせる。

「でも、もしもよ？　何かキツカケがあつたりして、警察が捜査をやり直したりしたら……」

あたしの言いたいことを逸早く理解してくれたのか、真紗耶さんは軽く笑いながら答える。ただし、またヒソヒソ声で。

「ふふふ、ええ、そうですよ。柴門さんのお腹を蹴ったのが私で、首田宗志は実は何も悪くないという真実は、私の他には、果音様、あるいは理奈子様くらいしか知りません。つまり私が警察に暴露すれば、あるいは柴門さんは捕まってしまうかもしれませんね」

理奈子とは、真紗耶さんがさつき化けていた女性の名前。じゃあ、果音というのは……？

それも気になったけど、あたしは敢えて口を挟まず、話の続きをすることにした。

「えっと……事件があつたのは一九九四年の春でしょ？」

「ええ」

カレンダーを見てツインテールを跳ねさせるあたし。

「ちよつと！ もうすぐ時効なんじゃないの！？」

殺人事件の時効は、《事件発覚から十五年》。先日、それが十五年から二十年に引き伸ばされたようだけれど、それはその改正後に起こった事件が対象。

二〇〇九年の春を迎えている今、志穂の時効も訪れているのではないかしら！？

「そうですよ。巫彩さんが春休みを迎える頃には、もう成立です。時効が成立してしまえばこちらのもの。誰かが不審に思おうが、調べ直そうが、柴門さんを起訴することは完全に不可能となります」

「そんな重要なこと、どうして話題にのぼらないの？」

「ちよつとちよつと、壁に耳あり障子に目あり、ですよ。それに……、追っ手に追われる毎日ですから。そんなことを考えている余裕もなく、気がつけば時効間近になっていたと、そんな感じです」

そのヒソヒソ声には若干の寂しさを感じられた。

無罪だの時効間近だの言ったって、結局この二人は自由の身になっていないし、時効が過ぎたって《追っ手》が二人を追いかけるのをやめてくれるわけじゃない。

そう……この二人は全く別の意味で、《追われる生活》を送っているわけで。

あたしが思うに、人が一生のうちに受ける苦悩の量はあらかじめ決まっっていて、ある苦しみから逃れれば、別の苦しみに襲われることになるような気がしてならない。

これが、無罪になった志穂、そして何の罪もない志穂の子を流した真紗耶さん……二人が改めて受けた罰ということなのかしら？

語り続けながらお茶を頻繁に飲んでいた真紗耶さん。あたしは立ち上がったお茶を持って来、解けかかった氷の入ったコップに注ぐ

と、今度は真紗耶さんの対面に座った。

「それで、首田宗志教の面々は相次いで集団自殺を……」

その問いに、お茶を飲もうとしていた真紗耶さんはにわかに手を止める。

「はい。自分たちにとっては首田宗志が全てだ、と考える連中でしたからね。ところが、ところが、集団自殺をする前に、奴らは実に愚かなことをして逝ったのです！」

そして再び回想へ……

【Recollection of Masaya】この世の終わり

それは、しぶとい残暑もようやく力を失い、肌を撫でるそよ風がサラサラと快くなってきた頃のこと……

「かんぱーい！ 柴門さんおめでとう！ ひゃあ長い裁判でしたねー」

「かんぱあい！ けど無罪で良かったあ……あんなヤサ男の一人や二人ぶつ殺したくらいでブタ箱に入ってたまるかつての！」

私と柴門さんは、私の家の台所で祝杯をあげておりました。ちなみに母は柴門さんが苦手らしいのでその場には居ません。

どこへ行っても疎まれてばかりの柴門さんが可哀想になり、私は声のトーンを落としました。

「柴門さん、退学は残念でしたね。でも、これで明日からクウチュー力で働けますよ。だって、無罪になれば前科は付かないわけですからね」

暗い私に輪をかけたような憂鬱な溜息をつく柴門さん。

「はあ、クウチュー力はさあ、今、バイトが雇われててね。私の出る幕じゃないわけよ。だから、明日から色んなバイトを探してみるつもり。私、試してみたいのよ。あんな事件を起こした私が、どれだけ《やり直せる》のか」

柴門さんの健気な想いに泣きそうになりましたが、ここは涙を堪え、明るくグラスを掲げます。

「柴門さん！ 今日飲みましょう！ ……と言ってもジューズ同然の缶力クテルですけどね」

「ふふ、構わん構わん！ 飲むわよー！」

その数日後、クウチュー力閉店後の空席で柴門さんの帰りを待つ私と蓉子さん。

「遅いですね。もう二十三時ですよ？」

「おかしいわねえ。今日、志穂がバイトに行った店って、《二十一時閉店》って、チラシにも書かれているのに」

「面接にはすんなり合格したのに……何かあったんでしょっか？」

「真紗耶ちゃん、もう帰ったほうが。お母さん、心ば」

と、そこで自動ドアが開き、柴門さんがその場にバツタリ。

渡辺徹のごとく、かくん、かくんと自動ドアに何度も挟まれると、だるそうに店に入り、私たちが居るのは違うテーブルに伏しました。

「うあーっ！ ふざけるなーっ！ 日本はどこも腐ってる！ 大人はみんなクズばっか！ ナメやがって糞店長め！ やっぱり前科者は首ちょんですか！」

前科者 という柴門さんの言葉が信じられず、私は柴門さんの前まで駆け寄り、テーブルにドンと両手を着きました。

「柴門さん！ 貴女は前科者ではありません！ 前科が付くのは、刑が確定した場合のみです。無罪になれば履歴書に逮捕歴を書く必要もないわけです。しかも貴女は未成年です。未成年者は例え刑が確定した場合でも前科は残らないはず！ 柴門さん、貴女まさか自分で自分の犯罪を履歴書に書いたんじゃないでしょうね！」

「んなことするわけないでしょ！」

「だって、そうとしか考えられないでしょう……？」 蓉子さんの沈痛な声。

柴門さんは、「ネットをあさってみれば！？」とだけ、ぶっきらぼうに言い放ちました。

嗚呼っ！ 私は蓉子さんが居る事も忘れ、柴門さんの体の上ののしかかりました。

「柴門さんっ！ ああーっ！ ネットに顔写真を晒されてしまったのですね！？ 《首田宗志を殺した犯人》として！」

「真紗耶……きっと首田宗志教の奴らよ。奴らしか、私と首田宗志のこと知ってる奴は居ないもん。奴らの内の誰かが、くたばる前に私への復讐をして逝ったのよ……！ 最後の最後まで、醜悪な連

中だったわねえっ！」

「柴門さんっ！」私は心底、自分たちの悲運を呪いました。

この一九九四年というのは、日本でインターネットが飛躍的に普及し始めた頃。さらに翌年の『windows95』の発売によって、ネットはより一般的なものへとなってゆくのでした。

私たちの嘆きようを見るに見かねたのか、蓉子さんがとても穏やかな歩調で歩み寄ってきます……

「志穂、もう一度だけ、貴女にチャンスをあげる。……このクウチユーカで働きなさい。ただし、条件があるわ。もう二度と、勝手に辞めるとか休むとかは言わないこと。今度、勝手なことをしたりしたら、二度とうちの敷居はまたがせないわ。いい？」

これは当然、蓉子さんの娘に対する愛情からくる言葉以外の何者でもありません。

しかし、その言葉がのちに柴門さんを追いつめることになるのです。

「……いいの!？」

「ええ。ただし条件は厳守してもらわよ？」

「ありがとうお母さん！ 私、真紗耶と付き合うようになってからは、男が気持ち悪くなっちゃって。おかげで真紗耶一筋になれたよ。だからきつと、失恋してヒッキーになることもないと思うから大丈夫！」

というわけで、娘に気を遣った蓉子さんがクウチユーカのバイトさんを辞めさせ、柴門さんを雇ったのです。

柴門さんはよく働きました。彼女のコケティッシュな明るさはお客さんに評判が良く、《イマドキのロボットみたいな若いバイトと違い、人間的な温かさに満ちている。》などと評されたもので、私も良く、客としてクウチユーカへ向かいました。

ちょうど木泊さんの両親が、孤児になってしまった親戚の赤ん坊を、半ば売名行為のために引き取ったという話を聞いたのも、この

時期のことです……。

さて、ある日も私は客として、柴門さんにパフェを注文いたしました。

そのパフェが、私が柴門さんにする、最後の注文になることも知らずに。

「苺パフェですね！？　かしこまりましたーっ！」

パフスリーブの白いブラウスに同色のカチューシャ、そして下着がギリギリ隠れる程度の赤いエプロンスカートを身にまとった柴門さんが、星々の煌きを宿したかのような笑顔を振りまいてみると、ちょうど私の隣のテーブルに、実に嫌らしい顔をした男性が座ったのです。

「……？」男は柴門さんの横顔を見て目の色を変えています。

「いらっしやいませっ！」

柴門さんが挨拶すると、男は柴門さんの顔を見て嘲笑。

「うはっ！　あー君、まさかまさか、漫画家の首田宗志を殺した子？　ネットで見たよ。よく呑気に働けるね」

「あ、あ……あぁっ、わ、私っ……………」

銀のトレイを落とし、ウェイトレス服のまま、ものすごい勢いで店を飛び出す柴門さん。私も慌てて後を追います。

これが、柴門さんがクウチューカもとい柴門家を去った日となったのでした。

そして柴門さんを追いかけて追いかけて、私はいつしか電車に乗っていました。

平日の真昼だったため、至極ガラリとした車内。ロングシートの隅の手すりを両腕で抱くように蹲る柴門さん。その隣に、私は消極的に腰掛けました。

活気ある電車の騒音が、落ち込みきった私たちと皮肉な対比の妙を生み出します。

「柴門さん……どこへ行くんです……？」

すると柴門さんは姿勢を正し、追いつめられたような顔で真つすぐ前を向きます。

「分かんないっ……！ でも、どこか遠く。誰も、私のこと知らない場所に行きたいよぉ」

「柴門さん……」

柴門さんの気持ちが手に取るように理解できるからこそ、私は何も言えませんでした。

再び柴門さんは手すりに蹲ります。

「私もっ、家には帰れない。木泊君も、家族に迷惑をかけないために死のうとしたんだっけ……。今はなんか、木泊君の気持ちが痛いほど解る気がする」

明らかに自殺をほのめかす柴門さんの発言に、私は慌てて、

「とりあえず、うちに来ませんか？」と付け加えます。

「ダメだよ。私、袴里さんに嫌われてるし」

「そんなこと言っている場合じゃないでしょう！？」

「でも……」

とにもかくにも、今日中には柴門さんを慰めなければ、何が起くるか判りません。

そう思った私は、とっさに《ある場所》を思い出したのです。ちなみに、私たちが出逢った林には行きたくありませんでした。木泊さんの哀しい記憶が甦るゆえ。

「柴門さん、いい場所があるんです。乗り換えが二回必要ですけど、来て頂けますか？」

「うん。もっ、どこへでも連れてってよ」

数十分後、私と柴門さんは京浜急行の快速特急・二千形のクロスシートに向き合って座っていました。

二千形の窓は基本的には開きません。もしかしたら、柴門さんが窓を開けて飛び降りるのでは……そんな想いが、私にこの列車を選

ばせたことを付け加えておきます。

「私、以前から京浜急行が好きでね、何度も乗ったことがあるんですけど、ずいぶん、車窓から緑が多く見えるので。いつかあの緑の中に入ってみたい、って思ってたんですよ」

「今の私とそこに入ったら、二度と生きちゃあ出てこれなくなるかもよ？」

こんな時でもブラックユーモアを欠かさない柴門さんに、ほんの少しだけ胸を撫で下ろす私。

「まあそれはそれでいいんじゃないですか？」

「（、'、'、）ふっ……」

こうして私たちは、郊外すらからも外れた場所へ足を踏み入れました。

柴門さんも私も黙ったまま、湿った土の感触を靴底に感じる森道を歩き出します。

私は……柴門さんの手を持てる力の全てを出し切って握っておりました。手を離れたなら即、柴門さんが冥府への旅に出かけてしまおうと思わんばかりに。

車窓から森のように見えていた場所は実は、いわば巨大な城壁のような存在で、その向こうには田んぼの跡地が連なる、のどかな自然地帯が広がっております。秋もいよいよ更け、鬱蒼たる木々の間を澄み切った風が踊るように駆け抜けてゆきます。

「広いのに、誰も居ない」柴門さんは半ば愕然。

柴門さんが呟いた 広いのに、誰も居ない……それは、現代日本の問題点の一つではないでしょうか？ そういう場所が、今の日本には少な過ぎるのでしょうか。

「柴門さん、そうですね」

私が俯きがてらに立ち止まると、柴門さんは私に手を握られたまま、石ころだらけの地べたにへたってしまします。

「私、もうダメだ」

「私なんか、最初からダメですよ」

「なあにそれ」呆れたように私を見上げる柴門さん。

私も柴門さんの隣に崩れ込みます。

「もう私、とにかく《現代日本社会にことごとく適応しないように出来ている人間》で」

「私は違うよ！？ 私は社会から賞賛されるだけの魅力と能力を持つてる！ なのに首田宗志のせいで！ …… 真紗耶のせいでもあるのよ？ あんたが私に、首田宗志を紹介したりするから」

その言葉を聞いて私は内心、含み笑いを致しました。柴門さんは、私が復讐に柴門さんを利用するために、柴門さんを首田宗志に近づけた事を知らないのだ、と。

私と柴門さんが、しばらくその場で呆然としていると（ただし未だに私は柴門さんの手を握る力を緩めぬまま）、遠くの道に、実に美しいシルエット

それは、私よりもずっと艶美な黒髪に、胸は大きくはあるけれど実にスレンダーな身体を持つ、大人の女性……

女性は私たちに気づくと、地面に崩れこんでいることを不審に思ったのか、悠然とした歩調はそのままに、私たちに近寄って来ました。

近づくにつれ、この女性のダガーのように鋭い瞳や、見事にカットされたダイヤのように利発な表情が身に迫ります。

そして私たちの前に立つと……その第一声は、
「貴女、人を殺しているわね？」と、柴門さんを見下ろしての一言。
氷の剣のごとき、伶俐かつ透明な声です。

私は向こうのほうからおでました！ と思いました。実は私はまさに、この女性目当てでここへ来たのです。

無論、柴門さんは穏やかではいられず、立ち上がって女性の顔を指差しました。

「あ、あんたまで！ あんたまでネットで私のことを……！」

「柴門さん柴門さん」私は柴門さんを宥めつつ、「……どうも。初めまして」女性に会釈をしました。

「こんにちは」女性も私に軽く頭を下げた後、柴門さんに少し厳しめな視線を送ります。「ネット？ そんなもの、私は持っていないわ。人を殺した人というのは、顔を見れば判るのよ私は」

「あ、貴女何者！？」

とうとう私の手を振り払い、女性の手前まで移動する柴門さん。

私は改めて、女性に挨拶をします。

「どうも、河東真紗耶と申します。こちらは、柴門志穂。私、京浜急行が好きで、ある風の強い日、千形に乗っておりました。すると偶然、本当に神の導きのごとく、風で剥がされたと思われる一枚のチラシが、開け放たれた窓から舞い入ったのです」

ここまで言うと、女性は私の意図を理解したようです。

「それが、《うち》のチラシだったのね？ 私に、何か用ありかしら？」

「まあ……さようでございます。チラシに、貴女の写真が、出ていたもので」

「そう……」

「なんなのよ！？」

一人、納得のいかない柴門さんを二人で連行し、私たちはかなりの時間をかけ、ある場所へ向かいました。

着いたのは……古びた木造校舎。そしてその隣には、立派な工場が建っております。

私たちが仰々しき門を開ける音を聞くと……

「のんちゃーん！ おかえりーっ！」

紅茶色の髪をした女性が、嬉しそうに駆けて参りました。

【Misa's viewpoint】のんと理奈子

「ちょっと待って真紗耶さん！ その 紅茶色の髪をした女性 っ
て、まさか、昨日の……」

またしても思わず口を挟んでしまうあたし。真紗耶さんは戸棚の
ガラスのほうを向き、今は告洵匐の姿をした自分を見つめた。

「はい。私が昨日変装していた、あの女性です。名前は……香上理
奈子。告洵匐と顔の構造が似ているから、変装がし易いんですね」
「……で、その校舎って何なの？ 校舎の隣に工場って、想像がつかないんだけど」

あたしは淡々と質問するけれど、どうもこのくだりに話が差しかったとたん、真紗耶さんの口調は自分たちの凄惨な過去を話するときよりも沈痛なものになっている。

「その時、理奈子さんに《のんちゃん》と呼ばれた、その女性
彼女こそが、その校舎と工場がある地帯を統べる女王様なのです」

「《のん》って、ずいぶん変わった名前だね。あ、もしかしてニ
ックネーム？」

「そうです、理奈子様特有のね。本名は 立原果音。《果実
》に《音》と書いて《かおん》と読みますが、理奈子様は最初に彼女と出会ったとき、《かのん》と呼び間違ってしまったそれで、それ以来ずっと、《のんちゃん》と……」

真紗耶さんの顔に、ほんの少しの微笑が宿った。

微笑ましい過去のエピソードが、暗澹たる過去を振り返ってすっかり暗くなったその心を、幾ばくか慰めてくれたんでしょう。

あたしも饒舌さを失い、

「それで……」とだけ訊く。

けれども真紗耶さんの温かな微笑は消えなかった。

「列車に舞い込んだチラシを見た私は、果音様のなさっておられる
《行き場所のない子供たちを無条件で引き取って住み込みで造花工

場で働かせる《という立派な生き方に感動して……》

「そう……。それで志穂があんなことになって、そのチラシのことを想い出した、と？」

「はい……」

【R e c c o l l e c t i o n o f M a s a y a】造花の愛（前書き）

七章の肝となる部分です。

【Recollection of Masaya】造花の愛

校舎に案内された私たち。

校舎内は非常にレトロでロマンティックでさえある女学院といった趣で、かなり古い建物ではありますが、果音様たちがきちんと手入れをしているのでしよう、木の温もりで優しく濾過された陽光が肌に快く触れました。

ガラス張りの通路を抜けて北棟へ向かい、音楽室に着くと、私、柴門さん、果音様、そして理奈子様……四人で木のテーブルを囲んで相談を始めました。

まあ、なんと言いますか、首田宗志教のみすばらしい座談会とは豪い違いだなあと、感じましたね。

首田宗志教の座談会ではお茶すら出てきませんでした（まあ連中の淹れたお茶なんて飲めませんけど）が、果音様が淹れて来てくれた紅茶の薫り高さは、おそらくアールグレイでしょう。優雅なバロツク装飾の施されたカップが、ここが安心できる場所なのだということを証明してくれているようでした。

さて、果音様の部屋でもあるというこの音楽室は、格調高いベーゼントルファアーインペリアルピアノが何よりも印象的で、教室というよりはお嬢様の部屋といった趣でした。

まず果音様が意外にも気さくな笑顔で、私と柴門さんに目を向けます。

この氷像のような女性が時折見せる、春の陽光を宿す湖面のような笑顔は格別に美しい……そう思いました。

「河東真紗耶さんに、柴門志穂さんね？　ねえ志穂さん、真紗耶さんが貴女をここに連れて来た理由、貴女もう、解っているわよね？　ここはね、行き場のない子たちを無条件で受け入れて、住み込み

で造花をこしらえてもらう……まあ、施設とでも言えばいいのかしらね？ 理奈子」

話を振られた理奈子様はビクン！ 完全なる、か弱き乙女ですね。とても大人の女性には見えません。

「え！？ えーつと……私に言われてもなあ……。何て言ったらいいんだろう……。ねえのんちゃん、私、よく判らないけど……。ここ、施設じゃないと思うなあ……。施設っていうと、なんて言ったらいいんだろう……」

私は申し訳ないと思いつつも、消極的に声を発します。

「あの……お言葉ですが理奈子様、そんなことを言ったら施設で育った人たちに失礼ではないでしょうか？ 私の母は施設から一步も出ぬ青春を送りましたが、それでもきちんとした人間に育ちましたよ？ まあ多少、不安定な面はありますが、それは生まれ持ったの性格に他なりませんし」

「そうよ理奈子。なににおいても偏見は良くないわ」

果音様に軽く諭され、シュンとする理奈子様。

「ううっ！ ごめんっ……」

その様子を見て居たたまれなくなっただのか、柴門さんが初めて本格的に話し出します。

「ん、まあまあ、とにかく、アットホームな場所ってことね。でも果音様、よくこんな大それたことが出来ますね。学校を丸ごと買収して住居にしたり、校庭だった場所にあんな工場を建てたり」

それを問われると果音様、手に持ったカップを優雅な仕草で受け皿に置きます。チャリン、と、奇麗な音がし……。果音様は愛しげに自分の部屋を見回しました。

「この学校はね、私と理奈子が出逢って、愛を育んだ場所なの」

あまりにもストレートな果音様の言葉に、思わず立ち上がったあたふたする理奈子様。ただでさえ赤みがかった頬は、更に真っ赤に染まっております。

「あっ！ のっ、のんちゃっ……。そんなっ、みんなの前でっ！」

おろおろする理奈子様を、優しく窺めるように見上げる果音様。

「理奈子、こそこそする必要は全くないのよ。私たち、もう二十五過ぎなんだから堂々としましようよ。私たちの仲は認められているんだから。私たちの仲を認めてくれた世の中へのお礼に、こうして私たちは……」ここで果音様、視線を私と柴門さんに戻します。「まあ、そういうことなのよ」

柴門さんは《私と自分》と《果音様と理奈子様》を見比べました。「まあ私と真紗耶も、どっちかっていうとレズですからね。それでも誰も文句言ってこないし。……果音様がこの場所を生み出した、その心は何となく理解できました。でもこんな大それたこと、よく出来ましたね」

柴門さんは明らかに、金銭的なことを知りたいのでしようが、果音様は嫌な顔一つしませんでした。

「私のフルネームはね、立原果音。ええそうよ。立原銀行の社長である、立原佐兵衛翁さへいの孫娘なの。知っているだろうけれど、十年程前にその祖父が亡くなって、まあ私には母も父も兄弟も居ないから祖父に一番近い血縁者として私は、財産を一人で相続した。そして大学を出次第、祖父の後を継いで、銀行の社長に……なるはずだった。でも、何だか虚しかった」

その言葉の続きを理奈子様が、

「そんな時に、ちょうど私たちが出逢った、この学校が閉校になるって聞いて……」と補完。

果音様は理奈子様を、本当に愛しそうに見つめました。

「そう。そうなの。どうせ閉校になってこの校舎が取り壊されたなら、下らないビルかマンションが私たちの想い出の場所を潰すのは時間の問題。だから私は、全ての財産を放って、この学校を買い占めることを考えたの。銀行なんて、直接的には人を助けられないし、幸せにも出来ない。私は社長の権利を適当な人に譲ると、生まれ育った大邸宅や世界各地に点在する別荘、何台もの外車、家にあった無数の宝物ほつもつ、ひいては自家用飛行機やヘリコプターの類まで、何も

かも……総て総て売り放つて、理奈子と共にこの校舎に移り住んだのよ」

大人物、といった逸話ではあるのですが、あまりにも凄すぎて私はやや不安を感じました……

「でも、よくそんな思い切ったことをなさいましたね。もし造花が売れなかったら……」

その疑問には、理奈子様が答えてくれるのでした。

「のんちゃん、凄いなだよ。のんちゃんにはね、《ピアニスト》とか《テニスプレイヤー》とか、色んな肩書きがあつて、その肩書きの中に、《造花アーティスト》もあつたから……」

私は、果音様と自分たちとのあまりの桁違いぶりに少々畏れつつも、一応納得して紅茶を飲みほします。

……その味は高貴でありながらどこまでもインテイメートで優しく、《決して自分たちとあなたたちとの間に壁は存在しない》という果音様のメッセージが込められているようでした。

「なるほど。アーティスト扱いになっているから、確実に成功できるといふ確信があつたわけですか。それで人を増やして、大きな造花製造会社にしたと、そう解釈していいんですね」

すると、こんな凄い人が……私ごときに向かって実に気さくに微笑み、頷きました。

「そうよ。一人では本格的には色々なことは出来ないものね。出来たとしても時間がかかるし。ただね、ただ造花をこしらえるだけでは、私の自己満足に始終してしまふ。それはもちろん、私の造花が人の心を癒すことはあるかもしれない。でも、それで苦しんでいる人が救われるわけではない……」

果音様の仰ったことは、非常に重要な問題だと思いました。

最近の芸術家の多くは、自らの芸術で誰かを救った気になつてい
る人が多いのです。しかし芸術というのは本来、自分のために追求
するものであつて……

私は深遠な面持ちで頷きました。

「なるほど。それで、行き場のない子供たちを引き取る、いわゆる駆け込み寺のような場所にしたかったと」

「そう。私はメンタルではなく、フィジカルに人を救いたかったのよ」

果音様の名言、と思いました。

今まさに親から虐待されたり、学校でイジメられたりしている人たちにとっては、どんな芸術も救いにはならないのです。その人たちにとって最も救いとなるのはまず『危険のない生活が送れる場所』でしょう。果音様はそのことを熟知しておられるのです。

私は果音様と柴門さんを交互に見つめました。

「では果音様、この柴門さんも快く受け入れて下さいますか？」

「ええ」

果音様は二つ返事でしたが、柴門さんは少し慌てて面々の顔を見回します。

「でも私、造花なんて、こしらえたことないし」

すると果音様は『無問題』と言わんばかりに含み笑い。

「それでもいいのよ？ それなら工場のほうで男の子たちと力仕事をしてくれればいいんだから。工場には、色々な形状のプラスチックを精製する設備があつてね、その機械を管理する力仕事は男の子たちの役割。それで女はこの校舎で、私と理奈子も含めて、造花そのものをこしらえていたんだけど、……実はね、困ってたのよ」

再び果音様の言葉を理奈子様が受け継ぎます。

「そうなんだあ。とつても頼りになる女の子が最近出ていっちゃつてえ」

すると柴門さんは突然立ち上がり、果音様の隣へ駆け寄つたのです。

「そういうことなら果音様！ 私、工場よりも、果音様たちとこの校舎で色とりどりの造花を生み出したいです！ 私には、

とても造花が似合いますので……」
「そう。解つたわ。ただ私、厳しいわよ？」

「果音様、厳しかろうと怖かろうと、私は男という者とは関わりたくないんです、もう。私に男を近づけてはダメです！ 惨劇が起こります！」

「ふふふふ」

果音様は柴門さんが冗談を言ったと思ったのか、温かい笑いを見せてくれましたが、私は……言っておいたほうがいい、と思いました。

「果音様。今の柴門さんのお言葉、誇大表現でもなんでもございません。実は……」

私が果音様に、柴門さんの過去の事を掻い摘んで説明すると、果音様の温かい笑みが憂いに満ちた笑みに変換されました。

そしてあるうことか、柴門さんの犯した犯罪のことには触れず、まず柴門さんの心の闇の発端となった出来事について語ってきます

……

「そう。知的障害者から猥褻行為を……。知的障害者は確かに生まれるながらに不本意なハンデを背負っているわ。でも、そのハンデを神格化するような社会のままでは差別も偏見もなくならないと思うのよ。ああ、まあ、よろしくね」

手を差し伸べられると柴門さんは、感涙と共に果音様の細く白い手を握り返しました。

「果音様っ！」

こうして、柴門さんはこの造花工場の一員となったのです。

当然、私は毎日様子を見に行ったわけですが、なんといいですか……日に日に、それまでの柴門さんを覆っていた邪気のようなものが薄らいでゆくのを私は感じたのです。

最初の数日は、柴門さんが仕事に行ってしまったため、廊下から教室の様子を覗く事になりましたが……

……果音様や理奈子様の手つきを真剣に見つめるお姿や、手に持った未完成の造花を流麗な手つきで完成に近づけるお姿は、私の知

る柴門さんのものではなく、花を愛する一人の乙女のものでありました。

そして数日後、やっと柴門さんが休み時間のときに、私は校舎跡に来ることができました。

「お邪魔します」

果音様、理奈子様、そして柴門さんが造花をこしらえる部屋である理科室に、私が初めて足を踏み入れると……

「あ！ 真紗耶！ おはようっ！ たった四日くらい会わなかっただけののに、久しぶりな気がするね！」

テーブルに置かれた幾つもの造花を満足そうに見つめていた柴門さんが、こちらを振り向いたのですが……その笑顔の輝きは目が潰されるほど眩しいものでした。

私は感激に打ち震え、椅子に座った柴門さんを上から抱き締めました。その温もりには、今までの柴門さんにはなかった、光の息吹が感じられたのです。

「柴門さんっ！」

「ち、ちよつと、果音様たちが来たらどーすんの！」

「いいじゃないですかあ……それなら見せてあげれば。あちらのお二人だつてラブラブなんですからあ。あら、」

そこで私は柴門さんの前に置かれた無数の造花に目をやりました。

「柴門さん、これ、全て貴女が……？」

「そつよ！ 驚いた！？」

柴門さんの生み出した造花は、架空の花であることが一目で判ります。

青いタンポポや緑色の薔薇をはじめ、ありえない花々がどっさり。それらはまさに、柴門さんらしい美しさに満ち溢れておりました。

「柴門さん、幸せですか？」

私が柴門さんから離れ、顔を真つすぐに見つめて問うと柴門さんは……

……恐らくその人生で最上のものであろう幸福な笑顔を見せてくれました。

「うんっ……！　とっても！　真紗耶、私をここに連れてきてくれて、ほんとにありがとうね！」

「いえいえ、どういたしまして……！」

【Missae's viewpoint】憎むべき者たち

……そこで真紗耶さんは祈るように深く深く目を閉じた。

「今でも、そのときの柴門さんの笑顔が、残像となつて私のまぶたの裏に焼きついております。思えば、あの頃の柴門さんが一番、お幸せそうでした」

……けれどもあたしは、そうやって人の気持ちちを他者が決めつけるのが好きじゃない。

「そんなふうに決めちゃっていいわけ？」

「ええ。確信できます。もちろん、何年も私と生きてきた中で、柴門さんは何度も明るいつ顔をを見せてはくれましたよ？　ですが、その笑顔の裏には常にどす黒いつ情念が渦巻いていて……。でも、あの造花工場で働いていた頃の柴門さんの笑顔は、本当に本当に、心の底からの明るいつ幸福に満ち満ちていたのです」

あたしはまた、紗那によつて土の地面に移されたあのポリジを想い出した。柴門志穂という人間にとっては、その造花工場こそが《土の地面》だったんだろう、と。

「やっぱり、果音さんとか、理奈子さんの人柄のせいなのかしらね？」

「ええ。私もそう解釈しています。あれは明らかに、果音様たちの《真摯な愛》の影響でしょう。確かに蓉子さんはお優しい方ではありますが、蓉子さんは私の母と違い、決して娘の精神に深く寄り添うタイプの母親ではないのです。娘が姿を消していても明るく仕事が出来る人ですからね」

「ええ。話を聞いていて思った。蓉子さんって現代的で能天気な人なんだろうなあって」

「そうですね。思えば、柴門さんの周りには子供の頃からずっと、真摯な愛を持った人間が一人も居なかったのです。この私の愛も、かなりドロドロしていますし……柴門さんが、あのように歪んだ人

になってしまったのは、そうした周囲の人間たちの責です」

「でも、果音さんたちは違った……」

「ええ。……ですが、」真紗耶さんの表情がまた翳りを見せる。「ですがそれは、束の間の幸福だったのです。ねえ巫彩さん、私が数日前に見たある夢は、柴門さんの生み出す造花によく似ておりまして」

「どんな夢を見たの？」

「まあ掻い摘んで言えば、柴門さんと二人きりの志穂で、幸せに暮らす夢ですよ。でも、青いタンポポや緑の薔薇が現世にないように、そんな生活も、現世では絶対に無理なんです。ありえない幸福、ありえない安らぎ……けれども確かに美しいんですよ」

この人もまた、私と同じ叶わぬ願いを抱いているのだと思った。

「真紗耶さん、あたしもね……、木泊兄さんの今にも消えちゃいそうな姿を見るたび、朱音の重く俯いた顔を見るたび、紗那の寂しそうな横顔を見るたび、眞子の諦めたような笑顔を見るたび、この世に居るのがこの五人だけだったら良かったのにつて、何度も思ったわ」

「さようですか……」

沈黙した空気。なのにあたしは、更に空気が重くなる質問をしなければならぬ！

「真紗耶さん、束の間の幸福　つて、どういう……？」

すると真紗耶さんも、もう哀しさが限界を超えたのか、逆に無表情になって、まるでキャスターがニュースを読み上げるみたいに淡々と語りだす。

「柴門さんが造花工場の一員になって半年近くが経った頃、プラスチックを精製する設備が大爆発を起こしました。死者四名、負傷者五名。当然、犠牲になったのは工場働いていた男の子たちです。校舎に居た果音様、理奈子様、そして柴門さんの三人は無傷でしたが、工場は全壊。生き残った男性5名は結局、果音様を捨てて施設

へ逃げて行きました」

その淡々とした解説が、あたしの心をズタズタにした。

果音さんも理奈子さんも女神様みたいな人で、志穂は女神たちの愛によってやつと優しい人間になれるところだったのに、それなのに、どうしてそうなるの？ どうしてそんな結末を迎えなければならないのかしら！？

あたしは無言のまま真紗耶さんの隣へ行き、真紗耶さんが自らの座った椅子の隣に置いた細長い包みを手に取った。

「これ、Sweet Seasonのワイナリーにあったワインでしょう！？」

「巫彩さん？ まあ、そうですが、よく判りましたね。貴女が昨日、飲みたそうにしていたので……」

真紗耶さんが言い終わる前に私は包み紙を破き、台所から栓抜きを取って来てコルクを抜き、そのままボトルに口をつけて二口ほど飲んだ。

「ゴクゴクゴク……あーっ！ 真紗耶さん！ どうしてですか！？ どうして爆発事故なんか起こるんです！？」

「なにを怒っているんです巫彩さん？ 不慮の事故、ですよ」

妙に不自然な笑みを見せる真紗耶さんが実に訝しい。

「本当に？」

「不慮の事故、不慮の事故、不慮の事故……… なわけがないですよー！？」

真紗耶さんまでもが激情を露にし、あたしの隣まで来るとこの手からワインを奪った。

「真紗耶さん！？」

「ゴクゴクゴクゴク…… ああ巫彩さんっ！ 次々に集団自殺していた首田宗志教！ ですね！ どこを探しても教祖の名前が見つからなかった！ それで……… 爆発事故が起こる前、やけに年をとって見える男が、造花工場で働き出したのです！ 果音様は寛大な方

で、来る者の詳しいプロフィールは聞かないと決めておりましたから！ その果音様の寛大さが！ あだになってしまったのですよ！

ああーっ！

「まさかぁ……！」

あまりに禍々しい予感に、あたしの全身がガタガタと震え出した。真紗耶さんもほとばしる感情を抑えられないのか、あたしのツインテールを双方の手で驚掴みにして何度も引っ張りながら激情的に話を続ける。

「ええ！ その まさか ですよ巫彩さん！ テロ……自爆テロです！ 死んだ四人のうちの一人の名前が、首田宗志教祖の名前と一致したのです！ そういえば爆発が起こる数日前、柴門さんが《新入りが工場で変な動きをしている》などと漏らしておりました！ 教祖は表立ったことはすることなく、ネットだけで色々なものを批判していた輩なので、私も柴門さんも教祖の顔を知らなかったのが悲運でした。きつとあの教祖が設備に何らかの細工を……！」

「嫌っ！ なんて醜い奴らなの……！」

あたしはその場に崩れ込む。真紗耶さんに掴まれたままのツインテールに引っ張られ、頭が痛い！

真紗耶さんはツインテールを持ったまま私あたしを見下ろし、死んだような目で話を続ける。

「巫彩さん、その教祖は昔、酷い差別に遭った人間だそうでね、《それでも頑張った自分》を武器に、不登校児やオタクへの攻撃を必死で行なっていましたよ！ 木泊さんが本を出版したという話を見つけてきて、それをネット掲示板上で批判し、木泊さん叩きの口火を切ったのもその教祖なのです……！ しかも教祖本人は、自らが自分を虐げた者たちと同じことをしているのだという事実になく気づいていない！」

「教祖はそこに志穂が暮らしていたことを知っていて、復讐として自爆テロを……！」

「それならまだマシですよ！ 復讐ならば柴門さんを殺すはずでし

よう？ …… 恐らく教祖は柴門さんの居場所を突き止めたものの、
いつしか柴門さんへの恨みより、造花工場で果音様に守られて和気
藹々と暮らす子供たちへの嫉妬のほうが強くなって、自爆テロを行
なったのでしよう！」

そのあまりの醜悪さに、とうとう両手で耳を塞ぐあたし。

「嫌あつ！ 汚いっ！ 聞きたくない聞きたくないっ！ 汚い汚い
汚い！ 嫌あーっ！」

あたしのツインテールを手放し、今度は耳を塞ぐ手をつかんで無
理やりに話を聞かせてくる真紗耶さん。

「巫彩さんっ…… それでも果音様と理奈子様は頑張ろうとしたので
す！ 努力して、何とか元の造花工場に戻しましょう…… ってね！」

話が首田宗志教のことから果音さんたちのことに移ると、あたし
は再び聞く耳を持った。

「それで、どうなったのよ！？」

あたしは《頼むから平和な展開になってくれ》という懇願を込め
て訊いたけど、その願いはいとも簡単に玉砕されるのだった。

「果音様と理奈子様は…… 必死で造花工場の信頼を回復するため、
寝る暇も惜しんでビラ配りに精を出しておられました……。 ある日、
私は田園地帯で、お二人を見かけたのですが……」

【Recollection of Masaya】悲劇

それぞれ、大量のビラが入っていると思われるスーツケースを二つずつ持つて歩くお二人。

すると、不意と、理奈子様がよろけたのです。果音様はスーツケースを手放し、理奈子様を抱き締めます。

「理奈子っ！　大丈夫！？　お願い、無理しないで！　貴女まで死んでしまったら私はもう……！」

それでも理奈子様は果音様の身体から離れます。

「大丈夫だよ、のんちゃん。私、頑張るよ……！」

しかし案の定、そう呟いた傍から理奈子様は無惨にも倒れてしまったのでした。

「理奈子！？　理奈子理奈子理奈子！！」

【Missae's viewpoint】着火する想い

「当然それは……体の疲れというよりは、心労でありました。そして精神病院へ行った理奈子様は……」

真紗耶さんの言葉が途切れた。それと同時にあたしの心に《リタリン》の四文字が！

「真紗耶さん！ その精神病院で理奈子さんはリタリンを……！？」

「はい。あれを打つと、不思議なほど寝ずに行動が出来る、と。まあリタリンは合法的な薬ですから。果音様は理奈子様がリタリンを打つのを止めようとはしなかったのですが、その頃ちょうど、毎日新聞などが反リタリン運動を始め、リタリンの入手が困難になってしまったのです」

「……勝手に処方しておいて、危険だと判ったら今度は断固としてリタリンを敵視……か」

「それで果音さんは……リタリンを不法入手するようになってしまったのです」

「っ……」

目を閉じるあたし。運命はこの人たちをどこまで不幸にすれば気が済むのかしら？

「やがて理奈子様は 私、空を飛べるんだよ…… などと、変なことを仰るようになって……ある日、ビラ配り帰りの電車の窓から飛び降りてしまわれたのです。走行し始めた直後でしたから、命は助かったのですが、元通りに歩けるようになるには不可能とのことでした……」

……あたしは、酔いも混ざって放心状態。声を発するのがやっとだった。

「真紗耶さん、リタリンって麻薬なの？」

「リタリン乱用者も、最初は軽鬱や眠気などの治療薬として、医師から処方され受動的に服用を始めた例の方が多数派なのですが……」

リタリン大量摂取による急性中毒の痙攣を起こした患者が居ましたし、他にも、不眠、不安、焦燥感、興奮、口渇、食欲不振、動悸、頻脈、高血圧、体重減少、頭痛、胸の痛み、不整脈、支離滅裂な行動、自殺念慮、幻覚、妄想、など、麻薬中毒によく似た症状が出るそうです。スリルを求めて万引きに走った乱用者も居たとか」

淡々とリタリンの解説をする真紗耶さんは、もう何かを諦めきっているような顔をしている。あたしは、

「……？」と、何かを問う顔を真紗耶さんに向けた。

その後、果音さんたちがどうなったのか知れたかったけれど、声に出して《知りたい》とは、もはや言えなかったから。

真紗耶さんはすぐにあたしの気持ちを察してくれた。

「校舎跡に残されたのは、果音様、柴門さん、そして、体が不自由になった理奈子様の三人。果音様は必然的に、理奈子様の看病のため校舎にほぼ缶詰となり……。そして柴門さんは、三人の理奈子様の薬代および生活費を稼ぐため、働こうとしたのですが」

「どこへ行っても《首田宗志を殺した犯人》としての志穂の顔を知っている者が現れた、と」

「そうです。当時はwindows95が発売されるなどして、インターネットが爆発的に一般人へと普及し始めた頃から、柴門さんの噂もまた、燃え広がるように日本中世界中へと拡散してしまつて……。それにそこら辺でアルバイトするだけでは、大したお金にはなりませんし。だから私たちは……あんなDVDを売る生活に……」

こうして過去噺がようやく《現在》に繋がった……。

志穂と真紗耶さん、二人の弁による長い長い回想が終わりを告げたとき、まるで劇の幕を下ろすように、サーツと冷たそうな雨の音が窓の外から響いてきた。

意識が朦朧としていたけれど、これは謝らないわけにはいかない。「ごめんなさい真紗耶さん。あたし、あたし、そんな事情があるっ

て知らなくて、あんなDVDを売っているアナタたちを、不可解に思ったこともあるの。本当に、浅はかだったわ」

「いいんですよ。あの、巫彩さん。ちょっと失礼しますね」

真紗耶さんはまるで精神安定剤を出すかのように携帯を手取る。

「真紗耶さん？」

「柴門さんには言えませんでしたけど私、巫彩さん、貴女とメールで話しているときだけは、憎しみとか恨みから解き放たれることが出来たんです……」

そういうことなのね。この人には、《恨みを思い出さずに居られる人》が居ないんでしょう。

「あ、そう言われてみれば……そうよね」

「お解り頂けたようで、嬉しいです。柴門さんの毒々しい諧謔性を見てみると、柴門さんの安住の場を破壊した首田宗志教祖への憎しみに繋がっていきますし、木泊さんの透き通った瞳を見てみると、こんな純粋な少年を攻撃してきた首田宗志教への恨みが募ってきました。そして母の顔を見ていると、施設で育った母をいちいち色眼鏡で見てる世間への怒りが湧いてくるのです！」

「真紗耶さん……それじゃあアナタ、心の休まる暇もないわよね」

「はい……。思えば私は小さな頃から、醜いものをたくさん見てしまいました。それが私の心に蓄積されて、恨みだらけの人間になっていた……。でも、巫彩さんへの言葉を書き込んでいるとき、ふと気づいたんです……自分が本当に純真な心で文字を打っているということに」

あんな義両親の元で育ったあたしには、何となくその気持ちが解った。

「憎い者だらけなときに、奇麗な者を見つけると、死にたくなるほど幸せよね……」

「ええ。もう、醜い奴らのことなんかどうでもいい。こんな純粋な心が自分の中でまだ生きているって、気づけただけで幸せだと思っていました。まるでシャフリヤールですよ私は。そして巫彩さん、貴

女はそのシャフリヤールに復讐心を萎えさせたシェエラザード……」
真紗耶さんに愛しそうな瞳で見つめられると、あたしは複雑な想いで俯く。

「そう……」

「……だからきつと、造花工場に居た頃の柴門さんもそうだったんですよ。柴門さんも果音様たちと共に居るときだけは、とても純粹な心で居ることが出来たご自分が愛しいんですよ、きつと。だから今、あんな状況になっても、あの場所に留まり続けておられるのではないのでしょうか……？」

悲しい。ただ悲しい。なんという悲しい人たちの嘸なのかしら？
誰も悪くない。

誰も生まれながらにしてよしまな心を持った人間ではない。
それだというのに、首田宗志教……ただそれだけの愚かな悪によって、こんなにも多くの人間が不幸になっているなんて！

雨は次第に強まり、いやが上にもあたしたちの悲しみを増幅させる……。

床に崩れ込んだあたしは両手で顔を覆い、ただ子供のように泣くことしか出来なかった。

「うつうつうつ……どうしてよ……？ 志穂はあたしや木泊兄さんのことを助けようって、形振り（なりふり）構わず義母に盾を突いてくれたのよ。そんな志穂が、どうして……」

すすり泣くあたしが、かっとな真紗耶さんを刺激したらしく、真紗耶さんはこの肩を抱いてきた。

「巫彩さんッ！ 悲しいのは過去のことだけではございませんのよ！？ 最近の柴門さんは、怪我が耐えぬのです！ いつもいつも、《撮影時》に見ることになる生々しき痣の数々！ 理奈子様です！ 理奈様がリタリンの副作用で暴れて果音様や柴門さんを……！
！」

「果音さんの絶望も並大抵のものではないわよねッ！ 一人でも多

くの子供たちを救おうって、総ての財産を投げ打ってまであんな場所を生み出したのに、それが逆にあだになって、逆に引き取った人々を死なせるハメに……っ！ ああ酷い酷い！ そのやつかみから、果音さんが志穂を虐待してるってことも「バシン！」

あたしの頬に鋭い衝撃が走った。

「巫彩さん！　いくら女性でも、そんな愚かな推測をされたのでは殴らずにはいられません！　あんな女神様のような方が虐待なんかするもんですか馬鹿馬鹿しい！　それは、それは、確かに柴門さんの痣は、『意図的に』柴門さんを殴ろうとしなければつかないようなもの……いえいえ、違います違います！」

「ほら！　アナタだって薄々感じてたんじゃないの！？」

ここで真紗耶さんは再びワインをあおる。

「ゴクゴク……いいえ、いいえっ！　果音様に限ってそのようなことは絶対に！」

あたしも真紗耶さんの手からワインを奪う。

「ゴクゴクゴク……ふ、ははははは！　首田宗志教みたいな汚らしい奴らの手にかかったら、女神様みたいな果音さんが悪魔になっただっておかしくないわよっ！」

「いやっ！　考えたくもなーいっ！！」

今度は真紗耶さんが両腕で耳を塞ぐ。

けれどもあたしはほとばしる激情を自分でもコントロールできなくなっていた。

「あたしだって考えたくもないわよ！　でもね、志穂は私の友達なの！　真実を知らなきゃ友達を救うことなんか出来ないでしょう！　……救いたいつ！　志穂も！　果音さんも！　理奈子さんも！　みんなみんな首田宗志教の悪意から救いたいものよッ！　それから、それから」

ゴロゴロゴロ！　ティンパニを乱れ鳴らしたかのような雷鳴が轟く。春の嵐かしら、風も強くなってきた。

「巫彩さん……？」

その弱々しい声に、今ばかりは腹が立った！

「それからアナタにだって、本当の姿に戻ってほしいッ！」

隣に崩れ込んでいる《真紗耶さん》のカツラを剥ぎ取り、ついでに自分の袖でメイクも拭き取って《真紗耶》に戻すあたし。

しばらく雷鳴も雷光も途絶え、あたしたちも沈黙する。

けれど、天の裁きを告げるような点滅が二人を照らしたとき、《真紗耶》が言葉を発した。

「み、ミサエ……なにをするの？」

「なにをするの　って……アナタのほうが最初に、あたしにその姿を見せてきたんじゃない？　どうしてあたしにだけ本来の姿を晒したの？」

「……………」

「あたしと……やり直したかったんじゃないの……？　志穂との生活はともじやないけど重くてつらくて、変装してパロディにでもしなきゃやってらんなかった……。けどそこから抜け出して、あたしと……って」

言葉を遮られるかと思ったけど、なぜか真紗耶は何も言わない。おかしいと思って横を見ると、真紗耶は俯いて涙を零していた。

「そんな……っ、そんなこと……は……」

これで解った……この人にとっての変装は、精神的な防具なんだって。

防具を外された今、ここに居るのは志穂に《造花の愛をくれる少女》を演じさせた、愚かで脆い少年……

年甲斐もなく飲んだ酒が全身に回り、何もかもが嘆かわしいことに思えてきて……あたしはうずくまるその背に片腕を回す。

「なーに辛気臭い顔してんのさ！？　あ！？　この中里巫彩様の愛を得るチャンスなのよ！　あんた！　はっはははははは！」

そして、天変地異を告げるかのような長い長い雷鳴のとどろき！　あたしの中で眠っていた何かが目覚めた気がした。

《真紗耶さん》の化粧を乱暴に落とし、なおかつ激しく取り乱したあたしの赤いチュニツクは艶めかしく乱れ、片方の肩が露出している。

すると真紗耶の涙に濡れた、けれどもどこかどす黒い怨念を感じさせる声が、この体に伝わってきた。

「ミサエ、自分の言ったこと、解ってる……？ おしほ一人じゃ、稼げない……。ミサエがおしほの代わりをするの？ 私とビデオを撮る？ それでそれを売って、おしほを助けるお金に変える……。私と付き合って……。そういうこと」

偉そうな口調でたくを並べる真紗耶にのしかかり、地べたに押し付けるあたし。

またゴロゴロと鼓膜を破くような雷鳴が響いた。

「構うかよ……。そんなこと構うか構うか構うか構うか構うか構うか構うか構うか構うかあぁあぁーっ！ 真紗耶とあたしがビデオ売って？ 志穂を自由の身にする？ 結構じゃないの！？ アナタと志穂を少しでも明るい世界へ行かせてやれるならね、こんな体の一つや二つ、ドブに投げ捨てたって構うもんか！」

「私はドブじゃない」

「うっさいわね！ 言葉の綾くらい理解しなさいよ！」

ずっとそのままの体制でうずくまっていたあたしたちを、少し弱まった雨の音が見守っていた。

平日の昼に二人で外をふらついていても、街ゆく人をOLだと勘違いさせるため、いつも着ているという志穂の高校時代の制服。確かにそのスリムでシックなデザインはまず学生服には見えない。

次の雷鳴が響いたとき、あたしは真紗耶を起き上がらせ、その襟元からリボンをスリりと解いてみせ、黒いブレザーを脱がすと、……血のついたブラウスが目に入った。

これは、志穂が首田宗志を殺した際に着ていたものに違いない。これを着ることで真紗耶さんは、志穂との結託を信じられぬほど強

いものにしようと思ったんでしよう。

「……………」真紗耶はなされるがまま、だった。

やがて豊胸によって異常に膨らんだ胸が露出すると、あたしは生まれてから一度も感じたことのない、得体の知れない懐かしさに泣くのを通り越して目を光らせた。

「大きい胸……………」お母さん、みたい」

あたしがその谷間に顔をうずめると、

「私、知らない」

真紗耶はボソツとそう呟き、スカートのポケットから小型の録画機を取り出して録画ボタンを押した。

【M i s a e · s v i e w p o i n t】着火する想い（後書き）

またしても15禁のボーダーラインに悩むpartでした。

【Shiho's viewpoint】悲哀の校舎跡

この呪われし校舎跡を叩き潰すかのような夏の嵐。その轟音が、《彼女》が開かずの間で大暴れする打撃音を掻き消す。

こんな中でも、果音は先ほど私に、

「あの子に何かあったら、志穂、貴女が理奈子を守るのよ？ 死なせたりしたら、殺すから」

などと勝手なことを言い残して出かけて行ったのだった。果音は、どんなことがあるうとも半月に一度、どこかへ出かけて行く日がある。薬を買いに行っているのである。

無論、それは不法入手。合法的には、あんな大量のリタリンは入手することが出来ないだろう。

嵐は止まないけれど、開かずの間から響く轟音は止まった。こんな恐ろしい夜は、久しぶりに彼女の顔を見たい。

そう思った私は、ドアの前で膝を抱えることをやめて恐る恐る部屋を出、長い長い通路を時折輝く雷光に照らされながら渡る。

そして開かずの間の前。

私は果音に渡されていた合鍵を使って厳重な鉄の錠前を、初めて自らの手で開けた。

そしてブイドロのごとき音を立てる重い扉を開ける。

その部屋の中は、廊下以上に木の腐った匂いに満ち満ちており、廃病院のごとく凄惨に荒れ果てていた。果音が片せど片せど、大暴れする彼女によってすぐに荒らされてしまう。

その瓦礫の真っ只中に横たわる彼女。

あちこちが切り傷と打撲痕だらけになり、服も元の形状が判らぬほど千切れてしまっているけれど……

……その紅茶色の髪だけは今でも全く色褪せていないし、やつれ

て青痣だらけになっているその顔も、《真紗耶が変装する理奈子》よりずっと高雅な愛らしさが感じられる。

「理奈子様……」私は彼女に、何年かぶりに声をかけた。

「志……穂……うっ、プバツ！ ごほっごほっ……！」

理奈子は私の名を呼ばうと口を開いた拍子に、先ほど食べたものを吐き戻してしまった。最近、理奈子はほとんど食事を受け付けなくなっているらしい。

《相合傘》を見て嘔吐してしまった自分を思い出して胸糞が悪かったけれど、私は理奈子をお風呂場で奇麗にしてあげようと、その異常に軽くなった体を持ち上げた。

そして第二理科室を改造して建てられたお風呂場の前に立った瞬間！

「志穂っ！ あ、貴女まさか！ 理奈子を溺死させ……っ」背後から果音の声！

「か、果音様！」

戸惑う私に駆け寄ると、果音は乱暴に理奈子を奪い、そのまま私を睨みつけた。

「理奈子には……私たちしか居ないの！ だから……そのときは、私たちのどちらかが殺ることになるんでしょうけど……」

ここで果音、理奈子を廊下に下ろして私に仁王のごとき怒りの目を向けた。

「……貴女になんか殺らせない！」

「そんな……私はただ、理奈子様を奇麗にしてあげようと……思っ
て……」

その言葉が、燃え盛る果音の炎に油を注いだ。

「私が、理奈子が汚くなっても放っておいてると言うの！？」

「いえ……そういうわけじゃ……私は本当に……」

「きあーっ！」

果音は両手で私を張り倒して廊下に叩きつけると、私を風呂場まで引っ張っていき、浴槽に溜まった水を桶ですくって私に何度もぶ

ちまけてきた。耳にも目にも、冷めた水がお構いなしに入ってくる。
やがて……

「や……め……ごぼっ……て……の……ん……ちゃ……ん……」

理奈子の最大限の声が虚しく響き渡ると……果音は一瞬だけ竦み
あがり、ただでさえ死体のように蒼白い顔面を、余計に白く凍りつ
かせた。

「あっ、り、理奈子……!？」

まるで急所を突かれたかのような衝撃に満ち満ちた一瞬の沈黙。
しかしすぐに今までにないほどの激烈なる絶望が果音の心を襲い

……

「アひーッ、ヒギヤアアアアア!」

果音は十字架を胸に突き立てられた悪魔のごとき悲鳴をあげ、私
の体を足で何度も何度も打ってきた。その衝撃で私の体は風呂場の
隅まで追いやられ、その拍子に冷たいシャワーが噴き出して私の全
身を震え上がらせる。

果音は私を殴りながら泣いていた。雷光によって浮き彫りになる
その涙の粒には微塵の濁りもなく、聖水のようにどこまでも透き通
っているのであった……。

【Shiho's viewpoint】悲哀の校舎跡（後書き）

七章はこれで終わりです。

八章以降はエログロな要素は失せ、ヒューマンティックな悲喜劇となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192u/>

こうもり族の反乱

2011年10月8日03時32分発行